

IBM® DB2 Query Patroller™



DB2 Query Patroller: インストール、管理、使用法のガイド

バージョン 8.2

IBM® DB2 Query Patroller™



DB2 Query Patroller: インストール、管理、使用法のガイド

バージョン 8.2

ご注意！

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： GC09-7658-01
IBM[®] DB2 Query Patroller[™]
DB2 Query Patroller Guide:
Installation, Administration, and Usage
Version 8.2

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1998 - 2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

本書について	vii
本書の構成	vii

第 1 部 DB2 Query Patroller 入門 . . . 1

第 1 章 DB2 Query Patroller の概要 . . . 3	
Query Patroller	3
Query Patroller のコンポーネント	4
インストール・タスクの概要	7

第 2 部 Query Patroller のインストール、セットアップ、および移行 . . . 9

第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要	11
Query Patroller サーバーおよびクライアント・ツール	11
Query Patroller の典型的な環境	12

第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX) 17

第 4 章 DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller のインストール (UNIX) 19

DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)	19
Query Patroller サーバーのインストール要件 (UNIX)	19
Query Patroller サーバーのメモリー要件 (UNIX)	22
Query Patroller サーバーのディスク要件 (UNIX)	23
DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)	24
Query Patroller サーバーのインストールの検査	34
DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (UNIX)	36
Query Patroller クライアント・ツールのインストール要件 (UNIX)	36
Query Patroller クライアント・ツールのメモリー要件 (UNIX)	39
Query Patroller クライアント・ツールのディスク要件 (UNIX)	39
DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (UNIX)	40
コマンド行プロセッサを使用した、クライアントから Query Patroller サーバーへの接続の構成	42
DB2 クライアントでの TCP/IP ノードのカタログデータベースのカタログと接続のテスト	44

CLP によるデータベースのカタログ	44
CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト	46

第 5 章 Query Patroller の手動でのインストール (UNIX) 49

DB2 製品の手動インストール	49
db2_install スクリプトによる DB2 製品のインストール	50
SMIT を使用して AIX に DB2 製品をインストールする	52
pkgadd を使用して Solaris オペレーティング環境に DB2 製品をインストールする	53
rpm を使用して Linux に DB2 製品をインストールする	54
swinstall を使用して HP-UX に DB2 製品をインストールする	55

第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows) 59

第 7 章 DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller のインストール (Windows) 61

DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)	61
Query Patroller サーバーのインストール要件 (Windows)	61
Query Patroller サーバーのメモリー要件 (Windows)	62
Query Patroller サーバーのディスク要件 (Windows)	63
DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)	63
Query Patroller サーバーのインストールの検査	75
DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (Windows)	77
Query Patroller クライアント・ツールのインストール要件 (Windows)	77
Query Patroller クライアント・ツールのメモリー要件 (Windows)	78
Query Patroller クライアント・ツールのディスク要件 (Windows)	79
DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (Windows)	80
コマンド行プロセッサを使用した、クライアントから Query Patroller サーバーへの接続の構成	82
クライアントでの TCP/IP ノードのカタログデータベースのカタログと接続のテスト	84
CLP によるデータベースのカタログ	84

**第 8 章 Query Patroller サーバーのセッ
トアップ 87**
Query Patroller サーバーの手動設定 87

第 9 章 Query Patroller の移行 89
DB2 セットアップ・ウィザードによる Query
Patroller サーバーの自動移行 89
Query Patroller サーバーの手動移行 90

第 10 章 次のステップ 93
Query Patroller を開始する 93
Query Patroller が照会を代行受信できるようにする 93
Query Patroller を停止する 94
Query Patroller 管理タスクの概要 95

**第 3 部 照会管理の計画によるビジネ
ス問題の解決. 97**

**第 11 章 ビジネス上の問題に関する
Query Patroller の解決策 99**
シナリオ: サブミッター・プロファイルを構成するこ
とによって照会サブミッターの要件を管理する . . . 99
シナリオ: 大規模な照会の処理 100
シナリオ: 大規模な緊急照会の実行 101
シナリオ: 照会クラスを使用してさまざまなサイズ
の照会を管理する 102
シナリオ: 履歴分析を使用してパフォーマンスを改
善する. 103

**第 12 章 Query Patroller のバックグ
ラウンド. 105**
Query Patroller による照会処理 105
Query Patroller でのコストの見積り 109
Query Patroller のしきい値 110
 サブミッターしきい値 110
 システムしきい値 111
Query Patroller 照会クラス 112
Query Patroller 履歴分析 113
Query Patroller の結果表および結果セット 114
Query Patroller の照会代行受信および管理 115
 照会代行受信 116
 照会管理 116
 代行受信されていない照会 116

第 13 章 照会管理ストラテジーの定義 119
照会管理ポリシーの定義 119
Query Patroller の構成ロードマップ 121

**第 14 章 Query Patroller を構成して
照会管理ストラテジーをインプリメント
する方法. 123**
Query Patroller のシステム構成 123
サブミッター・プロファイルの構成 125

**第 4 部 Query Patroller システム
のセットアップ 133**

**第 15 章 Query Patroller システム設
定の管理. 135**
Query Patroller システムの照会しきい値を設定する 135
Query Patroller のデータベース・リストを更新する 136
Query Patroller サブミッターの E メール通知を使
用可能にする 137
履歴データのコレクションを使用可能にする . . . 138

第 16 章 照会クラスの管理. 141
照会クラスの構成 141
Query Patroller の照会クラスを作成する 142
Query Patroller の照会クラスを除去する 143

第 5 部 ユーザーの管理 145

第 17 章 演算子の管理 147
Query Patroller 演算子 147
Query Patroller 演算子プロファイル 147
 アクティブな演算子プロファイルと中断した演算
 子プロファイル 148
 Query Patroller が使用する演算子プロファイル 148
ユーザーおよびグループ用の演算子プロファイルを
作成する 148
ユーザーおよびグループ用の演算子特権を中断また
はリストアする. 149

第 18 章 サブミッターの管理. 151
Query Patroller サブミッター 151
Query Patroller サブミッター・プロファイル . . . 151
 サブミッター・リソース制限 152
 特定のサブミッター・プロファイルからの照会の
 代行受信と管理. 152
 サブミッター・キュー優先順位 152
 サブミッターのチャージバック・アカウント . . 153
 アクティブおよび中断したサブミッター・プロフ
 ファイル 153
 Query Patroller が使用するサブミッター・プロフ
 ファイル 153
サブミッター・プロファイルの構成 155
ユーザーおよびグループ用のサブミッター・プロフ
ファイルを作成する 156
サブミッター・リソース制限を設定する 158
ユーザーおよびグループ用のサブミッター特権を中
断またはリストアする 159

第 19 章 照会サブミット設定の管理 161
Query Patroller 照会サブミット設定 161
別のサブミッターに対して照会サブミット設定を設
定する. 161

第 6 部 Query Patroller の使用 165

第 20 章 Query Patroller での照会の管理 167

管理対象照会状況 167

Query Patroller を使用して照会状況を変更する . . . 168

Query Patroller を使用して管理対象照会の詳細を表示する 169

Query Patroller を使用して管理対象照会の SQL を表示する 171

Query Patroller を使用して結果表を表示する . . . 172

保留照会をスケジュール時間で実行する 173

保留照会を実行するために開始時刻をスケジュールする 174

第 21 章 履歴分析の使用 177

履歴分析レポートの使用 177

Query Patroller を使用して履歴データを収集する 179

Query Patroller を使用して履歴データを生成する 180

履歴データが最後に生成された時期を判別する . . 182

Query Patroller を使用して履歴照会の詳細を表示する 183

Query Patroller を使用して索引の詳細を表示する 184

第 22 章 スペースの管理 187

照会および結果表に対して Query Patroller 保守スケジュールを設定する 187

履歴照会を管理する 188

管理対象照会および結果表のページをスケジュールする 190

履歴照会のページ・スケジュール 191

Query Patroller を使用して手動で結果表をドロップする 191

管理対象照会を手動で除去する 193

履歴照会を手動で除去する 194

第 7 部 Query Patroller の調整およびトラブルシューティング 197

第 23 章 Query Patroller を調整する 199

第 24 章 他の DB2 コンポーネントでの Query Patroller の使用 201

Query Patroller での DB2 ガバナーの使用 201

Query Patroller のプロセスに対する DB2 ガバナーのアクションによる効果 202

同じサブミッター・アプリケーションに対して Query Patroller と DB2 ガバナーを実行する . . . 202

DB2 接続コンセントレーターでの Query Patroller の使用 203

第 25 章 Query Patroller バージョン 8 の制約事項 205

第 8 部 付録 211

付録 A. Query Patroller のコマンド 213

Query Patroller のコマンド行サポート 213

ADD OPERATOR_PROFILE 215

ADD QUERY_CLASS 218

ADD SUBMISSION_PREFERENCES 220

ADD SUBMITTER_PROFILE 223

CANCEL QUERY 227

GENERATE HISTORICAL_DATA 228

FILE RESULT 230

GET OPERATOR_PROFILE 231

GET QP_SYSTEM 232

GET QUERY 233

GET QUERY_CLASS 234

GET SUBMISSION_PREFERENCES 235

GET SUBMITTER_PROFILE 236

LIST OPERATOR_PROFILES 237

LIST QUERIES 238

LIST QUERY_CLASSES 241

LIST SUBMISSION_PREFERENCES 242

LIST SUBMITTER_PROFILES 243

qpcenter - クエリー・パトローラー・センターの開始 244

qpmigrate - Query Patroller データおよび設定の移行 245

qpsetup - Query Patroller サーバーのセットアップ 247

qpstart - Query Patroller の開始 252

qpstop - Query Patroller の停止 253

REMOVE OPERATOR_PROFILE 254

REMOVE QUERY_CLASS 255

REMOVE QUERY_INFO 256

REMOVE QUERY_INFO_HISTORY 258

REMOVE RESULT 260

REMOVE SUBMISSION_PREFERENCES 262

REMOVE SUBMITTER_PROFILE 263

RUN HELD_QUERY 265

RUN IN BACKGROUND QUERY 266

SHOW RESULT 267

UPDATE OPERATOR_PROFILE 268

UPDATE QUERY_CLASS 271

UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES 273

UPDATE SUBMITTER_PROFILE 276

UPDATE QP_SYSTEM 279

Query Patroller のシステムしきい値の設定 280

保留照会処理設定 281

照会代行受信設定 282

システム保守設定 283

履歴データ収集設定 285

E メール通知設定 287

付録 B. Query Patroller コントロール表 289

DB2 Query Patroller コントロール表 289

プロファイル表 289

照会情報表 292

システム設定情報表	296
付録 C. Query Patroller メッセージ	301
DQP メッセージ	301
付録 D. Query Patroller グラフィカル・ユーザー・インターフェース	319
クエリー・パトローラー・センターにログオンする	319
クエリー・パトローラー・センター入門	320
Query Patroller 履歴分析インターフェース入門	323
Query Patroller を使用して履歴分析の表をフィルター操作する	326
付録 E. サブミッター・タスク	329
独自の照会サブミット設定を設定する	329
照会のモニター	330
照会の取り消し	331
付録 F. DB2 Universal Database の技術情報の概要	333
DB2 PDF 資料および印刷された資料	333
DB2 の基本情報	333
管理情報	334
アプリケーション開発情報	334
ビジネス・インテリジェンス情報	335
DB2 Connect 情報	336
入門情報	336
チュートリアル情報	337
オプション・コンポーネント情報	337
リリース・ノート	338
PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法	339
DB2 の印刷資料の注文方法	339
DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す	340
コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す	341

コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す	342
コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す	342
DB2 インフォメーション・センターの呼び出し	343
コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール	344
DB2 トラブルシューティング情報	345
アクセス支援	346
キーボードによる入力およびナビゲーション	346
アクセスしやすい表示	346
支援テクノロジーとの互換性	347
アクセスしやすい資料	347
DB2 チュートリアル	347
DB2 インフォメーション・センター	348
DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)	349
DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)	350
特定の言語でトピックを表示するようブラウザーを構成する方法	350
ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム	351
DB2 Universal Database 製品の共通基準認証	353
特記事項	355
商標	357
Query Patroller 用語集	359
索引	361
IBM と連絡をとる	367
製品情報	367

本書について

本書は、データベースに対する照会ワークロードを管理するために、DB2 Query Patroller バージョン 8 (Query Patroller) をインストール、構成、および使用方法に関する情報を扱います。

本書の対象読者は、データベース管理者、データウェアハウスのサポート担当者、データベース管理タスクを担当する他の DB2 Universal Database ユーザー、および Query Patroller の機能を組織内で活用する方法を理解することを望む方です。

本書の構成

本書では、以下の Query Patroller のトピックに関する情報を扱います。

DB2 Query Patroller 入門

- 3 ページの『第 1 章 DB2 Query Patroller の概要』では、Query Patroller とそのコンポーネントについて概説します。

Query Patroller のインストール、セットアップ、および移行

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』では、Query Patroller のさまざまなインストール環境について説明します。
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』では、UNIX システムで Query Patroller をインストールするステップを扱います。
- 19 ページの『第 4 章 DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller のインストール (UNIX)』には、DB2 セットアップ・ウィザードを使用する場合の前提条件、インストール・ステップ、および検査情報が含まれています。
- 49 ページの『第 5 章 Query Patroller の手動でのインストール (UNIX)』では、UNIX システムで Query Patroller を手動でインストールするステップを扱います。インストールの前提条件と、インストールの検査に関するステップの詳細が含まれています。
- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』では、Windows システムで Query Patroller をインストールするステップを扱います。
- 61 ページの『第 7 章 DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller のインストール (Windows)』には、DB2 セットアップ・ウィザードを使用する場合の前提条件、およびインストール・ステップが含まれています。
- 87 ページの『第 8 章 Query Patroller サーバーのセットアップ』では、インストール後に Query Patroller サーバーをセットアップするステップを扱います。
- 89 ページの『第 9 章 Query Patroller の移行』では、Query Patroller バージョン 7 のデータと設定を Query Patroller バージョン 8 に移行するステップを扱います。
- 93 ページの『第 10 章 次のステップ』では、Query Patroller のインストール、セットアップ、および移行を完了した後で行うステップが示されています。

照会管理の計画によるビジネス問題の解決

- 99 ページの『第 11 章 ビジネス上の問題に関する Query Patroller の解決策』には、Query Patroller のさまざまな機能を使用して架空の組織内の現実的な業務問題を解決する方法を示す、いくつかのシナリオが含まれています。
- 105 ページの『第 12 章 Query Patroller のバックグラウンド』では、Query Patroller の構成および使用に関する、バックグラウンドとなる概念を扱います。
- 119 ページの『第 13 章 照会管理ストラテジーの定義』では、環境内で Query Patroller のさまざまな機能をどのように活用するかを決定することに関する、高度な考慮事項について説明します。
- 123 ページの『第 14 章 Query Patroller を構成して照会管理ストラテジーをインプリメントする方法』では、Query Patroller のさまざまなコンポーネントを構成するのに必要な決定を段階的に説明します。

Query Patroller システムのセットアップ

- 135 ページの『第 15 章 Query Patroller システム設定の管理』では、システム・レベルの構成を実行することに関するタスクについて説明します。
- 141 ページの『第 16 章 照会クラスの管理』では、照会クラスの作成および除去に関するタスクについて説明します。

ユーザーの管理

- 147 ページの『第 17 章 演算子の管理』では、Query Patroller 演算子および演算子プロファイルの概念を定義するとともに、それらを管理するタスクについて説明します。
- 151 ページの『第 18 章 サブミッターの管理』では、Query Patroller サブミッターおよびサブミッター・プロファイルの概念を定義するとともに、それらを管理するタスクについて説明します。
- 161 ページの『第 19 章 照会サブミット設定の管理』では、Query Patroller サブミッター設定の概念について紹介するとともに、それらを管理するタスクについて説明します。

Query Patroller の使用

- 167 ページの『第 20 章 Query Patroller での照会の管理』では、Query Patroller による照会の管理に関するタスクについて説明します。
- 177 ページの『第 21 章 履歴分析の使用』では、履歴分析のさまざまな用途について説明し、システム内での履歴照会活動を調査するためのレポートおよびグラフ機能の使用方法に関する情報を扱います。
- 187 ページの『第 22 章 スペースの管理』では、システム内のスペースを確保するために、古い照会データおよび結果セットを除去するステップを扱います。

Query Patroller の調整およびトラブルシューティング

- 199 ページの『第 23 章 Query Patroller を調整する』では、特定のパフォーマンスまたはリソースの問題を解決するための、構成設定の調整方法に関するガイダンスを扱います。
- 205 ページの『第 25 章 Query Patroller バージョン 8 の制約事項』では、Query Patroller バージョン 8 の既知の制限および制約事項について説明します。

付録

- 213 ページの『付録 A. Query Patroller のコマンド』では、Query Patroller のコマンドをリストしています。
- 289 ページの『付録 B. Query Patroller コントロール表』では、照会を処理するために Query Patroller が必要とするコントロール表について説明します。
- 301 ページの『付録 C. Query Patroller メッセージ』では、Query Patroller によって戻されることのあるメッセージをリストしています。メッセージと推奨されているアクションについて説明します。
- 319 ページの『付録 D. Query Patroller グラフィカル・ユーザー・インターフェース』では、Query Patroller のグラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用してタスクを実行する方法について説明します。
- 329 ページの『付録 E. サブミッター・タスク』では、独自のサブミット設定を設定する方法について説明します。

第 1 部 DB2 Query Patroller 入門

第 1 章 DB2 Query Patroller の概要

Query Patroller

DB2® Query Patroller は、以下の主な方法で DB2 データベースに対して積極的および動的に照会のフローを制御できる、強力な照会管理システムです。

- さまざまなサイズの照会に個別の照会クラスを定義します。これにより、照会の間でのシステム・リソースの共用が向上し、小規模な照会が大規模な照会に妨げられるのを防げます。
- 特定のユーザーによってサブミットされた照会が早く実行されるように、それらの照会の優先順位を高くします。
- 大規模な照会を自動的に保留にして、取り消すかまたはオフピークの時間にスケジュールできるようにします。
- ランナウェイ照会を追跡および取り消します。

Query Patroller の機能を使用して、データベースの照会ワークロードを規制できます。それにより、小規模な照会および優先順位の高い照会を先に実行でき、システム・リソースが効率的に使用されます。さらに、完了した照会に関する情報を収集して、照会全体についての傾向、頻繁に使用するユーザー、および頻繁に使用される表と索引を判別できます。

管理者は Query Patroller を使用して以下のことを行えます。

- システム・レベルおよびユーザー・レベルで、リソース使用ポリシーを設定します。
- データベースのパフォーマンスに影響を及ぼす可能性のある照会を、取り消すまたは再スケジュールリングすることにより、システムの使用を積極的にモニターおよび管理します。
- データベースの使用に関する傾向を識別する (どのオブジェクトにアクセスするか、どの個人またはユーザーのグループがワークロードに最も影響を及ぼしているかなど) のに役立つレポートを生成します。

照会サブミッターは、Query Patroller を使用して以下のことを行えます。

- 自分がサブミットした照会をモニターします。
- 将来行われる検索のために照会結果を保管し再利用することにより、繰り返し照会をサブミットする必要を効率的に減らします。
- さまざまな設定 (照会の完了時に E メールでの通知を受信するかどうかなど) を行い、照会のサブミットをカスタマイズします。

関連概念:

- 4 ページの『Query Patroller のコンポーネント』
- 105 ページの『Query Patroller による照会処理』
- 7 ページの『インストール・タスクの概要』

関連タスク:

Query Patroller のコンポーネント

DB2[®] Query Patroller は、以下のコンポーネントで構成されるクライアント/サーバー・ソリューションです。

- Query Patroller サーバー
- クエリー・パトローラー・センター
- Query Patroller のコマンド行サポート

DB2 Query Patroller™ は、DB2 Enterprise Server Edition を実行しているシステムに配置することができます。

Query Patroller サーバー:

Query Patroller サーバーをインストールすると、ターゲット・コンピューターに以下のソフトウェア・エレメントが配置されます。

Query Patroller ストアード・プロシージャ

Query Patroller ストアード・プロシージャは、必要なデータベース・タスクを実行するために、Query Patroller コンポーネントによって呼び出されます。

コントロール表

データベースに対して発行された照会を管理するために Query Patroller がセットアップされている場合、DB2QP スキーマ、コントロール表、トリガー、関数、およびプロシージャは、そのデータベース内で作成されます。コントロール表には、Query Patroller が照会を管理するのに必要な情報がすべて保管されています。この情報には、以下が含まれます。

- Query Patroller のシステム・プロパティの設定
- 照会クラス情報
- サブミッター情報 (照会サブミットの設定を含む)
- 演算子情報
- 管理対象照会プロパティ情報
- 履歴照会プロパティ情報
- 照会結果情報
- 履歴分析データ
- スケジュールされたページ・ジョブの詳細

たとえば、SUBMITTER_PROFILE 表には、サブミッターの ID、権限レベル、およびユーザーが同時に実行できる照会の最大数などの情報が含まれています。ユーザーが照会をサブミットすると、Query Patroller はそれらのパラメーターに関して SUBMITTER_PROFILE 表を参照します。

ログ・ファイル

エラーに関する診断情報は、4 つのそれぞれ異なる Query Patroller ログ・ファイルに記録されます。

qpsetup.log

Query Patroller は、インストール中、および **qpsetup** コマンドの

発行時に、`qpsetup.log` への書き込みを行います。UNIX® オペレーティング・システムの場合、`qpsetup.log` は `INSTANCE/db2dump` ディレクトリー (ここで、`INSTANCE` は DB2 をインストールしたディレクトリー) に置かれています。Windows の場合、`qpsetup.log` は `diagpath` データベース構成パラメーターで指定されているディレクトリーに置かれています。`qpsetup.log` ファイルは、Query Patroller 管理者による使用を意図しています。

qpmigrate.log

Query Patroller は、インストール中、および `qpmigrate` コマンドの発行時に、`qpmigrate.log` への書き込みを行います。UNIX® オペレーティング・システムの場合、`qpmigrate.log` は `INSTANCE/db2dump` ディレクトリー (ここで、`INSTANCE` は DB2 をインストールしたディレクトリー) に置かれています。Windows の場合、`qpmigrate.log` は `diagpath` データベース構成パラメーターで指定されているディレクトリーに置かれています。`qpmigrate.log` ファイルは、Query Patroller 管理者による使用を意図しています。

qpuser.log

Query Patroller はシステムがアクティブになった時点から、`qpuser.log` ファイルへの書き込みを開始します。`qpuser.log` ファイルへ書き込まれる情報は問題判別に使用され、Query Patroller 管理者による使用を意図しています。UNIX® オペレーティング・システムの場合、`qpuser.log` は `INSTANCE/db2dump` ディレクトリー (ここで、`INSTANCE` は DB2 をインストールしたディレクトリー) に置かれています。Windows の場合、`qpuser.log` は `diagpath` データベース構成パラメーターで指定されているディレクトリーに置かれています。

qpdiaq.log

Query Patroller はシステムがアクティブになった時点から、`qpdiaq.log` ファイルへの書き込みを開始します。`qpdiaq.log` ファイルへ書き込まれる情報は問題判別に使用され、DB2 技術サポートによる使用を意図しています。UNIX® オペレーティング・システムの場合、`qpdiaq.log` は `INSTANCE/db2dump` ディレクトリー (ここで、`INSTANCE` は DB2 をインストールしたディレクトリー) に置かれています。Windows の場合、`qpdiaq.log` は `diagpath` データベース構成パラメーターで指定されているディレクトリーに置かれています。

Query Patroller がインストールされているサーバーでログ・ファイルを表示するには、テキスト・エディターを使用します。最新のイベントは、ファイルの最後に記録されます。一般に、各項目には以下の部分が含まれます。

- タイム・スタンプ
- インスタンス、データベース、およびパーティション名の詳細
- プロセスの ID (PID) と名前、またはスレッドの ID (TID) と名前
- エラーを報告したコンポーネント
- エラーについて説明している診断メッセージ (通常は「DQP」で始まる)

ログ・ファイルは絶えず増大します。時々、バックアップした後でそれらを消去しなければなりません。次に Query Patroller が必要としたときに、新しいログ・ファイルが生成されます。

クエリー・パトローラー・センター:

クエリー・パトローラー・センターは、管理者が Query Patroller システム・プロパティ、ユーザー、および照会の管理と、履歴分析レポートの表示に使用できる、グラフィカル・ユーザー・インターフェースです。さらに、クエリー・パトローラー・センターを使用することにより、照会サブミッターは照会を管理したり、照会結果の保管や照会サブミットの設定のカスタマイズを行えます。

クエリー・パトローラー・センターの外観や機能は、さまざまな要因 (ユーザーの権限や、DB2 管理ツールもインストールされているかなど) によって異なります。

管理者は、クエリー・パトローラー・センターのすべての機能へアクセスできます。管理者がクエリー・パトローラー・センターで行えるタスクのいくつかを、以下にリストします。

- Query Patroller システム・パラメーターの管理
- Query Patroller サブミッターおよび演算子用のプロファイルの作成、更新、または削除
- Query Patroller サブミッター用のサブミット設定の作成、更新、または削除
- 照会クラス作成、更新、または削除
- Query Patroller システムによって代行受信された照会のモニターおよび管理
- データベース使用の履歴を表示するレポートの生成および分析

サブミッターは、クエリー・パトローラー・センターの機能のサブセットにアクセスできます。サブミッターがクエリー・パトローラー・センターで行えるタスクのいくつかを、以下にリストします。

- Query Patroller システムを介してサブミットした照会のモニターおよび管理
- 将来の検索のための、サブミットした照会結果の保管
- サブミットした照会結果の表示またはファイル化
- 独自の照会サブミットの設定の作成、更新、または削除

Query Patroller のコマンド行サポート:

コマンド行サポートにより、Query Patroller 管理者およびサブミッターは、ほとんどの Query Patroller タスクを DB2 CLP またはオペレーティング・システムのコマンド行プロンプトから実行できます。Query Patroller コマンドをシェル・スクリプト、または Perl、awk、および REXX などの言語と結合することもできます。

関連概念:

- 3 ページの『Query Patroller』
- 105 ページの『Query Patroller による照会処理』

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』
- 199 ページの『第 23 章 Query Patroller を調整する』

インストール・タスクの概要

以下の章では、Query Patroller バージョン 8 のインストール、Query Patroller サーバーのセットアップ、および Query Patroller バージョン 7 からのデータの移行と設定に関するステップについて説明します。

最初のステップ

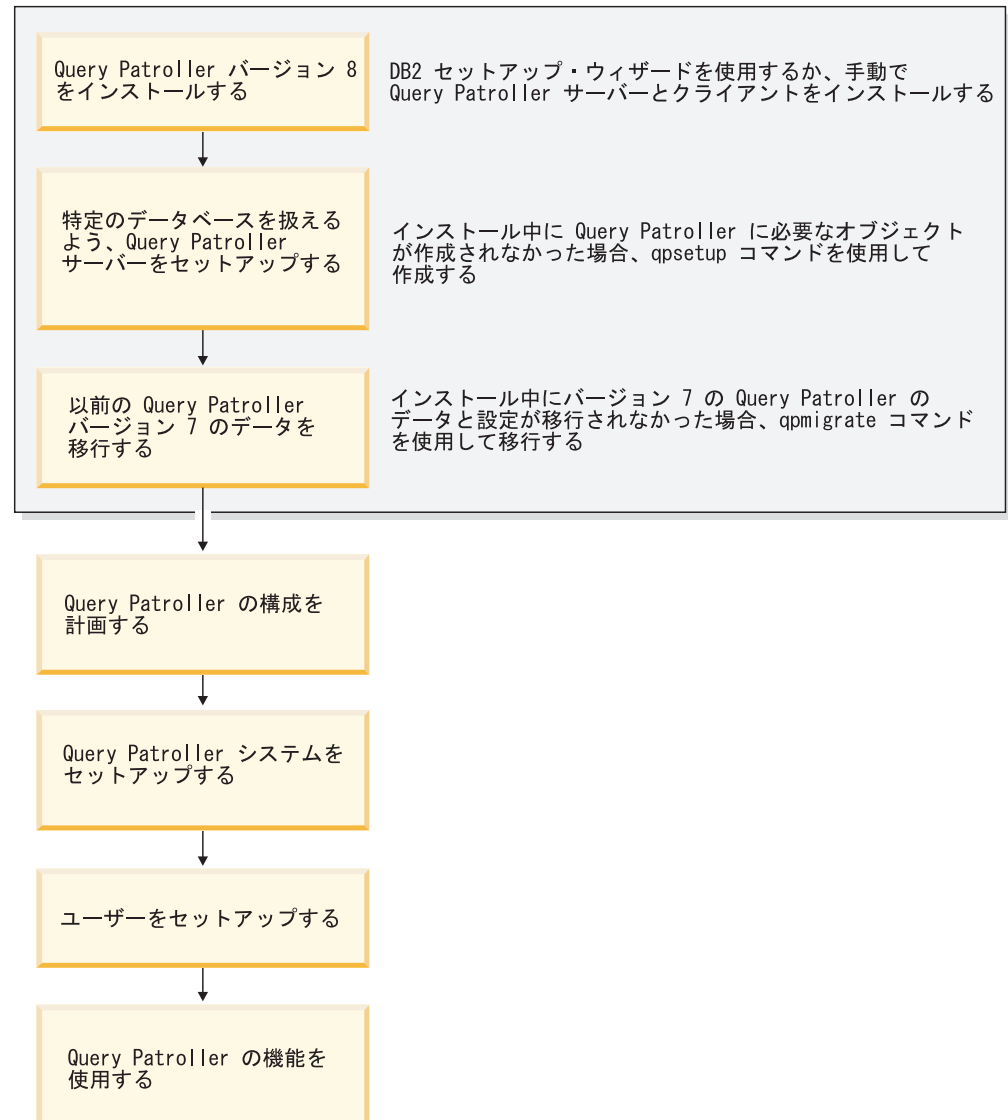


図 1. Query Patroller インストール・タスクの概要

関連概念:

- 3 ページの『Query Patroller』
- 4 ページの『Query Patroller のコンポーネント』
- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』
- 89 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる Query Patroller サーバーの自動移行』

関連タスク:

- 87 ページの『Query Patroller サーバーの手動設定』
- 90 ページの『Query Patroller サーバーの手動移行』
- 95 ページの『Query Patroller 管理タスクの概要』
- 93 ページの『Query Patroller が照会を代行受信できるようにする』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』
- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』

第 2 部 Query Patroller のインストール、セットアップ、および移行

第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要

このトピックでは、典型的な 2 つの Query Patroller インストール環境の概要を扱います。このトピックを読めば、Query Patroller を構成するコンポーネントと、それらを作動させる非パーティションおよびパーティション環境について理解できるはずです。

典型的な Query Patroller インストール環境は、以下のコンピューターから成り立っています。

- DB2[®] Enterprise Server Edition 環境内のすべてのパーティションにインストールされている Query Patroller サーバー。
- Query Patroller クライアント・ツールがインストールされている、1 つ以上のシステム管理ワークステーション。
- Query Patroller クライアント・ツールがインストールされている、1 つ以上の DB2 クライアント。
- Query Patroller クライアント・ツールがインストールされていない、1 つ以上の DB2 クライアント。
- Query Patroller クライアント・ツールがインストールされていない、1 つ以上のビジネス・インテリジェンス・クライアント。

Query Patroller サーバーおよびクライアント・ツール

Query Patroller サーバー:

Query Patroller サーバーは、DB2 Universal Database[™] Enterprise Server Edition (バージョン 8.1.2 以上) 環境を構成するコンピューターすべてにインストールされます。これは、非パーティション環境かパーティション環境のいずれかでもインストールできます。Query Patroller サーバーは、データベースに対して実行される照会の受信、分析、優先順位付け、およびスケジュールを行います。Query Patroller サーバーでは、照会の完了時にユーザーに通知することもできます。

Query Patroller クライアント・ツール (システム管理ワークステーション):

Query Patroller クライアント・ツールは、環境内でシステム管理ワークステーションとして機能する DB2 クライアントにインストールできます。DB2 クライアントの 1 つ以上が、システム管理ワークステーションとして機能できます。これらのツールは、データウェアハウスのリモート管理を実行するすべてのマシンにインストールしなければなりません。

システム管理クライアントにインストールされる Query Patroller クライアント・ツールは、クエリー・パトローラー・センターおよび Query Patroller のコマンド行サポートです。これらのツールを使用することにより、Query Patroller サーバーの構成と管理、ユーザー・プロファイルの作成と削除、照会と結果の宛先の管理、およびデータベースの使用履歴のモニターを行うことができます。

Query Patroller クライアント・ツール (DB2 クライアント):

Query Patroller クライアント・ツールは、DB2 クライアントにインストールできます。クエリー・パトローラー・センターか Query Patroller のコマンド行サポートのどちらか (または両方) をインストールできます。クライアントにクエリー・パトローラー・センターをインストールするには、それらのすべてに、DB2 クライアント製品 (DB2 Run-Time Client や DB2 Application Development Client など)、DB2 Connect™ 製品 (DB2 Connect Personal Edition や DB2 Connect Enterprise Edition など)、DB2 サーバー製品 (DB2 Enterprise Server Edition や DB2 Workgroup Server Edition など) のいずれかがインストールされていなければなりません。それらの製品はすべてバージョン 8.1.2 以上でなければなりません。クエリー・パトローラー・センターや Query Patroller のコマンド行サポートのない DB2 クライアントをインストールし、照会を Query Patroller サーバーにサブミットすることもできます。

注: 照会をサブミットできる、サード・パーティーの GUI ツールを装備したビジネス・インテリジェンス・クライアント (Business Objects など) を多数含めることもできます。これらのクライアントは、まず照会を専用のビジネス・インテリジェンス・サーバーにサブミットし、今度はそのビジネス・インテリジェンス・サーバーがその照会を Query Patroller サーバーに送信して処理します。

Query Patroller の典型的な環境

DB2 Enterprise Server Edition (ESE) の非パーティション環境:

Query Patroller を DB2 Enterprise Server Edition の非パーティション環境にインストールできます。たとえば、典型的な非パーティション環境は以下のコンピューターから成り立っています。

- DB2 Enterprise Server Edition (バージョン 8.1.2 以上) がインストールされている、Query Patroller サーバー 1 台。
- Query Patroller クライアント・ツールがインストールされている、システム管理ワークステーション 1 台。
- DB2 ランタイム・クライアント (UNIX および Windows) 2 台。

図 1 は、DB2 Enterprise Server Edition の非パーティション環境での、これらのコンピューターの典型的なセットアップの仕方を示しています。

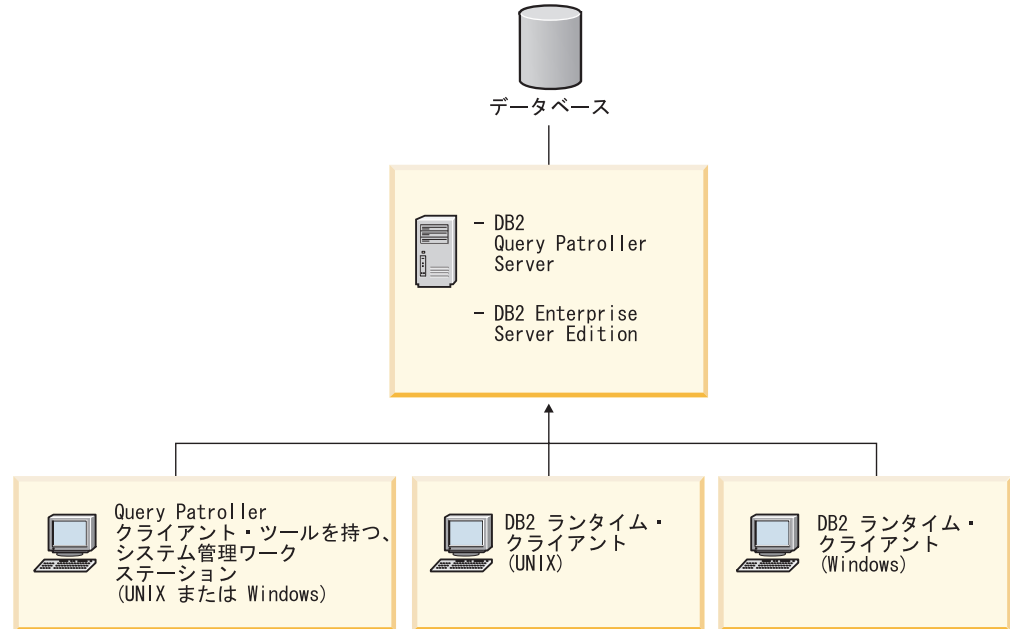


図 2. Query Patroller 非パーティション・インストール環境

典型的な非パーティション・データベース環境の場合、Query Patroller サーバーは、DB2 Enterprise Server Edition (バージョン 8.1.2 以上) を実行しているコンピューターにインストールされます。

DB2 Enterprise Server Edition のパーティション環境:

Query Patroller を DB2 Enterprise Server Edition のパーティション環境にインストールできます。たとえば、典型的なパーティション環境は以下のコンピューターから成り立っています。

- DB2 Enterprise Server Edition 環境 (バージョン 8.1.2 以上) 内のすべてのパーティションにインストールされている Query Patroller サーバー。
- ビジネス・インテリジェンス・クライアントから照会を受信および送信するための、ビジネス・インテリジェンス・サーバー 1 台。
- Query Patroller クライアント・ツールがインストールされている、システム管理ワークステーション 1 台。
- Query Patroller クライアント・ツールがインストールされている、DB2 クライアント 2 台。
- DB2 ランタイム・クライアント (UNIX および Windows) 2 台。

図 2 は、DB2 Enterprise Server Edition のパーティション環境での、これらのコンピューターの典型的なセットアップの仕方を示しています。

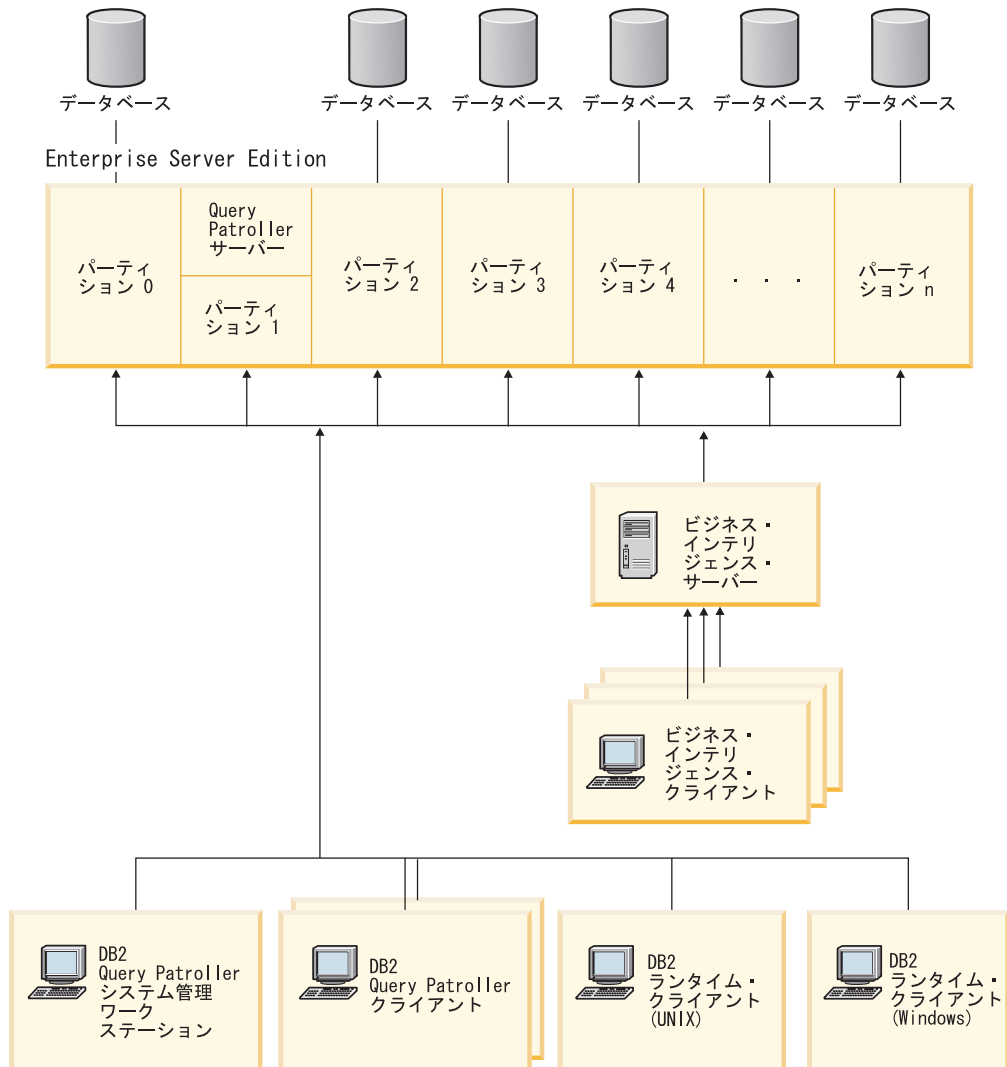


図 3. Query Patroller のパーティション・インストール環境

典型的なパーティション・データベース環境の場合、Query Patroller サーバーは、DB2 Enterprise Server Edition (バージョン 8.1.2 以上) を実行しているコンピューターすべてにインストールされます。これにより、すべての DB2 クライアント (Query Patroller クライアント・ツールがインストールされている) が、環境内のどの調整パーティションにも接続できます。

これで、Query Patroller を UNIX ベース・オペレーティング・システム環境か Windows® 環境のいずれかにインストールする準備が整いました。

関連概念:

- 121 ページの『Query Patroller の構成ロードマップ』
- 99 ページの『シナリオ: サブミッター・プロファイルを構成することによって照会サブミッターの要件を管理する』

- 101 ページの『シナリオ: 大規模な緊急照会の実行』
- 100 ページの『シナリオ: 大規模な照会の処理』
- 102 ページの『シナリオ: 照会クラスを使用してさまざまなサイズの照会を管理する』
- 3 ページの『Query Patroller』
- 4 ページの『Query Patroller のコンポーネント』

関連タスク:

- 63 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)』
- 24 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)』
- 40 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (UNIX)』
- 80 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (Windows)』

第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)

インストールする Query Patroller コンポーネントとツール、およびインストール先の環境の種類が分かっている場合、以下のステップに従って、Query Patroller を UNIX ベース・サーバーおよび UNIX ベース・クライアントにインストールできます。

前提条件:

Query Patroller をインストールする前に、以下のようにしてください。

- Query Patroller をインストールする環境の種類を確認する。
- Query Patroller サーバーをインストールするコンピューターが、必須のインストール、メモリー、およびディスク要件を満たしているか検査する。
- Query Patroller クライアント・ツールをインストールするコンピューターが、必須のインストール、メモリー、およびディスク要件を満たしているか検査する。
- Query Patroller をインストールする前に、DYN_QUERY_MGMT 構成パラメーターが DISABLE に設定されていることを確認してください。Query Patroller が照会を代行受信および管理するためには、このパラメーターが ENABLE に設定されていなければなりません。インストール時にインストーラーによって実行される内部照会が代行受信されないようにするため、インストールに先立ってこのパラメーターを DISABLE に設定する必要があります。

手順:

Query Patroller をインストールするには、以下のようにします。

1. DB2 セットアップ・ウィザード (UNIX) で Query Patroller サーバーをインストールします。
2. オプション: Query Patroller サーバーを手動でインストールします (UNIX)。
3. Query Patroller サーバーのインストールを検査します。
4. DB2 セットアップ・ウィザード (UNIX) で Query Patroller クライアント・ツールをインストールします。
5. DB2 インフォメーション・センターをインストールします (UNIX)。
6. オプション: Query Patroller クライアント・ツールを手動でインストールします (UNIX)。

関連タスク:

- 24 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)』
- 40 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (UNIX)』
- 34 ページの『Query Patroller サーバーのインストールの検査』
- 349 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

第 4 章 DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller のインストール (UNIX)

DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)

Query Patroller サーバーのインストール要件 (UNIX)

UNIX ベース・オペレーティング・システムでの Query Patroller サーバーのハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信に関する要件を以下に示します。

ハードウェア要件

以下のいずれか。ご使用の UNIX ベース・オペレーティング・システムに依存しています。

- IBM RISC/6000 (AIX)
- eServer pSeries (AIX)
- HP 9000 シリーズ 700 または 800 システム (HP-UX)
- Intel 32 ビット (Linux)
- Intel 64 ビット (Linux)
- AMD 64 ビット (Linux)
- S/390 9672 Generation 5 以降、Multiprise 3000 または eServer zSeries (Linux)
- Linux をサポートする IBM eServer iSeries (Linux)
- Linux をサポートする IBM eServer pSeries (Linux)
- Solaris UltraSPARC ベースのコンピューター (Solaris オペレーティング環境)

オペレーティング・システム要件

AIX

バージョン 4.3.3 (32 ビット)

- 保守レベル 9 と、IY22308 および IY32690 の APAR; または
- 保守レベル (ML) 10 以上と APAR IY32690 (ML-10 は IY22308 を含む); または
- 保守レベル 11、APAR 不要

バージョン 5.1.0 (32 ビット)

- 保守レベル 2 以上と、IY31254、IY32217、IY32905、IY29345、および IY31080 の APAR; または
- 保守レベル 3 以上

バージョン 5.1.0 (64 ビット)

- 保守レベル 2 以上と、IY31254、IY32217、IY32905、IY33023、IY29345、IY32466、および IY31080 の APAR; または
- 保守レベル 3 以上

バージョン 5.2.0 (32 ビットおよび 64 ビット)

現在のところ APAR は不要

注: 特定の APAR がインストールされているかどうかは、`instfix -v -i -k <APAR>` コマンドを使用して調べることができます。たとえば、`instfix -v -i -k IY31254` のようにします。

次の AIX ファイル・セットは、英語以外の言語で Query Patroller をインストールまたは実行するのに必要です。

- X11.fnt.ucs.ttf (AIX Windows Unicode TrueType フォント)
- x1C.rte 5.0.2.x
- アジア諸国の言語の場合、次のファイル・セットも必要です。
 - X11.fnt.ucs.ttf_CN (zh_CN または Zh_CN 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_KR (ko_KR 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_TW (zh_TW または Zh_TW 用)
- AIX バージョン 4.3.3 では、次のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix43.rte 5.0.2.x
 - OpenGL.OpenGL_X.rte.base 4.3.3.76
 - OpenGL.OpenGL_X.rte.soft 4.3.3.75
 - X11.adt.lib 4.3.3.10
- AIX バージョン 5.x では、次のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix50.rte 5.0.2.x

AIX ファイル・セットは、<http://techsupport.services.ibm.com/server/fixes> からダウンロードできます。

Linux

- サポートされている Linux 配布レベルおよびカーネル・レベルの最新情報については、ブラウザーで <http://www.ibm.com/db2/linux/validate> を参照してください。

HP-UX

- Query Patroller は、以下をインストール済みの、PA-RISC 2.x (PA-8x00) プロセッサを持つシステム用の HP-UX 11i (11.11) 上で実行することができます。
 - 2001 年 12 月 GOLDBASE11i バンドル (HP-UX)
 - 2001 年 12 月 GOLDAPPS11i バンドル (HP-UX)
 - パッチ PHSS_26560、PHKL_28489、および PHCO_27434 (HP-UX)
 - Java SDK 1.3.1 用パッチ。必要なパッチについては、<http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html> を参照してください。

Solaris オペレーティング環境

- Solaris 7 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106327-10
- Solaris 7 (64 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106300-11 + 106327-10
- Solaris 8 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108434-03 および 108528-12
- Solaris 8 (64 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108435-03 + 108434-03 および 108528-12
- Solaris 9 (32 ビット)
- Solaris 9 (64 ビット)

「推奨 & セキュリティー・パッチ」は、<http://sunsolve.sun.com> の Web サイトから入手できます。SunSolve Online Web サイトで、左側パネルの「Patches」メニュー項目をクリックし、「Browse & Download Patches」から「Recommended & Security Patches」を選択してください。

J2SE Solaris Patch Clusters も必要です。それらは、<http://sunsolve.sun.com> の Web サイトから入手できます。SunSolve Online Web サイトで、左側パネルの「Patches」メニュー項目をクリックし、「Browse & Download Patches」から「Recommended Patch Clusters」を選択してください。

Solaris オペレーティング環境に Query Patroller をインストールするには、SUNWlibC ソフトウェアが必要です。

64 ビット Fujitsu PRIMEPOWER システム上の Query Patroller では、次のものがが必要です。

- Solaris 8 カーネル更新パッチ 108528-16 以上 (パッチ 912040-01 用の修正を入手するため)。
- Solaris 9 カーネル更新パッチ 112233-01 以上 (パッチ 912041-01 用の修正を入手するため)。

Solaris オペレーティング環境用の Fujitsu PRIMEPOWER パッチは、FTSI (<http://download.ftsi.fujitsu.com/>) からダウンロードできます。

ソフトウェア要件

- Query Patroller サーバーをインストールするには、以下のうちいずれかがインストールされていることが必要です。
 - DB2 Enterprise Server Edition バージョン 8.1.2 およびフィックスパッチ 2+
 - DB2 Enterprise Server Edition バージョン 8.1.2 より上のもの
- 32 ビット環境で Query Patroller サーバー、Query Patroller の Java ベースのツール (クエリー・パトローラー・センターなど) を実行したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、IBM Software Development Kit (SDK) バージョン 1.3.1 またはバージョン 1.4.1 が必要です。インストール・プロセス中に、正しいレベルの IBM Software Developer's Kit for Java (SDK) がインストールされていない場合、必要に応じて SDK がインストールされます。

- 64 ビット環境で Query Patroller サーバー、Query Patroller の Java ベースのツール (クエリー・パトローラー・センターなど) を実行したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、IBM Software Development Kit (SDK) バージョン 1.4.1 が必要です。インストール・プロセス中に、正しいレベルの IBM Software Developer's Kit for Java (SDK) がインストールされていない場合、必要に応じて SDK がインストールされます。LinuxIA64 では、IBM Software Developer's Kit for Java (SDK) バージョン 1.3.1 が必要です。最新の DB2 Java アプリケーション開発アップデートについては、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/ad/v8/java> の Web ページを参照してください。
- オンライン・インストール・ヘルプを表示するには、Netscape 6.2 または Microsoft Internet Explorer 5.5 以上が必要です。

通信要件

- TCP/IP

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 24 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』

関連資料:

- 22 ページの『Query Patroller サーバーのメモリー要件 (UNIX)』
- 23 ページの『Query Patroller サーバーのディスク要件 (UNIX)』

Query Patroller サーバーのメモリー要件 (UNIX)

Query Patroller サーバーでは、最低でも 256 MB の RAM が必要です。それよりも多くのメモリーが必要になる場合もあります。

メモリー要件を判別する際に、以下の点を覚えていてください。

- システムで稼働している非 DB2 ソフトウェア用に、追加メモリーが必要な場合があります。
- Query Patroller クライアント・ツールをインストールする DB2 クライアントをサポートするために、さらに多くのメモリーが必要になる場合があります。
- 特定のパフォーマンス要件により、必要とされるメモリーの量が決まる場合があります。
- メモリー要件は、データベース・システムのサイズおよび複雑さによって影響を受けます。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 24 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』

関連資料:

- 23 ページの『Query Patroller サーバーのディスク要件 (UNIX)』
- 19 ページの『Query Patroller サーバーのインストール要件 (UNIX)』

Query Patroller サーバーのディスク要件 (UNIX)

Query Patroller サーバー (UNIX) に必要なディスク・スペース要件は、選択するインストールのタイプによって異なります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して Query Patroller サーバーをインストールする場合、インストール・タイプおよびコンポーネント選択に基づいて、インストール・プログラムがサイズを動的に見積ります。以下のためにディスク・スペースが必要になります。

- 製品コードの保管。
- Query Patroller の使用時に生成されるデータの保管 (コントロール表の内容など)。

必要なソフトウェアおよび通信製品のための余地をディスク・スペースに含めることを忘れないでください。

不足しているディスク・スペースの管理:

選択したコンポーネントをインストールするのに必要なスペースが、コンポーネントのインストール時に指定したパスのスペースを超えている場合、DB2 セットアップ・ウィザードによって、スペースの不足に関するエラーが出されます。選択すれば、インストールを継続することもできます。しかし、インストールするファイルのためのスペースが実際に足りなかった場合、スペースがなくなった時点で、Query Patroller サーバーのインストールは停止します。このようになった場合、インストールはロールバックされます。そして、該当するエラー・メッセージが最終ダイアログに表示されます。このとき、インストールを終了できます。

注: これが適用されるのは、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境でのインストールの場合だけです。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 24 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』

関連資料:

- 22 ページの『Query Patroller サーバーのメモリー要件 (UNIX)』
- 19 ページの『Query Patroller サーバーのインストール要件 (UNIX)』

DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)

このタスクは、より上位のタスクである *Query Patroller* のインストール (UNIX) の一部です。

このタスクでは、セットアップ・ウィザードを使用して、UNIX ベース・オペレーティング・システムに DB2 Query Patroller サーバーをインストールする際のステップを概説します。

前提条件:

ご使用のコンピューターが次の要件に合うことを確認してください。

- Query Patroller サーバーのインストール要件 (UNIX)
- Query Patroller サーバーのメモリー要件 (UNIX)
- Query Patroller サーバーのディスク要件 (UNIX)
- DB2 サーバーで実行していたインスタンスが停止していること。インスタンスを停止するには、SYSADM 権限を持ったユーザーとしてシステムにログオンし、UNIX シェル・プロンプトで **db2stop** コマンドを発行します。
- Query Patroller サーバーによって管理する照会の対象となるデータベースが存在していること。
- クライアントが Query Patroller サーバーに照会をサブミットするときに使用するすべての言語がインストールされていること。これは、サーバーとクライアント間のあらゆる従属関係を除去するために必要です。

手順:

Query Patroller サーバーをインストールする場合 (UNIX)、以下のようにします。

1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
2. 他のすべてのプログラムをシャットダウンし、DB2 セットアップ・ウィザードが必要に応じてファイルを更新できるようにします。
3. CD-ROM のラベルを調べて、適切な言語の CD-ROM を使用していることを確認します。
4. Query Patroller 製品 CD-ROM をマウントします。
5. 以下のコマンドを入力することによって、CD-ROM がマウントされているディレクトリーに移動します。

```
cd /cdrom
```

ここで、*/cdrom* は CD-ROM のマウント・ポイントを表しています。

6. **./db2setup** コマンドを入力し、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。「IBM DB2 セットアップ・ランチパッド」ウィンドウがオープンします。

7. DB2 ランチパッドから「製品のインストール」を選択します。



図 4. Query Patroller 初期画面 (UNIX)

8. 「インストールしたい製品を選択します」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。



図 5. Query Patroller 製品画面 (UNIX)

9. 「DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。

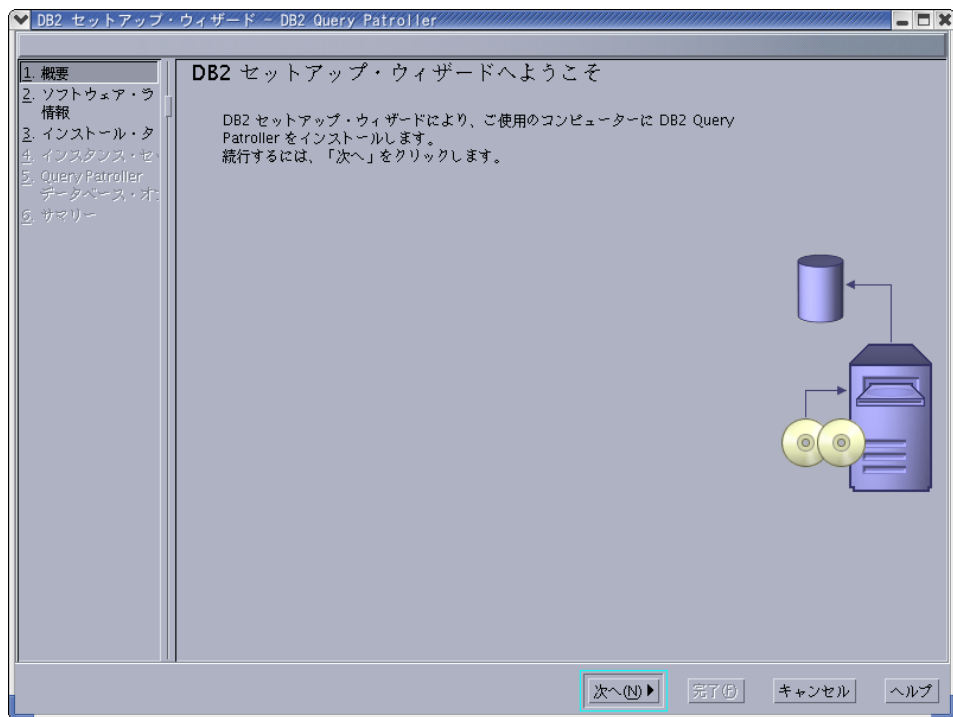


図 6. Query Patroller - DB2 セットアップ・ウィザードの初期画面 (UNIX)

10. 「ソフトウェア使用条件 (Software License Agreement)」ウィンドウで、条項に同意する場合は「同意します (Accept)」を選択します。それから、「次へ」をクリックします。条項に同意しない場合は「Decline (同意しません)」を選択します。それから、「キャンセル」をクリックしてインストールを終了します。

11. 「インストール・タイプの選択」ウィンドウで、「コンピューター用途ベース」を選択し、「次へ」をクリックします。

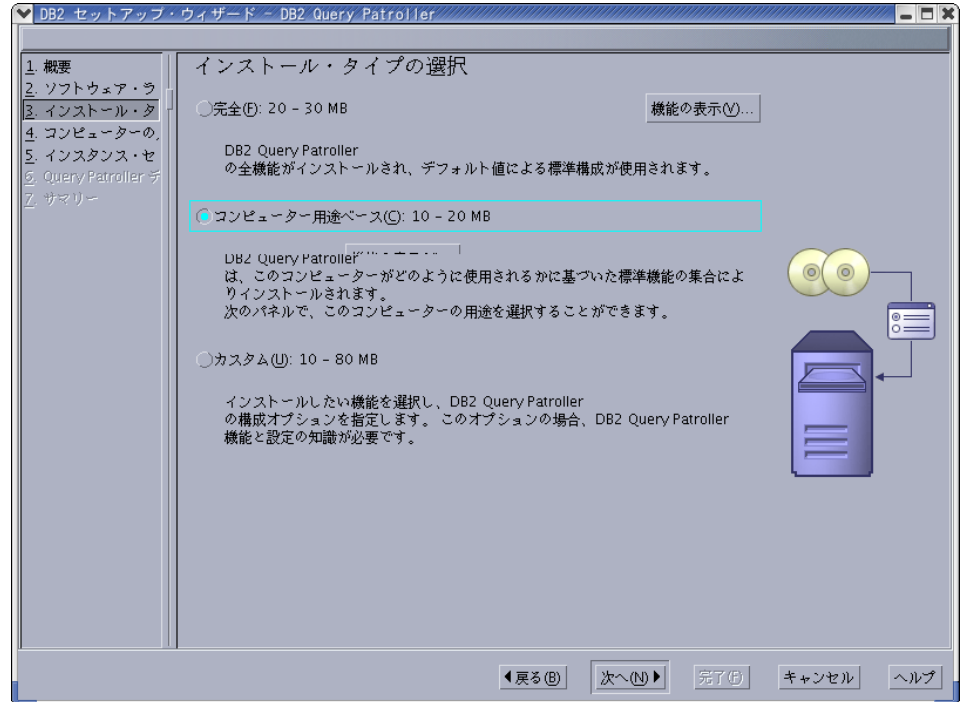


図 7. Query Patroller - インストール・タイプの選択 (UNIX)

12. 「このマシンの使用方法の選択」ウィンドウで、「サーバー」を選択し、「次へ」をクリックします。

注:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、「インストール・タイプの選択」ウィンドウで「コンピューター用途ベース」を選択し、「このコンピューターの用途の選択」ウィンドウで「サーバー」を選択した場合、クエリー・パトローラー・センターはインストールされません。クエリー・パトローラー・センターをインストールするには、「インストール・タイプの選択」ウィンドウで、インストール・タイプとして「完全」または「カスタム」を選択してください。

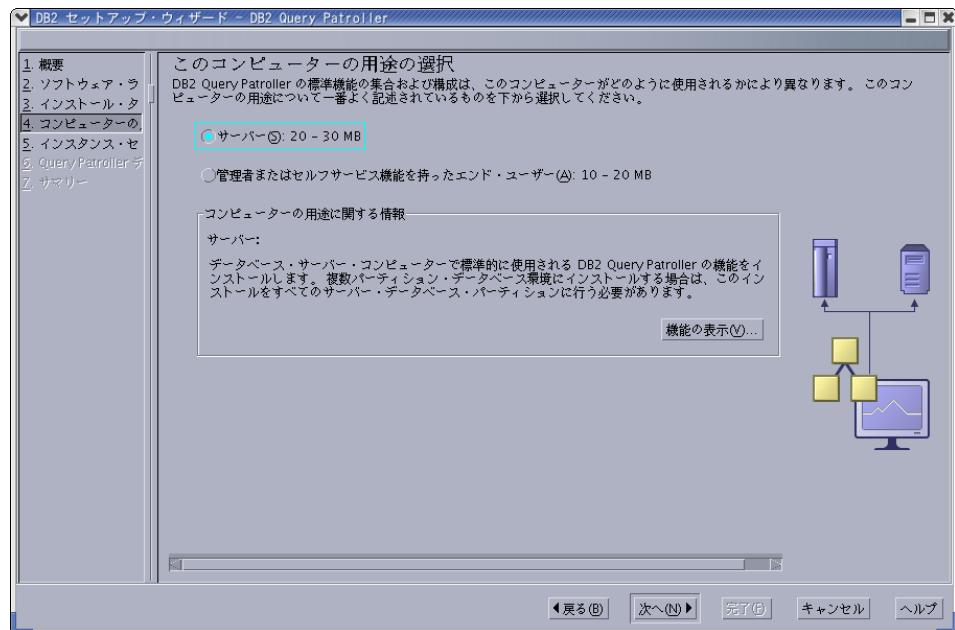


図 8. Query Patroller - コンピューターの使用方法 (UNIX)

13. 「DB2 インスタンスのセットアップ」ウィンドウで、既存の DB2 インスタンスを構成するか、このタスクをインストールの完了後まで保留するかを選択します。「インスタンス名」から、構成するインスタンスを選択します。選択を行ったら、「次へ」をクリックします。

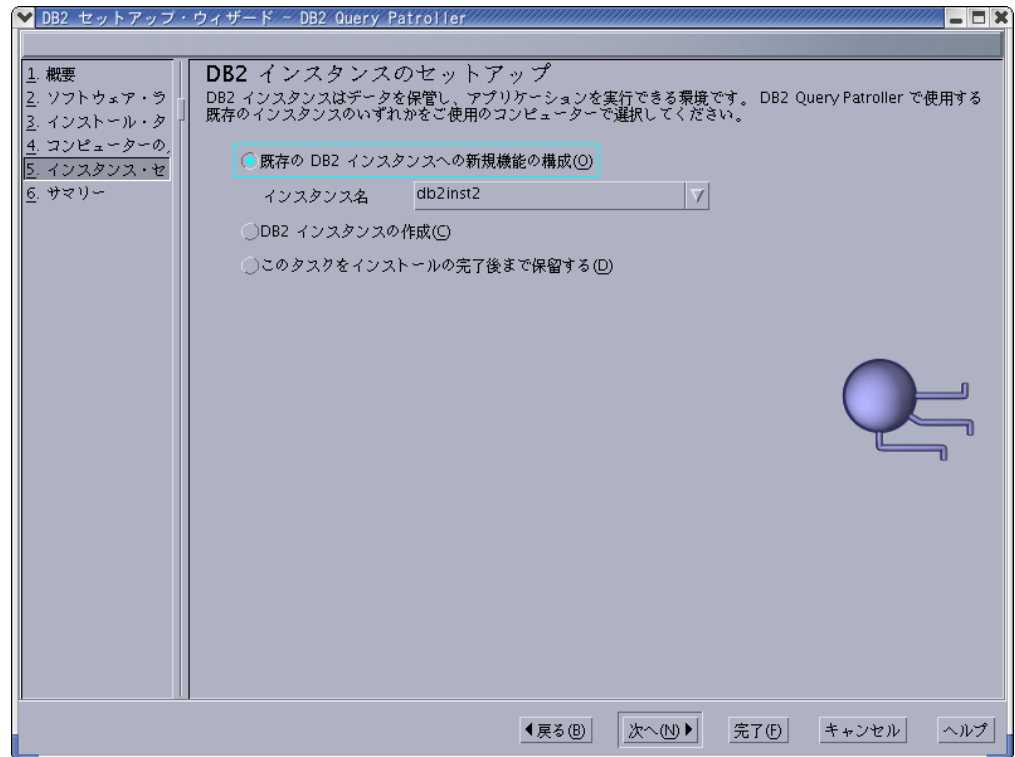


図 9. Query Patroller - DB2 インスタンスのセットアップ (UNIX)

14. 「DB2 Query Patroller データベース・オブジェクトの指定」ウィンドウで、照会を DB2 Query Patroller によって管理されるデータベースを選択します。「DB2 Query Patroller で使用するデータベースのセットアップ」を選択してから、「データベース名」からデータベースを選択します。既存のコントロール・データ表スペースを使用するか新規作成するか、既存の結果表スペースを使用するか新規作成するかを選択します。新規のコントロール・データ表スペースまたは新規の結果表スペースを作成する場合は、「新規」をクリックして「定義」をクリックします。既存の表スペースを使用する場合は、「既存」を選択してメニューから表スペースを選択します。表スペースを選択したら、「次へ」をクリックします。

注: 選択したデータベースがバージョン 7 の Query Patroller データベースの場合、バージョン 7 のデータと設定をバージョン 8 の Query Patroller システムに移行するかどうかを指定するようにプロンプトが出されます。インストール時に移行を選択しなかった場合は、インストール後に `qpmigrate` コマンドを使用して移行できます。

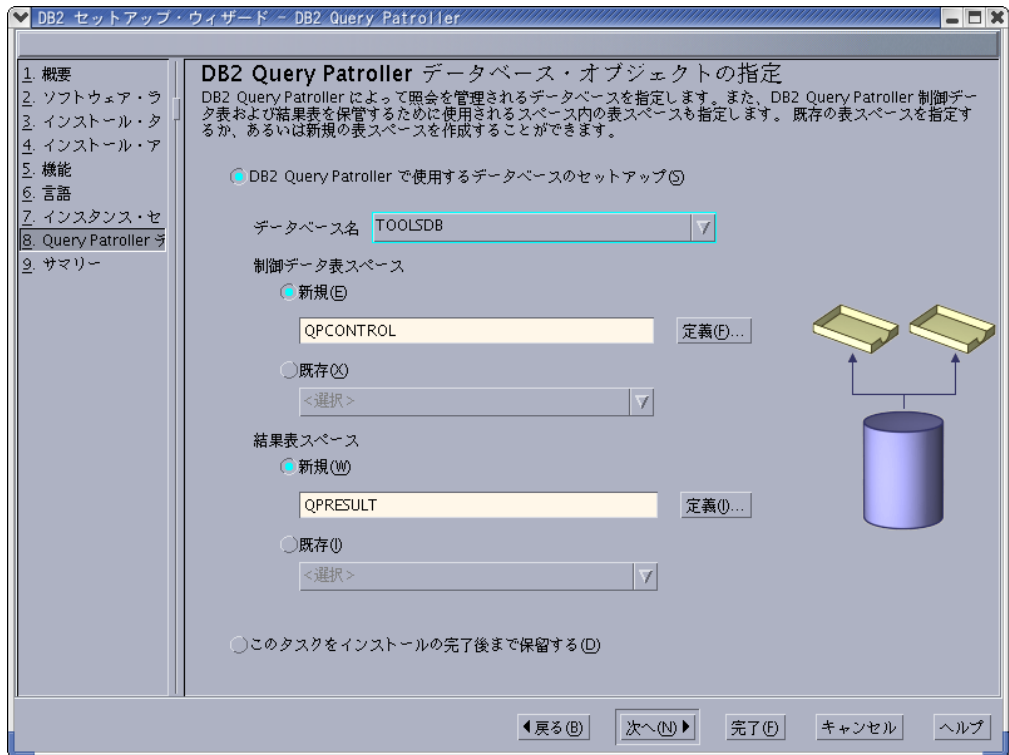


図 10. Query Patroller - データベース・オブジェクトの指定 (UNIX)

15. 新規コントロール・データ表スペースの作成を選択すると、「新規コントロール・データ表スペースの定義」ウィンドウが表示されます。このウィンドウへの値の入力を終わったら、「OK」をクリックします。「DB2 Query Patroller データベース・オブジェクトの指定」ウィンドウが再び表示され、テキスト・フィールドに新規のコントロール・データ表スペースの名前が表示されます。表スペースを選択したら、「次へ」をクリックします。

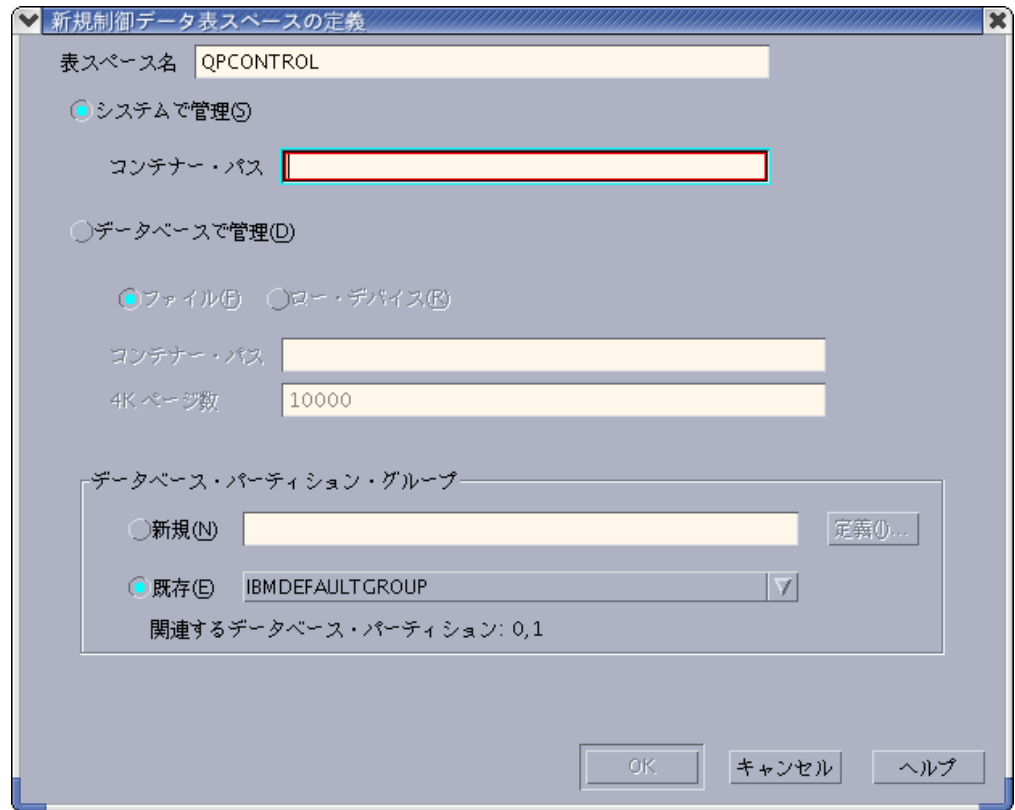


図 11. Query Patroller - 新規コントロール・データ表スペースの定義 (UNIX)

16. 新規の結果表スペースの作成を選択すると、「新規結果表スペースの定義」ウィンドウが表示されます。このウィンドウへの値の入力を終えたら、「OK」をクリックします。「DB2 Query Patroller データベース・オブジェクトの指定」ウィンドウが再び表示され、テキスト・フィールドに新規の結果表スペースの名前が表示されます。表スペースを選択したら、「次へ」をクリックします。

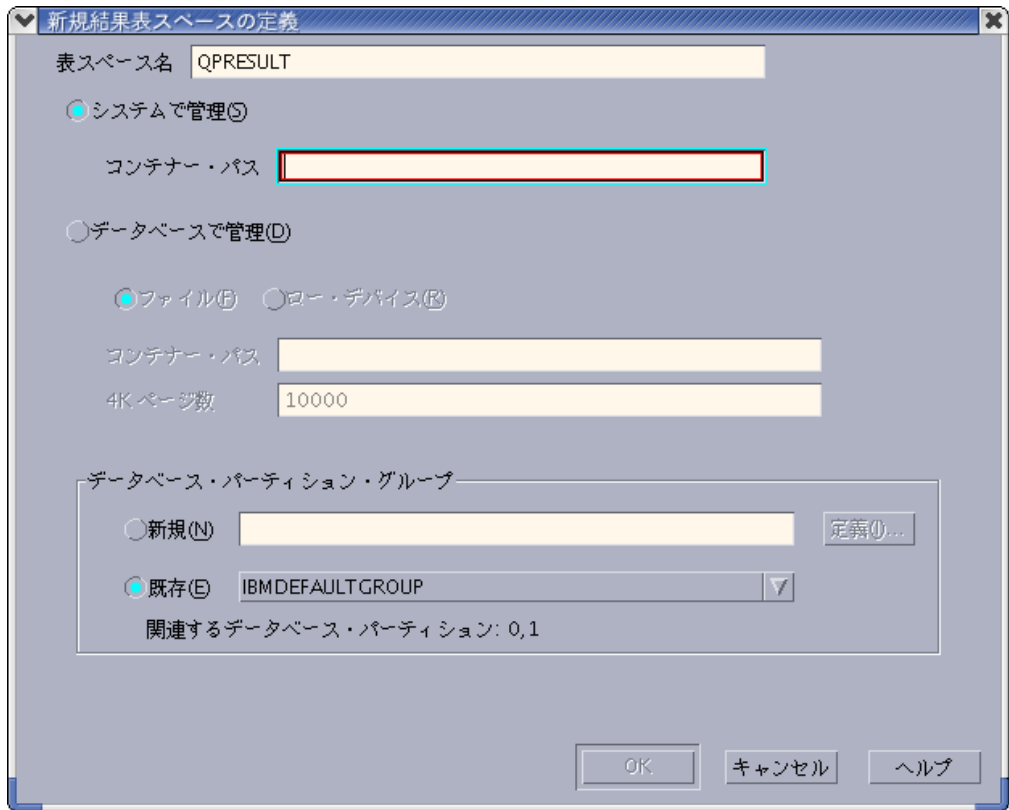


図 12. Query Patroller - 結果表スペースの定義 (UNIX)

17. Query Patroller サーバーをパーティション環境にインストールしている場合は、「新規データベース・パーティション・グループの定義」ウィンドウが表示されます。このウィンドウに必要な情報を入力して、「OK」をクリックします。



図 13. Query Patroller - 新規のデータベース・パーティション・グループ (UNIX)

18. 「ファイルのコピーの開始 (Start copying files)」ウィンドウで、「現在の設定 (Current settings)」の設定をチェックします。設定が希望に添うものであるなら、「完了」をクリックしてファイルのコピーを開始します。

インストールについては、オンライン・ヘルプが用意されています。オンライン・ヘルプを呼び出すには、各インストール・コーナーの右下の隅にある「ヘルプ」ボタンをクリックするか、または **F1** を押します。また、「キャンセル」ボタンをクリックすれば、いつでもインストールを中止できます。

インストールが完了すると、以下のディレクトリーのいずれかに Query Patroller サーバーがインストールされます。

AIX /usr/opt/db2_08_01

HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境

/opt/IBM/db2/V8.1

セットアップ・ウィザードを使用して、UNIX ベース・オペレーティング・システムに DB2 Query Patroller サーバーをインストールするタスクが完了しました。Query Patroller サーバーのインストールを検査したり、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して UNIX ベースの DB2 クライアントに Query Patroller クライアント・ツールをインストールしたりできます。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 63 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)』
- 87 ページの『Query Patroller サーバーの手動設定』
- 90 ページの『Query Patroller サーバーの手動移行』
- 40 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (UNIX)』
- 34 ページの『Query Patroller サーバーのインストールの検査』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』

関連資料:

- 22 ページの『Query Patroller サーバーのメモリー要件 (UNIX)』
- 23 ページの『Query Patroller サーバーのディスク要件 (UNIX)』
- 19 ページの『Query Patroller サーバーのインストール要件 (UNIX)』

Query Patroller サーバーのインストールの検査

Query Patroller サーバーのインストールが完了した後、インストールのチェックを行います。そのためには、照会をサブミットして、その状況をチェックします。

前提条件:

- **qpsetup** コマンドを発行して、Query Patroller サーバーをセットアップしなければなりません。このコマンドは、Query Patroller サーバーのインストールを検証する前に発行する必要があります。**qpsetup** コマンドは、サーバーのインストール時に自動発行することもできますし、インストール後に UNIX シェル・プロンプトまたは Windows コマンド・プロンプトで手動発行することもできます。
- データベースが属する DB2 インスタンスがサーバー上で稼働していることを確かめます。

手順:

Query Patroller サーバーのインストールを検証するには、次のようにします。

1. Query Patroller によって管理されるデータベースに、DBADM 権限を持つユーザーとしてログオンします。
2. Query Patroller を開始します。そのためには、**qpstart** コマンドを以下のように発行します。

```
qpstart dbname
```

ここで、*dbname* は、Query Patroller によって管理されるデータベースの名前です。以下のような出力が表示されるはずですが。

```
IBM DB2 Query Patroller V8, (c) Copyright IBM Corp. 1998-2003.
All rights reserved.
Initializing.
Query Patroller started.
```

注: UNIX ベースのオペレーティング・システムでは、**qpstart** コマンドは UNIX シェル・プロンプトに制御を戻します。残りの手順を継続するために 2 番目の UNIX シェル・プロンプトを開く必要はありません。Windows では、即時に Windows コマンド・プロンプトに制御が戻されます。

3. 次のコマンドを発行して、`dyn_query_mgmt` データベース構成パラメーターを使用可能にします。

```
db2 update db cfg for dbname using DYN_QUERY_MGMT enable
```

ここで、`dbname` は、Query Patroller によって管理されるデータベースの名前です。

4. Query Patroller サーバーで代行受信する照会をサブミットします。この照会の見積りコストは 15000 timeron 以上でなければなりません。なぜなら、15000 timeron よりコストの低い照会を Query Patroller は管理しないからです。これは、デフォルトの Query Patroller パラメーターによって判別されます。たとえば、次のような照会をサブミットします。

```
db2 select count(*) from syscat.tables,syscat.tables,syscat.tables
```

照会が戻るのを待ちます。この照会のコストが十分に高くない (15000 timeron より小さい) ことが分かった場合は、コストが最小コストの 15000 timeron より大きくなるまで十分な表をコマンドに付加します。たとえば、以下のように指定します。

```
db2 select count(*) from syscat.tables,syscat.tables,syscat.tables,...
```

上記の照会は一例に過ぎません。特定のシステムにより適合した照会をサブミットすることもできます。ただし、必ず照会のコストが 15000 timeron を超えるようにしてください。

5. 以下のコマンドを入力して、サブミットした照会の状況をチェックします。

```
qp -d dbname list queries
```

ここで、`dbname` は、Query Patroller によって管理されるデータベースの名前です。照会が正常に完了していたら、以下のような出力が表示されるはずです。

ID	Status	Created	Completed
1	Done	2003-10-30 18:36:37.615000	2003-10-30 18:36:37.615000

照会が打ち切られた場合、以下のような出力が表示されるはずです。

ID	Status	Created	Completed
1	Aborted	2003-10-30 18:36:37.615000	2003-10-30 18:36:37.615000

次のコマンドを発行すると、照会が打ち切られた理由を見出せます。

```
qp -d dbname get query 1
```

「Message Description」の下に、照会の打ち切りの原因となったエラーが示されます。エラーを調べ、照会を再サブミットしてください。

6. **qpstop** コマンドを入力して、Query Patroller サービスを停止します。以下のような出力が表示されるはずです。

```
IBM DB2 Query Patroller V8, (c) Copyright IBM Corp. 1998-2003.  
All rights reserved.  
Stopping Query Patroller.  
Query Patroller stopped.
```

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 63 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)』
- 24 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)』
- 87 ページの『Query Patroller サーバーの手動設定』
- 90 ページの『Query Patroller サーバーの手動移行』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』

DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (UNIX)

Query Patroller クライアント・ツールのインストール要件 (UNIX)

このトピックでは、UNIX ベース・オペレーティング・システムでの Query Patroller クライアント・ツールのハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信に関する要件をリストします。

ハードウェア要件

以下のいずれか。ご使用のシステムによって決まります。

- IBM RISC/6000 (AIX)
- eServer pSeries (AIX)
- HP 9000 シリーズ 700 または 800 システム (HP-UX)
- Intel 32 ビットまたは 64 ビット (Linux)
- Solaris SPARC ベースのコンピューター (Solaris オペレーティング環境)

オペレーティング・システム要件

AIX:

以下のいずれかです。

バージョン 4.3.3 (32 ビット)

- 保守レベル 9 と、IY22308 および IY32690 の APAR; または
- 保守レベル (ML) 10 以上と APAR IY32690

バージョン 5.1.0 (32 ビットまたは 64 ビット)

- 保守レベル 2 以上と、IY32905 および IY29345 の APAR; または
- 保守レベル 3 以上

バージョン 5.2.0 (32 ビットまたは 64 ビット)

現在のところ APAR は不要

次の AIX ファイル・セットは、英語以外の言語で DB2 をインストールまたは実行するのに必要です。

- X11.fnt.ucs.ttf (AIX Windows Unicode TrueType フォント)

- X11.fnt.ucs.com (AIX Windows Common フォント)
- x1C.rte 5.0.2.x
- アジア諸国の言語の場合、次のファイル・セットも必要です。
 - X11.fnt.ucs.ttf_CN (zh_CN または Zh_CN 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_KR (ko_KR 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_TW (zh_TW または Zh_TW 用)
- AIX バージョン 4.3.3 では、次のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix43.rte 5.0.2.x
- AIX バージョン 5.x では、次のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix50.rte 5.0.2.x

AIX ファイル・セットは、<http://techsupport.services.ibm.com/server/fixes> からダウンロードできます。

Linux:

- サポートされている Linux のレベルに関する最新の技術情報を調べるには、ブラウザで <http://ibm.com/db2/linux/validate> を参照してください。

HP-UX:

- PA-RISC 2.x (PA-8x00) プロセッサ搭載のシステム用の HP-UX 11i (11.11) で、以下のものがインストールされているもの。
 - 2002 年 12 月 GOLDBASE11i バンドル
 - 2002 年 12 月 GOLDAPPS11i バンドル
 - PHSS_26560、PHCO_27434、および PHKL_28489 のパッチ
 - Java SDK 1.3.1 用パッチ。必要なパッチについては、<http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html> を参照してください。

Solaris オペレーティング環境:

- Solaris のバージョン 7 以降
- Solaris Operating 環境のバージョン 7 以降には、以下のパッチが必要です。
 - Solaris 7 (32 ビット)「推奨 & セキュリティー・パッチ」+ 107226-17 + 107153-01 + 106327-10
 - Solaris 7 (64 ビット)「推奨 & セキュリティー・パッチ」+ 107226-17 + 107153-01 + 106300-11 + 106327-10
 - Solaris 8 (32 ビット)「推奨 & セキュリティー・パッチ」+ 108921-12 + 108940-24 + 108434-03 および 108528-12
 - Solaris 8 (64 ビット)「推奨 & セキュリティー・パッチ」+ 108921-12 + 108940-24 + 108435-03 + 108434-03 および 108528-12
 - Solaris 9 (32 ビット)
 - Solaris 9 (64 ビット)

Solaris オペレーティング環境に Query Patroller をインストールするには、次のソフトウェアが必要です。

- SUNWlibC

ソフトウェア要件

- DB2 製品が、Query Patroller クライアント・ツールをインストールするコンピューターにインストールされていなければなりません。DB2 製品はバージョン 8.1.2 (フィックスパック 2+) か、またはバージョン 8.1.2 以降の製品でなければなりません。以下の製品が該当する前提条件です。
 - 任意の DB2 クライアント製品 (DB2 Run-Time Client や DB2 Application Development Client など)
 - 任意の DB2 Connect 製品 (DB2 Connect Personal Edition や DB2 Connect Enterprise Server Edition など)
 - 任意の DB2 サーバー製品 (DB2 Enterprise Server Edition や DB2 Workgroup Server Edition など)
- 32 ビット環境で Query Patroller サーバー、Query Patroller の Java ベースのツール (クエリー・パトローラー・センターなど) を実行したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、IBM Software Development Kit (SDK) バージョン 1.3.1 またはバージョン 1.4.1 が必要です。インストール・プロセス中に、正しいレベルの IBM Software Developer's Kit for Java (SDK) がインストールされていない場合、必要に応じて SDK がインストールされます。
- 64 ビット環境で Query Patroller サーバー、Query Patroller の Java ベースのツール (クエリー・パトローラー・センターなど) を実行したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、IBM Software Development Kit (SDK) バージョン 1.4.1 が必要です。インストール・プロセス中に、正しいレベルの IBM Software Developer's Kit for Java (SDK) がインストールされていない場合、必要に応じて SDK がインストールされます。LinuxIA64 では、IBM Software Developer's Kit for Java (SDK) バージョン 1.3.1 が必要です。最新の DB2 Java アプリケーション開発アップデートについては、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/ad/v8/java> の Web ページを参照してください。
- オンライン・インストール・ヘルプを表示するには、Netscape 6.2 または Microsoft Internet Explorer 5.5 以上が必要です。

通信要件

- TCP/IP。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 40 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (UNIX)』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』

関連資料:

- 39 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのメモリー要件 (UNIX)』
- 39 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのディスク要件 (UNIX)』

Query Patroller クライアント・ツールのメモリー要件 (UNIX)

DB2 クライアントで Query Patroller クライアント・ツールを実行する際の、推奨されている最小メモリー要件を以下に示します (UNIX)。

- システム管理ワークステーションで Query Patroller クライアント・ツールを実行する場合は、UNIX ベースのオペレーティング・システムを実行するのに必要な RAM 容量に加えて、さらに 64 MB の RAM が必要です。
- メモリー所要量: Query Patroller サーバーに照会をサブミットする DB2 クライアントで Query Patroller クライアント・ツールを実行するのに必要なメモリーの量は、次の要素に応じて異なります。

- 使用する UNIX 系オペレーティング・システム、および
- 実行しているデータベース・アプリケーション

オペレーティング・システムの最小メモリー要件を、DB2 クライアントでこれらのツールを実行するための最小の要件として使用できます。

注: 推奨されている最小メモリー要件に満たない場合は、パフォーマンスに悪影響を及ぼすことがあります。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 40 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (UNIX)』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』

関連資料:

- 36 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのインストール要件 (UNIX)』
- 39 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのディスク要件 (UNIX)』

Query Patroller クライアント・ツールのディスク要件 (UNIX)

インストールの実際のハード・ディスク要件は、使用するファイル・システムやインストールする Query Patroller クライアント・ツールによって異なる可能性があります。アプリケーション開発ツール (必要な場合) と通信製品のためのディスク・スペースも確実に含めてください。

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 クライアントに Query Patroller クライアントをインストールするときは、サイズ見積りはインストール・タイプとコンポーネント選択に基づいて、インストール・プログラムによって動的に指定されます。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 40 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (UNIX)』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』

関連資料:

- 36 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのインストール要件 (UNIX)』
- 39 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのメモリー要件 (UNIX)』

DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (UNIX)

このタスクは、より上位のタスクである *Query Patroller* のインストール (UNIX) の一部です。

このタスクは、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、UNIX ベースの DB2 クライアントで *Query Patroller* クライアント・ツールをインストールするステップの概要です。

前提条件:

UNIX ベースの DB2 クライアントで *Query Patroller* クライアント・ツールをインストールする前に、以下の要件を満たす必要があります。

- *Query Patroller* クライアント・ツールのインストール要件 (UNIX)
- *Query Patroller* クライアント・ツールのメモリー要件 (UNIX)
- *Query Patroller* クライアント・ツールのディスク要件 (UNIX)
- Solaris オペレーティング環境または HP-UX で実行されている DB2 クライアントに *Query Patroller* クライアント・ツールをインストールする場合は、カーネル構成パラメーターを更新してシステムを再始動する必要があります。
- DB2 製品 (バージョン 8.1.2 以上) が、DB2 *Query Patroller* クライアント・ツールをインストールするコンピューターにインストールされていなければなりません。以下の製品が該当する前提条件です。
 - 任意の DB2 クライアント製品 (DB2 Run-Time Client や DB2 Application Development Client など)
 - 任意の DB2 Connect 製品 (たとえば、DB2 Connect Personal Edition や DB2 Connect Enterprise Server Edition)
 - 任意の DB2 サーバー製品 (DB2 Enterprise Server Edition や DB2 Workgroup Server Edition など)

手順:

カーネル構成パラメーターを更新してシステムをリブート (Solaris および HP-UX の場合に必要) した後に、*Query Patroller* クライアント・ツールをインストールすることができます。

次のようにして、UNIX ベースの DB2 クライアントに *Query Patroller* クライアント・ツールをインストールします。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。

2. 他のすべてのプログラムをシャットダウンし、DB2 セットアップ・ウィザードが必要に応じてファイルを更新できるようにします。
3. Query Patroller 製品 CD-ROM のラベルを調べて、適切な言語の CD-ROM を使用していることを確認します。
4. Query Patroller 製品 CD-ROM をマウントします。
5. 以下のコマンドを入力することによって、CD-ROM がマウントされているディレクトリーに移動します。

```
cd /cdrom
```

ここで、*/cdrom* は CD-ROM のマウント・ポイントを表しています。

6. **./db2setup** コマンドを入力し、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。「IBM DB2 セットアップ・ランチパッド」ウィンドウがオープンします。
7. DB2 ランチパッドから「製品のインストール」を選択します。
8. 「インストールしたい製品を選択します」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。
9. 「DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。
10. 「ソフトウェア使用条件 (Software License Agreement)」ウィンドウで、条項に同意する場合は「同意します (Accept)」を選択し、「次へ」をクリックします。条項に同意しない場合は「Decline (同意しません)」を選択します。それから、「キャンセル」をクリックしてインストールを終了します。
11. 「インストール・タイプの選択」ウィンドウで、「コンピューター用途ベース」ボタンを選択し、「次へ」をクリックします。
12. 「このマシンの使用方法の選択」ウィンドウで、「管理者またはセルフサービス機能を持ったエンド・ユーザー」を選択し、「次へ」をクリックします。
13. セットアップ・プログラムのプロンプトに従って進んでください。残りのステップについては、オンライン・ヘルプを参照できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、各インストール・コーナーの右下の隅にある「ヘルプ」ボタンをクリックするか、または **F1** を押します。また、「キャンセル」ボタンをクリックすれば、いつでもインストールを中止できます。

インストールが完了すると、以下のディレクトリーのいずれかに Query Patroller クライアント・ツールがインストールされます。

AIX /usr/opt/db2_08_01

HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境

/opt/IBM/db2/V8.1

これで、Query Patroller ツールが使用可能になった DB2 クライアント (UNIX) を構成して、リモートの Query Patroller サーバーにアクセスする準備ができました。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』

関連資料:

- 36 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのインストール要件 (UNIX)』
- 39 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのメモリー要件 (UNIX)』
- 39 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのディスク要件 (UNIX)』

コマンド行プロセッサを使用した、クライアントから Query Patroller サーバーへの接続の構成

このタスクでは、コマンド行プロセッサ (CLP) を使用して、クライアントから Query Patroller サーバーへの接続を構成する方法を説明します。

前提条件:

クライアントから Query Patroller サーバーへの接続を構成する前に、

- クライアント・コンピューター上で、通信を構成する必要があります。通信は、TCP/IP でなければなりません。
- Query Patroller サーバー上で、通信を構成する必要があります。通信は、TCP/IP でなければなりません。

手順:

次のようにして、コマンド行プロセッサを使用して、クライアントから Query Patroller サーバーへの接続を構成します。

1. DB2 クライアント上で TCP/IP ノードをカタログします。
2. DB2 クライアント上でデータベースをカタログします。
3. クライアントからサーバーへの接続をテストします。

関連タスク:

- 42 ページの『DB2 クライアントでの TCP/IP ノードのカタログ』
- 44 ページの『CLP によるデータベースのカタログ』
- 46 ページの『CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト』

DB2 クライアントでの TCP/IP ノードのカタログ

TCP/IP ノードのカタログでは、DB2 クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードについて記述する項目が追加されます。この項目では、選択された別名 (*node_name*)、*hostname* (または *ip_address*)、およびクライアントがリモート・ホストにアクセスするときに使用する *svcname* (または *port_number*) を指定します。

前提条件:

- システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限か、または *catalog_noauth* オプションが ON に設定されていることが必要です。root 権限を使用してノードをカタログすることはできません。

手順:

TCP/IP ノードのカタログを実行するには、

1. システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限のあるユーザーとしてシステムにログオンします。
2. UNIX クライアントを使用している場合には、下記のようにしてインスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sqllib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sqllib/db2cshrc
```

ここで、*INSTHOME* はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

3. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
4. コマンド行プロセッサに次のようなコマンドを入力して、ノードをカタログします。

```
db2 => catalog tcpip node node_name remote hostname|ip_address  
server service_name|port_number [remote_instance instance_name]  
[system system_name] [ostype os_type]
```

```
db2 => terminate
```

ここで、

- *node_name* は、カタログするデータベースが含まれているマシンに対して設定可能なニックネームです。
- *remote_instance* は、アタッチ先サーバー・インスタンスの名前です。
- *system* は、サーバーを識別するための DB2 システム名です。
- *ostype* は、サーバーのオペレーティング・システムのタイプです。

注:

- a. **terminate** コマンドは、ディレクトリー・キャッシュをリフレッシュするために必要です。
- b. *remote_instance*、*system*、および *ostype* はオプションですが、DB2 ツールを使用するユーザーの場合は必須です。
- c. クライアントで使用される *service_name* は、サーバーのものと同一である必要はありません。しかし、そのマップ先ポート番号は同じでなければなりません。

注:

たとえば、ポート番号 *50000* を使用しているリモート・サーバー *earth.torolab.ibm.com* 上で *earth* を呼び出すためのノードをカタログするには、**db2** プロンプトで次のように入力します。

```
db2 => catalog tcpip node earth remote earth server 50000  
DB20000I The CATALOG TCP/IP NODE command completed successfully.  
DB21056W Directory changes may not be effective until the directory cache is  
refreshed.
```

```
db2 => terminate  
DB20000I The TERMINATE command completed successfully.
```


関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『CLP によるクライアントでの TCP/IP 通信の構成』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG TCPIP NODE コマンド』

データベースのカタログと接続のテスト

CLP によるデータベースのカタログ

ここでは、DB2 コマンド行プロセッサ (CLP) を使用することによって、データベースのカタログを作成する方法について説明します。

クライアント・アプリケーションからリモート・データベースにアクセスできるようにするには、クライアント上にそのデータベースのカタログを作成する必要があります。データベースを作成すると、特に指定しない限りそのデータベースは、データベース名と同じデータベース別名を使用して、サーバー上で自動的にカタログされます。

DB2 クライアントとリモート・データベースの接続確立には、データベース・ディレクトリー内の情報、および (ノード不要のローカル・データベースのカタログを実行するのでない限り) ノード・ディレクトリー内の情報が使用されます。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID が必要です。
- DB2 では、root 権限によるデータベースのカタログ作成はサポートされていません。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect 製品がインストールされているシステムでデータベースのカタログを実行する場合は、システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限を付与されたユーザー ID でなければなりません。
- 下記のパラメーター値は、リモート・データベースのカタログに適用されます。
 - データベース名
 - データベース別名
 - ノード名
 - 認証タイプ (オプション)
 - コメント (オプション)

それらのパラメーター値について、また使用する値を記録することについては、『データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート』を参照してください。

- 下記のパラメーター値は、ローカル・データベースのカタログに適用されます。
 - データベース名
 - データベース別名
 - 認証タイプ (オプション)

– コメント (オプション)

ローカル・データベースは、いつでもアンカタログおよび再カタログできます。

手順:

データベースをクライアントでカタログするには、次に示すステップを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. オプション。『データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート』の「使用値」欄を更新してください。
3. UNIX プラットフォームで DB2 を使用している場合には、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、 Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

INSTHOME はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

4. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。 Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを実行します。 UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを実行します。
5. コマンド行プロセッサに次のようなコマンドを入力して、データベースをカタログします。

```
db2 => catalog database database_name as database_alias at  
node node_name [ authentication auth_value ]
```

ここで、

- *database_name* は、カタログするデータベースの名前です。
- *database_alias* は、カタログするデータベースの代替名またはニックネームです。
- *node_name* は、カタログするデータベースが含まれているマシンに対して設定可能なニックネームです。
- *auth_value* は、リモート・データベースの認証値です。認証タイプを指定すると、パフォーマンスが向上することがあります。認証値として指定できるオプションは、SERVER、CLIENT、SERVER_ENCRYPT、および KERBEROS です。

例:

たとえば、*sample* というリモート・データベースを、ノード *db2node* においてローカル・データベース別名 *mysample* でカタログし、認証値として *server* を使用するには、次のコマンドを入力します。

```
db2 => catalog database sample as mysample at node db2node  
authentication server
```

```
db2 => terminate
```

関連タスク:

- 46 ページの『CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト』

関連資料:

- 「インストールおよび構成 補足」の『データベースのカatalogのためのパラメーター値ワークシート』
- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG DATABASE コマンド』

CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト

ノードとデータベースのカatalogが終わったら、データベースに接続して接続のテストを実行する必要があります。

前提条件:

- 接続をテストするためには、その前にデータベース・ノードとデータベースのカatalogを実行しておくことが必要です。
- *userid* および *password* の値は、この 2 つが認証されるシステムで有効なものではなければなりません。デフォルトでは、認証はサーバー上で実行されます。
- データベース・マネージャーが開始済みでなければなりません。まだ開始されていない場合には、データベース・サーバーで **db2start** コマンドを入力することによって、データベース・マネージャーを開始できます。

手順:

クライアントからサーバーへの接続をテストするには、

1. UNIX プラットフォームで DB2 を使用している場合には、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

INSTHOME はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

2. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
3. クライアント側で次のコマンドを入力することにより、リモート・データベースに接続します。

```
db2 => connect to database_alias user userid
```

たとえば、次のコマンドを入力します。

```
connect to mysample user jtris
```

パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。

接続が正常に完了したら、接続先のデータベースの名前を示したメッセージが表示されます。下記のようなメッセージが表示されます。

```
Database Connection Information
Database server = DB2/NT 8.1.0
SQL authorization ID = JSTRIS
Local database alias = mysample
```

これで、データベースを使用できるようになります。たとえば、システム・カタログ表にリストされているすべての表名のリストを取り出したい場合、次のような SQL コマンドを入力します。

```
select tablename from syscat.tables
```

db2 terminate コマンドの後で SQL ステートメントを発行すると、暗黙接続となります。デフォルト・データベースを定義するには、**db2set db2dbdft = <dbname>** コマンドを実行します。このコマンドを実行した後、データベースに接続せずに、たとえば **db2 select * from <table>** コマンドを実行します。このコマンドは、**db2dbdft** で定義されている値を使用します。デフォルト以外のデータベースに接続するには、**CONNECT** コマンドを使用して、選択したデータベースに明示的に接続しなければなりません。

データベース接続の使用が終わったら、**connect reset** コマンドを入力してデータベース接続を終了します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2start - DB2 の開始コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

第 5 章 Query Patroller の手動でのインストール (UNIX)

Query Patroller のインストールで DB2 セットアップ・ウィザードを使用しない場合、続くセクションの情報を使用して、Query Patroller を手動でインストールできます。

注: 手動インストールが完了したら、**qpsetup** コマンドを実行して、手動インストールが正常に行われたかどうか検査します。

DB2 製品の手動インストール

DB2 製品は、DB2 セットアップ・ウィザードまたは応答ファイルを使用してインストールすることが勧められています。DB2 セットアップ・ウィザードには、便利なグラフィカル・インターフェースとインストールのヘルプ、ユーザーおよびグループの作成、プロトコルの構成、インスタンスの作成の機能が含まれています。

応答ファイルによるインストールも、グラフィカル・インターフェースがないだけで、それ以外の点では同じメリットがあります。それに加えて、応答ファイルを使用する場合は、個々の DBM 構成パラメーターやプロファイル・レジストリー変数を設定するなど、高度な構成機能を利用できます。

それでも、UNIX ベースのオペレーティング・システムでそれらのインストール方法を使用したくない場合は、**db2_install** スクリプトや UNIX ベースのオペレーティング・システム付属のインストール・ユーティリティーを使用して、手動で DB2 製品をインストールすることができます。

前提条件:

インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。たとえば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合には、「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

制約事項:

Windows オペレーティング・システムでは、DB2 製品を手動でインストールすることはできません。Windows オペレーティング・システムの場合、DB2 セットアップ・ウィザードまたは応答ファイルを使用する以外の方法で DB2 製品をインストールすることはできません。

手順:

下記のようにして、手動インストールを選択します。

- **db2_install** スクリプトを使用して DB2 をインストールする (サポートされるいずれかの UNIX 系オペレーティング・システムでのインストールで使用可能)
- SMIT を使用して AIX に DB2 をインストールする
- rpm を使用して Linux に DB2 をインストールする

- swinstall を使用して HP-UX に DB2 をインストールする
- pkgadd を使用して Solaris オペレーティング環境に DB2 をインストールする

関連概念:

- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB のインストール方式 (Windows および UNIX)』

関連タスク:

- 50 ページの『db2_install スクリプトによる DB2 製品のインストール』
- 52 ページの『SMIT を使用して AIX に DB2 製品をインストールする』
- 54 ページの『rpm を使用して Linux に DB2 製品をインストールする』
- 55 ページの『swinstall を使用して HP-UX に DB2 製品をインストールする』
- 53 ページの『pkgadd を使用して Solaris オペレーティング環境に DB2 製品をインストールする』
- 「インストールおよび構成 補足」の『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

db2_install スクリプトによる DB2 製品のインストール

db2_install スクリプトは、UNIX 系オペレーティング・システムのネイティブ・インストール・ユーティリティを使用することにより、特定の DB2 製品のすべてのコンポーネントをシステムにインストールします。db2_install スクリプトでのインストールは英語サポートだけです。つまり、ヘルプ、メッセージ、およびツールのインターフェースは英語だけです。この方法で製品をインストールした場合、対話式インストール (DB2 セットアップ・ウィザード) または応答ファイルによるインストールの場合なら自動的に実行されるユーザーの作成や構成などの作業を、インストール後に実行する必要があります。

前提条件:

db2_install スクリプトを使用して DB2 製品をインストールする前に、

- root 権限が必要です。
- インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。たとえば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合には、「*DB2* サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

制約事項:

Windows オペレーティング・システムでは、db2_install スクリプトを使用して DB2 をインストールすることはできません。DB2 for Windows は、DB2 セットアップ・ウィザードまたは応答ファイルを使用してインストールする必要があります。

手順:

db2_install スクリプトを使用して DB2 製品をインストールするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。

3. シェル・プロンプトに対して `./db2_install` コマンドを入力して、`db2_install` スクリプトを起動します。`db2_install` スクリプトは、DB2 バージョン 8 の製品 CD-ROM の `root` ディレクトリーにあります。`db2_install` スクリプトは、以下のキーワードのいずれかを入力するためのプロンプトを表示します (どの DB2 製品をインストールするかを示す)。

DB2.EXP

DB2 Express Edition

DB2.ESE

DB2 Enterprise Server Edition

DB2.WSE

DB2 Workgroup Server Edition および DB2 Workgroup Server Unlimited Edition

DB2.PE

DB2 Personal Edition

DB2.CONEE

DB2 Connect Enterprise Edition、DB2 Connect Unlimited Edition、および DB2 Connect Application Server Edition

DB2.CONPE

DB2 Connect Personal Edition

DB2.ADMCL

DB2 Administration Client

DB2.ADCL

DB2 Application Development Client

DB2.RTCL

DB2 Run-Time Client

DB2.DLM

DB2 Data Links Manager

DB2.GSE

DB2 Spatial Extender

DB2.WM

DB2 Warehouse Manager

DB2.WMC

DB2 Warehouse Manager Connector

DB2.QP

DB2 Query Patroller

DB2.CUBE

DB2 Cube Views

DB2.LSDC

DB2 Information Integrator 非リレーショナル・ラッパー

DB2.RCON

DB2 Information Integrator リレーショナル・ラッパー

4. インストールする製品に対応するキーワードを入力してください。複数の製品キーワードを指定する場合は、キーワードとキーワードの間をスペースで区切りません。

DB2 ソフトウェアのインストール・ディレクトリーは、次の場所にあります。

- /usr/opt/db2_08_01 (AIX の場合)
- /opt/IBM/db2/V8.1 (HP-UX、Linux、または Solaris オペレーティング環境の場合)

Solaris オペレーティング環境の場合は、DB2 のベース・ディレクトリーとして異なるディレクトリーを指定できます。Solaris オペレーティング環境の場合のデフォルトのベース・ディレクトリーは、/opt です。それとは別のベース・ディレクトリーに DB2 をインストールする場合には、データベースの DB2 インストール・ディレクトリー /opt/IBM/db2/V8.1 のためのリンクが設定されます。製品の一部は、デフォルトのインストール・ディレクトリーに依存しています。リンクを作成することによって、DB2 の物理的位置を /opt 以外のベース・ディレクトリーにすることが可能になります。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (AIX)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『HP-UX 上での CD-ROM のマウント』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 「インストールおよび構成 補足」の『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

SMIT を使用して AIX に DB2 製品をインストールする

ここでは、AIX において、システム管理インターフェース・ツール (SMIT) を使用することにより DB2 製品をインストールする方法について説明します。この方法で製品をインストールした場合、対話式インストール (DB2 セットアップ・ウィザード) や応答ファイルによるインストールの場合なら自動的に実行されるユーザーの作成や構成などの作業を、インストール後に実行する必要があります。

前提条件:

SMIT を使用して AIX に DB2 をインストールする前に、

- root 権限が必要です。
- インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。たとえば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合には、「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

手順:

SMIT を使用して DB2 製品を AIX にインストールするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。

3. シェル・プロンプトに対して **smit** コマンドを入力します。 **smit** GUI が表示されます。
4. 「システム管理 (**System Management**)」 リストで、「ソフトウェアのインストールと保守 (**Software Installation and Maintenance**)」 → 「ソフトウェアのインストールと更新 (**Install and Update Software**)」 → 「ソフトウェアのインストール (**Install Software**)」を選択します。
5. 「*ソフトウェアの入力装置/ディレクトリー (***INPUT device/directory for software**)」 テキスト・フィールドで、インストール・メディアの入力装置またはディレクトリーを指定します。または、「リスト (**List**)」をクリックすると、すべての入力装置またはディレクトリーが表示されます。
6. マウントされている CD-ROM ドライブをリストから選択します。インストール・メディアの入力装置またはディレクトリーが「*ソフトウェアの入力装置/ディレクトリー (***INPUT device/directory for software**)」 テキスト・フィールドに表示されます。「**OK**」をクリックします。
7. 「*インストールするソフトウェア (***SOFTWARE to install**)」 テキスト・フィールドで、インストールするコンポーネントを指定します。または、「リスト (**List**)」 ボタンをクリックすると、インストール可能なソフトウェア製品が表示されます。「**OK**」をクリックします。

注: DB2 製品の各 CD-ROM には、インストールできるコンポーネントのリストを示すファイルが含まれています。そのリストを使用して、インストールする製品のうち必須、標準、およびオプションの DB2 コンポーネントについて調べてください。コンポーネントのリストは、ComponentList.htm というファイルに含まれており、それは CD-ROM の /db2/plat ディレクトリーに含まれています (plat はインストール対象のプラットフォーム)。

インストール処理が完了すると、 /usr/opt/db2_08_01 ディレクトリーに DB2 ソフトウェアがインストールされます。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (AIX)』
- 「インストールおよび構成 補足」の『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

pkgadd を使用して Solaris オペレーティング環境に DB2 製品をインストールする

ここでは、Solaris オペレーティング環境において、**pkgadd** ユーティリティーを使用することにより DB2 製品をインストールする方法について説明します。この方法で製品をインストールした場合、対話式インストール (DB2 セットアップ・ウィザード) や応答ファイルによるインストールの場合なら自動的に実行されるユーザーの作成や構成などの作業を、インストール後に実行する必要があります。

前提条件:

pkgadd を使用して Solaris オペレーティング環境に DB2 製品をインストールする前に、

- root 権限が必要です。
- インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。たとえば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合には、「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

手順:

pkgadd を使用して Solaris オペレーティング環境に DB2 製品をインストールするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。
3. インストールするコンポーネントを指定します。DB2 製品の各 CD-ROM には、インストールできるコンポーネントのリストを示すファイルが含まれています。そのリストを使用して、必須、標準、およびオプションの DB2 コンポーネントについて調べてください。コンポーネントのリストは、ComponentList.htm というファイルに含まれており、それは CD-ROM の /db2/plat ディレクトリーに含まれています (plat はインストール対象のプラットフォーム)。
4. インストールするコンポーネントごとに **pkgadd** コマンドを実行します。

```
pkgadd component_name
```

たとえば、コントロール・センターをインストールする場合には、下記のコマンドを入力することによって db2wcc81 コンポーネントをインストールします。

```
pkgadd db2wcc81
```

インストール処理が完了すると、DB2 ソフトウェアは /opt/IBM/db2/V8.1 ディレクトリーにインストールされます。

関連タスク:

- 50 ページの『db2_install スクリプトによる DB2 製品のインストール』
- 「インストールおよび構成 補足」の『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

rpm を使用して Linux に DB2 製品をインストールする

ここでは、Linux において、**rpm** コマンドを使用することにより DB2 製品をインストールする方法について説明します。この方法で製品をインストールした場合、対話式インストール (DB2 セットアップ・ウィザード) や応答ファイルによるインストールの場合なら自動的に実行されるユーザーの作成や構成などの作業を、インストール後に実行する必要があります。

前提条件:

rpm コマンドを使用して Linux に DB2 製品をインストールする前に、

- root 権限が必要です。

- インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。たとえば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合には、「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

手順:

rpm コマンドを使用して Linux に DB2 製品をインストールするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。
3. インストールするコンポーネントを指定します。DB2 製品の各 CD-ROM には、インストールできるコンポーネントのリストを示すファイルが含まれています。そのリストを使用して、必須、標準、およびオプションの DB2 コンポーネントについて調べてください。コンポーネントのリストは、ComponentList.htm というファイルに含まれており、それは CD-ROM の /db2/plat ディレクトリーに含まれています (plat はインストール対象のプラットフォーム)。
4. インストールするコンポーネントごとに **rpm** コマンドを実行します。

```
rpm -ivh component_name
```

たとえば、コントロール・センターをインストールする場合には、下記のコマンドを入力することによって db2cc81-8.1.0-0.i386.rpm コンポーネントをインストールします。

```
rpm -ivh IBM_db2cc81-8.1.0-0.i386.rpm
```

インストール処理が完了すると、/opt/IBM/db2/V8.1 ディレクトリーに DB2 ソフトウェアがインストールされます。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 「インストールおよび構成 補足」の『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

swinstall を使用して HP-UX に DB2 製品をインストールする

ここでは、HP-UX において、**swinstall** ユーティリティーを使用することにより DB2 製品をインストールする方法について説明します。この方法で製品をインストールした場合、対話式インストール (DB2 セットアップ・ウィザード) や応答ファイルによるインストールの場合なら自動的に実行されるユーザーの作成や構成などの作業を、インストール後に実行する必要があります。

前提条件:

swinstall ユーティリティーを使用して HP-UX に DB2 製品をインストールする前に、

- root 権限が必要です。
- インストールする個々の DB2 製品については、インストールの資料を参照してください。たとえば、DB2 Enterprise Server Edition をインストールする場合に

は、「DB2 サーバー機能 概説およびインストール」のマニュアルを参照して、インストールの前提条件などの重要なセットアップ情報を確認してください。

手順:

swinstall ユーティリティーを使用して HP-UX に DB2 製品をインストールするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。
3. シェル・プロンプトに対して次のコマンドを入力することによって、 **swinstall** ユーティリティーを実行します。

```
swinstall -x autoselect_dependencies=true
```

このコマンドを実行すると、「ソフトウェアの選択 (Software Selection)」、および「ソースの指定 (Specify Source)」ウィンドウが表示されます。必要に応じて、「ソースの指定 (Specify Source)」ウィンドウの「ソース・ホスト名 (Source Host Name)」に表示されているホスト名を変更します。

4. 「ソース・デポ・パス (Source Depot Path)」フィールドで、
/cdrom/db2/hpux と入力します (/cdrom は CD-ROM のマウント・ディレクトリー)。
5. 「OK」をクリックして、「ソフトウェアの選択 (Software Selection)」ウィンドウに戻ります。
6. 「ソフトウェアの選択 (Software Selection)」ウィンドウには、インストール可能なソフトウェアのリストが表示されます。インストールするコンポーネントを指定します。DB2 製品の各 CD-ROM には、インストールできるコンポーネントのリストを示すファイルが含まれています。そのリストを使用して、必須、標準、およびオプションの DB2 コンポーネントについて調べてください。コンポーネントのリストは、ComponentList.htm というファイルに含まれており、それは CD-ROM の /db2 ディレクトリーに含まれています。
7. 「アクション (Actions)」メニューから「インストール用にマーク (Mark for Install)」を選択して、インストールするコンポーネントを選択します。
8. 下記のメッセージが表示されたなら、「OK」をクリックします。

```
In addition to the software you just marked, other software was  
automatically marked to resolve dependencies. This message will  
not appear again.
```
9. 「アクション (Actions)」メニューから「インストール (分析) (Install (analysis))」を選択します。「インストール分析 (Install Analysis)」ウィンドウが表示されます。
10. 「状況 (Status)」フィールドに「作動可能 (Ready)」というメッセージが表示されたなら、「インストール分析 (Install Analysis)」ウィンドウの「OK」を選択します。
11. 確認ウィンドウで「はい (Yes)」を選択して、ソフトウェアのインストールを確認します。

ソフトウェアがインストールされる間、「インストール (Install)」ウィンドウを見て、「状況 (Status)」フィールドに「作動可能 (Ready)」が表示されるのを

確認します。「メモ (Note)」ウィンドウが表示されます。 **swinstall** プログラムによってファイル・セットがロードされ、そのファイル・セットのための制御スクリプトが実行されます。

12. 「ファイル (File)」メニューから「終了 (Exit)」を選択し、 **swinstall** を終了します。

インストール処理が完了すると、 /opt/IBM/db2/V8.1 ディレクトリーに DB2 ソフトウェアがインストールされます。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『HP-UX 上での CD-ROM のマウント』
- 「インストールおよび構成 補足」の『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)

インストールする Query Patroller コンポーネントとツール、およびインストール先の環境の種類が分かっている場合、以下のステップに従って、Query Patroller を Windows サーバーおよび Windows クライアントにインストールできます。

前提条件:

Query Patroller をインストールする前に、以下のようにしてください。

- Query Patroller をインストールする環境の種類を確認する。
- Query Patroller サーバーをインストールするコンピューターが、必須のインストール、メモリー、およびディスク要件を満たしているか検査する。
- Query Patroller クライアント・ツールをインストールするコンピューターが、必須のインストール、メモリー、およびディスク要件を満たしているか検査する。
- Query Patroller をインストールする前に、DYN_QUERY_MGMT 構成パラメーターが DISABLE に設定されていることを確認してください。Query Patroller が照会を代行受信および管理するためには、このパラメーターが ENABLE に設定されていなければなりません。インストール時にインストーラーによって実行される内部照会が代行受信されないようにするため、インストールに先立ってこのパラメーターを DISABLE に設定する必要があります。

手順:

Query Patroller をインストールする場合 (Windows)、以下のようにします。

1. DB2 セットアップ・ウィザード (Windows) で Query Patroller サーバーをインストールします。
2. Query Patroller サーバーのインストールを検査します。
3. DB2 セットアップ・ウィザード (Windows) で Query Patroller クライアント・ツールをインストールします。
4. DB2 インフォメーション・センターをインストールします (Windows)。

関連タスク:

- 63 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)』
- 80 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (Windows)』
- 34 ページの『Query Patroller サーバーのインストールの検査』
- 350 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

第 7 章 DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller のインストール (Windows)

DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)

Query Patroller サーバーのインストール要件 (Windows)

このトピックでは、Windows での Query Patroller サーバーのハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信に関する要件をリストします。

ハードウェア要件

- 32 ビット Query Patroller サーバーの場合、Pentium または Pentium 互換の CPU が必要です。64 ビット Query Patroller サーバーの場合、Itanium または Itanium 互換の CPU が必要です。

オペレーティング・システム要件

- Windows NT バージョン 4 (Service Pack 6a) 以降
- Windows 2000 Professional、Standard Server、Advanced Server、および Datacenter Server。Windows ターミナル・サーバーには Windows 2000 Service Pack 2 が必要です。
- Windows Server 2003 (32 ビットおよび 64 ビット)

ソフトウェア要件

- Query Patroller サーバーをインストールするには、以下のうちいずれかがインストールされていることが必要です。
 - DB2 Enterprise Server Edition バージョン 8.1.2 およびフィックスパック 2+
 - DB2 Enterprise Server Edition バージョン 8.1.2 より上のもの
- 32 ビット環境で Query Patroller サーバー、Query Patroller の Java ベースのツール (クエリー・パトローラー・センターなど) を実行したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、IBM Software Development Kit (SDK) バージョン 1.3.1 またはバージョン 1.4.1 が必要です。インストール・プロセス中に、必要に応じて IBM Software Development Kit (SDK) がインストールされます。
- 64 ビット環境で Query Patroller サーバー、Query Patroller の Java ベースのツール (クエリー・パトローラー・センターなど) を実行したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、IBM Software Development Kit (SDK) バージョン 1.4.1 が必要です。インストール・プロセス中に、必要に応じて IBM Software Development Kit (SDK) がインストールされま

す。最新の DB2 Java アプリケーション開発アップデートについては、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/ad/v8/java> の Web ページを参照してください。

- オンライン・インストール・ヘルプを表示するには、Netscape 6.2 または Microsoft Internet Explorer 5.5 が必要です。

通信要件

- TCP/IP。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 63 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)』
- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』

関連資料:

- 62 ページの『Query Patroller サーバーのメモリー要件 (Windows)』
- 63 ページの『Query Patroller サーバーのディスク要件 (Windows)』

Query Patroller サーバーのメモリー要件 (Windows)

Query Patroller サーバーでは、最低でも 256 MB の RAM が必要です。それよりも多くのメモリーが必要になる場合もあります。

メモリー要件を判別する際に、以下の点を覚えていてください。

- システムで稼働している非 DB2 ソフトウェア用に、追加メモリーが必要な場合があります。
- Query Patroller クライアント・ツールをインストールする DB2 クライアントをサポートするために、さらに多くのメモリーが必要になる場合があります。
- 特定のパフォーマンス要件により、必要とされるメモリーの量が決まる場合があります。
- メモリー要件は、データベース・システムのサイズおよび複雑さによって影響を受けます。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 63 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)』
- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』

関連資料:

- 61 ページの『Query Patroller サーバーのインストール要件 (Windows)』
- 63 ページの『Query Patroller サーバーのディスク要件 (Windows)』

Query Patroller サーバーのディスク要件 (Windows)

Query Patroller サーバーに必要なディスク・スペースは、選択するインストールのタイプや Query Patroller がインストールされているディスク・ドライブのタイプによって異なります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して Query Patroller サーバーをインストールする場合、インストール・タイプおよびコンポーネント選択に基づいて、インストール・プログラムがサイズを動的に見積ります。以下のためにディスク・スペースが必要になります。

- 製品コードの保管。
- Query Patroller の使用時に生成されるデータの保管 (コントロール表の内容など)。

必要なソフトウェアおよび通信製品のための余地をディスク・スペースに含めることを忘れないでください。

不足しているディスク・スペースの管理:

選択したコンポーネントをインストールするのに必要なスペースが、コンポーネントのインストール時に指定したパスのスペースを超えている場合、DB2 セットアップ・ウィザードによって、スペースの不足に関する警告が出されます。選択すれば、インストールを継続することもできます。しかし、インストールするファイルのためのスペースが実際に足りなかった場合、スペースがなくなった時点で、Query Patroller サーバーのインストールは停止します。このようになった場合、インストールはロールバックされます。そして、該当するエラー・メッセージが最終ダイアログに表示されます。このとき、インストールを終了できます。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 63 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)』
- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』

関連資料:

- 61 ページの『Query Patroller サーバーのインストール要件 (Windows)』
- 62 ページの『Query Patroller サーバーのメモリー要件 (Windows)』

DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)

このタスクは、より上位のタスクである *Query Patroller* のインストール (Windows) の一部です。

このタスクは、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して Windows で Query Patroller サーバーをインストールするステップの概要です。

前提条件:

ご使用のコンピューターが次の要件に合うことを確認してください。

- Query Patroller サーバーのインストール要件 (Windows)
- Query Patroller サーバーのメモリー要件 (Windows)
- Query Patroller サーバーのディスク要件 (Windows)
- DB2 サーバーで実行していたインスタンスが停止していること。インスタンスを停止するには、SYSADM 権限を持ったユーザーとしてシステムにログオンし、Windows コマンド・プロンプトで **db2stop** コマンドを発行します。
- Query Patroller サーバーによって管理する照会の対象となるデータベースが存在していること。
- クライアントが Query Patroller サーバーに照会をサブミットするときに使用するすべての言語がインストールされていること。これは、サーバーとクライアント間のあらゆる従属関係を除去するために必要です。

手順:

次のようにして、Windows に Query Patroller サーバーをインストールします。

1. Query Patroller サーバーのインストールに使用する管理者アカウントを使用して、システムにログオンします。
2. すべてのプログラムをクローズし、インストール・プログラムが必要に応じてファイルを更新できるようにします。
3. CD-ROM をドライブに挿入します。使用可能であれば、自動実行機能によって DB2 セットアップ・ランチパッドが自動的に起動します。このウィンドウから、インストールに直接進むことができます。
4. DB2 ランチパッドから「製品のインストール」を選択します。

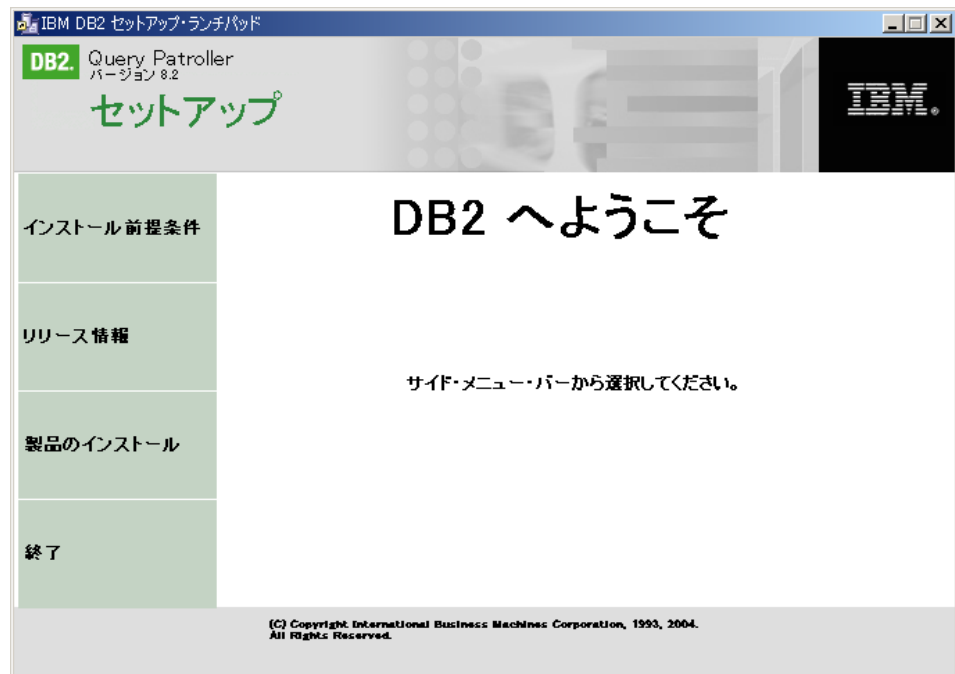


図 14. Query Patroller - 初期画面 (Windows)

5. 「インストールしたい製品を選択します」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。

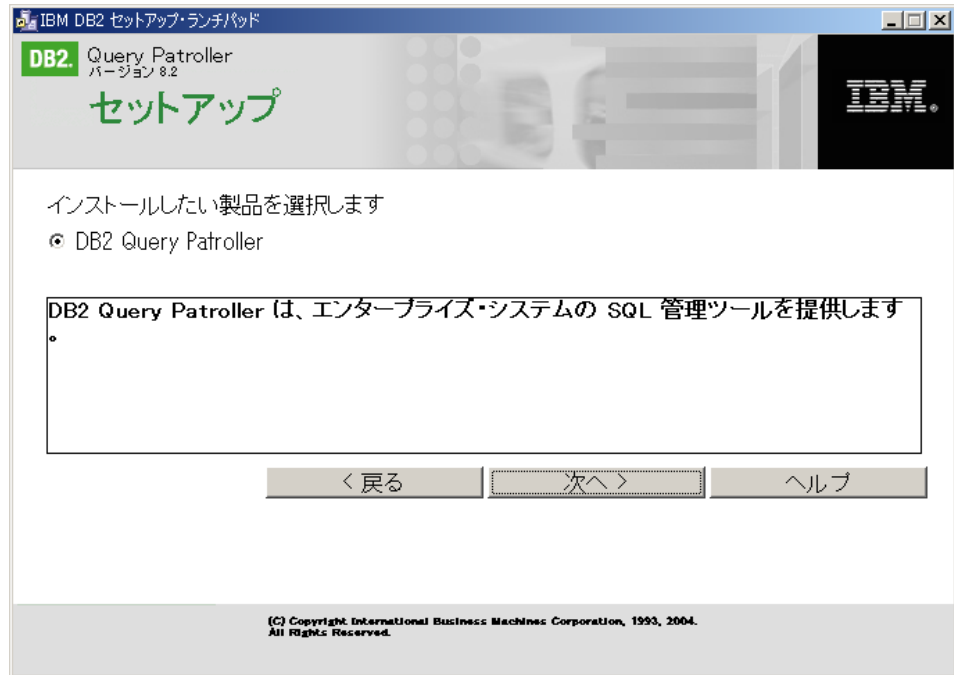


図 15. Query Patroller - 製品説明 (Windows)

6. 「DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。
7. 「使用条件 (License Agreement)」ウィンドウで、条項に同意する場合は「使用条件の条項に同意します (I accept the terms in the license agreement)」を選択します。それから、「次へ」をクリックします。条項に同意しない場合は「使用条件の条項に同意しません (I do not accept the terms in the license agreement)」を選択します。それから、「キャンセル」をクリックしてインストールを終了します。

8. 「インストール・タイプの選択」ウィンドウで、「コンピューター用途ベース」を選択し、「次へ」をクリックします。

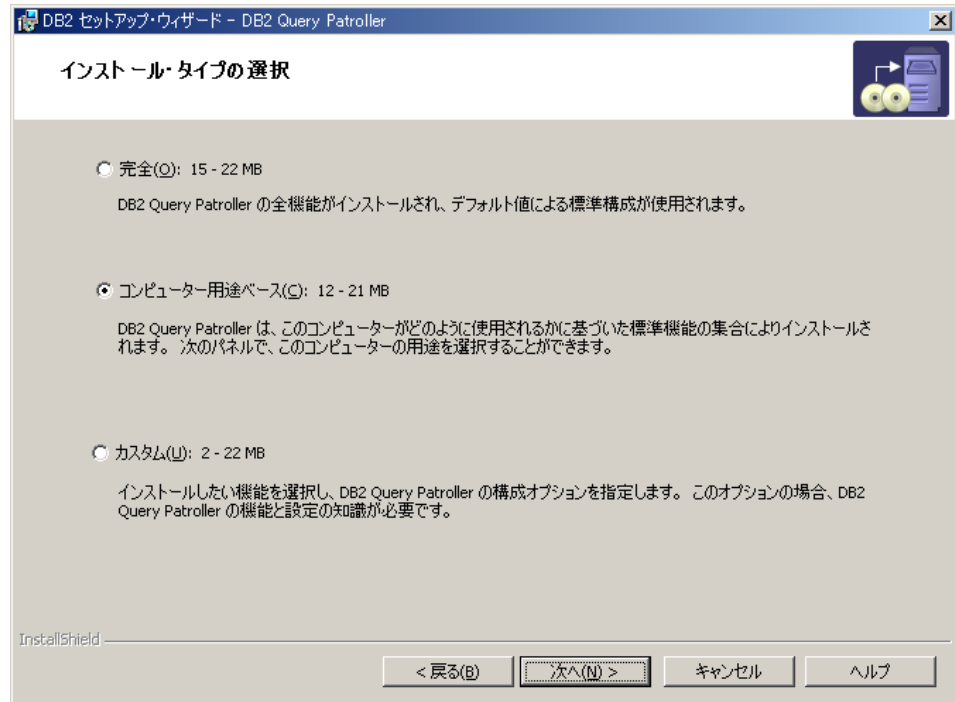


図 16. Query Patroller - インストール・タイプの選択 (Windows)

9. 「このマシンの使用方法の選択」ウィンドウで、「サーバー」を選択し、「次へ」をクリックします。

注:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、「インストール・タイプの選択」ウィンドウで「コンピューター用途ベース」を選択し、「このコンピューターの使用の選択」ウィンドウで「サーバー」を選択した場合、クエリー・パトローラー・センターはインストールされません。クエリー・パトローラー・センターをインストールするには、「インストール・タイプの選択」ウィンドウで、インストール・タイプとして「完全」または「カスタム」を選択してください。

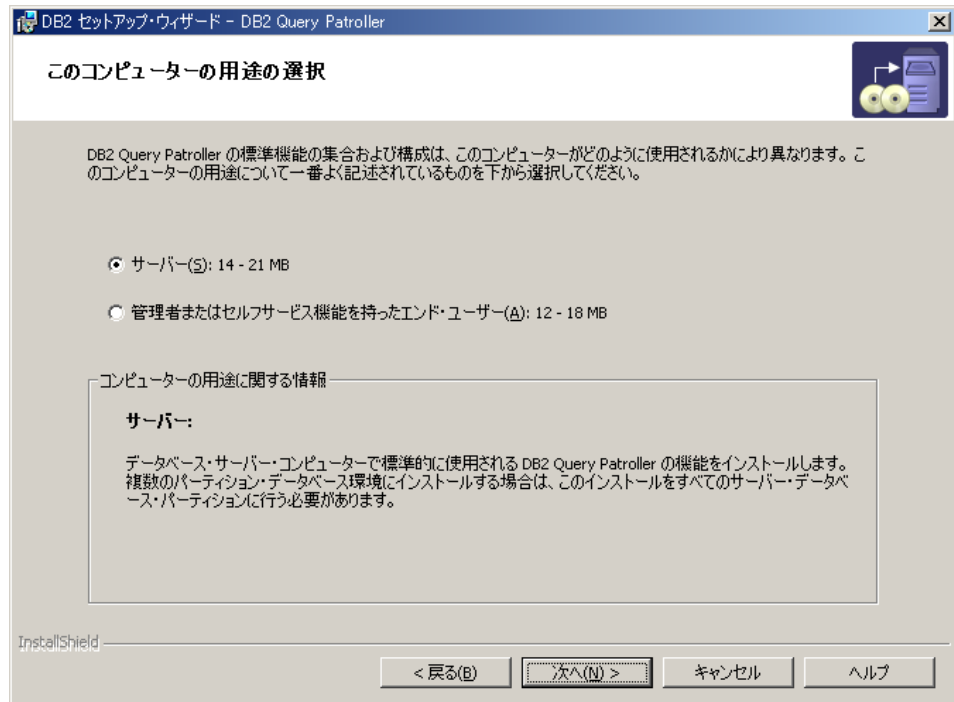


図 17. Query Patroller - コンピューターの使用方法 (Windows)

10. 「インストール・フォルダーの選択 (Select installation folder)」で「インストール・フォルダーの確認 (Confirm installation folder)」セクションをチェックします。表示されているドライブとディレクトリーに Query Patroller サーバーをインストールする場合は、「次へ」をクリックします。
11. 「DB2 インスタンスのセットアップ」ウィンドウで、既存の DB2 インスタンスを構成するか、このタスクをインストールの完了後まで保留するかを選択します。既存のすべての DB2 インスタンスが「DB2 インスタンス」に表示されます。選択したインスタンスに、関連付けられている既存のデータベースがない場合、警告ダイアログが表示され、別のインスタンスを選択するか、そうでなければこのタスクをインストールの完了後まで保留するように通知されます。選択を行ったら、「次へ」をクリックします。

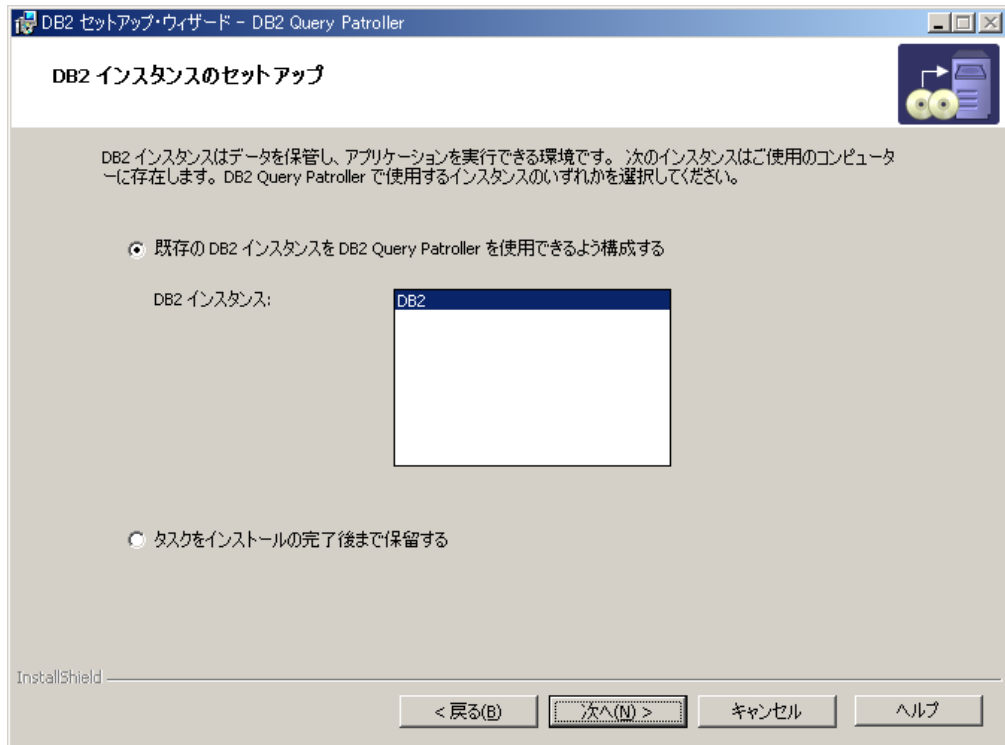


図 18. Query Patroller - DB2 インスタンスのセットアップ (Windows)

12. 「管理するデータベースの指定」ウィンドウで、Query Patroller が管理する既存のデータベースを選択します。選択したデータベースが「データベース名」に表示されます。選択を行ったら、「次へ」をクリックします。

注: 選択したデータベースにバージョン 7 Query Patroller のデータと設定がある場合、バージョン 7 のデータと設定をバージョン 8 Query Patroller システムに移行するかどうかを指定するようにプロンプトが出されます。インストール時に移行を選択しなかった場合は、インストール後に **qpmigrate** コマンドを使用して移行できます。

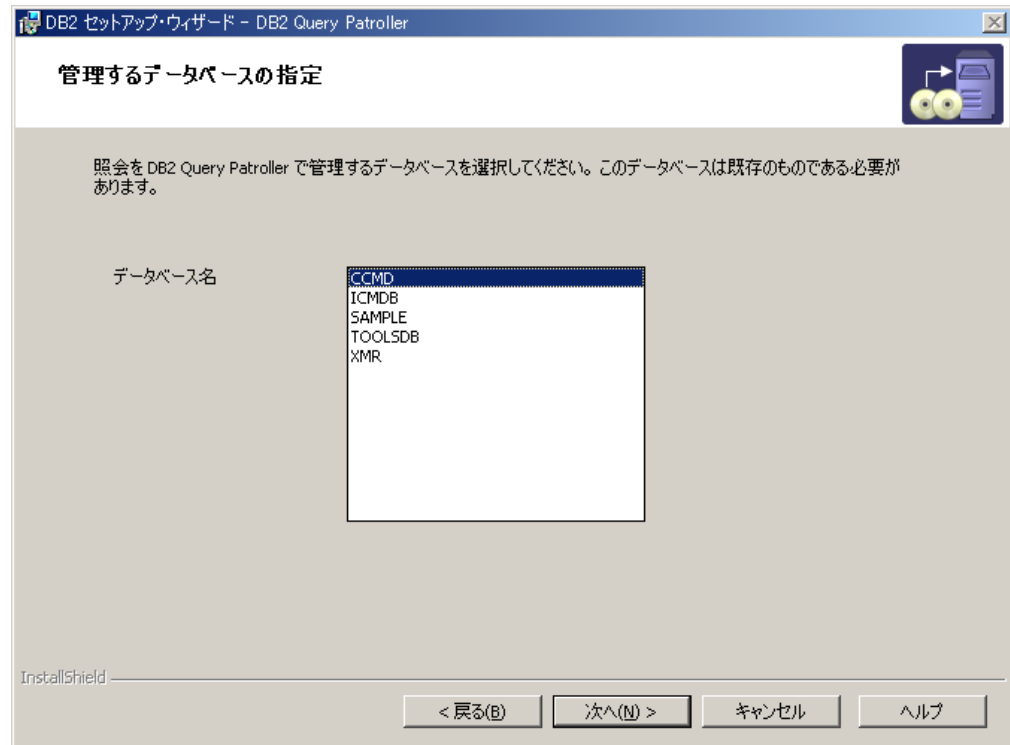


図 19. Query Patroller - 管理するデータベースの指定 (Windows)

13. 「DB2 Query Patroller 情報を保管する表スペースを指定する」ウィンドウで、既存のコントロール・データ表スペースを使用するか新規作成するか、既存の結果表スペースを使用するか新規作成するかを選択します。新規のコントロール・データ表スペースまたは新規の結果表スペースを作成する場合は、「新規」をクリックして、「定義」をクリックします。既存の表スペースを使用する場合は、「既存」を選択してメニューから表スペースを選択します。表スペースを選択したら、「次へ」をクリックします。

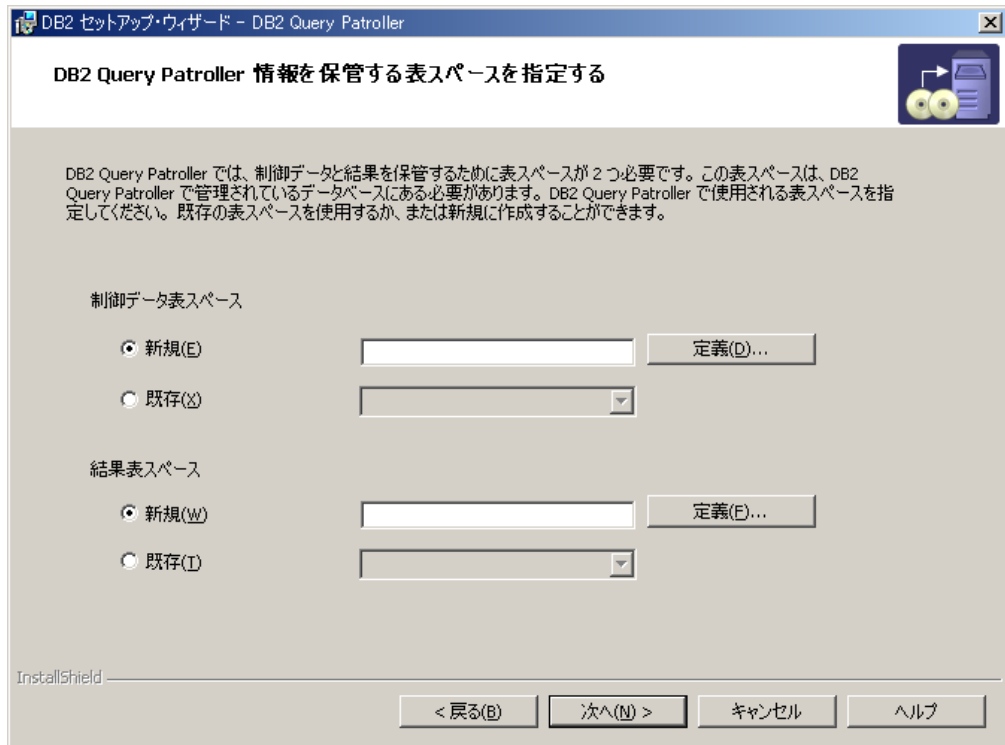


図 20. Query Patroller - 表スペースの指定 (Windows)

14. 新規コントロール・データ表スペースの作成を選択すると、「新規コントロール・データ表スペースの定義」ウィンドウが表示されます。このウィンドウへの値の入力を終わったら、「OK」をクリックします。「DB2 Query Patroller 情報を保管する表スペースを指定する」ウィンドウが再び表示され、テキスト・フィールドに新規のコントロール・データ表スペースの名前が表示されます。Query Patroller をパーティション環境にインストールしている場合は、「データベース・パーティション・グループ」ボックスがウィンドウの下部に表示されます。既存のデータベース・パーティション・グループを使用したい場合は、「既存」をクリックします。新規のデータベース・パーティション・グループを作成したい場合は、「新規」をクリックして、「定義」をクリックします。「新規データベース・パーティション・グループの定義」ウィンドウが表示されます。このウィンドウに必要な情報を入力して、「OK」をクリックします。「新規コントロール・データ表スペースの定義」ウィンドウが再度表示されます。表スペースを選択したら、「次へ」をクリックします。

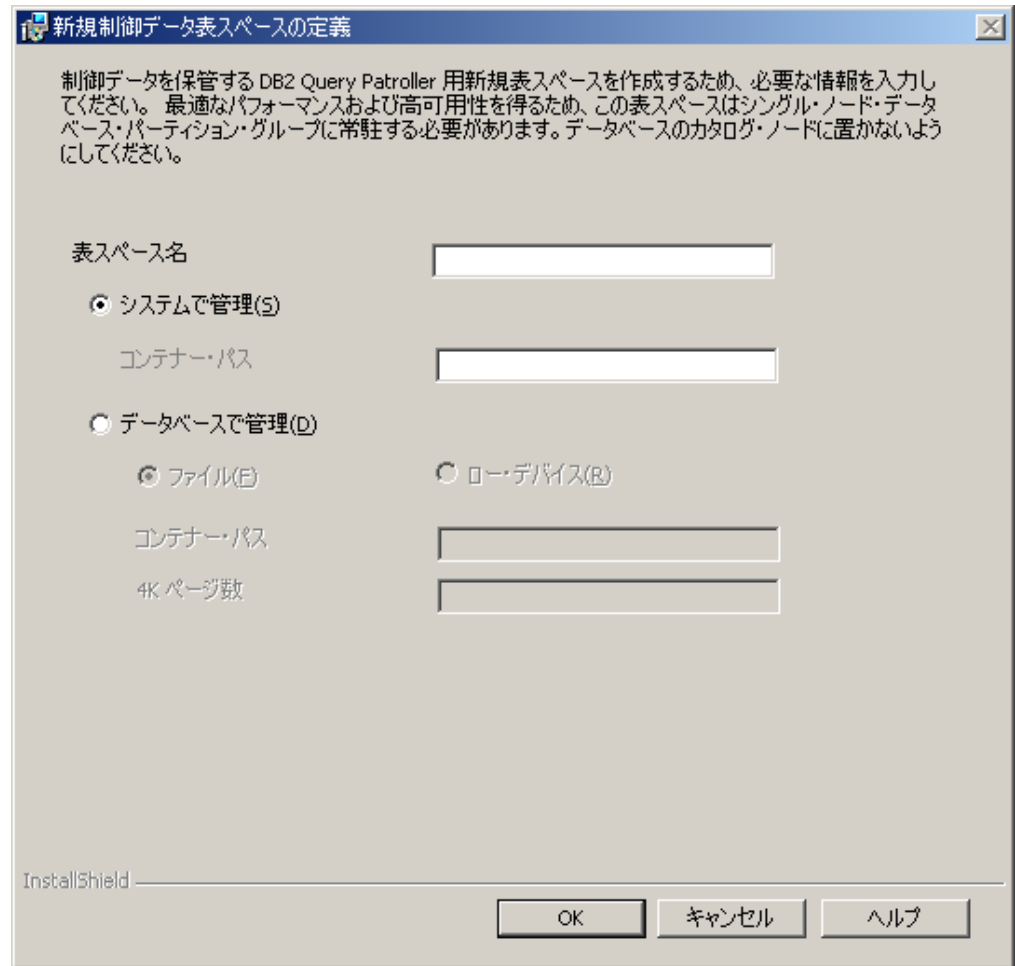


図 21. Query Patroller - 新規コントロール・データ表スペースの定義 (Windows)

15. Query Patroller サーバーをパーティション環境にインストールしている場合は、「新規データベース・パーティション・グループの定義」ウィンドウが表示されます。このウィンドウに必要な情報を入力して、「OK」をクリックします。

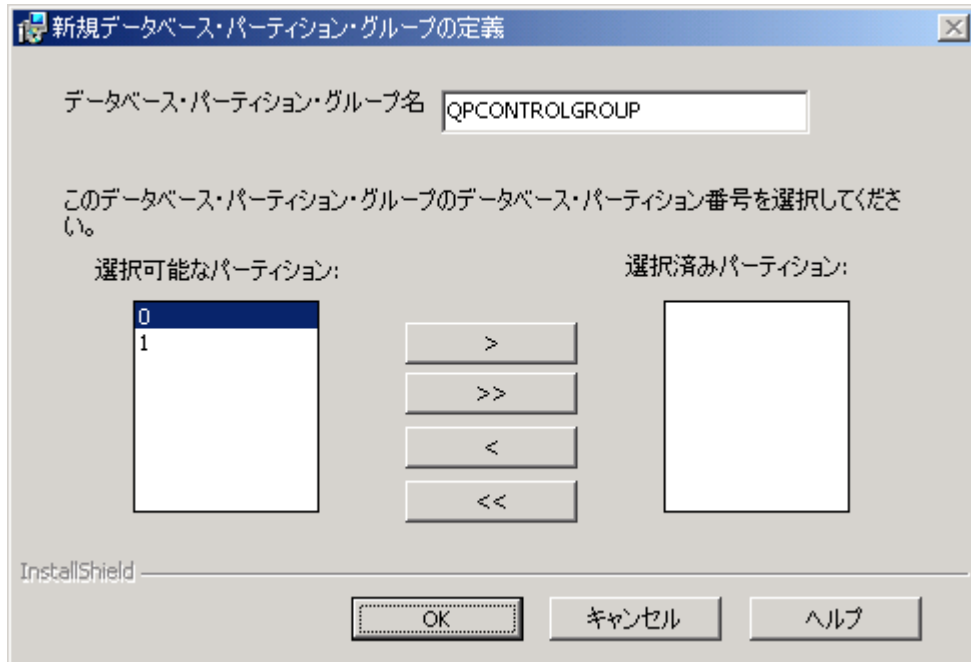


図 22. Query Patroller - 新規のデータベース・パーティション・グループ (Windows)

16. 新規の結果表スペースの作成を選択すると、「新規結果表スペースの定義」ウィンドウが表示されます。このウィンドウへの値の入力を終えたら、「OK」をクリックします。「DB2 Query Patroller 情報を保管する表スペースを指定する」ウィンドウが再び表示され、テキスト・フィールドに新規の結果表スペースの名前が表示されます。Query Patroller をパーティション環境にインストールしている場合は、「データベース・パーティション・グループ」ボックスがウィンドウの下部に表示されます。既存のデータベース・パーティション・グループを使用したい場合は、「既存」をクリックします。新規のデータベース・パーティション・グループを作成したい場合は、「新規」をクリックして、「定義」をクリックします。「新規データベース・パーティション・グループの定義」ウィンドウが表示されます (上の図を参照)。このウィンドウに必要な情報を入力して、「OK」をクリックします。「新規結果表スペースの定義」ウィンドウが再度表示されます。表スペースを選択したら、「次へ」をクリックします。

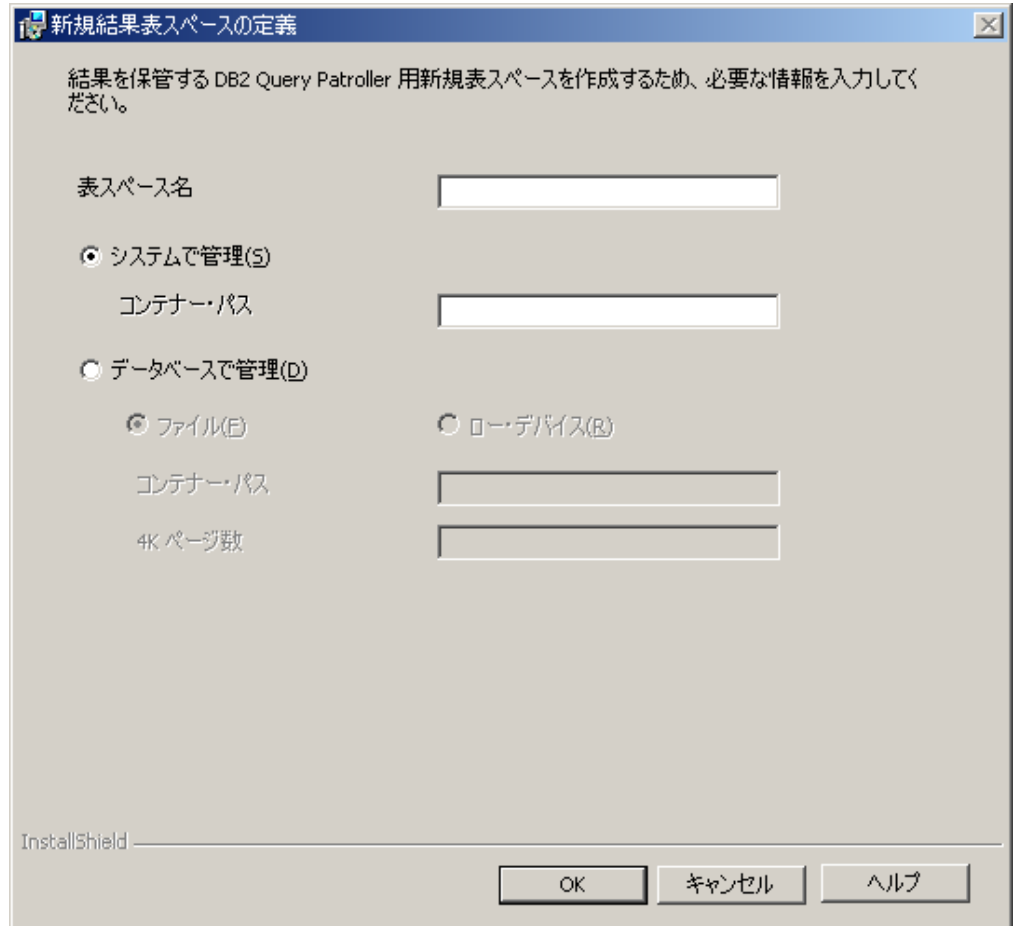


図 23. Query Patroller - 新規の結果表スペースの定義 (Windows)

17. 「DB2 Query Patroller サービス用のユーザー情報の設定 (Set user information for the DB2 Query Patroller service)」ウィンドウで、「ユーザー情報 (User information)」セクションにユーザー情報を入力します。情報を入力したら、「次へ」をクリックします。

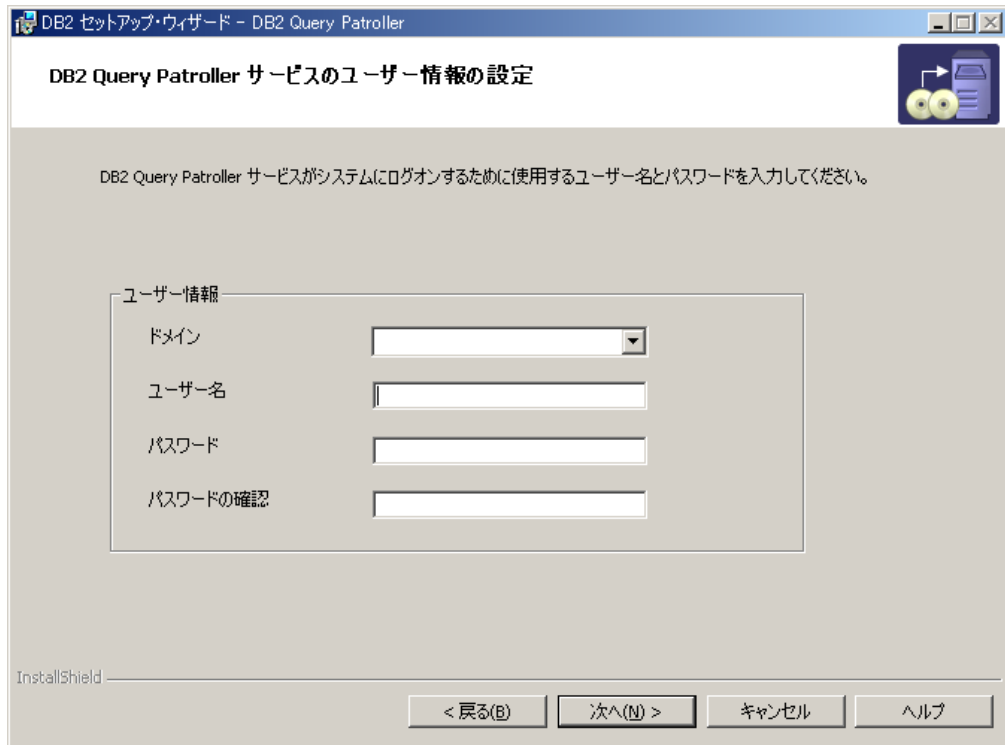


図 24. Query Patroller - サービス用のユーザー情報の設定 (Windows)

18. 「ファイルのコピーの開始 (Start copying files)」ウィンドウで、「現在の設定 (Current settings)」の設定をチェックします。設定が希望に添うものであるなら、「インストール (Install)」をクリックしてファイルのコピーを開始します。

インストールについては、オンライン・ヘルプが用意されています。オンライン・ヘルプを呼び出すには、各インストール・コーナーの右下の隅にある「ヘルプ」ボタンをクリックするか、または **F1** を押します。また、「キャンセル」ボタンをクリックすれば、いつでもインストールを中止できます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、db2.log ファイルを参照してください。この db2.log ファイルには、インストール/アンインストール作業の一般情報とエラー・メッセージが保管されています。デフォルトでは、db2.log ファイルは My Documents¥DB2LOG¥ ディレクトリーにあります。My Documents ディレクトリーの位置はコンピューターの設定によって異なります。最新の Query Patroller のインストールについては、db2wi.log を参照してください。このログの内容は db2.log ファイルの末尾に置かれます。

これで、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して Windows で Query Patroller サーバーをインストールするタスクが完了しました。Query Patroller サーバーのインストールを検査したり、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 クライアント (Windows) に Query Patroller クライアント・ツールをインストールしたりできます。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 24 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)』
- 87 ページの『Query Patroller サーバーの手動設定』
- 90 ページの『Query Patroller サーバーの手動移行』
- 80 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (Windows)』
- 34 ページの『Query Patroller サーバーのインストールの検査』
- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』

関連資料:

- 61 ページの『Query Patroller サーバーのインストール要件 (Windows)』
- 62 ページの『Query Patroller サーバーのメモリー要件 (Windows)』
- 63 ページの『Query Patroller サーバーのディスク要件 (Windows)』

Query Patroller サーバーのインストールの検査

Query Patroller サーバーのインストールが完了した後、インストールのチェックを行います。そのためには、照会をサブミットして、その状況をチェックします。

前提条件:

- **qpsetup** コマンドを発行して、Query Patroller サーバーをセットアップしなければなりません。このコマンドは、Query Patroller サーバーのインストールを検証する前に発行する必要があります。**qpsetup** コマンドは、サーバーのインストール時に自動発行することもできますし、インストール後に UNIX シェル・プロンプトまたは Windows コマンド・プロンプトで手動発行することもできます。
- データベースが属する DB2 インスタンスがサーバー上で稼働していることを確かめます。

手順:

Query Patroller サーバーのインストールを検証するには、次のようにします。

1. Query Patroller によって管理されるデータベースに、DBADM 権限を持つユーザーとしてログオンします。
2. Query Patroller を開始します。そのためには、**qpstart** コマンドを以下のように発行します。

```
qpstart dbname
```

ここで、*dbname* は、Query Patroller によって管理されるデータベースの名前です。以下のような出力が表示されるはずですが。

```
IBM DB2 Query Patroller V8, (c) Copyright IBM Corp. 1998-2003.  
All rights reserved.  
Initializing.  
Query Patroller started.
```

注: UNIX ベースのオペレーティング・システムでは、**qpstart** コマンドは UNIX シェル・プロンプトに制御を戻します。残りの手順を継続するために 2 番目の UNIX シェル・プロンプトを開く必要はありません。Windows では、即時に Windows コマンド・プロンプトに制御が戻されます。

3. 次のコマンドを発行して、*dyn_query_mgmt* データベース構成パラメーターを使用可能にします。

```
db2 update db cfg for dbname using DYN_QUERY_MGMT enable
```

ここで、*dbname* は、Query Patroller によって管理されるデータベースの名前です。

4. Query Patroller サーバーで代行受信する照会をサブミットします。この照会の見積りコストは 15000 timeron 以上でなければなりません。なぜなら、15000 timeron よりコストの低い照会を Query Patroller は管理しないからです。これは、デフォルトの Query Patroller パラメーターによって判別されます。たとえば、次のような照会をサブミットします。

```
db2 select count(*) from syscat.tables,syscat.tables,syscat.tables
```

照会が戻るのを待ちます。この照会のコストが十分に高くない (15000 timeron より小さい) ことが分かった場合は、コストが最小コストの 15000 timeron より大きくなるまで十分な表をコマンドに付加します。たとえば、以下のように指定します。

```
db2 select count(*) from syscat.tables,syscat.tables,syscat.tables,...
```

上記の照会は一例に過ぎません。特定のシステムにより適合した照会をサブミットすることもできます。ただし、必ず照会のコストが 15000 timeron を超えるようにしてください。

5. 以下のコマンドを入力して、サブミットした照会の状況をチェックします。

```
qp -d dbname list queries
```

ここで、*dbname* は、Query Patroller によって管理されるデータベースの名前です。照会が正常に完了していたら、以下のような出力が表示されるはずです。

ID	Status	Created	Completed
1	Done	2003-10-30 18:36:37.615000	2003-10-30 18:36:37.615000

照会が打ち切られた場合、以下のような出力が表示されるはずです。

ID	Status	Created	Completed
1	Aborted	2003-10-30 18:36:37.615000	2003-10-30 18:36:37.615000

次のコマンドを発行すると、照会が打ち切られた理由を見出せます。

```
qp -d dbname get query 1
```

「Message Description」の下に、照会の打ち切りの原因となったエラーが示されます。エラーを調べ、照会を再サブミットしてください。

6. **qpstop** コマンドを入力して、Query Patroller サービスを停止します。以下のような出力が表示されるはずです。

IBM DB2 Query Patroller V8, (c) Copyright IBM Corp. 1998-2003.
All rights reserved.
Stopping Query Patroller.
Query Patroller stopped.

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 63 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)』
- 24 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)』
- 87 ページの『Query Patroller サーバーの手動設定』
- 90 ページの『Query Patroller サーバーの手動移行』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』

DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (Windows)

Query Patroller クライアント・ツールのインストール要件 (Windows)

このトピックでは、Windows での Query Patroller クライアント・ツールのオペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信に関する要件をリストします。

オペレーティング・システム要件

以下のいずれかです。

- Windows 98
- Windows ME
- Windows NT バージョン 4.0 (Service Pack 6a) 以降
- Windows NT Server 4.0, Terminal Server Edition (Terminal Server 用 Service Pack 6 以降)。これは DB2 Run-Time Client だけをサポートしません。
- Windows 2000
- Windows XP (32 ビット・エディションおよび 64 ビット・エディション)
- Windows Server 2003 (32 ビット・エディションおよび 64 ビット・エディション)

ソフトウェア要件

- DB2 製品が、Query Patroller クライアント・ツールをインストールするコンピューターにインストールされていなければなりません。DB2 製品はバージョン 8.1.2 (フィックスパック 2+) か、またはバージョン 8.1.2 以降の製品でなければなりません。以下の製品が該当する前提条件です。
 - 任意の DB2 クライアント製品 (DB2 Run-Time Client や DB2 Application Development Client など)

- 任意の DB2 Connect 製品 (DB2 Connect Personal Edition や DB2 Connect Enterprise Server Edition など)
- 任意の DB2 サーバー製品 (DB2 Enterprise Server Edition や DB2 Workgroup Server Edition など)
- 32 ビット環境で Query Patroller サーバー、Query Patroller の Java ベースのツール (クエリー・パトローラー・センターなど) を実行したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、IBM Software Development Kit (SDK) バージョン 1.3.1 またはバージョン 1.4.1 が必要です。インストール・プロセス中に、必要に応じて IBM Software Development Kit (SDK) がインストールされます。
- 64 ビット環境で Query Patroller サーバー、Query Patroller の Java ベースのツール (クエリー・パトローラー・センターなど) を実行したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、IBM Software Development Kit (SDK) バージョン 1.4.1 が必要です。インストール・プロセス中に、必要に応じて IBM Software Development Kit (SDK) がインストールされます。最新の DB2 Java アプリケーション開発アップデートについては、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/ad/v8/java> の Web ページを参照してください。
- オンライン・インストール・ヘルプを表示するには、Netscape 6.2 または Microsoft Internet Explorer 5.5 が必要です。

通信要件

- TCP/IP。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 80 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (Windows)』
- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』

関連資料:

- 78 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのメモリー要件 (Windows)』
- 79 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのディスク要件 (Windows)』

Query Patroller クライアント・ツールのメモリー要件 (Windows)

以下のリストは、DB2 クライアント (Windows) で Query Patroller クライアント・ツールを実行する際に推奨される最小メモリー要件を示しています。

- システム管理ワークステーションで Query Patroller クライアント・ツールを実行するには、Windows オペレーティング・システムを実行するのに必要な RAM 容量に加え、64 MB の追加 RAM が必要です。たとえば、Windows 2000 Professional を実行しているシステム管理ワークステーションでクエリー・パトロ

ーラー・センターを実行するには、オペレーティング・システム用に最小で 64 MB の RAM と、ツール用に 64 MB の追加 RAM が必要です。

- メモリー所要量: Query Patroller サーバーに照会をサブミットする DB2 クライアントで Query Patroller クライアント・ツールを実行するのに必要なメモリーの量は、次の要素に応じて異なります。
 - 使用する Windows オペレーティング・システム、および
 - 実行しているデータベース・アプリケーション

Windows オペレーティング・システムの最小メモリー要件を、DB2 クライアントでこれらのツールを実行するための最小の要件として使用できます。

注: 推奨されている最小メモリー要件に満たない場合は、パフォーマンスに悪影響を及ぼすことがあります。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 80 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (Windows)』
- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』

関連資料:

- 77 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのインストール要件 (Windows)』
- 79 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのディスク要件 (Windows)』

Query Patroller クライアント・ツールのディスク要件 (Windows)

インストールの実際のハード・ディスク要件は、使用するファイル・システムやインストールする Query Patroller クライアント・ツールによって異なる可能性があります。アプリケーション開発ツール (必要な場合) と通信製品のためのディスク・スペースも確実に含めてください。

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して Query Patroller クライアント・ツールをインストールする場合、インストール・タイプおよびコンポーネント選択に基づいて、インストール・プログラムがサイズを動的に見積ります。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 80 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (Windows)』
- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』

関連資料:

- 77 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのインストール要件 (Windows)』

DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (Windows)

このタスクは、より上位のタスクである *Query Patroller* のインストール (Windows) の一部です。

このタスクは、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 クライアント (Windows) で *Query Patroller* クライアント・ツールをインストールするステップの概要です。

前提条件:

DB2 クライアント (Windows) で *Query Patroller* クライアント・ツールをインストールする前に、以下の要件を満たす必要があります。

- *Query Patroller* クライアント・ツールのインストール要件 (Windows)
- *Query Patroller* クライアント・ツールのメモリー要件 (Windows)
- *Query Patroller* クライアント・ツールのディスク要件 (Windows)
- DB2 製品 (バージョン 8.1.2 以上) が、*Query Patroller* クライアント・ツールをインストールするコンピューターにインストールされていなければなりません。以下の製品が該当する前提条件です。
 - 任意の DB2 クライアント製品 (DB2 Run-Time Client や DB2 Application Development Client など)
 - 任意の DB2 Connect 製品 (たとえば、DB2 Connect Personal Edition や DB2 Connect Enterprise Server Edition)
 - 任意の DB2 サーバー製品 (DB2 Enterprise Server Edition や DB2 Workgroup Server Edition など)

手順:

次のようにして、Windows に *Query Patroller* クライアント・ツールをインストールします。

1. *Query Patroller* クライアント・ツールのインストールに使用する管理者アカウントを使用して、システムにログオンします。
2. 他のすべてのプログラムをシャットダウンし、DB2 セットアップ・ウィザードが必要に応じてファイルを更新できるようにします。
3. *Query Patroller* 製品 CD-ROM のラベルを調べて、適切な言語の CD-ROM を使用していることを確認します。
4. CD-ROM をドライブに挿入します。使用可能であれば、自動実行機能によって DB2 セットアップ・ランチパッドが自動的に起動します。このウィンドウから、インストールに直接進むことができます。
5. DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。セットアップ・プログラムを別の言語で実行したい場合や、セットアップ・プログラムが自動始動に失敗した場合には、DB2 セットアップ・ウィザードを使用して手動で開始することができます。

次のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始します。

- a. 「スタート」-> 「ファイル名を指定して実行」をクリックします。
- b. 「開く」フィールドで、次のコマンドを入力します。

```
x:¥setup /i language
```

ここで、

- *x:* は使用する CD-ROM ドライブを表します。
- *language* は使用言語を表すテリトリー ID です (たとえば、英語の場合は EN になります)。

/i フラグが指定されていないと、インストール・プログラムはオペレーティング・システムのデフォルト言語で実行されます。

- c. 「OK」をクリックします。
6. DB2 ランチパッドがオープンしたら、「製品のインストール」を選択します。
7. 「インストールしたい製品を選択します」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。
8. 「DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ」ウィンドウで、「次へ」をクリックします。
9. 「使用条件 (License Agreement)」ウィンドウで、条項に同意する場合は「使用条件の条項に同意します (I accept the terms in the license agreement)」を選択します。「次へ」をクリックします。条項に同意しない場合は「使用条件の条項に同意しません (I do not accept the terms in the license agreement)」を選択します。それから、「キャンセル」をクリックしてインストールを終了します。
10. 「インストール・タイプの選択」ウィンドウで、「コンピューター用途ベース」を選択し、「次へ」をクリックします。
11. 「このマシンの使用方法の選択」ウィンドウで、「管理者またはセルフサービス機能を持ったエンド・ユーザー」を選択し、「次へ」をクリックします。
12. セットアップ・プログラムのプロンプトに従って進んでください。残りのステップについては、オンライン・ヘルプを参照できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、各インストール・コーナーの右下の隅にある「ヘルプ」ボタンをクリックするか、または **F1** を押します。また、「キャンセル」ボタンをクリックすれば、いつでもインストールを中止できます。

これで、Query Patroller ツールが使用可能になった DB2 クライアント (Windows) を構成して、リモートの Query Patroller サーバーにアクセスする準備ができました。

関連概念:

- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

関連タスク:

- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』

関連資料:

- 77 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのインストール要件 (Windows)』

- 78 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのメモリー要件 (Windows)』
- 79 ページの『Query Patroller クライアント・ツールのディスク要件 (Windows)』

コマンド行プロセッサを使用した、クライアントから Query Patroller サーバーへの接続の構成

このタスクでは、コマンド行プロセッサ (CLP) を使用して、クライアントから Query Patroller サーバーへの接続を構成する方法を説明します。

前提条件:

クライアントから Query Patroller サーバーへの接続を構成する前に、

- クライアント・コンピューター上で、通信を構成する必要があります。通信は、TCP/IP でなければなりません。
- Query Patroller サーバー上で、通信を構成する必要があります。通信は、TCP/IP でなければなりません。

手順:

次のようにして、コマンド行プロセッサを使用して、クライアントから Query Patroller サーバーへの接続を構成します。

1. DB2 クライアント上で TCP/IP ノードをカタログします。
2. DB2 クライアント上でデータベースをカタログします。
3. クライアントからサーバーへの接続をテストします。

関連タスク:

- 42 ページの『DB2 クライアントでの TCP/IP ノードのカタログ』
- 44 ページの『CLP によるデータベースのカタログ』
- 46 ページの『CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト』

クライアントでの TCP/IP ノードのカタログ

これは、CLP を使用したクライアント・サーバー接続の構成 のメインタスクの一部です。

TCP/IP ノードのカタログでは、DB2 クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードについて記述する項目が追加されます。この項目では、選択された別名 (*node_name*)、*hostname* (または *ip_address*)、およびクライアントがリモート・ホストにアクセスするときに使用する *svcname* (または *port_number*) を指定します。

手順:

TCP/IP ノードをカタログするには、以下のステップを実行します。

1. システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限のあるユーザーとしてシステムにログオンします。 *catalog_noauth* オプションが ON に設定されている場合には、これらの権限がなくてもシステムにログオンすることができます。

2. UNIX クライアントを使用する場合は、インスタンス環境をセットアップしてから、DB2 コマンド行プロセッサを起動します。開始スクリプトを以下のよう
に実行します。

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile (bash、Bourne、または Korn シェルの場合)
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc (C シェルの場合)
```

ここで、*INSTHOME* は、インスタンスのホーム・ディレクトリーです。

3. **db2** プロンプトから次のコマンドを入力することによって、ノードをカタログ
します。

```
catalog tcpip node node_name remote hostname|ip_address¥
server service_name|port_number¥
[remote_instance instance_name] [system system_name] [ostype os_type]
terminate
```

ここで、

- *system* は、リモート・サーバーのシステム名です。
- *ostype* は、リモート・サーバー・システムのオペレーティング・システム
です。

remote_instance、*system*、および *ostype* はオプションですが、DB2 ツール
を使用するユーザーの場合は指定することをお勧めします。クライアントで使用
される *service_name* は、サーバーのものと同じである必要はありません。しか
し、そのマップ先ポート番号は同じでなければなりません。

たとえば、サービス名 *server1* を使用して、*db2node* というノードでリモ
ート・ホスト *myserver* をカタログするには、**db2** プロンプトに次のように入力
します。

```
catalog tcpip node db2node remote myserver server server1
terminate
```

たとえば、ポート番号 *3700* を使用して、*db2node* というノードに IP アドレ
ス *9.21.15.235* でリモート・サーバーをカタログするには、**db2** プロンプトに
次のように入力します。

```
catalog tcpip node db2node remote 9.21.15.235 server 3700
terminate
```

注: terminate コマンドは、ディレクトリー・キャッシュをリフレッシュするた
めに必要です。

次のステップは、クライアントでのデータベースのカタログです。

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『CLP によるクライアントでの TCP/IP 通
信の構成』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG TCP/IP NODE コマンド』

データベースのカタログと接続のテスト

CLP によるデータベースのカタログ

ここでは、CLP を使用してデータベースのカタログを実行する方法について説明します。

クライアント・アプリケーションからリモート・データベースにアクセスできるようにするには、クライアント上にそのデータベースのカタログを作成する必要があります。データベースを作成すると、特に指定しない限りそのデータベースは、データベース名と同じデータベース別名を使用して、サーバー上で自動的にカタログされます。DB2 クライアントとリモート・データベースの接続確立には、データベース・ディレクトリー内の情報、および（ノード不要のローカル・データベースのカタログを実行するのでない限り）ノード・ディレクトリー内の情報が使用されます。

前提条件:

データベースのカタログの前に、

- 有効な DB2 ユーザー ID が必要です。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect 製品がインストールされているシステムでデータベースのカタログを実行する場合は、システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限を付与されたユーザー ID でなければなりません。
- 下記のパラメーター値は、リモート・データベースのカタログに適用されます。
 - データベース名
 - データベース別名
 - ノード名
 - 認証タイプ (オプション)
 - コメント (オプション)

それらのパラメーター値については、『データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート』を参照してください。

- 下記のパラメーター値は、ローカル・データベースのカタログに適用されます。
 - データベース名
 - データベース別名
 - 認証タイプ (オプション)
 - コメント (オプション)

ローカル・データベースは、いつでもアンカタログおよび再カタログできます。

手順:

データベースをクライアントでカタログするには、次に示すステップを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバーがインストールされているシステムでデータベ

ースのカタログを実行する場合は、システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限を付与されたユーザーとしてシステムにログオンします。

- 『データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート』の「使用値」欄を更新してください。
- UNIX プラットフォームで DB2 を使用している場合には、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

```
. INSTHOME/sqllib/db2profile (bash, Bourne、または Korn シェルの場合)
source INSTHOME/sqllib/db2cshrc (C シェルの場合)
```

ここで、*INSTHOME* は、インスタンスのホーム・ディレクトリーです。

- DB2 コマンド行プロセッサを起動します。そのためには、DB2 コマンド・ウィンドウで **db2** コマンドを入力します。
- コマンド行プロセッサに次のようなコマンドを入力して、データベースをカタログします。

```
catalog database database_name as database_alias at%
node node_name authentication auth_value
```

たとえば、*sample* というリモート・データベースを、ノード *db2node* においてローカル・データベース別名 *mysample* でカタログするには、次のコマンドを入力します。

```
catalog database sample as mysample at node db2node%
authentication server
terminate
```

次のステップは、クライアントからサーバーへの接続のテストです。

関連タスク:

- 46 ページの『CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト』

関連資料:

- 「インストールおよび構成 補足」の『データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート』
- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG DATABASE コマンド』

CLP によるクライアント・サーバー接続のテスト

これは、コマンド行プロセッサ (CLP) を使用したクライアント・サーバー接続の構成 のメインタスクの一部です。

ノードとデータベースのカタログが終わったら、データベースに接続して接続のテストを実行する必要があります。

前提条件:

下記の前提条件があります。

- 接続をテストするためには、その前にデータベース・ノードとデータベースのカタログを実行しておく必要があります。
- userid* および *password* の値は、この 2 つが認証されるシステムで有効なものではなければなりません。デフォルトでは、認証はサーバー上で実行されます。

3. データベース・マネージャーを始動するには、データベース・サーバーで **db2start** コマンドを入力します (まだ始動していない場合)。

手順:

クライアントからサーバーへの接続をテストするには、

1. UNIX クライアントを使用している場合には、次のようにして始動スクリプトを実行します。

```
. INSTHOME/sqllib/db2profile (bash, Bourne、または Korn シェルの場合)
source INSTHOME/sqllib/db2cshrc (C シェルの場合)
```

ここで、*INSTHOME* はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

2. クライアント側で CLP に次のコマンドを入力することにより、リモート・データベースに接続します。

```
connect to database_alias user userid
```

たとえば、次のコマンドを入力します。

```
connect to mysample user jsmith
```

パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。

接続が正常に完了したら、接続先のデータベースの名前を示したメッセージが表示されます。下記のようなメッセージが表示されます。

```
Database Connection Information
Database server = DB2/NT 8.1.0
SQL authorization ID = JSMITH
Local database alias = mysample
```

これで、データベースを使用できるようになります。たとえば、システム・カタログ表にリストされているすべての表名のリストを取り出したい場合、次のような SQL コマンドを入力します。

```
select tablename from syscat.tables
```

どのデータベースとも接続していない状態で SQL ステートメントを発行すると、暗黙接続となります。デフォルト・データベースを定義するには、**db2set db2dbdft = <dbname>** コマンドを実行します。このコマンドを実行した後、データベースに接続せずに、たとえば **db2 get * from <table>** コマンドを実行します。このコマンドは、**db2dbdft** で定義されている値を使用します。デフォルト以外のデータベースに接続するには、CONNECT コマンドを使用して、選択したデータベースに明示的に接続しなければなりません。

データベース接続の使用が終わったら、**connect reset** コマンドを入力してデータベース接続を終了します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2start - DB2 の開始コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

第 8 章 Query Patroller サーバーのセットアップ

Query Patroller サーバーの手動設定

このタスクは、指定された DB2 データベースで Query Patroller サーバーを手動でセットアップする方法の概要です。DB2 セットアップ・ウィザードは、Query Patroller サーバーのインストール (UNIX または Windows) の際に、**qpsetup** コマンドを自動的に実行します。ただし、インストールの際にこのコマンドを自動的に実行しない場合は、UNIX シェル・プロンプトまたは Windows コマンド・プロンプトから **qpsetup** コマンドを発行することによってインストールの後で手動で実行できます。**qpsetup** は以下の 2 つの状況で使用できます。

1. **qpsetup** は、Query Patroller サーバーをセットアップせずに Query Patroller サーバー・ファイルをインストールする場合に使用できます。
2. **qpsetup** は、Query Patroller サーバーのインストール後に別のデータベースを管理することにした場合に使用できます。

qpsetup コマンドは以下の作業を実行します。

- 指定された表スペースが存在しない場合に、Query Patroller コントロール表に使用する SMS または DMS 表スペースを作成する。
- 指定された表スペースが存在しない場合に、Query Patroller 結果表に使用する SMS または DMS 表スペースを作成する。
- 指定された表スペースで Query Patroller コントロール表を作成する (存在しない場合)。
- Query Patroller パッケージをデータベースにバインドする。

Query Patroller を使用するデータベースごとに、**qpsetup** コマンドを実行する必要があります。

制約事項:

- 表スペース・コンテナは 1 つだけ指定できます。これは、過度に複雑なインストール・プロセスおよびコマンド行入力を避けるためです。表スペース用に複数のコンテナが必要な場合は、**qpsetup** コマンドを実行する前にその表スペースを作成する必要があります。
- バッファ・プールを指定することはできません。表スペースはデフォルトのバッファ・プール IBMDEFAULTBP を使用して作成されます。表スペースで別のバッファ・プールを使用しなければならない場合は、**qpsetup** コマンドを実行する前にそのバッファ・プールと表スペースを作成する必要があります。
- 表スペースはデフォルトのバッファ・プール IBMDEFAULTBP (4K ページ・サイズ) を使用して作成されるため、表スペースのページ・サイズも 4K になります。表スペースのページ・サイズを 4K 以外にしなければならない場合は、**qpsetup** コマンドを実行する前にその表スペースとバッファ・プールを作成する必要があります。

- **qpsetup** コマンドの CONTROL_DBPARTITIONGROUP および RESULT_DBPARTITIONGROUP パラメーターで複数の論理データベース・パーティションにまたがるパーティション・グループを指定する場合は、以下の制限が適用されます。
 - SMS または DMS コンテナの作成時にコンテナ・ストリング構文にデータベース・パーティション式を指定することができます。データベース・パーティション式は一般に、パーティション・データベース・システムで複数の論理データベース・パーティションを使用する場合に指定します。この指定により、コンテナ名がデータベース・パーティション・サーバー間でユニークなものとなります。この式を指定する場合、データベース・パーティション番号はコンテナ名の一部となるか、あるいは、追加の引き数を指定すれば、引き数の結果はコンテナ名の一部となります。

前提条件:

- Query Patroller サーバーがコンピューターにインストールされていなければなりません。
- DB2 インスタンスがコンピューターで実行されていなければなりません。これは、Query Patroller サーバーがモニターするデータベースを含むインスタンスです。
- **qpsetup** コマンドを使用して新しい表スペースを作成するには、SYSADM 権限を持っている必要があります。
- **qpsetup** コマンドを使用して既存の表スペースを使用するには、DBADM 権限を持っている必要があります。

手順:

指定された DB2 データベースで Query Patroller サーバーをセットアップするには、以下のようにします。

1. **qpsetup** コマンドを発行する前に、適切なコマンド構文とコマンド・パラメーターをチェックする。詳しくは、関連リンクにある **qpsetup** コマンド・トピックを参照してください。
2. オペレーティング・システムに応じて、UNIX シェル・プロンプトまたは Windows コマンド・プロンプトで **qpsetup** コマンドを発行する。

関連タスク:

- 63 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)』
- 24 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)』
- 90 ページの『Query Patroller サーバーの手動移行』
- 34 ページの『Query Patroller サーバーのインストールの検査』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』
- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』

関連資料:

- 245 ページの『qpmigrate - Query Patroller データおよび設定の移行』
- 247 ページの『qpsetup - Query Patroller サーバーのセットアップ』

第 9 章 Query Patroller の移行

DB2 セットアップ・ウィザードによる Query Patroller サーバーの自動移行

DB2® セットアップ・ウィザードは、Query Patroller サーバーのインストール (UNIX または Windows) の際に、**qpmigrate** コマンドを自動的に実行します。DB2 セットアップ・ウィザードが Query Patroller バージョン 7 のデータや設定をサーバー上で検出すると、インストール時にこの事実を知らせるメッセージが表示されます。このとき、DB2 セットアップ・ウィザードにバージョン 7 のデータと設定を自動的に移行させるか、インストールが終了するまで移行を据え置くかを決定できます。インストール時に DB2 セットアップ・ウィザードにこのコマンドを自動実行させる主な利点は、使いやすさです。

以下の項目は、Query Patroller サーバーのインストール時に自動的に移行されません。

- Query Patroller システム設定
- Query Patroller 照会クラス
- Query Patroller サブミッター・プロファイル
- Query Patroller 演算子プロファイル
- Query Patroller サブミット設定ファイル

インストール時に DB2 セットアップ・ウィザードに **qpmigrate** コマンドを自動的に実行させない場合は、これらの項目をインストールの完了後に確実に移行してください。これを行うには、UNIX® シェル・プロンプトまたは Windows® コマンド・プロンプトから適切なコマンド構文とコマンド・パラメーターを使用する **qpmigrate** コマンドを発行してこれらの項目を手動で移行します。

バージョン 7 の管理者プロファイルを Query Patroller、バージョン 8 に移行すると、演算子プロファイルが作成されます。このプロファイルには、Query Patroller の全特権について最大の権限レベルが自動的に付与されます。しかし、移行後のプロファイルには、Query Patroller データベースに対する DBADM 権限が自動的に付与されません。したがって、移行後の管理者プロファイルには、履歴データを生成したり、演算子プロファイルを作成、更新、または削除したりする特権がありません。移行後のこのプロファイルを使用するユーザーがそのような作業を実行することが必要になった場合には、移行後に DBADM 権限をそのユーザーに手動で付与する必要があります。

注: 以下の項目は、**qpmigrate** コマンドによって移行されません。

- Query Patroller バージョン 7 の結果表スペース値 (この値は DB2 レジストリー DQP_RES_TBLSPC から取られます)。この値が移行されないのは、インストール・プロセスで **qpsetup** コマンドが実行されたときに、Query Patroller バージョン 8 の結果表スペース値が適切にセットアップされているはずだからです。

- DB2 クライアントで定義されている Query Patroller バージョン 7 設定。これらの設定が移行されないのは、**qpmigrate** コマンドがクライアント・コンピュータでなくサーバー・コンピュータで実行されるためです。たとえば、DQP_ABORTRESULT や DQP_SHARE などのクライアント設定は、照会サブミット設定に移行されません。
- Query Patroller バージョン 7 の E メール通知機能。この機能が移行されないのは、Query Patroller バージョン 8 の E メール通知機能では、対応する Query Patroller バージョン 7 機能と異なるパラメーターが必要なためです。必要な場合は、移行後に E メール通知設定を手動でセットアップして使用可能にする必要があります。Query Patroller バージョン 8 では、E メール通知機能はデフォルトで使用不可になっています。
- Query Patroller バージョン 7 のグループ・プロファイル「PUBLIC」。このグループ・プロファイルが移行されないのは、Query Patroller バージョン 8 では「PUBLIC」という名前のグループ・サブミッター・プロファイルがインストール時に自動的に作成されるためです。したがって、これは事前に存在しており、バージョン 7 のグループ・プロファイルとは異なる意味を持っています。

したがって、**qpmigrate** コマンドを自動的に実行した後に、DB2 Query Patroller サーバーをさらにカスタマイズして調整しなければならない場合があります。

関連タスク:

- 63 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)』
- 24 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)』
- 90 ページの『Query Patroller サーバーの手動移行』

関連資料:

- 245 ページの『qpmigrate - Query Patroller データおよび設定の移行』

Query Patroller サーバーの手動移行

このタスクは、Query Patroller バージョン 7 のデータと設定を Query Patroller バージョン 8 システムに手動で移行する方法の概要です。

DB2 セットアップ・ウィザードは、Query Patroller サーバーのインストール (UNIX または Windows) の際に、**qpmigrate** コマンドを自動的に実行します。ただし、インストールの際にこのコマンドを自動的に実行しない場合は、UNIX シェル・プロンプトまたは Windows コマンド・プロンプトから **qpmigrate** コマンドを発行することによってインストールの後で手動で実行できます。このコマンドをインストール後に発行する主な利点は、Query Patroller バージョン 7 のデータと設定を移行する前に **qpmigrate** コマンドのコマンド構文とコマンド・パラメーターを読むことができることです。このとき、移行プロセスをより良く理解できます。

制約事項:

- **qpmigrate** コマンドは、クライアント・コンピューターでなくサーバー・コンピューターで実行される必要があります。したがって、バージョン 7 の Query Patroller クライアント設定は移行できません (たとえば、DQP_ABORTRESULT と DQP_SHARE は照会サブミット設定に移行されません)。
- バージョン 8 の Query Patroller の E メール通知機能では、対応するバージョン 7 機能とは異なるタイプのパラメーターが必要です。したがって、バージョン 7 の E メール通知機能は移行されません。移行後にバージョン 8 用の E メール通知を手動でセットアップする必要があります (必要な場合)。
- **qpmigrate** コマンドを実行するとき、Query Patroller サーバーが実行されてはなりません。
- Query Patroller サーバー設定を移行するためと、(後でオプションとして) Query Patroller バージョン 7 のコントロール表と結果表をクリーンアップする (*cleanup* パラメーターを使用する) ために、**qpmigrate** をそれぞれ 1 回 ずつ実行してください。

前提条件:

- **qpmigrate** コマンドを実行するには、DBADM 権限が必要です。
- DB2 インスタンスおよび対応する DB2 データベースは、**qpmigrate** コマンドを実行する前にバージョン 7 からバージョン 8 に移行する必要があります。
- Query Patroller バージョン 8 がサーバーにインストールされている必要があります。
- **qpmigrate** コマンドを実行する前に、**qpsetup** コマンドを実行する必要があります。
- データベースが属する DB2 インスタンスがサーバー上で稼働している必要があります。
- Query Patroller システムをカスタマイズする前に、**qpmigrate** コマンドを実行する必要があります。**qpmigrate** コマンドを実行する前に Query Patroller バージョン 8 システムをカスタマイズすると、以前にカスタマイズされたプロファイルおよびシステム・パラメーターが **qpmigrate** によって上書きされる可能性があります。以下のことを考慮に入れてください。
 - QP_SYSTEM 表にあるシステム設定は、移行された値で上書きされます (バージョン 7 で存在するパラメーターの場合)。
 - QUERY_CLASS 表にある既存の照会クラスは上書きされません。移行された照会クラスは QUERY_CLASS に追加されます。照会クラスの最大限度 99 に到達すると、照会クラスはそれ以上移行または追加されません。移行された照会クラスの *max_cost* が既存の照会クラスと同じである場合、その照会クラスは移行または追加されません。
 - DB2 ユーザー ID または DB2 グループ ID についてユーザー・プロファイル関連の項目 (SUBMITTER_PROFILE、OPERATOR_PROFILE、および SUBMISSION_PREFERENCES) がすでに存在する場合、**qpmigrate** の実行時に、同じユーザー名またはグループ名を持つ対応するバージョン 7 プロファイルからの値は上書きされません。

注: この前提条件には 1 つの例外があります。**qpmigrate** コマンドを実行する前に、デフォルトの PUBLIC サブミット設定の設定を検査し、(必要であれば) 希望する値に更新する必要があります。この更新の結果、**qpmigrate** に

よって作成されるすべての新規照会のサブミット設定は、デフォルトの PUBLIC サブミット設定からすべての必要な値を継承します。

手順:

Query Patroller サーバーを移行するには、以下のステップを実行します。

1. **qpmigrate** コマンドを発行する前に、適切なコマンド構文とコマンド・パラメーターをチェックする。詳しくは、関連リンクにある **qpmigrate** コマンド・トピックを参照してください。
2. オペレーティング・システムに応じて、UNIX シェル・プロンプトまたは Windows コマンド・プロンプトから **qpmigrate** コマンドを発行する。

qpmigrate コマンドを実行したときは、常にメッセージ・ログ・ファイル `qpmigrate.log` で重要なメッセージをチェックしてください。このログは、Windows オペレーティング・システムでは `¥sqllib¥<instance>¥` ディレクトリーにあり、UNIX ベースのオペレーティング・システムでは `/sqllib/db2dump/` ディレクトリーにあります。これらのパスは Windows および UNIX でのデフォルト位置です。Windows コマンド・プロンプトまたは UNIX シェル・プロンプトで DB2 データベース・マネージャー構成パラメーター `diagpath` を使用して、これらのパスを変更できます。

バージョン 7 の管理者プロファイルを Query Patroller、バージョン 8 に移行すると、演算子プロファイルが作成されます。このプロファイルには、Query Patroller の全特権について最大の権限レベルが自動的に付与されます。しかし、移行後のプロファイルには、Query Patroller データベースに対する DBADM 権限が自動的に付与されません。したがって、移行後の管理者プロファイルには、履歴データを生成したり、演算子プロファイルを作成、更新、または削除したりする特権がありません。移行後のこのプロファイルを使用するユーザーがそのような作業を実行することが必要になった場合には、移行後に DBADM 権限をそのユーザーに手動で付与する必要があります。

関連タスク:

- 63 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (Windows)』
- 24 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller サーバーのインストール (UNIX)』
- 87 ページの『Query Patroller サーバーの手動設定』
- 34 ページの『Query Patroller サーバーのインストールの検査』
- 17 ページの『第 3 章 Query Patroller のインストール (UNIX)』
- 59 ページの『第 6 章 Query Patroller のインストール (Windows)』

関連資料:

- 245 ページの『qpmigrate - Query Patroller データおよび設定の移行』
- 247 ページの『qpsetup - Query Patroller サーバーのセットアップ』

第 10 章 次のステップ

Query Patroller を正常にインストールできたら、次は Query Patroller サーバーを開始して、Query Patroller が照会を代行受信できるようにする必要があります。そうしたら、Query Patroller で管理タスクの実行を開始できるようになります。

Query Patroller を開始する

通常のビジネス操作中に、Query Patroller を開始または停止する必要がある場合があります。たとえば、照会クラスの作成、変更、または除去を行った後は、変更内容を反映させるため Query Patroller を停止してから再始動する必要があります。

前提条件:

- DBADM 権限が必要です。
- DB2 が開始済みであることが必要です。

手順:

Query Patroller を開始するには、**qpstart** コマンドを発行してください。

関連タスク:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『UNIX での DB2 UDB の開始』
- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『Windows での DB2 UDB の開始』
- 94 ページの『Query Patroller を停止する』

関連資料:

- 252 ページの『qpstart - Query Patroller の開始』

Query Patroller が照会を代行受信できるようにする


Query Patroller の代行受信、管理、および履歴分析機能を使用する前に、*dyn_query_mgmt* 構成パラメーターを設定することによって Query Patroller が照会を代行受信できるようにする必要があります。


手順:

Query Patroller が照会を代行受信できるようにするには、次の方式のいずれかを使用してください。

注: パーティション環境では、Query Patroller はすべてのパーティションに対して使用可能にする必要があります。

DB2 コントロール・センター方式:

1. 「データベース構成」ウィンドウをオープンします。
2. DYN_QUERY_MGMT の「値」をクリックします。  ボタンが表示されません。

3.  をクリックします。「データベース構成パラメーターの変更」ウィンドウがオープンします。
4. 「使用可能」ラジオ・ボタンをクリックします。
5. 「OK」をクリックして、「データベース構成パラメーターの変更」ウィンドウをクローズします。
6. 「OK」をクリックして、「データベース構成」ウィンドウをクローズして変更を保管します。

コマンド行方式:

UPDATE DATABASE CONFIGURATION コマンドを発行し、Query Patroller に照会を代行受信させるデータベースについて `dyn_query_mgmt` を `ENABLE` に設定します。

関連概念:

- 115 ページの『Query Patroller の照会代行受信および管理』

関連資料:

- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『`dyn_query_mgmt` - 「動的 SQL 照会管理」構成パラメーター』

Query Patroller を停止する

通常のビジネス操作中に、Query Patroller を開始または停止する必要がある場合があります。たとえば、照会クラスの作成、変更、または除去を行った後には、変更内容を反映させるため Query Patroller を停止してから再始動する必要があります。Query Patroller を停止した後で、強制された照会は Query Patroller を再始動し、照会のリカバリーが完了しない限り、不整合状態となります。

前提条件:

- DBADM 権限が必要です。
- Query Patroller が開始済みである必要があります。

手順:

Query Patroller を停止するには、**qpstop** コマンドを発行してください。

関連タスク:

- 93 ページの『Query Patroller を開始する』

関連資料:

- 253 ページの『qpstop - Query Patroller の停止』

Query Patroller 管理タスクの概要

インストール、セットアップ、および移行を完了し、Query Patroller で照会の代行受信を可能にしたら、Query Patroller システムを管理および使用し始めることができます。以下のダイアグラムは、さまざまな Query Patroller のポストインストール・タスクの概要を示しています。

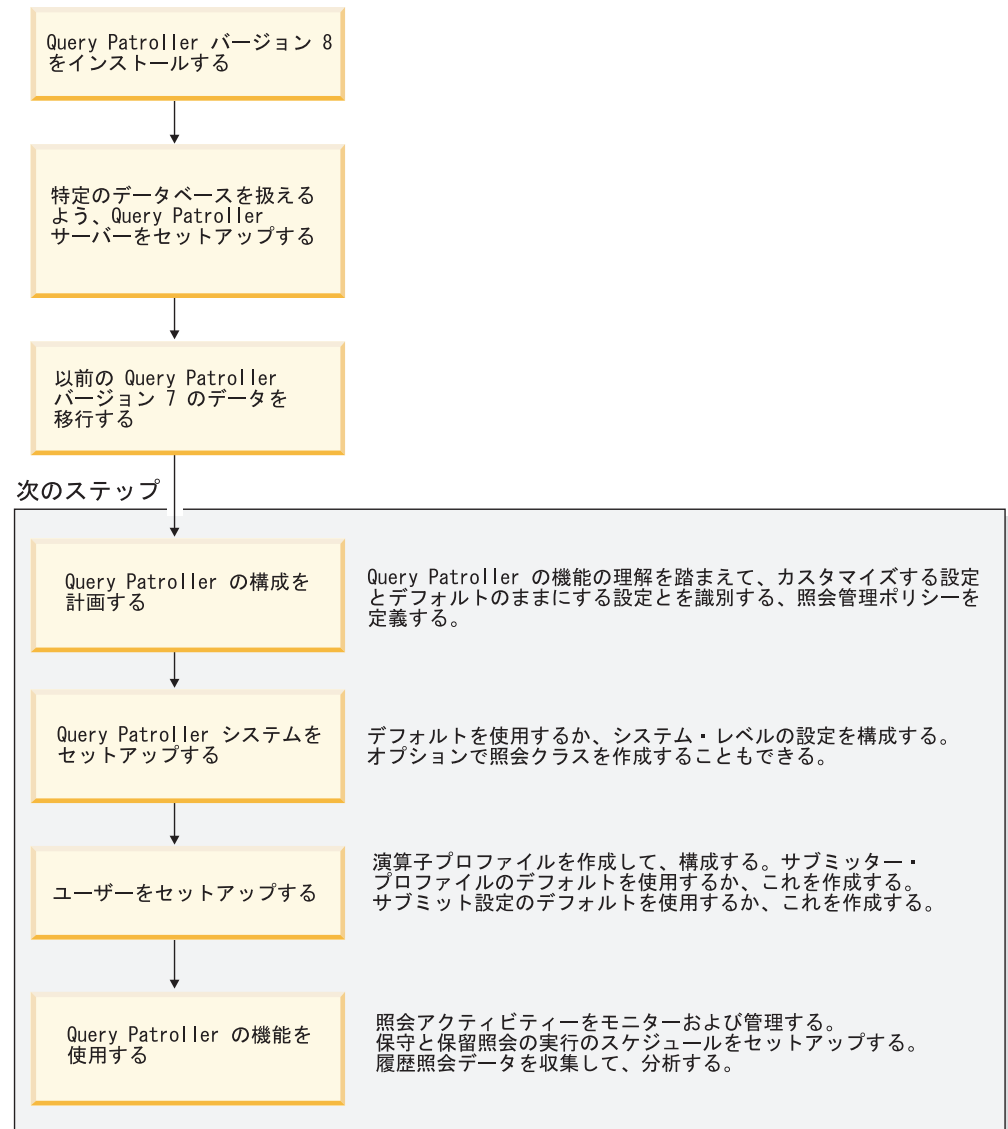


図 25. Query Patroller 管理タスクの概要

関連概念:

- 112 ページの『Query Patroller 照会クラス』
- 110 ページの『Query Patroller のしきい値』
- 115 ページの『Query Patroller の照会代行受信および管理』
- 121 ページの『Query Patroller の構成ロードマップ』
- 11 ページの『第 2 章 Query Patroller インストール環境の概要』

- 119 ページの『照会管理ポリシーの定義』
- 205 ページの『第 25 章 Query Patroller バージョン 8 の制約事項』

関連タスク:

- 136 ページの『Query Patroller のデータベース・リストを更新する』
- 93 ページの『Query Patroller を開始する』
- 93 ページの『Query Patroller が照会を代行受信できるようにする』
- 138 ページの『履歴データのコレクションを使用可能にする』

第 3 部 照会管理の計画によるビジネス問題の解決

第 11 章 ビジネス上の問題に関する Query Patroller の解決策

この章では一連のシナリオを通して、架空の業務上の設定の中で Query Patroller の機能を使用する例を示します。これらのシナリオでは、34 の小売食料雑貨品店とデパートを運営する Shopmart という会社の照会管理ストラテジーを説明します。各シナリオは、特定のデータウェアハウジングの課題について概説し、Shopmart 社が Query Patroller の機能を利用して問題をどのように解決したかを説明します。

シナリオ: サブミッター・プロファイルを構成することによって照会サブミッターの要件を管理する

Shopmart のデータウェアハウスには、主に 3 つのタイプのユーザーがいます。営業担当員、営業マネージャー、およびビジネス・アナリストです。これら 3 つのグループにはそれぞれ、サブミットする照会のタイプと必要な応答時間に関して、異なる要件があります。

営業担当員は照会をサブミットするとき、多くの場合にカスタマー照会に対する即時の応答を期待しています。ときには、照会結果を受信する速度が、重要な顧客を得るか失うかを左右します。営業担当員は、照会をサブミットするのに照会アプリケーションを使用します。

営業マネージャーはデータウェアハウスを、主に週次レポートを作成するために使用します。これらの照会はカスタマイズされた照会構築アプリケーションで作成されるため、照会のサイズと SQL の効率に関して妥当な一貫性があります。営業マネージャーは時間制約の下で照会をサブミットします。最新の統計を週次会合で紹介できる時間に間に合うようにまとめなければなりません。

ビジネス・アナリストは複雑な随時照会を作成します。SQL の経験が限られているアナリストが作成すると、これらの照会は時々非常に大規模で扱いにくくなり、データウェアハウスのパフォーマンスに深刻な影響を与えます。これらの照会の応答時間は特に重要ではありませんが、結果は数時間以内に戻される必要があります。

これらのグループとその照会のさまざまな特性を反映させるため、管理者 Mel は既存の DB2® ユーザー・グループ (Managers、Salesreps、および Analysts) に基づいて 3 つの Query Patroller サブミッター・プロファイルを作成しました。

営業担当員に迅速な応答の要件があるため、管理者 Mel は Salesreps サブミッター・プロファイルを、このサブミッター・グループからの照会が Query Patroller によって代行受信されないように構成しました。これにより、Query Patroller がこれらの照会を代行受信して管理することに関連したパフォーマンス・コストを回避できます。

営業マネージャー用のレポート照会が比較的迅速に実行されることを保証するため、Mel は 999 というキュー優先順位を Managers サブミッター・プロファイルに割り当てました。優先順位が 999 であるということは、マネージャーの照会がキ

ューに入れられるとき、他のサブミッターからの照会よりも高い優先順位が与えられるということです。営業マネージャーの照会はサイズが一貫しているため、Melはこのサブミッター・プロファイルの照会コストしきい値をデフォルトのままにしておきました。

ビジネス・アナリストは、許可されているデフォルト・コストよりも大きい照会をサブミットしなければならないことがあります。ただし、ビジネス・アナリストがコストの大きすぎる照会をサブミットすることがないように、MelはAnalystsサブミッター・プロファイルの最大照会コストしきい値を1億に設定しました。コストがこのしきい値を超える照会をアナリストがサブミットすると、その照会はQuery Patrollerによって保留にされます。

以下の表では、これらのShopmartサブミッター・プロファイル設定が要約されています。

表1. Shopmartサブミッター・プロファイル設定

サブミッター・プロファイル	Query Patrollerによって代行受信されるか	最大照会コスト (timeron 単位)	キュー優先順位
Salesreps	いいえ	n/a	n/a
Managers	はい	デフォルト (10 000 000)	999
Analysts	はい	100 000 000	デフォルト (500)

関連概念:

- 110 ページの『Query Patroller のしきい値』
- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』

関連タスク:

- 156 ページの『ユーザーおよびグループ用のサブミッター・プロファイルを作成する』
- 158 ページの『サブミッター・リソース制限を設定する』

シナリオ: 大規模な照会の処理

Jane は、Shopmart ストアの顧客の購入パターンを調査するビジネス・アナリストです。Jane には、現在計画中の Shopmart の新店舗で提供する一連のサービスに関する提案を行う責任が課せられています。

Jane は、顧客が購入する生鮮食品の種類と、顧客が利用する店内サービス (たとえばドライ・クリーニングや写真の現像など) の種類の間には重要な関係があると考えています。この関係を調査するために、Jane は大規模な照会をサブミットします。これには、様々な部門の多くの表も関係します。

ビジネス・アナリストからの著しく大規模な照会がシステム・リソースを停止させることがないように、またこれよりも小さな照会が実行されないようにするために、システム管理者の Mel は、ビジネス・アナリストからの著しく大規模な照会が保留されるように Query Patroller のしきい値を設定しました。ビジネス・アナリストに許可されているサイズを超える照会を Query Patroller が保留するとき、Query

Patroller は照会が保留されることをサブミッターにアラートします。このとき、照会を即時に実行するか、後で実行されるようにスケジュールするか、あるいは取り消すかを定めることができます。Mel は、一日の終わりになってもまだ保留されている照会が、夜間に実行されるように Shopmart システムをセットアップしました。

Jane の照会のサイズは、ビジネス・アナリストの Query Patroller グループ・プロファイルに対して指定した最大サイズを超えます。Query Patroller は照会を保留します。そして Jane は照会が保留されていることを示す Query Patroller からのエラー・メッセージを受け取ります。それで Jane はデータウェアハウス・サポート・チームの Quentin を呼びます。

Quentin は、SQL ステートメントでエラーが出されるほど照会は巨大ではないことを確認するため、照会を調べます。Quentin は、照会の大きさは許容範囲にあるので、取り消さなければならない正当な理由はないと判断します。Quentin には今、Jane の保留された照会の扱いに関して 2 つの選択肢があります。照会をリリースして、リソースが使用可能になったらすぐ実行するという選択肢と、保留された照会に対してスケジュールする時刻に照会を実行するという選択肢です。

Quentin は、その照会は通常のコストしきい値を超えているけれども、実行できるようにすることを Jane に伝えます。ただし、他のユーザーへの影響を最小限に抑えるために、その照会が夜間に実行されるようにしたことを説明します。

関連概念:

- 99 ページの『シナリオ: サブミッター・プロファイルを構成することによって照会サブミッターの要件を管理する』
- 125 ページの『サブミッター・プロファイルの構成』
- 119 ページの『照会管理ポリシーの定義』

シナリオ: 大規模な緊急照会の実行

昨年の 5 月から 10 月の間に販売された Shopmart の医療関連の商品のラインに、緊急リコールが発生しました。法律部門は薬局の販売部長の Arun に、この期間に販売された医療関連の商品すべてに関する詳細報告書、および残りの在庫に関する詳細報告書を提出するように求めました。

これは、システムがフル稼働しているときに、大規模な照会を一度に実行しなければならないことを意味しますが、しかし照会の実行は急務です。Arun はシステム管理者の Mel に、この照会は後に遅らせることはできず、今すぐ行わなければならないものであることを知らせます。

システム全体を機能不全に陥れる 1 度の大規模な照会から保護するため、Mel は、販売部長を含むあらゆるユーザーのグループからの極めて大規模な照会が保留されるように、照会サブミッター・プロファイル内の Query Patroller のしきい値を設定しました。

Mel は Arun の照会がどれほど重要かを知っていたので、Arun のサブミッター・プロファイルのキュー優先度の値を一時的に上げ、これが完了するまで照会のサブミットを待つよう Arun に依頼します。Arun のキュー優先度を上げることは、照

会がキューに入れられるときに、他のいくつかの照会が完了した後、その照会が最初に実行されるということを意味します。

照会がサブミットされると、Arun のサブミッター・プロファイルの最大照会コストを超えるため、システムによって代行受信され、保留されます。Mel は、十分な量のリソースが使用可能になったらすぐ実行するために、照会を保留状態から解除します。

照会を実行した後、Mel は Arun のサブミッター・プロファイルのキュー優先度の値をリセットし、最初の値に戻します。

関連概念:

- 125 ページの『サブミッター・プロファイルの構成』
- 100 ページの『シナリオ: 大規模な照会の処理』
- 119 ページの『照会管理ポリシーの定義』

関連タスク:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループのサブミッター・プロファイルを変更する』

関連資料:

- 276 ページの『UPDATE SUBMITTER_PROFILE』

シナリオ: 照会クラスを使用してさまざまなサイズの照会を管理する

本部は、各製品ライン・マネージャーに対し、月曜日の午後の営業会議に備えて、全社の先週の売上高を調べておくよう命じています。売上高は土曜日の業務終了後まで入手できないため、マネージャーは通常、週次売上照会を月曜日の午前 8:30 から午前 11:00 の間に実行します。

システムはすべての週次売上照会を同時に実行することもできますが、そうするならばシステム・リソースを独占してしまい、他のユーザーが小さな照会 (顧客の口座の照会など) を同時に実行できなくなってしまう可能性があります。この問題を解決するため、システム管理者 Mel は、システム・リソースを小さな照会と大きな照会の両方に割り振る照会クラスをセットアップしました。

照会クラスは、サイズに応じて、照会のグループ化と実行を行う *Query Patroller* のメカニズムです。照会クラスごとに、クラスに含まれる照会のサイズと、並行実行できる照会の数を指定できます。照会は、照会クラスごとに別々にキューに入れます。したがって、データベースに対する照会の流れを制御できます。

小さな照会はほんの数秒で完了するので、小さな照会用の照会クラスをセットアップする際、Mel はこのクラスから同時に実行できる照会の数に制限を設定しませんでした。一方、大きな週次売上照会が独占できるリソースの量を制限するため、大きな照会用の照会クラスについては、照会の最大数を 10 に設定しました。つまり、15 の週次売上照会が同時にサブミットされると、そのうちの 5 つはこの照会クラス内の実行中の照会がいくつか完了するまでキューに入れられるということです。

乳製品の営業マネージャー Bill が週次売上照会を月曜日の午前 9:55 にサブミットしたとき、すでに他の 12 人のマネージャーが同様の照会を実行しようとしていました。同時に、クレジット担当者 Alphonso が、いくつかの顧客口座情報を検索するための照会をサブミットしていました。

Mel がセットアップした照会クラスのおかげで、Alphonso の小さな照会クラスは即時に実行されます。Bill の照会はキューに入れられ、他の売上照会がいくつか完了したときに、大きな照会用のクラスで実行されます。

関連概念:

- 121 ページの『Query Patroller の構成ロードマップ』
- 129 ページの『照会クラス構成』
- 125 ページの『サブミッター・プロファイルの構成』
- 119 ページの『照会管理ポリシーの定義』

関連タスク:

- 142 ページの『Query Patroller の照会クラスを作成する』

シナリオ: 履歴分析を使用してパフォーマンスを改善する

Shopmart データウェアハウスは、ここ数年で非常に大規模になったため、管理者の Mel はデータベースを再構築してパフォーマンスを改善する方法を探しているところです。

Query Patroller はここ 6 か月間、データウェアハウスの照会アクティビティ・データを収集してきました。履歴分析機能はこのデータを使用して、どのデータベース・オブジェクトが使用されたか、どのサブミッターによってか、およびそれはいつかについてのレポートを生成します。

Mel はこの履歴分析「ヒットしなかった表」レポートを使用して、ここ 6 か月で照会によってアクセスされていない表を識別します。これらの表のいくつかはかなり大規模で、データウェアハウスの最も強力なプロセッサ上に配置されています。履歴データは、これらの表がほとんどまたはまったくアクセスされていないことを示しているため、Mel はそれらをもっと低速なアクセスの装置に移動させて、より頻繁に使用される表のためにスペースを空けることに決めます。

Mel は別のレポート「ヒットした表」を使用して、データベース内の最も頻繁にアクセスされている表を調べます。データウェアハウス・ユーザーにとって最も重要だと思われる表を識別したら、彼はそれをさらにドリルダウンして、索引に適する候補を探すために、アクセスされた列をさらに詳細に調べます。さらに彼は「ヒットしなかった索引」レポートを調べて、どの索引が使用されておらず、除去すべきかを確認します。

Mel は、これらの変更を Shopmart データウェアハウスにインプリメントした後、それが照会のパフォーマンスに与える影響をモニターすることができます。これを実行するために、彼は照会実行時間についての履歴分析グラフおよびレポートを調べて、現在の照会の平均実行時間と、データベース変更前の平均実行時間とを比較します。

関連概念:

- 177 ページの『履歴分析レポートの使用』

関連タスク:

- 179 ページの『Query Patroller を使用して履歴データを収集する』

第 12 章 Query Patroller のバックグラウンド

この章では、照会管理ストラテジーを定義するのに必要となる、概念的な情報を扱います。

Query Patroller による照会処理

Query Patroller は、照会がサブミットされるときに、DB2® と対話して特定の処理を行います。このトピックでは、照会がサブミットされることから結果が生成されるまでに行われる処理について説明します。

照会のサブミット:

Query Patroller は、様々な方法によってサブミットされる照会を代行受信することができます。たとえば、次のようなサブミットの方法があります。

- 照会アプリケーション
- 中間層ビジネス・インテリジェンス・ツール
- DB2 グラフィカル・ユーザー・インターフェース (動的)
- コマンド行インターフェース

照会がサブミットされると、DB2 は *dyn_query_mgmt* データベース構成パラメーターをチェックします。パラメーターが **ENABLE** に設定されると、Query Patroller は、SQL ステートメントやサブミッターの ID などの照会に関する情報をキャプチャーします。また、Query Patroller はこの時点で、照会に対する値を管理する照会サブミッターの最小コスト (**MIN_COST_TO_MANAGE**) や、サブミッターの照会値の最大コスト (**MAX_COST_ALLOWED**) などの、他の情報の評価も行います。

コスト分析:

照会がサブミットされた後、DB2 照会オプティマイザーは照会に関するコストの見積りを行います。照会オプティマイザーは Query Patroller に、照会を実行するための見積りコストを *timeron* という単位で提供します。

照会代行受信:

Query Patroller は、照会を代行受信するか、データベースに対して直接実行されるようにするかを決定します。

プロパティをシステム・レベルまたはサブミッター・レベルで設定して、Query Patroller が代行受信する照会を指定できます。システム・レベルで設定すると、照会の代行受信はアプリケーション名に基づいて決定されます。サブミッター・レベルで設定すると、照会の代行受信はサブミッター・プロファイルのプロパティに基づいて決定されます。

Query Patroller が照会を代行受信しない場合、Query Patroller はそれ以上関与せず、照会はデータベースに対して直接実行されます。

照会管理:

照会の値を管理するためのサブミッターの最小コスト (MIN_COST_TO_MANAGE) を照会の見積りコストが下回る場合、照会はデータベースに対して直接実行されます。

照会に対する値を管理するサブミッターの最小コストを照会の見積りコストが上回る場合、Query Patroller は照会を評価し、優先順位付けを行って、その照会を保留するかキューに入れます。

Query Patroller が照会を保留するのは、次のいずれかの場合です。

- 照会の見積りコストがサブミッターの照会値の最大コスト (MAX_COST_ALLOWED) を超えている。
- 照会の見積りコストがシステムに対する最大ワークロード・コスト値 (MAX_TOTAL_COST) を超えている。

保留の状態にある照会は、管理者または演算子が手動で照会をリリースするか、またはスケジュールされたリリース・ジョブが実行されるまでは実行されません。

Query Patroller が照会をキューに入れるのは、次のような場合です。

- サブミッターに対する最大照会数 (MAX_QUERIES_ALLOWED) にすでに達している。
- システムに対する最大照会数 (MAX_TOTAL_QUERIES) にすでに達している。
- 照会の見積りコストに現行ワークロード・コストを加えた値が、システムに対する最大ワークロード・コスト値 (MAX_TOTAL_COST) を超えている。
- 照会を実行する照会クラスに対する最大照会数 (MAX_QUERIES) の値にすでに達している。

Query Patroller は定期的に照会のキューをチェックして、実行可能な照会を識別します。たとえば、サブミッターが 5 つの照会を同時にサブミットできる場合、6 番目の照会はキューに入れられます。しかし他の 5 つの照会のいずれかが完了するとすぐに、照会が他のシステムおよびサブミッターのしきい値を下回っている場合、Query Patroller はその 6 番目の照会を実行します。

照会クラスが定義されていない場合、照会はデフォルトの照会クラス内で実行されます。照会クラスが定義されている場合、照会は適切な照会クラス内で実行されます。

照会の実行:

DB2 は照会を実行し、Query Patroller は、107 ページの表 2 で示されるサブミッターのサブミット設定に基づいて、結果セットを 2 つの宛先のいずれかに送信します。

表 2. 結果セットの宛先

宛先	クエリー・パトローラー・センター方式	コマンド行方式
オリジナルの DB2 エージェント・プロセスは照会を実行し、照会を実行したアプリケーションに結果セットを戻す。	「照会サブミット設定」ウィンドウの「結果セットが戻されるまで待つ」が選択される。	RESULT_DESTINATION パラメーターに「A」を指定して UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES または ADD SUBMISSION_PREFERENCES コマンドが発行される。
照会を実行して結果表に結果セットを保管するために、新規 DB2 エージェント・プロセスが作成される。	「照会サブミット設定」ウィンドウの「アプリケーションをリリースして結果表から結果を検索する」が選択される	RESULT_DESTINATION パラメーターに「T」を指定して UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES または ADD SUBMISSION_PREFERENCES コマンドが発行される。

照会の実行は、完了するまでは、いつでもサブミットを取り消すかあるいはバックグラウンドに置くことができます。

通知:

照会の結果セットが直接結果表に送信されること、また E メール通知がサブミッターに対してセットアップされていることをサブミッターが示した場合、 Query Patroller は結果表の作成時に、E メール通知をサブミッターに送信します。

以下の図は、このトピックで説明した照会の処理を示しています。

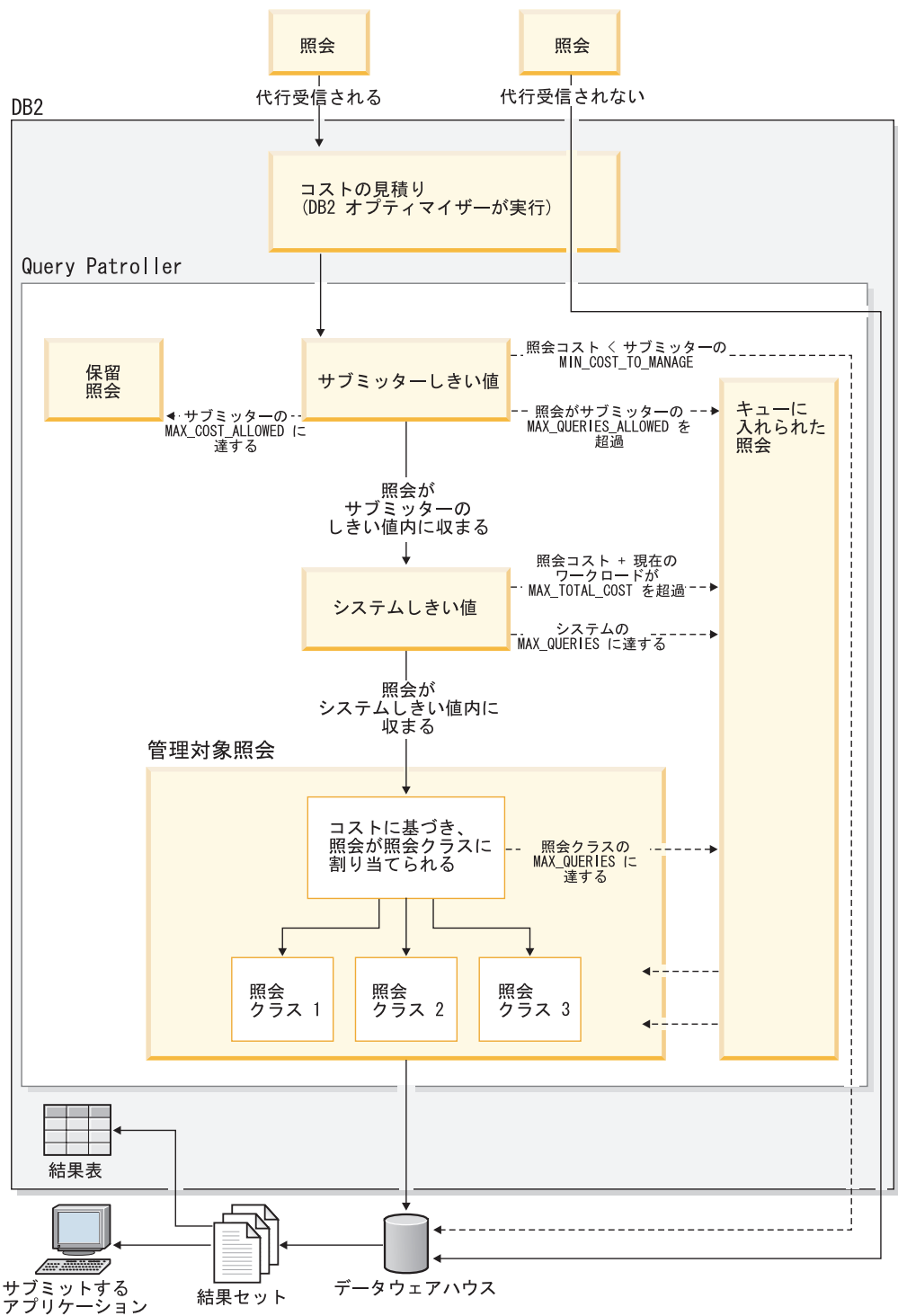


図 26. Query Patroller による照会処理

関連概念:

- 121 ページの『Query Patroller の構成ロードマップ』
- 129 ページの『照会クラス構成』
- 125 ページの『サブミッター・プロファイルの構成』

- 109 ページの『Query Patroller でのコストの見積り』
- 3 ページの『Query Patroller』
- 4 ページの『Query Patroller のコンポーネント』

関連資料:

- 273 ページの『UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES』
- 280 ページの『Query Patroller のシステムしきい値の設定』
- 282 ページの『照会代行受信設定』
- 287 ページの『E メール通知設定』
- 220 ページの『ADD SUBMISSION_PREFERENCES』

Query Patroller でのコストの見積り

Query Patroller は代行受信する各照会を、照会の見積りサイズ、または見積りコストに基づいて評価します。照会の見積りコストとは、照会の実行で使用されるシステム・リソース合計の見積りのことです。かぎとなる Query Patroller のしきい値の数値は、照会の見積りコストに基づいて設定されます。Query Patroller のグラフィカル・ユーザー・インターフェースでは、この見積りコストは単にコストと呼ばれます。たとえば、「照会の最大コスト」などです。

Query Patroller が入手する照会の見積りコストの情報は、DB2[®] に依存します。DB2 にサブミットされる照会に関して、必要なすべての表のデータを検索するために様々な方法やアクセス・プランがあります。アクセス・プランの 1 つにデータ・アクセス・ストラテジーというものがあります。これには、索引の使用、ソート方式、ロックング・セマンティクス、および結合方式が含まれます。

DB2 照会オプティマイザーは照会のための様々なアクセス・プランを分析して、見積りリソース・コストの点で最も効率の良いプランを判別します。アクセス・プランの見積りコストを計算する際、照会オプティマイザーは、CPU (命令の数) と I/O (シークおよびページ転送の数) の両方を考慮します。照会を実行するために照会オプティマイザーが選択したアクセス・プランの詳細をキャプチャーすることができます。これらの詳細は Explain 表に保管され、DB2 Explain 機能を使用して照会や表示を行うことができます。

DB2 のコスト・メジャー単位は、timeron です。timeron は実際の CPU 実行時間と同等ではありませんが、選択したアクセス・プランに応じた特定の照会の実行に必要な見積りリソースの相対的なメジャー値を提供します。timeron 単位で計測される照会の見積りコストからはその照会の実行時間は分かりませんが、同じワークロードのもと、同じ環境にある 2 つの照会を比較するための基礎を提供することができます。たとえば、外部要因 (ハードウェアの容量や並行ワークロード) が同じ場合、複雑な結合や、大きな表のスキャンを含む高コストな照会の方が、低コストで単純な照会よりも実行時間が長くなるのが予測できます。

DB2 は、照会実行の見積りコストを Query Patroller に渡します。Query Patroller はこの情報を使用して、システムに対して定義された特定のしきい値を照会が超えていないかどうかを判断します。

注: 照会最適化による照会の見積りコストの計算は現行の表統計を基に行われるため、照会最適化の計算の基になる情報が常に正確なものとなるように、`RUNSTATS` コマンドを定期的に行うことをお勧めします。

関連概念:

- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『分散統計の最適化の使用』
- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『SQL Explain 機能』
- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『Explain ツール』
- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『Explain 表および Explain 情報の編成』

Query Patroller のしきい値

Query Patroller は、データベースに対して実行できるワークロードの流れを判断するには、リソースしきい値に依存します。しきい値は、特定のサブミッターまたはグループによって実行される照会の数とサイズ、あるいはシステム・ワークロード全体のサイズ、またはこの両方をコントロールするために設定されます。特定のシステムとワークロードの特性に応じて、これらのしきい値の一部または全部を設定することがあります。しきい値のメイン・タイプは、サブミッターしきい値とシステムしきい値です。

サブミッターしきい値

サブミッターしきい値はサブミッター・プロファイルで設定され、しきい値は個々のサブミッターまたはサブミッターのグループに対して設定されます。個々のユーザーは、複数のグループに属することが可能で、ユーザーは複数グループ・プロファイルと同時に、個々のサブミッター・プロファイルも持つことになり得る可能性があります。ユーザーが、照会をサブミットできる複数プロファイルを持っている時、適切なしきい値の設定は、サブミッターに対して有効なプロファイルを選択する規則の集合に基づいて選択されます。Query Patroller によるサブミッター用に使用するプロファイルの選択方法については、『Query Patroller サブミッター・プロファイル』の項を参照してください。

サブミッターの最大コストしきい値 (`MAX_COST_ALLOWED` パラメーター) は、サブミッターが実行可能な照会の最大コストを決定します。見積りコストが、プロファイルの最大コストを超過する照会をサブミッターが実行しようとした場合、照会は保留となります。

システム・リソースに支障が出るようなランナウェイ照会で問題がある場合、このしきい値を設定する必要がある時もあります。サイズ制限を照会ごとに設定すると、異常に大規模な照会の実行前に、それらを分離することができます。また、照会の実行と取り消しを個別に決定できるよう、照会を保留にすることもできます。

サブミッターに対する最大照会数 (`MAX_QUERIES_ALLOWED`) は、特定のサブミッターで同時に実行できる照会の数を決定します。サブミッターが、プロファイルで指定した最大照会数がすでに実行中の場合に、照会を実行しようとした場合、いずれかの照会が完了するまで、この照会はキューに入れられます。

サブミッター・グループに大規模な照会をサブミットする許可を与えていながら、個々のサブミッターには少しの照会への制限しか与えたくない場合、このしきい値を設定する必要がある時もあります。このしきい値を設定すると、応答時間が予想より遅いために、同じコストの照会を素早く連続して再サブミットするユーザーの問題に対処することもできます。

特定のユーザーまたはグループによるリソースの使用をコントロールする必要がある場合、サブミッターのしきい値 (1 つまたは両方) を設定する時もあります。たとえば、データウェアハウスが、主に 1 つの部門から資金提供を受けながら、別の部門もリソースの限定使用が認められている場合、2 番目の部門のユーザーまたはグループが、照会に利用できるリソースの量が制限されるように、サブミッターしきい値を設定する時もあります。資金提供部門のユーザーおよびグループに対するしきい値は、サブミッターごとに許可されるリソースの量についてよりゆるやかにすることができます。

システムしきい値

照会コスト (MAX_TOTAL_COST パラメーター) および数 (MAX_TOTAL_QUERIES パラメーター) に対して、システムしきい値を設定すると、データベースに対して実行する全体のワークロードをコントロールできます。

システムに対する最大ワークロード・コスト (MAX_TOTAL_COST パラメーター) は、データベースに対して実行中のワークロード全体の最大サイズを決定します。ワークロード・コストは、システムで現在実行中の Query Patroller 管理対象照会すべてのコスト見積りを追加することによって計算されます。新規照会の実行によって、現在実行中のすべての照会の集約コストが最大ワークロード・コストを超過することになると、新規照会は、システムが最大ワークロード・コストを超過せずに新規照会を実行できるまでキューに入れられた状態になります。

現在のワークロードを実行中に、CPU の使用率が異常に高いことを検出した場合、このしきい値を設定する時もあります。また、ワークロード・サイズ制限を設けることによって、システムを多重定義するリスクを抑えるときもあります。

システムの最大照会数 (MAX_TOTAL_QUERIES パラメーター) は、システムで同時に実行できる照会数に制限を設けます。このしきい値に到達すると、追加の照会は、システムが最大照会数を超過せずに実行できるようになるまでキューに入れられた状態になります。

システムの多重定義を防ぐために、並行照会数に制限を設ける必要がある場合、このしきい値を設定する必要がある時もあります。

関連概念:

- 115 ページの『Query Patroller の照会代行受信および管理』
- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』

関連タスク:

- 135 ページの『Query Patroller システムの照会しきい値を設定する』
- 158 ページの『サブミッター・リソース制限を設定する』

Query Patroller 照会クラス

照会クラスは、サイズに応じて、照会のグループ化と実行を行う Query Patroller のメカニズムです。照会クラスを使用すると、異なるサイズのグループ化の照会の中で、システム・リソースが共有されるように、データベース上の照会の流れをコントロールすることができます。たとえば、次のようになります。

- 小規模の照会用に 1 つの照会クラスを指定し、大規模な照会用にも 1 つの照会クラスを指定することによって、より大規模な照会の背後で比較的小規模の照会が進まなくなることを防ぐことができます。小規模の照会は、照会自身のクラスで実行され、大規模な照会と別々にキューに入れられます。
- 一度に実行可能なシングル照会クラスに、照会数を指定し、並行して処理される大規模な照会の数に制限することによって、より大規模な照会がシステム・リソースを独占することができないようにすることができます。

照会クラスは、照会ごとの見積りコストに応じて、管理照会をカテゴリー化します。特定の Query Patroller システムに対して定義された照会クラスは、見積りコストが指定された範囲以内で減少する管理対象照会を許可します。たとえば、照会クラス 1 が、10 000 timeron までコストの上昇を許可すると、7500 timeron とコストを見積った照会は、そのクラスで実行されます。

照会クラスは、それぞれのクラスで並行して実行する照会数を制限できるように構成することができます。たとえば、照会クラス 2 はこの照会クラスの最大照会数 (MAX_QUERIES パラメーター) 値を 10 に設定することによって、同時に実行できる照会を 10 に構成することができます。この制限に到達すると、そのクラスに組み込まれる追加照会は、そのクラスで実行中の照会のいずれかが完了するまでキューに入れられます。

照会クラスの上限值は、照会クラスの最大照会コスト (MAX_COST パラメーター) 値で設定されます。特定の照会クラスに下限値をはっきりと定義されないうちは、下限値は、次の 2 つの要因の相互作用から強制的に設定されます。

1. 照会は、可能な最低見積りコストを指定した照会クラスで、常に実行されます。たとえば、見積りコストが 1200 timeron の照会は MAX_COST 値を 10 000 と指定した照会クラス 1 か、MAX_COST 値を 100 000 と指定した照会クラス 2 のいずれでも実行が可能です。常には照会クラス 1 で実行されます。これは、照会クラス 2 が 10001 timeron より小さい照会を決して受け付けないことを意味します。
2. それぞれのサブミッター・プロファイルには、照会が、Query Patroller で管理されるようにするために持つことができる最低コストを指定する、管理する照会の最小コストの値 (MIN_COST_TO_MANAGE パラメーター) が含まれます。たとえば、「managers」グループ用に定義されたサブミッター・プロファイルの最小照会コストが 1000 timeron の場合、このグループのメンバーによってサブミットされた 1000 より小さい見積りコストを指定した照会は、照会クラスに組み込まれません。これらの照会は、組み込まれずに、キューに入らず実行されません。

システム内で定義された照会クラスには、それぞれユニークな照会の最大コスト値 (MAX_COST パラメーター) がなければなりません。

それぞれの照会クラスは、`QUERY_CLASS` コントロール表の行として、そのパラメーターに従い保管されます。

デフォルトの照会クラス

すべてのシステムには、管理者で定義された照会クラスがなくても、デフォルトの照会クラスがあります。このデフォルトの照会クラスに対する最大照会コストは無制限です。

照会は、次の 2 つの条件のもとで、デフォルトの照会クラスで実行されます。

- 照会の見積りコストが、システムの最大照会コスト (`MAX_TOTAL_COST` パラメーター) 以下で、任意のユーザー定義の照会クラスに対する最大照会コストより大きい場合。このように、照会クラスが定義されているケースでは、デフォルトの照会クラスで一度に実行できるのは、シングル照会クラスだけです。
- 管理者で定義された照会クラスがない場合、すべての照会はデフォルトの照会クラスで実行されます。このように、照会クラスが定義されていないケースでは、無制限の照会クラスが、デフォルトの照会クラスで一度に実行できます。

注: このクラスで同時に実行している照会の数はシステムの照会合計数 (`MAX_TOTAL_QUERIES` パラメーター) での、システム間の制限によって間接的に制限されます。

関連概念:

- 129 ページの『照会クラス構成』
- 102 ページの『シナリオ: 照会クラスを使用してさまざまなサイズの照会を管理する』

関連タスク:

- 142 ページの『Query Patroller の照会クラスを作成する』
- 141 ページの『照会クラスの構成』

関連資料:

- 218 ページの『ADD QUERY_CLASS』

Query Patroller 履歴分析

データウェアハウスのさまざまな局面を長期に渡って分析するために、Query Patroller で提供される履歴分析機能を使用することができます。これによって、ビジネス・レポート、パフォーマンス・チューニング (Query Patroller システムしきい値の最適化から)、および重複データベース・オブジェクトの識別に関する情報を収集することができます。

特定の表、索引、および列が使用されているかどうか、および照会サブミッターにより使用されているかどうかを検索することができます。実行された照会の数や、照会実行時間のような情報から、リソース使用量が、月、週、日、時間、また分単位でどのように変化するかを確かめることができます。

Query Patroller の履歴分析機能を使用すると、データウェアハウスの使用に傾向を確認することができる可能性があります。

- 表、索引、および列のレポートは、どのデータベース・オブジェクトが使用されておらず、そのためストレージ・スペースを保護するために除去されるかを確認するために役立ちます。
- サブミッターによる照会レポートは照会の数とサイズを示しており、どのサブミッター・グループがシステム・リソースの中で最も重要な消費者であるかを識別するために役立ちます。
- データウェアハウスに対して長期に渡り実行された照会数のレポートは、ピーク・トラフィック時刻とオフピーク時刻を識別するために役立ち、オフピーク時刻中に保守タスクをスケジュールすることができるようになります。
- 長期に渡る照会の実行のレポートは、さまざまなシステム、ハードウェア、および構成変更がパフォーマンスにどのように影響を与えたのかを確認するために役立ちます。

デフォルトでは、Query Patroller で管理される正常に完了したすべての照会は履歴分析に組み込まれます。さらに、正常に完了した照会の中で、Query Patroller によって代行受信されたが管理されなかった照会を、自分の履歴分析に組み込みことができます。

履歴分析で使用できる最新の情報を持つためには、履歴データを生成する必要があります。履歴データを生成すると、Query Patroller が履歴分析用に保管した照会に対して、SQL Explain 機能を実行し、クエリー・パトローラー・センターの履歴分析のレポートとグラフで情報が使用できるようになります。

履歴照会の通常のページをスケジュールするか、照会を個々に除去するかによって適合するとおり、履歴分析から照会を除去することができます。

関連概念:

- 115 ページの『Query Patroller の照会代行受信および管理』
- 323 ページの『Query Patroller 履歴分析インターフェース入門』
- 177 ページの『履歴分析レポートの使用』

関連タスク:

- 183 ページの『Query Patroller を使用して履歴照会の詳細を表示する』
- 188 ページの『履歴照会を管理する』
- 180 ページの『Query Patroller を使用して履歴データを生成する』
- 179 ページの『Query Patroller を使用して履歴データを収集する』
- 138 ページの『履歴データのコレクションを使用可能にする』

Query Patroller の結果表および結果セット

Query Patroller が照会を実行するたびに、戻った行が結果セットを形成します。Query Patroller は結果セットを結果の宛先に設定します。この宛先は、照会がサブミットされたアプリケーションまたは結果表のいずれかです。

結果表は、結果セットを保管するために Query Patroller で作成される表です。次の場合に、結果表が作成されます。

- 照会がいずれかの理由で保留となり、解放されてから完了した

- サブミッターが、自分のサブミット設定に、結果表を作成することを指定した
- 照会がバックグラウンドで実行されている

Query Patroller がインストールされていると、結果表が保管されるスペースを指定する必要があります。表スペースの名前は Query Patroller システム・プロパティーに保管されます。指定された表スペースの名前は、後で変更したり除去したりすることができます。Query Patroller システム・プロパティーで指定された表スペース名を除去すると、Query Patroller はデフォルトの表スペースを使用します。

結果表のサイズは、結果表に戻される行の数を制限することにより、サブミッターのプロパティーで、サブミッターごとに制限を設けることができます。結果表はストレージ・スペースを消費するため、定期的に除去する必要があります。結果表は手動で除去するか、またはページ・ジョブをスケジュールすることもできます。

照会サブミッターは、次の特定の 방법으로、結果表のハンドルを行うためのサブミット設定を構成することができます。

- 他の Query Patroller ユーザーが結果表を表示することができるようにする
- Query Patroller から結果を戻さないようにするか、または照会の結果セットが許可されている最大セットより長い場合に、結果を切り捨てるかどうか指定することができる

注: 結果が戻らない場合、照会は失敗 (照会状況は打ち切り) したと見なされます。照会結果が切り捨てられた場合、照会は正常に完了 (照会状況は完了で、結果状況は切り捨て) したと見なされます。

関連タスク:

- 187 ページの『照会および結果表に対して Query Patroller 保守スケジュールを設定する』
- 191 ページの『Query Patroller を使用して手動で結果表をドロップする』

Query Patroller の照会代行受信および管理

照会がサブミットされてから、Query Patroller は各照会に持つ相互作用のレベルを判別するため、2つの段階の評価を実行します。

1. まず、照会が、Query Patroller をう回することのできる特定の基準を満たすかどうか判断するため、照会の評価を行います。代行受信されない照会は管理されません。また、履歴分析用データの集合としても使用されません。
2. 次に、Query Patroller は、それぞれの照会がどのようにハンドルされているかを判断するために代行受信された照会の評価を行います。Query Patroller の照会の評価に応じて、次のいずれかが発生します。
 - 照会は管理対象で、履歴データも収集されている。
 - 照会は管理対象ではないが、履歴データが収集されている。
 - 照会は管理対象でもなく、履歴データの収集もない。

注: Query Patroller が、これらの評価および以降の代行受信および管理を実行するには、`dyn_query_mgmt` データベース構成パラメーターを ENABLE に設定する必要があります。

照会代行受信

Query Patroller は、次の基準に照会が一致した場合に照会を代行受信します。

- 照会は、Query Patroller システム・プロパティーで代行受信したい指定を行った照会のアプリケーションからのものである。
- 照会は、プロファイルが Query Patroller はサブミッターから照会を代行受信することを示すサブミッターからのものである。

Query Patroller が照会を代行受信すると、照会を管理する必要があるかどうか調べるために、照会を評価します。管理する必要がある照会に対する基準に代行受信された照会が一致しなくても、代行受信された照会での履歴分析のデータを収集するように Query Patroller が構成されます。

照会管理

Query Patroller は、照会のサブミッター用に設定されたプロパティーと、Query Patroller のシステム設定に基づき、代行受信された照会を管理します。Query Patroller は、照会の見積りコストも使用します。これは DB2® 照会オプティマイザーによってアクセスされます。Query Patroller が照会上で実行する管理機能には、照会の優先順位付け (該当する場合)、照会の照会クラスへの割り当て (該当する場合)、および照会の実行、待機、保留、リジェクトのいずれかを行うことが含まれます。照会のコストが、照会を管理する最小コスト (MIN_COST_TO_MANAGE) に対するサブミッターのプロファイルで指定された値より小さい場合、Query Patroller はその照会を管理しません。表 3 は、Query Patroller の管理対象および非管理対象照会の扱い方での違いを示します。

表 3. 管理対象照会および非管理対象照会の Query Patroller 処理

Query Patroller アクション	管理対象照会	非管理対象照会
クエリー・パトローラー・センターの管理対象フォルダーに照会を保管する	はい	なし
クエリー・パトローラー・センターの履歴分析フォルダーに照会を保管する	はい	オプション
照会の優先順位付け	はい	いいえ
適切な照会クラスに照会を割り当てる	はい	いいえ
さまざまなしきい値に基づいた、照会の実行、待機、またはリジェクト	はい	いいえ
サブミッターのアプリケーションに結果セットを戻すか、または結果表を作成する	はい	なし
結果表が作成された場合に E メール通知をサブミッターに送信する	オプション	なし

代行受信されていない照会

Query Patroller は、特定のアプリケーションから、または特定のサブミッターからの照会を代行受信しないように構成することができます。代行受信されない照会は、Query Patroller で管理されず、そのためこの照会で履歴分析データを収集することはできません。

関連概念:

- 112 ページの『Query Patroller 照会クラス』
- 113 ページの『Query Patroller 履歴分析』
- 110 ページの『Query Patroller のしきい値』
- 105 ページの『Query Patroller による照会処理』

第 13 章 照会管理ストラテジーの定義

Query Patroller QMF を使用し始める前に、ワークロードの特性、ユーザー要件、および使用可能なシステム・リソースの量に基づいてストラテジーを定義する必要があります。

この章では、照会管理ストラテジーを定義するにあたって決めなければならないさまざまな事項の概要を示すとともに、計画の中で設定できるさまざまな業務上の目標を説明します。

照会管理ポリシーの定義

Query Patroller を使用すると、照会がサブミットされた後にどのように処理されるかを厳密に指定して、照会の処理ポリシーをインプリメントすることができます。そのようなポリシーの一部として、どの照会を代行受信または管理し、どの照会を傍受せずに実行させるかを、厳密に定義しなければなりません。また、ユーザーまたはシステム・リソースしきい値に基づき、どのような状況で照会を保留にしたり、キューに入れたりするかを指定することもできます。

照会処理ポリシーのセットアップには、以下のようないくつかの決定事項が含まれます。

1. Query Patroller によって代行受信および管理される照会のタイプの決定
2. 全体的なデータベース・ワークロードを制限するかどうかの決定
3. どのような照会をいつ保留にするかの決定
4. 保留にされた照会を処理するポリシーの考案
5. さまざまなサイズの照会を管理するために照会クラスを使用するかどうかの決定

Query Patroller によって代行受信および管理される照会のタイプを決定する:

Query Patroller がコスト見積りを実行する照会を代行受信すると、必ずシステム・リソースが使用されます。また、照会の応答時間にも影響があります。同様に、Query Patroller が照会を代行受信したとき、その照会を管理する (照会クラスに割り当てる、キューに入れる、サブミッター優先順位をチェックするなど) にはシステム・リソースが必要で、照会の応答時間に影響があります。照会や照会グループを代行受信して管理する利点を、そのオーバーヘッドがシステム・リソースのパフォーマンスと可用性に与える影響と比較する必要があります。

これらのことを考慮すると、以下のような特定の種類の照会を Query Patroller に代行受信させないほうがよいと判断される場合があるかもしれません。

- OLTP (オンライン・トランザクション処理) アプリケーションによってサブミットされる照会など、瞬時に近い応答が必要な照会
- Query Patroller で代行受信およびトラッキングすることの利点よりも、迅速な応答の要件の方が重要なユーザーがサブミットする照会

Query Patroller を複数のステージに分けてロールアウトし、サブミッターやアプリケーションのサブセットからの照会だけを代行受信することから始めることができます。そのようにすれば、すべてのユーザーに影響を与えることなく初期構成をテストできます。

また、システム・パフォーマンスに大きな影響を与えるほど大規模でない照会を Query Patroller で管理しないようにすることもできます。Query Patroller が照会を管理する最小の照会コストしきい値を設定すれば、Query Patroller によって代行受信されたものの、相対的に小さいと見積られた照会は、即時処理するよう指定できます。このしきい値は、個々のサブミッターまたはサブミッター・グループごとに、サブミッター・プロファイルで設定されます。Query Patroller はこの設定のデフォルト値を備えていますが、さまざまなサブミッターごとにこの値をカスタマイズする場合は、システムでの管理に適した最小の照会コストを判別する必要があります。

管理対象照会の全体的なワークロードを制限するかどうかを決定する:

並行して実行される管理対象照会の合計数に加え、並行して実行されるすべての管理対象照会の合計集約コストについて制限を設定するオプションがあります。デフォルトでは、これらの Query Patroller 設定は無制限に設定されています。管理対象照会の全体的なワークロードを制御する場合は、システムに適したワークロードを判別する必要があります。

どのような照会をいつ保留にするかを決定する:

個々のサブミッターやサブミッター・グループからサブミットされる照会のサイズについて、コスト制限を指定できます。この制限を超える照会は Query Patroller によって保留にされます。

Query Patroller は、照会に対するこれらのコスト制限の出発点として使用できるデフォルトを備えているものの、これらの設定をカスタマイズする場合は、システム内のさまざまなサブミッターについて設定するのに適した照会コスト制限を判別する必要があります。

保留にされた照会を処理するポリシーを考案する:

照会が保留にされたときに処理される方法を決定する必要があります。たとえば、保留にされた照会を管理者や演算子が個別に選別して、サイズにかかわらずその照会を実行するのが妥当であるかを調べるかどうか、あるいはサイズしきい値を超えた場合に自動的にキャンセルするかどうかを決定する必要があります。また、保留にされた照会をスケジュールに基づいて実行するオプションもあります。

保留にされた照会をスケジュールに基づいて実行する場合、データベースの使用ピークの期間や保守アクティビティなどの要因を考慮に入れて、そのスケジュールを決定する必要があります。

さまざまなサイズの照会を管理するために照会クラスを使用するかどうかを決定する:

照会クラスは、データベースに対する照会の流れを制御するのに役立ちます。システムで並行して実行される大規模な照会の数を制限しなければならない場合や、小

規模な照会がキューで大規模な照会の後ろに入れられることにならないようにする場合は、さまざまなサイズの照会を実行する照会クラスを作成できます。

関連概念:

- 121 ページの『Query Patroller の構成ロードマップ』
- 129 ページの『照会クラス構成』
- 125 ページの『サブミッター・プロファイルの構成』

関連タスク:

- 141 ページの『照会クラスの構成』
- 155 ページの『サブミッター・プロファイルの構成』

Query Patroller の構成ロードマップ

Query Patroller は、たとえばランナウェイ照会がシステムを独占するのを防ぐといった、特定のビジネス目標に対処するのに役立ちます。表 4 は、様々な業務目的に適用される特定の構成設定を示しています。

表 4. 構成情報のロードマップ

目的	設定するパラメーター	参照トピック
特定のサブミッターからの照会が急騰しないようにする、または照会のサイズを制限する	サブミッター・プロファイルの中の照会の最大許容コスト (MAX_COST_ALLOWED)	サブミッター・プロファイルの構成
特定のサブミッターやグループからの照会の数を制限する	サブミッター・プロファイルの中の照会の最大許容数 (MAX_QUERIES_ALLOWED)	サブミッター・プロファイルの構成
システムにおける最適な並行照会数を設定する	システム設定値の中の、システムにおける最大合計照会数 (MAX_TOTAL_QUERIES)	Query Patroller のしきい値
すべての照会または代行受信した照会で使用されるシステム・リソースの量を制限する	システム設定値の中の、最大システム・ワークロード・コスト (MAX_TOTAL_COST)	Query Patroller のしきい値
何人かのサブミッターまたはグループが、Query Patroller を介さずに照会を行えるようにする	サブミッター・プロファイルの中の、代行受信を行わないオプションを選択する (INTERCEPT を「N」に設定する)	サブミッター・プロファイルの構成
何らかのアプリケーションが、Query Patroller による代行受信なしで照会を行えるようにする	システム設定値の中で、代行受信しないアプリケーションを指定する (INTERCEPT_APPLICATION および EXCLUDE_APPLICATIONS)	Query Patroller システムの照会しきい値を設定する
Query Patroller が照会を代行受信する特定のアプリケーションを指定する	システム設定値の中で、代行受信するアプリケーションを指定する (INTERCEPT_APPLICATION および INCLUDE_APPLICATIONS)	Query Patroller システムの照会しきい値を設定する

表 4. 構成情報のロードマップ (続き)

目的	設定するパラメーター	参照トピック
小規模な照会を、Query Patroller の管理なしで実行する	サブミッター・プロファイル内の、管理を行う最小コスト (MIN_COST_TO_MANAGE)	サブミッター・プロファイルの構成
照会がキューにあるときに、特定ユーザーの照会に優先順位を付ける	プロファイル・プロファイルの中の、キュー優先順位 (PRIORITY)	サブミッター・プロファイルの構成
小規模な照会が、大規模な照会の後にキューに入れられないようにする	サイズによりグループ分けした照会に基づいてキュー・クラスをセットアップする	照会クラス構成
並行大規模照会の数を制限する	大規模な照会のための照会クラスをセットアップする	照会クラス構成
結果表および履歴照会情報によって使用されるディスク・スペースを管理する	結果表、管理対象照会情報、および履歴照会情報を除去するパーティション・ジョブをセットアップする	照会および結果表に対して Query Patroller 保守スケジュールを設定する

関連概念:

- 110 ページの『Query Patroller のしきい値』
- 115 ページの『Query Patroller の照会代行受信および管理』
- 129 ページの『照会クラス構成』
- 125 ページの『サブミッター・プロファイルの構成』
- 119 ページの『照会管理ポリシーの定義』

関連タスク:

- 135 ページの『Query Patroller システムの照会しきい値を設定する』
- 187 ページの『照会および結果表に対して Query Patroller 保守スケジュールを設定する』

第 14 章 Query Patroller を構成して照会管理ストラテジーをインプリメントする方法

Query Patroller による照会管理のストラテジーを定義したら、次は、目標を達成するために構成しなければならない特定のパラメーターと、デフォルトのままでも構わないパラメーターとを判別する必要があります。

試用期間中にデフォルト値を使用して Query Patroller を実行し、履歴分析機能を使用して、データベース・アクティビティーに関する情報を収集および分析することもできます。このデータを収集すると、デフォルト設定の調整が必要かどうか、追加サブミッター・プロファイルの構成または作成が必要かどうか、あるいは照会クラスの作成が必要かどうかについての理解が深まります。

この章では、Query Patroller システム・レベル・パラメーター、サブミッター・プロファイル、および照会クラスの構成を計画する際のステップについて説明します。環境に適した構成設定を決定したら、135 ページの『第 15 章 Query Patroller システム設定の管理』、151 ページの『第 18 章 サブミッターの管理』、および 141 ページの『第 16 章 照会クラスの管理』で概説されているステップを使用して、それらの設定を構成できます。

Query Patroller のシステム構成

Query Patroller では、システム内で並行して実行する照会の数に制限を設定するか、または並行して実行するすべての照会の合計コストに制限を設定するか、あるいはその両方を設定することによって、データベースに対して並行して実行される照会ワークロードのサイズを制御することができます。

デフォルトでは、これらの設定は両方とも無制限となっています。サブミッター・レベルのリソース制限および照会クラス内のリソース制限が、同時に実行できる照会ワークロードのサイズを有効に抑制するので、たいいていの場合にはこれらのデフォルトで十分です。照会クラスおよびサブミッター・レベルのリソース制限を使用して、データベース・アクティビティーを抑制することを強くお勧めします。ただし、これらのシステム・レベルの設定のいずれかまたは両方を構成したい場合、以下のヒューリスティックを使用して、システムに最適な設定を決定することができます。

合計照会 (MAX_TOTAL_QUERIES) の設定:

管理対象照会の合計数に対する制限を効果的に設定できるかどうかは、ご使用のデータベースのワークロードの性質に依存しています。特に、ワークロードにおける照会のサイズのばらつきの程度によって、このしきい値を設定することに利点があるかどうかが決まります。

ワークロードが同質で、見積りコストの点で似ている照会が含まれている場合、このしきい値の適切な設定は、さまざまな数の照会によってテスト・ワークロードを

実行し、さまざまなサイズのワークロードにどれほど適正に回答するかシステム・パフォーマンスをモニターすることによって決定できます。

ワークロードは同質でないが、構成の点では整合性がある場合、つまりたとえば 75 % は小さく 25 % は大きい照会である場合、この構成を模したテスト・ワークロードのセットを実行することによって、このしきい値の適切な設定を決定できます。テスト・ワークロードの照会の数を徐々に増やしながら、システムのパフォーマンスをモニターします。これによってシステムで並行して実行できる照会の最適数を明らかにします。

注:

1. システムで照会クラスを定義する前に、これらのテスト・ワークロードを実行することを強くお勧めします。
2. Query Patroller によって代行受信または管理されない照会は、MAX_TOTAL_QUERIES しきい値の対象とは見なされません。これはつまり、代行受信または管理されずに実行される照会がかなりの数であると予想されるときに、システムで並行して実行できる照会の数を判別する場合は、これらの照会を考慮する必要があるということです。たとえば、システムで並行して 1000 の照会をスムーズに実行できると判断し、一般に代行受信または管理されない 200 の照会を実行する場合は、照会の最大合計数は 800 に設定します。

データベース・ワークロードが、それに含まれる照会のサイズの点で一貫していないと、並行照会 (MAX_TOTAL_QUERIES) しきい値の最大数の適切な設定を決めることはかなり難しい場合があります。これは、システム・パフォーマンスはワークロード内の照会のサイズと数の両方に基づいて変わるからです。

並行照会 (MAX_TOTAL_QUERIES) しきい値の最大数を設定した後も、正しい設定であることを確認するために引き続きパフォーマンスをモニターします。データベースのかなりの再構築を実行したり、通常のデータベース・ワークロードに変更があった場合は、その後この設定の再評価が必要になることがあります。

合計ワークロード・コスト (MAX_TOTAL_COST) の設定:

Query Patroller は、現在システムで実行されているすべての管理対象紹介の見積りコストを合算して、現在のデータベース・ワークロードの合計コストを計算します。各照会の見積りコストは、照会の実行全体に基づいて計算されます。これは数分または数時間にわたることもあります。

システムのすべての照会の合計コストに実用的な限度を設定する (MAX_TOTAL_COST) ことは難しい場合がよくあります。その理由として、100,000 timeron のコストがかかる 10 個の照会は、1,000,000 timeron のコストがかかる単一の照会と合計コストは同じであり、10 個の照会を 1 時間以内に同時に実行することが、単一の照会を何時間も実行することよりシステム・リソースにとって負担となる可能性があるとしても、合計コストは同じだからです。

システムが特定の単一ポイント・イン・タイムでいくつの timeron を処理できるかを効果的に確認するには、システムが特定の期間内または特定のタイム・スライス内にいくつの作業の timeron を処理できるかを数える必要があります。以下のステップでは、これを実行する方法を説明しています。

1. ワークロードの代表的な照会または照会セットを選択します。これらの照会はよく分かっているもので、通常の実行に要する時間を十分理解しているものである必要があります。
2. 照会 (単数または複数) のテスト実行を何度か行います。
3. 履歴分析の「照会 (Queries)」レポートを使用して、照会の実行時間と、timeron における照会の見積りコストを確認します。
4. さらに正確なコストの測定をするには、照会実行時間をタイム・スライスに分割します。たとえば、50 分の照会を 10 に分けて、5 分間のタイム・スライスにします。照会の実行中はコストが比較的一定であると想定すると、各タイム・スライスの実行のコストは、照会の合計コストの 10 分の 1 であるの見積ることができます。たとえば、50 分を要する 100,000 timeron のコストがかかる照会は、それぞれ 10,000 timeron のコストがかかる 10 のタイム・スライスに分割することができます。
5. パフォーマンスが低下し始める前に、これらの代表的な照会をいくつ同時に実行できるかを判別します。たとえば、パフォーマンス低下の前にそのような照会を同時に 20 まで実行できれば、システムは並行して 20,000,000 timeron を実行可能と判別することができます。

注: Query Patroller によって代行受信または管理されない照会は、MAX_TOTAL_COST パラメーターの対象とは見なされません。これはつまり、代行受信または管理されずに実行される照会がかなりの数であると予期されるときに、ワークロードの最大コストを判別する場合は、これらの照会を考慮する必要があるということです。

6. クエリー・パトローラー・センターのインターフェースまたはコマンド行のいずれかから、並行照会の最大数 (MAX_TOTAL_COST) しきい値を設定します。
7. 正しい設定であることを確認するために引き続きパフォーマンスをモニターします。データベースのかなりの再構築を実行したり、通常データベース・ワークロードに変更があった場合は、その後この設定の再評価が必要になることがあります。

サブミッター・プロファイルの構成

サブミッター・プロファイルには、サブミッター照会の代行受信、サブミッター・リソースの制限、およびサブミッターのキュー優先順位に関する設定が含まれています。サブミッター・プロファイルを作成する前に、ユーザーと組織の必要に最もかなうようにこれらの設定を構成する方法を計画する必要があります。

ステップ 1: システムで区別できるサブミッターのタイプを判別する

ユーザーとグループ用のサブミッター・プロファイルを計画する前に、Query Patroller が使用できるユーザー情報のタイプに基づいて行えるサブミッターの区別を判別する必要があります。サブミッターとなれるのは、ユーザー、ユーザー・グループ、アプリケーション、またはユーザーに代わって照会をサブミットするサーバーです。

ユーザーがデータベースに直接接続して Query Patroller に照会を直接サブミットする 2 層セットアップでは、照会をサブミットするすべてのユーザーを区別できません。

ユーザーがサード・パーティーのサブミット・アプリケーションを介して照会をサブミットする 3 層セットアップでは、そのツールが適切なユーザー情報を Query Patroller に渡す場合にのみ、サブミッターを区別できます。たとえば、サブミット・アプリケーションが照会をサブミットするユーザーの DB2® ID を使用してデータベースに接続する場合、Query Patroller はユーザーのサブミッター・プロファイルを使用して照会の処理方法を判別できます。サブミット・アプリケーションが照会をサブミットするユーザー ID とは異なる ID を使用してデータベースに接続する場合、Query Patroller は接続 ID のプロファイルを使用して照会の処理方法を判別します。そのような場合、サブミット・アプリケーションを介してサブミットされたすべての照会は、単一のサブミッターから発信されたものとして識別されません。

さまざまなユーザー・グループがさまざまなアプリケーションを使用して照会をサブミットする状況では、それらのグループに基づいてリソース割り振り、優先順位、または他のユーザー特性を区別できます。

ステップ 2: それぞれのサブミッターやサブミッター・グループを特徴付けるリソース要件の特性を判別する

データベースに対して照会を実行するさまざまな部門やグループに関連したウェアハウス使用パターンのことをすでによく知っているかもしれませんが、各グループが一般にサブミットする照会の種類を知らない場合は、履歴分析機能を使用してデータベース・アクティビティの代表サンプルを得るための履歴データを収集し、サブミッター・アクティビティ・データを分析できます。

「サブミッター」レポートを使用すれば、以下のサブミッター・アクティビティ情報を表示できます。

- さまざまなサブミッターによってサブミットされた照会のサイズ
- 特定の時間フレーム内でサブミッターやサブミッター・グループによってサブミットされた照会の数
- 異常に大規模な照会を生成したサブミッター

ステップ 3: Query Patroller によって代行受信される個々またはグループのサブミッターを決定する

システム内のさまざまなサブミッターの照会要件に関する情報から、照会が一貫して非常に小さいため代行受信する価値がないサブミッターが組織内にあるかどうか分かります。そのようなサブミッターを識別できる場合、それらのサブミッターからの照会が代行受信されないようにそのサブミッター・プロファイルを設定できます。

また、応答時間要件が非常に大きく、照会の代行受信時に発生するほんの少しのパフォーマンス・コストも許容できないユーザーが組織にいる場合もあります。それらのユーザーも、照会が代行受信されないサブミッター・プロファイルに関連付ける必要があります。

Query Patroller をパイロットまたはテスト・プロジェクトとして配置している場合、プロジェクトに参加しているサブミッターだけを代行受信できます。これを行う最も単純な方法は、テスト・サブミッター・プロファイルを代行受信されるように設定し、PUBLIC サブミッター・プロファイルを Query Patroller によって代行受信されないように設定することです。

注: 実稼働環境では、データベースに対して随時照会をサブミットする能力のあるサブミッターからの照会を代行受信することをお勧めします。

Query Patroller によって代行受信されないように設定されている (INTERCEPT='N') サブミッター・プロファイルの下でサブミットされた照会は履歴分析の目的で追跡できないことに注意してください。つまり、あるサブミッター・プロファイルが Query Patroller によって代行受信されないように設定された場合、そのプロファイルの下でサブミットされた照会アクティビティは生成されるリソース使用レポートに表示されません。

ステップ 4: 照会が代行受信されるサブミッターについて設定するしきい値を決定する

サブミッター・プロファイル内ではいくつかの異なるリソースしきい値を設定できます。これらのしきい値の一部またはすべてをデフォルト値のままにしておくことができますが、サブミッター・リソース割り振りを区別する必要があるほとんどの場合では、これらのしきい値の 1 つ以上を使用してリソースの使用を個々またはグループのレベルで制御できます。

注: グループ・プロファイルのリソースしきい値を設定する際には、設定する限界値は、照会をサブミットするたびに、そのグループ内のそれぞれに適用されることに注意してください。それは、グループ全体のサブミットに関するリソースの限界値ではありません。

以下の表では、しきい値とともに、そのデフォルト値と可能な使用法が示されています。各サブミッター・プロファイル・パラメーターの詳細については、ADD_SUBMITTER_PROFILE コマンドの説明を参照してください。

表 5. サブミッターしきい値のデフォルトと使用法

しきい値	パラメーター	デフォルト値	使用法
最大照会コスト	MAX_COST_ALLOWED	10,000,000 timeron	個々の照会のサイズを制御します。問題のあるサブミッターに制約を加えたりランナウェイ照会を防止したりするのに使用します。
照会の最大数	MAX_QUERIES_ALLOWED	100 個の照会	並行照会の最大数を制御します。サブミッターが多くの照会を同時にサブミットすることによってシステム・リソースを独占することを防止するために使用します。
結果行の最大数	MAX_RESULT_ROWS	1,000,000 行	単一の照会で結果表に保管できる結果行の数を制御します。大規模な照会結果が使用するディスク・スペースを制限するために使用します。
管理する最小コスト	MIN_COST_TO_MANAGE	15,000 timeron	特定の照会がサイズに基づいて管理されるかどうかを判別します。管理を行うと実行時間と比較して著しい影響がパフォーマンスに及ぶ、小規模な照会を除外するために使用します。

システム内のさまざまなサブミッターによる照会アクティビティーに関する情報から、それぞれのサブミッターやサブミッター・グループによってサブミットされる通常の照会のサイズが分かります。これにより、各サブミッター・グループに割り当てることのできる最大照会コスト (MAX_COST_ALLOWED) に適した値 (timeron 単位) が分かります。一部のサブミッターでは、この値をデフォルトのままにしておくことができます。しかし、過度に大規模な照会を時々サブミットするサブミッターについては、受け入れられると思われるサイズの照会に基づいて最大照会コストの値をサブミッター・プロファイルで設定し、この値を超える照会を Query Patroller が保留にするようにできます。過度に大規模な照会が正当化される場合、サブミッターは Query Patroller 管理者にサイズに関係なくその照会を手動で実行するように通知するか、リソースの使用が低いときに他の保留にされた照会とともにその照会を実行できることを通知する必要があります。

同様に、特定の個々またはグループのサブミッターが同時に多くの照会をサブミットしている問題を観察または認識している場合は、そのサブミッター・プロファイルで照会の最大数 (MAX_QUERIES_ALLOWED) をサブミッターのリソース要件に対して妥当と思われる値に設定できます。

注: 環境でさまざまなサブミッターが区別されない場合は、代行受信されるすべての照会が単一のサブミッターに属するものとして識別されるため、許可される最大照会数 (MAX_QUERIES_ALLOWED) のしきい値を無制限 (-1) に設定する必要があります。

ディスク・スペース制限が問題である場合は、照会の結果表に保管される結果行数に関する制限 (MAX_RESULT_ROWS) を設定できます。また、サブミッター・アクティビティー・レポートから、さまざまなサブミッターにおける結果セットの通常のサイズが分かります。これから、さまざまなプロファイルでこのサブミッターしきい値に適した値が分かります。

管理する最小コスト (MIN_COST_TO_MANAGE) のしきい値を設定すると、小規模な照会が Query Patroller 管理をう回するようにできます。Query Patroller によって管理されているワークロードの量が十分でないように感じる場合は、この値を小さくする必要があります。Query Patroller によって管理されている照会の数が多すぎると感じる場合は、この値を大きくする必要があります。

依然として、これらの照会が履歴分析の目的で追跡されることを指定できますが、このトラッキングでは照会ごとに表の更新が行われるため、小規模なパフォーマンス・コストが発生することに注意してください。

ステップ 5: 各サブミッター・プロファイルのキュー優先順位レベルを判別する

サブミッター・プロファイルのキュー優先順位レベルは、キューに入れられた照会が実行される順序を判別します。サブミッターのキュー優先順位レベルが高いほど、その照会はキューから早く選択されて実行されます。照会を Query Patroller によって管理する必要があるものの、他のサブミッターの照会よりも緊急性が高いサブミッターがある場合は、サブミッターやサブミッター・グループのキュー優先順位レベルを調整できます。

管理対象照会だけがキューに入れられるので、キュー優先順位は代行受信されて管理される照会にのみ影響を与えます。

関連概念:

- 110 ページの『Query Patroller のしきい値』
- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』
- 99 ページの『シナリオ: サブミッター・プロファイルを構成することによって照会サブミッターの要件を管理する』
- 101 ページの『シナリオ: 大規模な緊急照会の実行』
- 102 ページの『シナリオ: 照会クラスを使用してさまざまなサイズの照会を管理する』
- 109 ページの『Query Patroller でのコストの見積り』
- 119 ページの『照会管理ポリシーの定義』

関連タスク:

- 156 ページの『ユーザーおよびグループ用のサブミッター・プロファイルを作成する』

関連資料:

- 276 ページの『UPDATE SUBMITTER_PROFILE』

照会クラス構成

照会クラスを使用すると、システムで並行して実行できる特定サイズの照会の数を制御できます。システム用の照会クラスを作成する前に、作成する照会クラスの数と各照会クラスの構成方法を決定する必要があります。

ステップ 1: ワークロードを特徴付ける

作成する照会クラスのタイプと数を判別する前に、まずシステムで一般的なワークロードの特性を理解する必要があります。特に、データウェアハウスに対して実行されるさまざまな照会のサイズの範囲と、各サイズ・グループの分布または頻度を理解する必要があります。

この情報がまだない場合は、データベース・アクティビティの代表サンプルを得るための履歴データを収集し、Query Patroller 履歴分析レポートを使用して現在のワークロードに存在するサイズ・グループを判別する必要があります。

ワークロード・データを収集したら、クエリー・パトローラー・センターの「履歴分析」フォルダーにある「一定時間の照会アクティビティ」レポートを調べます。列ヘッダーをクリックし、「見積りコスト」列でデータをソートします。

このレポートから、照会クラスを作成する際のガイドとして使用できる自然なサイズ・グループが分かります。

たとえば、130 ページの表 6 は、特定のデータウェアハウスの 2 週間での照会アクティビティに関してまとめられた統計を示しています。

表 6. サンプル・ワークロードでの照会の分布

照会サイズ (timeron 単位)	照会の数	ワークロード内の合計照会数に 対するパーセント
<8099	1588	88
10190 から 96444	206	11
>1030000	17	1

このワークロード内の照会は、3つのサイズ範囲に自然に分かれます。最も小規模な(最も頻度が高い)タイプの照会の見積りサイズは 8099 timeron より低くなります。このワークロード内の照会の次のサイズ範囲は 10190 から 96444 timeron です。最も大規模で最も頻度が低い照会は 1030000 より大きくなります。

これらのグループ分けに基づき、照会クラスを計画できます。識別した主なサイズ・グループのそれぞれについて、1つの照会クラスを計画できます。

注: 照会クラスを多く作成しすぎるとパフォーマンスが低下するので、構成を変更した後はシステム・パフォーマンスをモニターする必要があります。

ステップ 2: 各照会クラスの最大照会コストを決定する

各照会クラス内の照会の最大コストは、その照会クラスが実行することになる照会のサイズ範囲の上限に対応する必要があります。

表 6 のデータに基づき、識別された 3つのサイズ・グループに対応する 3つの照会クラスを作成できます。これらの照会クラスは表 7 に示されています。

表 7. 照会クラスの論理サイズ・グループ

照会クラス	照会の最大サイズ (timeron 単位)
1	10000
2	100000
3	10000000

照会サイズの範囲全体に渡って照会が均一に分散していることがデータから示されている場合は、小規模、中規模、および大規模の照会に対応する照会クラスの任意の区別を行う必要があります。

注: システム内の各照会クラスには、照会の最大コストに関する特殊な値が必要です。

ステップ 3: 各照会クラスでの照会の最大数を決定する

照会クラスがシステム・リソースの使用をより効果的に割り振ることができるようにするため、各照会クラスで並行して実行できる照会の数を制限できます。照会クラスでの照会の最大数を設定するためのかぎは、ワークロード内での特定サイズの照会の分布に対して照会の実行時間を比較することです。

各照会クラスでの照会の最大数を決定するときは、短時間駐車(たとえば 15 分)と長時間駐車(たとえば最大 10 時間)の両方が可能な照会の駐車場としてシステムを考えると役立ちます。短時間駐車のカスタマーが駐車場の全カスタマーの 50% を表しているとしても、短時間駐車のカスタマーは駐車場を短い時間しか使用しないので、駐車スペースの 50% を短時間駐車に割り振りたいとは思わないでしょう。

これは、特定の時刻に未使用の短時間駐車場が多く存在する可能性があることを意味します。同時に、長時間駐車のカスタマーは、長時間駐車場が空くのを待つこととなります。

たとえば、130 ページの表 6 と 130 ページの表 7 で示されているシステムでの照会の最大数 (MAX_TOTAL_QUERIES) が 100 に設定されているとします。照会クラス 1 で実行される照会はワークロード全体の 88% を表します。しかし、これらの照会は実行にほんの少しの時間しかかかりません。この照会クラスでの照会の最大数 (MAX_QUERIES) は、60 に設定できます。この数は、小規模な照会が実行を待たずにすむほど十分に大きくなっていますが、他の照会クラス内の大規模な照会がキューに入れられる間にこの照会クラスで空の場所が発生しないほど十分に小さくなっています。このとき、照会クラス 2 および 3 での照会の最大数は、それぞれ 30 および 10 個の照会に設定できます。

照会クラスでの照会の最大数を設定する別の戦略は、大規模な照会にのみ制限を設定し、小規模な照会の数を無制限にしておくことです。大規模な照会用の照会クラスで照会クラスの最大数を設定することにより、システムで実行される大規模な照会の数を制限できます。小規模な照会クラスで照会の最大数を無制限に設定することにより、実行するためのリソースが使用可能であっても小規模な照会がキューに入れられないことを保証できます。

ステップ 4: 照会クラスの定義を評価する

照会クラス設定の効果性は、クエリー・パトローラー・センターの「管理対象照会」フォルダーを使用して評価できます。このフォルダーでは、各照会クラスで現在実行されている照会の数と、各照会クラスでキューに入れられている照会の数が分かります。ワークロードの実行時に定期的にこのビューをチェックすれば、一部のクラスで照会の過度のキューイングが発生しているかどうかを調べ、それに応じて照会クラスでの照会の最大数を調整できます。

また、「履歴分析」フォルダーの「照会アクティビティー (Query Activity)」グラフおよびレポートを使用すれば、照会が実行時にキューで時間を過ごしたかどうかを調べることができます。

関連概念:

- 112 ページの『Query Patroller 照会クラス』
- 102 ページの『シナリオ: 照会クラスを使用してさまざまなサイズの照会を管理する』
- 109 ページの『Query Patroller でのコストの見積り』
- 119 ページの『照会管理ポリシーの定義』

関連タスク:

- 142 ページの『Query Patroller の照会クラスを作成する』

第 4 部 Query Patroller システムのセットアップ

第 15 章 Query Patroller システム設定の管理

この章では、システム・レベルの設定を構成する方法に関する情報を扱います。これらのタスクのほとんどは、クエリー・パトローラー・センターのグラフィカル・ユーザー・インターフェースでも実行できますし、**UPDATE QP_SYSTEM** コマンドを使用してコマンド行からでも実行できます。

Query Patroller システムの照会しきい値を設定する

照会コストおよび数に対して、システムしきい値を設定すると、データベースに対して実行する全体のワークロードをコントロールできます。デフォルトでは、これらの照会しきい値には制限がありません。始めから、制限付きのしきい値を設けた場合や、ガイドとなる履歴データを収集するまで待機する場合があります。

最初に、代行受信するアプリケーションを指定し、次に管理対象照会に対する広域制限 (システム間にまたがる制限) を設定します。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が存在する

手順:

Query Patroller システムの照会しきい値を設定するには、次の方式のいずれかを使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「Query Patroller システム・プロパティ」ノートブックをオープンする。
2. 「しきい値」タブをクリックする。
3. 代行受信するアプリケーションを指定するには、次のオプションのいずれかを選択してください。
 - **すべてのアプリケーション**
 - **アプリケーションなし、またはリストされているアプリケーションのみ。**
Query Patroller によって代行受信されるアプリケーションの実行可能ファイル名を入力します。複数のアプリケーションを指定する場合は、コンマで区切ってください。
 - **リストされたアプリケーションを除くすべてのアプリケーション。** Query Patroller によって代行受信されないアプリケーションの実行可能ファイル名を入力します。複数のアプリケーションを指定する場合は、コンマで区切ってください。

注: アプリケーション名は、大文字小文字が区別されます。

4. 「照会の最大数」フィールドで、システムで同時に実行できる照会数を入力する。入力値は、次の要因に応じて変わります。

- データベースのパフォーマンス
- 照会をサブミットするユーザー数
- 指定時刻にサブミットされる照会の平均コスト

値を無制限に設定するには、このフィールドをブランクにしておいてください。

5. 「**最大ワークロード・コスト**」フィールドで、`timeron` 単位の最大ワークロード・コストのしきい値を表す数を入力する。値を無制限に設定するには、このフィールドをブランクにしておいてください。
6. 「**OK**」をクリックして、入力を受け入れる。

コマンド行方式:

次のパラメーターを指定して **UPDATE QP_SYSTEM** コマンドを発行してください。

- INTERCEPT_APPLICATION
- INCLUDE_APPLICATIONS
- EXCLUDE_APPLICATIONS
- MAX_TOTAL_QUERIES
- MAX_TOTAL_COST

関連概念:

- 110 ページの『Query Patroller のしきい値』

関連資料:

- 279 ページの『UPDATE QP_SYSTEM』

Query Patroller のデータベース・リストを更新する

クエリー・パトローラー・センターで処理するために選択するデータベースのリストを更新することができます。

手順:

データベースのリストを更新するには、次の方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「データベース・リストの更新」ウィンドウをオープンする。
2. 矢印ボタンを使用して、「**選択可能なデータベース**」リストから「**選択済みデータベース**」リストへ追加するデータベースを移動します。
3. 「**OK**」をすると、クエリー・パトローラー・センターで処理できるデータベースのリストを更新することができます。

Query Patroller サブミッターの E メール通知を使用可能にする

照会が完了し、結果表が作成される時をサブミッターに通知してもらいたい場合、あるいは結果を結果表に送るはずであった照会処理の間にエラーが発生した場合に、E メール通知を使用可能にします。

注: 次の場合に、サブミッター用に結果表が作成されます。

- 照会サブミッターのサブミット設定が、照会のサブミット後にアプリケーションを解放するように指定した場合
- 照会が保留となってから実行された場合
- 照会がバックグラウンドで実行された場合

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が存在する

SMTP メール・サーバーへのアクセスも必要です。

手順:

E メール通知を使用可能にするには、以下の方式のうちのいずれかを実行してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「Query Patroller システム・プロパティ」ノートブックをオープンする。
2. 「E メール」タブをクリックする。
3. 「E メール通知を使用可能にする」チェック・ボックスを選択する。
4. 「E メール・サーバー」フィールドに、使用するホスト名または IP アドレスと SMTP E メール・サーバーを入力する。
5. 照会サブミット設定に指定された E メール・アドレスがないサブミッターに対して「E メールを送信しない」、または「E メールを指定されたアドレスへ送信する」を選択する。管理者のアドレスまたはサポート・デスクなどの指定されたアドレスへ送信する場合は、フィールドにそのアドレスを入力してください。

注: サブミッターは、「照会サブミット設定」ウィンドウに使用したい E メール・アドレスを指定することができます。詳しくは、別のサブミッター用の照会サブミットの設定を行うの設定を参照してください。

6. 「OK」をクリックして E メール通知を使用可能にし、ノートブックをクローズする。

コマンド行方式:

次のパラメーターを指定して **UPDATE QP_SYSTEM** コマンドを発行してください。

- EMAIL_ENABLE
- EMAIL_SERVER
- SEND_DESIGNATED

- DESIGNATED_EMAIL_ADDRESS

関連概念:

- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』

関連タスク:

- 161 ページの『別のサブミッターに対して照会サブミット設定を設定する』

関連資料:

- 279 ページの『UPDATE QP_SYSTEM』

履歴データのコレクションを使用可能にする

Query Patroller の履歴分析は、データウェアハウスの使用を分析するための強力な道具となります。Query Patroller によって管理された照会だけの履歴データや、Query Patroller によって代行受信されたすべての照会の履歴データを収集できます。代行受信されない照会については、履歴データを収集できません。

デフォルトの動作では、管理対象照会についての履歴データだけが収集されます。

注: 照会の実行時間に関するデータを収集する場合は、DB2 のタイム・スタンプとステートメント・モニターのスイッチを「ON」に設定する必要があります。照会が戻す行数に関するデータを収集する場合は、DB2 ステートメント・モニターのスイッチを「ON」に設定する必要があります。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が存在する

手順:

履歴データの収集を使用可能にするには、次のいずれかの方式を実行してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「Query Patroller システム・プロパティ」ノートブックをオープンする。
2. 「オプション」タブをクリックする。
3. 「履歴分析」の下で、保管したい照会を「管理対象照会のみ」または「すべての代行受信済み照会」ラジオ・ボタンを選択して指定する。
4. 「OK」をクリックして変更内容を保管する。

コマンド行方式:

QUERIES_TO_SAVE パラメーターを指定して **UPDATE QP_SYSTEM** コマンドを発行する。

関連概念:

- 113 ページの『Query Patroller 履歴分析』
- 115 ページの『Query Patroller の照会代行受信および管理』

関連資料:

- 279 ページの『UPDATE QP_SYSTEM』

第 16 章 照会クラスの管理

照会クラスは、サイズに応じて、照会のグループ化と実行を行う Query Patroller のメカニズムです。照会クラスを使用すると、異なるサイズのグループ化の照会の中で、システム・リソースが共有されるように、データベース上の照会の流れをコントロールすることができます。

この章では、Query Patroller システムで照会クラスを構成、作成、および除去する方法について説明します。

照会クラスの構成

照会クラスを使用すると、システムで並行して実行できる特定サイズの管理対象照会の数を知ることができます。

前提条件:

トピック『照会クラス構成』を読み終えている必要があります。

手順:

照会クラスを構成するには、以下のようにします。

1. Query Patroller 履歴分析レポートを使用して、システムおよびワークロード統計を収集します。
2. 照会クラスの作成でガイドとして使用できる照会の自然なサイズ・グループを (見積り照会コストに基づいて) 識別するには、クエリー・パトローラー・センターの「履歴分析」>>「照会」フォルダーで表示される「一定時間の照会アクティビティ」レポートを調べます。
3. 列ヘッダーをクリックし、「見積りコスト」列で照会データをソートします。

注: 「見積りコスト」列が表示されない場合は、下部ツールバーにある「列のカスタマイズ (Customize columns)」アイコンをクリックします。

4. 各照会クラスの最大照会コスト (timeron 単位) を決定します。

注: システム内の各照会クラスには、最大照会コストに関する特殊な値が必要です。各照会クラス内の照会の最大コストは、その照会クラスが実行することになる照会のサイズ範囲の上限に対応する必要があります。

5. 各照会クラスで並行して実行できる照会の最大数を決定します。
6. Query Patroller 用の照会クラスを作成します。
7. 照会クラスの定義を評価して改良します。「管理対象照会」フォルダーでは、各クラスで現在実行されている照会の数と、各照会クラスでキューに入れられている照会の数が分かります。

注: 「照会クラス」列が表示されない場合は、下部ツールバーにある「列のカスタマイズ (Customize columns)」アイコンをクリックします。

まだ行っていなければ、管理対象照会に関するシステムしきい値を設定または変更するか、サブミッター・リソース制限を設定または変更することにより、データベースに対する照会の流れをさらに制御できます。

関連概念:

- 129 ページの『照会クラス構成』
- 102 ページの『シナリオ: 照会クラスを使用してさまざまなサイズの照会を管理する』
- 119 ページの『照会管理ポリシーの定義』

関連タスク:

- 142 ページの『Query Patroller の照会クラスを作成する』
- 179 ページの『Query Patroller を使用して履歴データを収集する』

Query Patroller の照会クラスを作成する

照会クラスを作成すると、システムに対して一度に実行されるさまざまなサイズの照会数をコントロールすることができます。新規の照会クラスを作成する時には、そのプロパティを指定することができます。また、その照会クラスに関する有用な記述を指定することができます。

照会クラスを作成する場合には、次の要因を考慮する必要があります。

- データベースのパフォーマンス
- 照会をサブミットするユーザー数
- 指定時刻にサブミットされる照会の平均コスト

照会クラスは、Query Patroller が開始している間に、作成、除去または変更できません。ただし、この変更は、Query Patroller が停止して再始動するまでは反映されません。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が存在する

手順:

新規照会クラスを作成するには、次の方式のいずれかを使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「照会クラスの作成」ウィンドウをオープンする。
2. 「照会の最大数」フィールドで、同時に実行できるこの照会クラスの最大数を指定する。この照会クラスに属し、この値に到達した後でサブミットされた照会は、Query Patroller によってキューに入れられます。この数は、「Query Patroller システム・プロパティ」ノートブックで設定された照会の最大数以下である必要があります。システムの照会の最大数が無制限の場合、このフィールドをプランクにしておくことによって、照会の最大数を無制限として、照会クラスを作成することができます。

3. 「照会の最大コスト」フィールドに、照会クラスに属する照会に対する最大サイズを指定する。定義している照会クラスには、この照会の最大コスト額より小さく、次の最小照会クラスの照会の最大コスト額より大きい照会が含まれます。同じ照会の最大コスト額を持つ 2 つの照会クラスを定義することはできません。
4. オプション: 「照会クラス記述」フィールドに、作成している照会クラスに対するコメントまたは記述を入力する。
5. 「OK」をクリックして照会クラスを作成し、「照会クラスの作成」ウィンドウをクローズします。「OK」をクリックすると、照会クラス ID が Query Patroller によって割り当てられます。

コマンド行方式:

ADD QUERY_CLASS コマンドを発行する。

関連概念:

- 112 ページの『Query Patroller 照会クラス』

関連タスク:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『Query Patroller の照会クラスを変更する』
- 143 ページの『Query Patroller の照会クラスを除去する』

関連資料:

- 218 ページの『ADD QUERY_CLASS』

Query Patroller の照会クラスを除去する

使用している照会種別を変更したい場合、照会クラスを除去してください。照会クラスが使用されていないことを検出した場合、または照会クラスのすべてをサイズ変更したい場合に、照会クラスを除去することがあります。

照会クラスは、Query Patroller が開始している間に、作成、除去または変更できません。ただし、この変更は、Query Patroller が停止して再始動するまでは反映されません。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が存在する

手順:

照会クラスを除去するには、次の方式のいずれかを使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「クエリー・パトローラー・センター」で、「照会クラス」フォルダーが検出されるまで「構成」フォルダーを展開する。
2. 「照会クラス」フォルダーをクリックする。既存の照会クラスが、ウィンドウの右側のペイン (内容ペイン) に表示されます。

3. 内容ペインで、除去したい照会クラスを右クリックして、ポップアップ・メニューの「**除去**」をクリックする。照会クラスを除去したいことを確認できるウィンドウがオープンします。

コマンド行方式:

REMOVE QUERY_CLASS コマンドを発行する。

関連概念:

- 112 ページの『Query Patroller 照会クラス』

関連タスク:

- 142 ページの『Query Patroller の照会クラスを作成する』
- ヘルプ: *Query Patroller* の『Query Patroller の照会クラスを変更する』

関連資料:

- 255 ページの『REMOVE QUERY_CLASS』

第 5 部 ユーザーの管理

第 17 章 演算子の管理

Query Patroller 演算子

Query Patroller 演算子は、管理者権限の一部と、プロファイルで定義されたタスクを持ったユーザーまたはユーザー・グループを示す、Query Patroller で使用される ID です。演算子 ID は、Query Patroller では定義されません。既存の DB2® ユーザーまたはグループ ID から選択して、作成されます。

注: DBADM 権限のある ID は、自動的に Query Patroller 管理者になります。

Query Patroller 演算子は次の管理タスクのいくつか、またはすべてを実行します。

- 構成

照会クラスの作成または削除、システム間のしきい値の設定以外に、E メール通知の設定などの他の構成タスクが含まれます。

- モニター

照会状況の変更、管理対象照会の SQL の表示、および不要な結果表の削除が含まれます。

- ユーザー管理

サブミッター・プロファイルの作成、変更および削除が含まれます。また、すでに完了して不要になった管理対象照会の除去と、保留照会の手動による除去も含まれます。

- 履歴分析

不要になった履歴照会の除去が含まれます。

関連概念:

- 151 ページの『Query Patroller サブミッター』
- 147 ページの『Query Patroller 演算子プロファイル』

Query Patroller 演算子プロファイル

Query Patroller 演算子の役割は、ヘルプ・デスク担当者のような第一線のサポート役では、ユーザーにより通常指定されます。

演算子が実行できるタスクの種類は、演算子の持っている権限のレベルが、表示権限または編集権限であるかによって異なります。

たとえば、プロファイルに編集権限を指定した MONITORING 特権がある演算子は、照会状況の変更、管理対象照会の SQL の表示、および不要になった結果表の削除が可能です。ただし、プロファイルに表示権限を指定した MONITORING 特権がある演算子は、照会状況の表示しかできません。

アクティブな演算子プロファイルと中断した演算子プロファイル

演算子プロファイルが中断されている場合、そのプロファイルに関連付けられているユーザーは、アクティブ・サブミッター・プロファイルに関連付けられているなら、クエリー・パトローラー・センターにサブミッターとして引き続きアクセスできます。ただし、クエリー・パトローラー・センターの他の部分にはアクセスできません。

Query Patroller が使用する演算子プロファイル

演算子のユーザー ID に、この ID と関連する複数のグループ演算子プロファイルがある場合、Query Patroller は、ユーザーが関連するすべての演算子プロファイルの特権をマージして、演算子の特権を決定します。特権はマージされ、演算子は、そのプロファイルから、最高の特権を集めたものを付与されます。

関連概念:

- 147 ページの『Query Patroller 演算子』
- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』

関連タスク:

- 148 ページの『ユーザーおよびグループ用の演算子プロファイルを作成する』
- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループの演算子プロファイルを変更する』

ユーザーおよびグループ用の演算子プロファイルを作成する

既存の演算子プロファイルに基づいて、または新規の設定で、Query Patroller の演算子プロファイルを作成することができます。

前提条件:

DBADM 権限が必要です。

手順:

演算子プロファイルを作成するには、次のいずれかの方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「演算子の作成」ウィンドウをオープンするには、次のようにしてください。
 - a. 既存の演算子プロファイルに基づいて演算子プロファイルを作成している場合。
 - b. 新規の設定で演算子プロファイルを作成している場合。
2. 「演算子」フィールドに、作成する演算子の名前を入力する。名前は大文字で入力する必要があり、DB2 許可 ID としても存在する必要があります。
3. 「プロファイル・タイプ」フィールドを使用して、演算子プロファイルをユーザーまたはグループに適用するかどうかを選択する。
4. オプション: クエリー・パトローラー・センターのすべての部分にアクセスする新規演算子の機能を一時的に中断する場合は、「アクセス中断」チェック・ボックスを選択します。

注: これがグループ演算子プロファイルである場合、このグループのユーザーに他の演算子プロファイルがあるなら、アクセスを中断してもこのグループに属する全ユーザーを中断することにはなりません。ただし、このプロファイルを中断すると、これらのユーザーには、ユーザーが所属する他のグループの演算子プロファイルに対して割り当てられる特権以外の追加特権は与えられません。

5. 「**構成**」フィールドを使用して、演算子がクエリー・パトローラー・センターの「**構成**」ツリー・エレメントに対して持つアクセス・レベルを指定する。指定するアクセス・レベルは、演算子が照会クラスを作成または削除できるかどうか、またはシステム間のしきい値を設定するかどうかを決定します。
6. 「**モニター**」フィールドを使用して、演算子がクエリー・パトローラー・センターの「**モニター**」ツリー・エレメントに対して持つアクセス・レベルを指定する。指定するアクセス・レベルは、演算子が照会状況を変更できるかどうか、または結果表を削除できるかどうかを決定します。
7. 「**ユーザー管理**」フィールドを使用して、演算子がクエリー・パトローラー・センターの「**ユーザー管理**」ツリー・エレメントに対して持つアクセス・レベルを指定する。指定するアクセス・レベルは、演算子がサブミッター・プロファイルを作成、変更、または削除できるかどうかを決定します。
8. 「**履歴分析**」フィールドを使用して、演算子がクエリー・パトローラー・センターの「**履歴分析**」ツリー・エレメントに対して持つアクセス・レベルを指定する。指定するアクセス・レベルは、演算子が履歴照会データを作成して、表示できるかどうかを決定します。
9. 「**OK**」をクリックして新規演算子プロファイルを作成する。

コマンド行方式:

ADD OPERATOR_PROFILE コマンドを発行する。

関連概念:

- 147 ページの『*Query Patroller* 演算子』

関連タスク:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループの演算子プロファイルを変更する』
- 149 ページの『ユーザーおよびグループ用の演算子特権を中断またはリストアする』
- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループの演算子プロファイルを除去する』

関連資料:

- 215 ページの『**ADD OPERATOR_PROFILE**』

ユーザーおよびグループ用の演算子特権を中断またはリストアする

クエリー・パトローラー・センターのすべての部分へアクセスする演算子の機能を一時的に停止 (中断) し、あとからこれらの特権をリストアすることができます。

注:

1. 中断した演算子プロファイルを指定したユーザーは、アクティブ・サブミッター・プロファイルがあるなら、クエリー・パトローラー・センターにサブミッターとして引き続きアクセスできます。
2. クエリー・パトローラー・センターのいくつかの部分にのみ、演算子のアクセスを中断またはリストアしたい場合には、ユーザーおよびグループの演算子プロファイルを変更するを参照してください。

前提条件:

DBADM 権限が必要です。

手順:

演算子の特権を中断するには、次のいずれかの方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「演算子プロパティ」ウィンドウをオープンする。
2. 「一般」ページで「**アクセス中断**」チェック・ボックスを選択し、クエリー・パトローラー・センターのすべての部分へのアクセスする演算子の機能を中断するか、このチェック・ボックスをクリアして、クエリー・パトローラー・センターの指示されたエリアへのサブミッターの機能をリストアすることができます。

注: これがグループ演算子プロファイルである場合、このグループのユーザーに他の演算子プロファイルがあるなら、アクセスを中断してもこのグループに属する全ユーザーを中断することにはなりません。ただし、このプロファイルを中断すると、これらのユーザーには、ユーザーが所属する他のグループの演算子プロファイルに対して割り当てられる特権以外の追加特権は与えられません。

3. 「**OK**」をクリックして「演算子プロパティ」ウィンドウをクローズする。

コマンド行方式:

SUSPENDED パラメーターを使用して、 **UPDATE OPERATOR_PROFILE** コマンドを発行する。

関連概念:

- 147 ページの『Query Patroller 演算子』

関連タスク:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループの演算子プロファイルを変更する』
- 148 ページの『ユーザーおよびグループ用の演算子プロファイルを作成する』
- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループの演算子プロファイルを除去する』

関連資料:

- 268 ページの『UPDATE OPERATOR_PROFILE』

第 18 章 サブミッターの管理

Query Patroller サブミッター

サブミッターは、照会をサブミットする人、グループ、またはアプリケーションを示す Query Patroller で使用される ID です。サブミッター ID は Query Patroller では定義されません。サブミッターがインスタンスに接続する時に DB2[®] が割り当てる SQL 許可 ID です (大文字小文字の区別があり、通常は大文字です)。Query Patroller は、サブミッター ID を使用して、Query Patroller から照会をサブミットするユーザーまたはユーザーのグループを区別することができます。

個々のサブミッターを識別する Query Patroller の機能は、Query Patroller を使用している環境により変化します。

- ユーザーが、Query Patroller に直接照会をサブミットする 2 層環境では、各サブミッターに関連した DB2 の ID が Query Patroller に渡されます。
- 3 層環境では、Query Patroller は、アプリケーションからサブミットされたすべての照会を、同一のサブミッターからのもののように扱います。このような環境では、2 番目の層にあるアプリケーション・サーバーは、ユーザーが照会をサブミットしているかどうかに関係なく、同じ ID を使用して、データベースへの接続を行います。

関連概念:

- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』
- 161 ページの『Query Patroller 照会サブミット設定』

関連タスク:

- 156 ページの『ユーザーおよびグループ用のサブミッター・プロファイルを作成する』
- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループのサブミッター・プロファイルを変更する』
- 158 ページの『サブミッター・リソース制限を設定する』

Query Patroller サブミッター・プロファイル

Query Patroller サブミッター・プロファイルは、次のように定義される特性の集合です。

- Query Patroller がサブミッターからの照会を代行受信するかどうか
- サブミッターの照会が代行受信される場合、これらの照会に適用されるリソースの制限は何か
- サブミッターの照会がキューに持つのはどの優先順位か
- サブミッターのチャージバック・アカウント・コード (コスト・トラッキングに使用される)

個々のユーザーおよびグループ用にサブミッター・プロファイルを作成できますが、それは必須ではありません。Query Patroller のインストール中に、PUBLIC というサブミッター・プロファイルが作成されます。デフォルトでは、すべてのサブミッターは、より限定的なプロファイルに属さない限り、このプロファイルを使用します。153 ページの『Query Patroller が使用するサブミッター・プロファイル』を参照してください。

他に割り当てたサブミッターの一部に対して、異なる特性を割り当てたい場合には、サブミッターは、別のサブミッター・プロファイルを使用しなくてはなりません。たとえば、マーケティング部門によってサブミットされる照会を、照会が使用するリソースを判別するためにトラッキングする場合、その部門に、サブミッターのためのグループ・サブミッター・プロファイルを作成する必要があります。これは、マーケティング・サブミッター用に DB2® グループを使用する必要があることを意味します。

サブミッター・リソース制限

サブミッター・リソース制限を設定すると、システム・リソースを使いすぎる個々のサブミッターまたはサブミッターのグループがなくなります。サブミッターが同時に実行できる照会の数と、サブミッターからの単一照会が被る最大コスト (timerons 単位) とに、制限を設定することができます。「Query Patroller のしきい値」のトピックを参照してください。

大規模な照会結果で使用するディスク・スペースの量を制限するには、サブミッターからの単一照会に対する結果表に保管できる結果行の数を、制限することができます。

特定のサブミッター・プロファイルからの照会の代行受信と管理

関連するサブミッターからの照会が、Query Patroller をう回することができるかどうかを、サブミッター・プロファイルに指定することができます。代行受信されない照会は管理されません。また、履歴分析用データの集合としても使用されません。

さらに、サブミッターからの照会が、特定のサイズ (timerons 単位) より小さい場合、Query Patroller は、この照会を管理しないこともサブミッター・プロファイルに指定できます。サブミッターの管理する最小コスト (MIN_COST_TO_MANAGE) を使用して、これを指定します。

サブミッター・キュー優先順位

ある特定のユーザーからの照会に、キューがある場合に他の照会を超えた優先順位があるかどうか確認したい場合、それらのユーザーにさらに高い優先順位を割り当てることができます。サブミッター・キュー優先順位は 0 から 999 までの数値で、照会のキューで関連するサブミッターによって実行される照会の優先順位を定義します。デフォルトでは、すべてのサブミッターに 500 の優先順位があります。たとえば、貨幣取引に必要な照会を実行するサブミッターに、これらの取引が迅速に取り扱われるよう、キュー優先順位 700 を割り当てたいこともあります。

キュー優先順位の設定が効率よく動作するためには、別のユーザーに割り当てたいキュー優先順位の値を前もって計画しておく必要があります。

サブミッターのチャージバック・アカウント

チャージバック・アカウントは、コスト・トラッキングに使用される、英数字のアカウント・コードです。チャージバック・パラメーターを使用して、サブミッターを論理グループにソートして使用コストをトラッキングすることができます。チャージバック・アカウントの履歴分析データを入手するには、TRACK_QUERY_INFO 表を表示してください。

アクティブおよび中断したサブミッター・プロファイル

照会をサブミットするには、ユーザーはアクティブ・サブミッター・プロファイルを持たなければなりません。DB2 バージョン 8 では、すべての DB2 ユーザー ID は、PUBLIC グループに属するため、PUBLIC サブミッター・プロファイルがアクティブであると、デフォルトでは Query Patroller によってすべての DB2 ユーザーが照会をサブミットできることとなります。PUBLIC サブミッター・プロファイルを中断せずに、個々のユーザーが照会をサブミットできないようにするには、サブミッターに個々のプロファイルを作成し、このプロファイルを中断することができます。サブミッター・プロファイルを作成または中断するには、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権がプロファイルにある管理者または演算子である必要があります。

Query Patroller が使用するサブミッター・プロファイル

サブミッターに設定される照会サブミット設定には、Query Patroller が、そのサブミッターに使用するグループ・サブミッター・プロファイルの指定が組み込まれます。サブミッター・プロファイルに対するデフォルトの照会サブミット設定は PUBLIC です。サブミッターごとの照会サブミット設定を変更して、サブミッター・プロファイルの設定を変更することができます。

Query Patroller は、次の基準の中で重要な順に照会を処理する時に使用するサブミッター・プロファイルを識別します。

1. サブミッター自身のプロファイルがあれば、Query Patroller はこれを選択します。このサブミッター・プロファイルのタイプは USER です。
2. サブミッターに USER サブミッター・プロファイルはなくても照会サブミット設定がある場合、Query Patroller は照会サブミット設定で指定されたグループ・プロファイルに一致するアクティブ・グループ・プロファイルを選択します。
3. 照会サブミット設定でグループ・サブミッター・プロファイルが指定されていない場合、あるいは指定されたグループ・サブミッター・プロファイルがアクティブでない場合、Query Patroller は、次の特性の中において次の重要度の順で、最も制限の強いアクティブ・グループ・プロファイルを選択します。
 - a. Query Patroller にグループからの代行受信照会があるかどうか (BYPASS Y/N)
 - b. グループに対して管理する最小コスト値 (MIN_COST_TO_MANAGE)
 - c. グループに対する最大照会コスト値 (MAX_COST_ALLOWED)
 - d. グループに対する最大照会数 (MAX_QUERIES_ALLOWED)
 - e. グループのキュー優先順位
 - f. グループに対する戻り行の最大数 (MAX_RESULT_ROWS)

4. 同じ度合いの制限のあるアクティブなグループ・サブミッター・プロファイルが複数ある場合は、Query Patroller がプロファイルを任意に選択します。
5. アクティブなグループ・サブミッター・プロファイルが見つからない場合には、Query Patroller は PUBLIC プロファイルを選択します。
6. PUBLIC サブミッター・プロファイルがアクティブでない場合、Query Patroller はサブミッター・プロファイルが見つからない記述をした SQL エラーを戻します。

たとえば、照会をサブミットする時に、使用する ID が 3 つあるセールス・マネージャーについて、考えてみます。

- セールス・データにアクセスする時は、*sales_dept* グループ ID を使用する。
- 販売取引を実行する時は、*sales_transactions* グループ ID を使用する。
- 部門の従業員記録にアクセスする時は、*managers* グループ ID を使用する。

これらのグループ ID にはそれぞれサブミッター・プロファイルがあります。それぞれのグループ・プロファイルについては、表 8 で示されるように定義されています。

表 8. プロファイル設定

設定	<i>sales_dept</i>	<i>sales_transactions</i>	<i>managers</i>
代行受信	Y	Y	Y
管理する最小コスト値 (timeron 単位)	10 000	10 000	15 000
照会の最大コスト許可値 (timeron 単位)	700 000	250 000	1 000 000
照会の最大数値	20	30	20
キュー優先順位	500	700	500
戻り行の最大数値	1 000,000	400 000	1 200 000

セールス・マネージャーには自分用のサブミット・プロファイル (USER タイプ) はなく、サブミット設定は、照会をサブミットするために使用したいグループ・プロファイルの指定は行いません。Query Patroller は、サブミッター・プロファイルの中で最も制限のあるプロファイルを判別することで、セールス・マネージャーの照会を処理する時に使用するサブミッター・プロファイルを識別します。

- この 3 つのグループすべてでサブミットされる照会は代行受信が可能で、3 つの制限レベルは同じです。
- *managers* グループ・プロファイルで指定された照会を管理する最小コストは 15 000 timeron で、*sales_dept* グループ・プロファイルと *sales_transactions* グループ・プロファイルの両方で指定された照会を管理する最小コストは 10 000 timeron です。*managers* グループ・プロファイルの制限はゆるやかなため、使用されません。
- *sales_dept* グループ・プロファイルで許可される照会の最大コストに指定された値は 700 000 timeron で、250 000 timeron が、*sales_transactions* グループ・プロファイルの値です。*sales_transactions* グループ・プロファイルの値の方がより制限が強くなっています。

- Query Patroller は、*sales_transactions* グループ・プロファイルを、セールス・マネージャーからの照会を処理する時に使用するサブミッター・プロファイルとして識別します。

セールス・マネージャーが、さらに大量の照会をサブミットする必要がある場合には、自分用のサブミット・プロファイル (USER タイプ) を作成するように管理者に要請するか、またはサブミット設定を変更する必要があります。これによって、照会をサブミットするために使用したいグループ・プロファイルの指定ができます。

関連概念:

- 151 ページの『Query Patroller サブミッター』
- 115 ページの『Query Patroller の照会代行受信および管理』
- 161 ページの『Query Patroller 照会サブミット設定』

関連タスク:

- 156 ページの『ユーザーおよびグループ用のサブミッター・プロファイルを作成する』
- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループのサブミッター・プロファイルを変更する』

サブミッター・プロファイルの構成

データベース用のサブミッター・プロファイルを作成する前に、データベースを使用するサブミッターのタイプとそれぞれのサブミッターまたはサブミッター・グループが使用するリソースに課される制約に関する決定を行う必要があります。

前提条件:

このタスクを完了する前に、トピック『サブミッター・プロファイルの構成』を読む必要があります。

手順:

サブミッター・プロファイルを構成するには、次の方式を使用してください。

1. システムで区別できるサブミッターのタイプを決定します。
2. オプション: データベース・アクティビティの代表サンプルを得るための履歴データを収集します。
3. オプション: Historical Analysis サブミッター・レポートを使用して、以下の情報を表示します。
 - さまざまなサブミッターによってサブミットされた照会のサイズ
 - 特定の時間フレーム内でサブミッターやサブミッター・グループによってサブミットされた照会の数
 - 異常に大規模な照会を生成したサブミッター
4. Query Patroller によって代行受信されるサブミッターまたはサブミッター・グループを決定します。
5. 照会が代行受信されるサブミッターについて設定するしきい値を決定します。
6. 各サブミッター・プロファイルの優先順位レベルを決定します。

7. システム用のサブミッター・プロファイルを作成します。
8. システム・パフォーマンスを評価し、必要な場合はサブミッター・プロファイルを変更します。

関連概念:

- 110 ページの『Query Patroller のしきい値』
- 115 ページの『Query Patroller の照会代行受信および管理』
- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』
- 99 ページの『シナリオ: サブミッター・プロファイルを構成することによって照会サブミッターの要件を管理する』
- 125 ページの『サブミッター・プロファイルの構成』
- 100 ページの『シナリオ: 大規模な照会の処理』
- 119 ページの『照会管理ポリシーの定義』

関連タスク:

- 179 ページの『Query Patroller を使用して履歴データを収集する』
- 156 ページの『ユーザーおよびグループ用のサブミッター・プロファイルを作成する』
- 158 ページの『サブミッター・リソース制限を設定する』

ユーザーおよびグループ用のサブミッター・プロファイルを作成する

既存のサブミッター・プロファイルに基づいて、または新規の設定で、Query Patroller のサブミッター・プロファイルを作成することができます。サブミッター・プロファイルでは以下のことが可能です。

- サブミッターのチャージバック・アカウント・コード (コスト・トラッキングに使用される) を定義する
- サブミッターからの照会を代行受信するかどうか指定する
- サブミッターの照会を代行受信できる場合、サブミッターのリソース制限を設定する

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が存在する

手順:

1 つ以上のサブミッター・プロファイルを作成するには、次のいずれかの方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「サブミッターの作成」ノートブックをオープンします。
 - 既存のサブミッター・プロファイルに基づいてサブミッター・プロファイルを作成する
 - 新規の設定でサブミッター・プロファイルを作成する

2. 「一般」ページで、次のようにしてください。
 - a. 「サブミッター・ユーザー ID」フィールドで、このプロフィールに関連する名前を入力する。名前は大文字小文字が区別され、データベース接続情報の SQL 許可 ID に一致する必要があります。SQL 許可 ID は、ログイン ID と同じである必要があります (ただし大文字)。複数のサブミッター・プロフィールを作成するには、複数の値をコンマで区切る必要があります。
 - b. 「プロフィール・タイプ」フィールドを使用して、サブミッター・プロフィールをユーザーまたはグループに適用するかどうかを選択する。
 - c. オプション: 「チャージバック・アカウント」フィールドで、コスト・トラッキングに使用する英数字のアカウント・コードを入力する。チャージバック・パラメーターを使用して、サブミッターを論理グループにソートして使用コストをトラッキングすることができます。

例:

- 3 人のサブミッターが法律部門に所属している場合、「チャージバック・アカウント」フィールドに LEGAL と入力することができます。
 - MK001 の経費コードがマーケティング部門に対して存在している場合、いつでもマーケティング部門からサブミッターを追加したときに、「チャージバック・アカウント」フィールドに MK001 と入力することができます。
- d. 照会をサブミットする新規サブミッターの機能を一時的に中断する場合は、「アクセス中断」チェック・ボックスを選択します。
3. 「リソース」ページで、次のようにしてください。

- a. 作成中しているサブミッターからの照会を Query Patroller で代行受信しないようにしたい場合、「このサブミッターからの照会を代行受信しない」チェック・ボックスを選択する。Query Patroller はコスト計算を行わず、また履歴分析表示に照会も作成しません。Query Patroller は、このプロフィールを使用したサブミッターによって実行される照会を管理しません。
- b. 「管理する最小コスト」フィールドに、0 以上の数か、または 照会の最大コスト以下の値を入力する。この値より小さい照会コストは、Query Patroller で管理されません。
- c. 「照会の最大数」フィールドで、サブミッターに同時に実行できる許可のある照会の最大数を入力する。追加照会はキューに入れます。無制限の照会を同時に実行できるようにするには、このフィールドをブランクにしておいてください。
- d. 「照会の最大コスト」フィールドに、最大照会コストの数値を入力する。サブミッターが、この値よりも大きい見積りコストで照会を実行した場合、この照会は保留となります。値を無制限に設定するには、このフィールドをブランクにしておいてください。
- e. 「結果表の最大サイズ」フィールドに、結果表に保管される結果列の最大数に対する値を入力する。このフィールドをブランクにしておくと、DB2 は常にこのサブミッターの結果表を結果セット全体に順応するのに十分な大きさにします。
- f. 「キュー優先順位」フィールドで、照会が実行された時に、その照会に割り当てられる優先順位を示す 0 から 999 までの値を入力する。数値が高くなるほど、優先順位が高くなります。

4. 「OK」をクリックして新規サブミッターを作成する。

コマンド行方式:

ADD SUBMITTER_PROFILE コマンドを発行する。

関連概念:

- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』
- 151 ページの『Query Patroller サブミッター』

関連タスク:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループのサブミッター・プロファイルを変更する』
- 159 ページの『ユーザーおよびグループ用のサブミッター特権を中断またはリストアする』
- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループのサブミッター・プロファイルを除去する』
- 161 ページの『別のサブミッターに対して照会サブミット設定を設定する』

関連資料:

- 223 ページの『ADD SUBMITTER_PROFILE』

サブミッター・リソース制限を設定する

サブミッターの照会を、Query Patroller で代行受信するようにしたいかどうかを指定することができます。代行受信する指定をすると、サブミッターが使用するリソースも制限することができ、サブミッターがシステム・リソースを使いすぎることができなくなります。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が存在する

手順:

サブミッター・リソースを制限するには、次のいずれかの方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「サブミッター・プロパティ」ノートブックをオープンする。
2. 「リソース」タブをクリックする。
3. 作成中しているサブミッターからの照会を Query Patroller で代行受信しないようにしたい場合、「このサブミッターからの照会を代行受信しない」チェックボックスを選択する。Query Patroller はコスト計算を行わず、また履歴分析表示に照会も作成しません。Query Patroller は、このプロファイルを使用したサブミッターによって実行される照会を管理しません。

4. 「管理する最小コスト」フィールドに、0 以上の数か、または照会の最大コスト以下の値を入力する。この値より小さい照会コストは、Query Patroller で管理されません。
5. 「照会の最大数」フィールドで、このサブミッターが同時に実行できる許可のある照会の最大数を入力する。追加照会はキューに入れられます。無制限の照会を同時に実行できるようにするには、このフィールドをブランクにしておいてください。
6. 「照会の最大コスト」フィールドに、最大照会コストの数値を入力する。サブミッターが、この値よりも大きい見積りコストで照会を実行した場合、この照会は保留となります。値を無制限に設定するには、このフィールドをブランクにしておいてください。
7. 「結果表の最大サイズ」フィールドに、結果表に保管される結果列の最大数に対する値を入力する。このフィールドをブランクにしておく、DB2 は常にこのサブミッターの結果表を結果セット全体に順応するのに十分な大きさにします。
8. 「キュー優先順位」フィールドで、照会が実行された時に、その照会に割り当てられる優先順位を示す 0 から 999 までの値を入力する。数値が高くなるほど、優先順位が高くなります。
9. 「OK」をクリックしてサブミッター・プロファイルを更新します。

コマンド行方式:

UPDATE SUBMITTER_PROFILE コマンドを発行する。

関連概念:

- 151 ページの『Query Patroller サブミッター』
- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』

関連タスク:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループのサブミッター・プロファイルを変更する』
- 159 ページの『ユーザーおよびグループ用のサブミッター特権を中断またはリストアする』

関連資料:

- 276 ページの『UPDATE SUBMITTER_PROFILE』

ユーザーおよびグループ用のサブミッター特権を中断またはリストアする

照会をサブミットするサブミッターの機能を一時的に中断し、あとからこれらの特権をリストアすることができます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が存在する

手順:

サブミッターの特権を中断またはリストアするには、次のいずれかの方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「サブミッター・プロパティ」ノートブックをオープンする。
2. 「一般」ページで「アクセス中断」チェック・ボックスを選択し、照会をサブミットするサブミッターの機能を中断するか、このチェック・ボックスをクリアして、照会をサブミットするサブミッターの機能をリストアすることができます。
3. 「OK」をクリックして「サブミッター・プロパティ」ノートブックをクローズする。

コマンド行方式:

SUSPENDED パラメーターを使用して、 **UPDATE SUBMITTER_PROFILE** コマンドを発行する。

関連概念:

- 151 ページの『Query Patroller サブミッター』

関連タスク:

- 156 ページの『ユーザーおよびグループ用のサブミッター・プロファイルを作成する』
- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループのサブミッター・プロファイルを変更する』
- 158 ページの『サブミッター・リソース制限を設定する』

関連資料:

- 276 ページの『UPDATE SUBMITTER_PROFILE』

第 19 章 照会サブミット設定の管理

Query Patroller 照会サブミット設定

照会サブミット設定は、次の事項を指定するために使用されます。

- サブミッターにユーザー・サブミッター・プロファイルがなく、複数のグループ・サブミッター・プロファイルがある場合に照会をサブミットする時、サブミッターが使用するサブミッター・プロファイル
- Query Patroller がサブミッターの照会結果を送信するロケーション
- サブミッターの結果表を表示する者
- サブミッターの結果表が大きすぎる場合の Query Patroller の対応
- サブミッターに通知を送信するために使用される E メール・アドレス

デフォルトの照会サブミット設定は、PUBLIC と呼ばれるサブミッター・プロファイルに割り当てられます。個々のサブミッターがデフォルトのサブミット設定と異なる設定が必要となった場合、そのサブミッター用に新規の設定を作成する必要があります。

関連概念:

- 151 ページの『Query Patroller サブミッター』
- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』

関連タスク:

- 161 ページの『別のサブミッターに対して照会サブミット設定を設定する』

別のサブミッターに対して照会サブミット設定を設定する

デフォルトの照会サブミット設定は PUBLIC と呼ばれます。独自のサブミット設定がないサブミッターは、PUBLIC サブミット設定で指定された設定を使用します。サブミッターに PUBLIC サブミット設定で指定された値を使用したくない場合は、サブミッター用に別のサブミット設定を設定することができます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が存在する

手順:

照会サブミット設定を更新するには、次の方式のいずれかを使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「照会サブミット設定」ウィンドウをオープンする。

- 既存の照会サブミット設定に基づいて新規の照会サブミット設定を作成する
 - 新規の設定で新規の照会サブミット設定を作成する
 - 既存の照会サブミット設定を変更する
2. 新規の照会サブミット設定を作成する場合、「**サブミッター**」フィールドに、照会をサブミットするアプリケーションを開始するために使用されたサブミッターの名前か、ユーザー ID を入力する。
 3. サブミッターまたはエンド・ユーザーが、複数のグループ・プロファイルに属している場合、「**使用するサブミッター・プロファイル**」フィールドを使用して、サブミッターが照会のサブミット時に使用するグループ・プロファイルを選択する。サブミッターまたはエンド・ユーザーが、タイプがユーザーであるサブミッター・プロファイルを持っている場合、このフィールドにはサブミッターのユーザー ID が表示され、この値を変更することはできません。

タイプがユーザーであるサブミッター・プロファイルが欠けているが、複数のグループ・サブミッター・プロファイルに所属している場合、このフィールドにはグループ・サブミッター・プロファイルがリストされます。照会のサブミットに使用したいグループ・サブミッター・プロファイルを選択してください。「自動的に選択」項目は、最も低いリソース制限を持つプロファイルを適用します。

4. 照会がサブミットされた後に発生することを次のように指定する。
 - 照会をサブミットしたアプリケーションが、Query Patroller が照会を管理する間、結果セットが戻されるのを待機することを指定するには、「**結果セットが戻されるのを待機する**」ラジオ・ボタンを選択する。このオプションはデフォルトです。

このオプションが選択されている場合、照会をサブミットしたアプリケーションは、結果セットが戻されるまで応答しなくなります。

- 結果セットは DB2 の表に保管され、照会をサブミットしたアプリケーションは、さらに進んだ処理用にフリーとなるように指定するには、「**アプリケーションを解放して結果表からの結果を検索する**」ラジオ・ボタンを選択する。
5. 結果表に使用したいアクセス・レベルを次のように指定する。
 - サブミッターだけが結果表にアクセスできるように指定するには、「**サブミッターへの限定アクセス**」ラジオ・ボタンを選択する。
 - 結果表を、特定の DB2 ユーザーがアクセスできるようにするには、「**他のユーザーまたはグループへのアクセスを認可する**」ラジオ・ボタンを選択する。関連したフィールドに特定のユーザーまたはグループの名前をコンマで区切って入力します。リストされている DB2 ユーザーは、照会がサブミットされたデータベースへのアクセスを持っている必要があります。
 6. 結果セットが最大許可長より長い場合のハンドル方法について、次のように指定する。
 - 結果セットがサブミッターのプロファイルに定義されている限度よりも長い場合、切り捨てられた結果が結果表に保管されることを指定するには、「**切り捨てられた結果セットを戻す**」ラジオ・ボタンを選択する。
 - 完了していない結果を結果表に保管しないように指定するには、「**結果を戻さない**」ラジオ・ボタンを選択する。
 7. 「**E メール・アドレス**」フィールドで、サブミッターに通知を送信するために使用される E メール・アドレスを入力する。E メールを複数のアドレスに送信す

るには、複数の値をコンマで区切って入力することができます。通知は、照会が完了したり、エラーを検出すると指定されたアドレスへ送信されます。結果表は作成された場合に限ります。

注: 次の場合に、サブミッター用に結果表が作成されます。

- 「アプリケーションの解放」オプションが「照会サブミット設定」ウィンドウで指定されている。
- 「結果が戻るまで待機する」オプションが「照会サブミット設定」ウィンドウで指定されているが、照会の完了前に保留状態になっている。
- 照会状況が「照会をバックグラウンドで実行する」に変更されている。

8. 「OK」をクリックして照会サブミット設定を設定する。

コマンド行方式:

新規の照会サブミット設定を作成するには、 **ADD SUBMISSION_PREFERENCES** コマンドを発行する。

既存の照会サブミット設定を変更するには、 **UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES** コマンドを発行する。

関連概念:

- 151 ページの『Query Patroller サブミッター』

関連タスク:

- 156 ページの『ユーザーおよびグループ用のサブミッター・プロファイルを作成する』
- ヘルプ: *Query Patroller* の『サブミッターの照会サブミット設定を除去する』

関連資料:

- 273 ページの『UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES』

第 6 部 Query Patroller の使用

第 20 章 Query Patroller での照会の管理

管理対象照会状況

照会が Query Patroller で管理されている間、照会は次の異なる状態の中のいずれかとなります。照会状況情報は、クエリー・パトローラー・センターの管理対象フォルダー、「管理対象照会プロパティ」ノートブックの「照会クラス」フィールド、GET QUERY コマンドの実行のいずれかの方法で取得することができます。

照会が Query Patroller で管理される場合、通常の処理では次の状態を通過します。

初期 照会は Query Patroller サーバーによって代行受信されました。(この状況は、照会が後続の状況にすぐに移動するため表示されません。)

実行中 照会は進行中で、実行のために DB2® に渡されました。

完了 照会が正常に完了しました。

次のケースでは、照会は処理中に他の状態に移行します。

保留 照会のコストがサブミッターの照会の最大コストを超えています。保留照会は手動で解放するか、またはスケジュールされたジョブによって自動的に解放できます。保留照会を解放すると、照会は保留解除 状態になります。

保留解除

照会は保留になっていましたが、編集権限を伴う MONITORING 特権がプロファイルに付与されている管理者または演算子によって解放されたか、またはスケジュールされたジョブによって自動的に解放されました。保留解除された照会は、クエリー・コントローラーによって処理され、現行システムのワークロードに応じて、実行中 状態または待機中 状態になります。

待機中 照会は実行を待機します。次のしきい値に超過があると、照会はキューに入れられます。

- システムに対する最大照会数 (MAX_TOTAL_QUERIES)
- サブミッターに対する最大照会数 (MAX_QUERIES_ALLOWED)
- システムに対する最大ワークロード・コスト (MAX_TOTAL_COST)
- 照会を実行する照会クラスに対する最大照会数 (MAX_QUERIES)

照会をキューに入れることになった状態が変化した時に、照会を実行します。たとえば、照会クラスに対する最大照会数が超過したためにキューに入れられていた照会は、そのクラスに属する照会数が最大値より少ない値に下がった時に実行されます。ただし、複数のしきい値で超過を起こしている照会は、最初のしきい値が超過していなくなっても、次のしきい値にまだ超過がある場合があります。この場合は、しきい値すべてに超過がなくなると照会を実行されません。

取り消し

照会が、編集権限を伴う MONITORING 特権をプロファイルに付与された管理者、サブミッター、演算子によって取り消されました。実行中、保留、保留解除、または待機中の照会だけを取り消すことができます。

打ち切り

照会はエラーのために DB2 によって終了しました。

リジェクト

照会を実行できませんでした。

不明 照会の状況を判別できません。状況が**不明**の照会は、**実行中**ではありませんが、**Query Patroller** は、この照会が完了したのか失敗したのか判別できません。

関連概念:

- 205 ページの『第 25 章 Query Patroller バージョン 8 の制約事項』

関連資料:

- 233 ページの『GET QUERY』
- 279 ページの『UPDATE QP_SYSTEM』

Query Patroller を使用して照会状況を変更する

権限レベルに応じて、照会の取り消し、保留照会の解放、または照会をバックグラウンドで実行するなどの方法で、**Query Patroller** によって管理される照会状況を変更する場合があります。

照会の取り消し

照会をサブミットした後で、エラーが含まれていることに気付いた場合か、またはコストが高すぎることに気付いた場合には、この照会を取り消します。たとえば、照会のコストに対して許可されているシステム・リソースの最大量を超過した照会があるため、保留となるという通知を受け取ることがあります。照会を取り消すと、これは取り消し状態となります。

保留状態から照会を解放する

照会がサブミッターの最大照会コストを超過していても、特定の照会を実行すると判断される場合には、保留照会を解放してください。保留照会を解放すると、現行システムのワークロードに応じて、照会は実行状態または待機中状態になります。

照会をバックグラウンドで実行する

照会結果が戻るまで待機するが、特定の照会の実行中はクライアント・アプリケーションを使用する、ということが照会サブミット設定によって指定されている場合、照会をバックグラウンドで実行します。照会をバックグラウンドで実行すると、現行システムのワークロードに応じて、照会を実行状態または待機中状態にします。

前提条件:

- 照会を取り消すには、次のいずれかの要件に合致する必要があります。
 - DBADM 権限がある
 - 演算子のプロファイルに、編集権限のある **MONITORING** 特権が存在する
 - 照会のサブミッターである
- 保留照会を解放するには、次のいずれかの要件に合致する必要があります。
 - DBADM 権限がある

- 演算子のプロファイルに、編集権限のある MONITORING 特権が存在する
- 照会をバックグラウンドで実行するには、次が必要です。
 - 照会のサブミッターである

手順:

照会の状況を変更するには、次のようにしてください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「照会状況の変更」ウィンドウをオープンする。
2. 照会を取り消すには、「照会の取り消し」をクリックする。
3. 照会を実行するには、「照会を保留状態から解放する」をクリックする。
4. サブミットしているアプリケーションのコントロールを回復するには、「照会をバックグラウンドで実行する」をクリックする。Query Patroller は、照会の実行を停止してから再サブミットします。照会の結果は、結果表に戻ります。
5. 「OK」をクリックする。指定したとおりに照会の状況が変更され、「照会状況の変更」ウィンドウをクローズされます。

コマンド行方式:

照会を取り消すには、**CANCEL QUERY** コマンドを発行する。

照会を実行するには、**RUN HELD_QUERY** コマンドを実行する。

照会をバックグラウンドで再実行するには、**RUN IN BACKGROUND QUERY** コマンドを実行する。

関連概念:

- 167 ページの『管理対象照会状況』

関連タスク:

- 191 ページの『Query Patroller を使用して手動で結果表をドロップする』

関連資料:

- 227 ページの『CANCEL QUERY』
- 265 ページの『RUN HELD_QUERY』
- 266 ページの『RUN IN BACKGROUND QUERY』

Query Patroller を使用して管理対象照会の詳細を表示する

Query Patroller で管理されている照会のプロパティを表示することによって、照会のサブミッター、処理時間、および結果表に関する情報などの詳細を調べることができます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集または表示権限のある MONITORING 特権が存在する

- 照会のサブミッターである

手順:

照会の詳細を表示するには、次のようにしてください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「管理対象照会プロパティ」ノートブックをオープンする。
2. 照会に関する一般情報を表示するには、「一般」タブをクリックする。
 - a. 新規ウィンドウで照会の SQL を表示するには、「別のウィンドウで SQL を表示する」をクリックする。
 - b. 照会をサブミットしたサブミッターのプロファイルを表示するには、「サブミッター・プロパティ」をクリックする。「サブミッター・プロパティ」ウィンドウをオープンするには、DBADM 権限があるか、または、編集または表示権限のある USER ADMINISTRATION 特権を持ったプロファイルの演算子である必要があります。
 - c. 照会を取り消すなどの照会の状況を変更する場合には、「状況の変更」をクリックする。
3. 照会実行情報および結果表の詳細を表示するには、「結果」タブをクリックする。
 - a. 照会の結果表を表示するには、「結果の表示」をクリックする。
 - b. 照会の結果表を保管するには、「結果の保管」をクリックする。

注: 照会の結果を保管する際、BLOB 列の値は保管されません。それは、BLOB というキーワードで置き換えられます。CLOB の値のサイズが 32K より大きい場合、それは切り捨てられます。
 - c. 照会の結果表を削除するには、「結果表のドロップ」をクリックする。
4. 照会のイベント・タイム・スタンプと処理期間を表示するには、「時間」タブをクリックする。
5. 許可 ID、アプリケーション情報、およびユーザー情報を表示するには、「その他」タブをクリックする。
6. 「クローズ」をクリックして、「管理対象照会プロパティ」ノートブックをクローズする。

コマンド行方式:

照会の詳細を表示するには、**GET QUERY** コマンドを発行します。

照会の結果を保管するには、**FILE RESULT** コマンドを発行します。

照会の結果を表示するには、**SHOW RESULT** コマンドを発行します。

関連タスク:

- 171 ページの『Query Patroller を使用して管理対象照会の SQL を表示する』
- ヘルプ: *Query Patroller* の『照会サブミッター・プロファイルを表示する』
- 168 ページの『Query Patroller を使用して照会状況を変更する』

関連資料:

- 233 ページの『GET QUERY』

- 267 ページの『SHOW RESULT』
- 230 ページの『FILE RESULT』

Query Patroller を使用して管理対象照会の SQL を表示する

「SQL ステートメント」ウィンドウを使用して、管理対象照会の SQL を表示します。このウィンドウから、ステートメント内のストリングおよび SQL キーワードを検索したり、SQL ステートメントのファイルへの保管、印刷、コピーが可能です。DB2 オプティマイザーが、SQL ステートメントに対して使用したアクセス・プランを検索するために、SQL Explain に、照会を貼り付けることができます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集または表示権限のある MONITORING 特権が存在する
- 照会のサブミッターである

手順:

照会の SQL を表示するには、次の方式のいずれかを使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「SQL ステートメント」ウィンドウをオープンする。
2. 「テキストのコピー」をクリックして、クリップボードに SQL ステートメントをコピーする。
3. 「検索」をクリックして、SQL ステートメントで特定のテキスト・ストリングを検索する。このアクションは「検索」ウィンドウをオープンします。
4. 「別名保管」をクリックして、標準の別名保管ウィンドウをオープンする。このウィンドウから SQL ステートメントを保管するファイルとロケーションを指定することができます。
5. 「印刷」をクリックして、標準の印刷ウィンドウをオープンする。このウィンドウから、プリンターおよび印刷する SQL ステートメントを選択します。
6. 「クローズ」をクリックして、「SQL ステートメント」ウィンドウをクローズする。

関連概念:

- 115 ページの『Query Patroller の照会代行受信および管理』
- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『SQL コンパイラー』

関連タスク:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『管理対象の照会の SQL ステートメントで特定のテキストを検索する』

Query Patroller を使用して結果表を表示する

次の場合に、結果表が作成されます。

- 照会サブミッターのサブミット設定が、照会のサブミット後にアプリケーションを解放するように指定した場合
- 照会が保留となつてから実行された場合
- 照会がバックグラウンドで実行された場合

次の状態で、結果表を表示する場合があります。

- 対象となるデータに対して、最後に照会を実行してから大幅な変更がないかどうか疑わしい場合
- 以前実行された照会の結果を表示したい場合 (照会を再サブミットすると、異なる結果が戻る可能性があります。)
- 照会が別の Query Patroller サブミッターによって実行され、サブミッターの結果表に対するアクセスが付与されている場合

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 照会のサブミッターである
- 照会のサブミッターにより結果表へのアクセスが付与されている

手順:

照会の結果表を表示するには、次の方式のいずれかを使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

注: 別のサブミッターの結果を表示するために、クエリー・パトローラー・センターを使用することは、この結果へのアクセスが付与されていてもできません。コマンド行を使用してください。

1. 「結果の表示」ウィンドウをオープンする。「結果の表示」ウィンドウによって、一度に結果表の行を 50 行を表示することができます。
2. 「前へ」または「次へ」をクリックして、結果表の行を移動する。
3. 「クローズ」をクリックして、「結果の表示」ウィンドウをクローズする。

コマンド行方式:

SHOW RESULT コマンドを発行する。

関連概念:

- 114 ページの『Query Patroller の結果表および結果セット』

関連タスク:

- 169 ページの『Query Patroller を使用して管理対象照会の詳細を表示する』

関連資料:

- 267 ページの『SHOW RESULT』

保留照会をスケジュール時間で実行する

スケジュール時刻に実行するために保留照会を設定し、保留照会が実行できる最大時間を指定することができます。これによって、使用中のシステムでの要求がより少ない時のオフピーク時間中に実行できるように保留照会をスケジュールすることができます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が存在する

手順:

保留照会をスケジュール時刻に実行するには、次のいずれかの方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「Query Patroller システム・プロパティ」ノートブックをオープンする。
 2. 「保留照会」タブをクリックする。
 3. 保留照会を実行する時刻を設定するには、次のようにしてください。
 - a. 「スケジュール時刻に保留照会の実行」チェック・ボックスを選択する。
 - b. 「開始時刻のスケジュール」をクリックして、照会を実行する時刻を手動でスケジュールできるウィンドウをオープンする。保留照会を実行するための開始時刻をスケジュールリングするを参照してください。
- 注:** 保留照会の実行にはデフォルトのスケジュールはありません。スケジュールを作成しないと、保留照会は実行されません。終了日を通り過ぎてから、終了日を持つスケジュールを作成すると、保留照会はこれ以上実行されません。
4. 「保留照会を実行する時間」フィールドで、保留照会を実行する時間の長さを指定する。指定した時間量が過ぎると、実行されていない保留照会は、次の開始時刻まで保留されます。現在実行している照会は、完了まで実行することができます。
 5. 「OK」をクリックして、スケジュール時刻に保留照会を実行する。

コマンド行方式:

次のパラメーターを指定して **UPDATE QP_SYSTEM** コマンドを発行してください。

- RUN_HELD_QUERIES
- RUN_HELD_DURATION

注: **UPDATE QP_SYSTEM** コマンドにより、クエリー・パトローラー・センターから保留照会を実行するためにスケジュールを既に手動で設定している場合に限り、保留照会を実行することができます。コマンド行を使用して、スケジュールを手動で設定することはできません。

関連概念:

- 167 ページの『管理対象照会状況』

関連タスク:

- 174 ページの『保留照会を実行するために開始時刻をスケジュールする』

関連資料:

- 279 ページの『UPDATE QP_SYSTEM』

保留照会を実行するために開始時刻をスケジュールする

繰り返しの原則で、特定の時刻に実行する保留照会をスケジュールすることができます。たとえば、毎週日曜日の午前 1:00 で実行するように、保留照会をスケジュールすることができます。

注: クエリー・パトローラー・センターからだけ、保留照会を実行するためにスケジュールを手動で設定することができます。コマンド行を使用して、スケジュールを手動で設定することはできません。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が存在する

注: 演算子ではあるけれども編集権限がない場合には、スケジュールを表示することはできても、このスケジュールを変更することはできません。

手順:

保留照会の実行をスケジュールするには、次の方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「保留照会実行の開始時刻のスケジュール」をオープンする
2. 保留照会を実行する頻度を指定するには、「**インターバル**」および「**頻度**」フィールドを使用する。選択したインターバルによっては、「**詳細**」フィールドを使用する必要がある場合もあります。
3. 保留照会の実行を開始する時期を指定するには、「**日付**」および「**時刻**」フィールドを使用する。
4. 保留照会の実行終了日を指定する。終了日がない場合は、「**終了日なし**」チェック・ボックスを選択します。終了日を指定するには、「**日付**」および「**時刻**」フィールドを使用します。

注: 指定された終了日は、シングル・タスクの期間を設定しません。繰り返しタスクの終了日を設定します。たとえば、保留照会を、向こう 7 週間にわたり毎週土曜日に 4 時間おきに実行するように設定する場合には、「**日付**」および「**時刻**」フィールドを使用して、現時点から 7 週間先である終了日を指定することができます。

5. オプション: タスクを実行できないようにするには、「**スケジュールの中断**」チェック・ボックスを選択する。

6. 「追加」ボタンをクリックして、「スケジュール・リスト」にタスクを追加する。
7. 「OK」をクリックして、「Query Patroller システム・プロパティ」ノートブックに戻る。保留照会を実行する期間を設定することができます。

関連概念:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『スケジュールリング — 概要』

第 21 章 履歴分析の使用

Query Patroller の履歴分析機能を使用して、長期に渡ってデータウェアハウス・アクティビティのさまざまな面を分析できます。この章では、履歴分析のさまざまな用途と、履歴データのレポートやグラフを生成および表示する方法について概説します。

履歴分析レポートの使用

Query Patroller Center の履歴分析レポートからは、多くの有用な情報が得られます。「履歴分析」フォルダーをクリックすれば、これらのレポートにアクセスできます。このフォルダーを展開すると、以下のフォルダーが表示されます。

- 照会
- ヒットした表
- ヒットしなかった表
- ヒットした索引
- ヒットしなかった索引
- サブミッター

使用可能なデータがあるなら、「ヒットした表」および「サブミッター」フォルダーをさらに展開して、レポートをさらに表示できます。

ほとんどの履歴分析レポートは、表形式と図形形式で表示できます。2 つのビューの間で切り替えを行うには、「表の表示」ボタンと「グラフの表示」、または「ヒストグラムの表示」ボタンを使用します。

レポートをソート (表ビューで参照しているとき) する場合、列のヘッダーをクリックすれば、その列でレポートがソートされます。

178 ページの表 9 では、データウェアハウスに関して調べることのできる情報、その情報の用途、およびその情報を履歴分析レポートで見つける方法がリストされています。レポートは、照会が実行されるまでにキューに入っている時間や、先月処理された照会の数といった疑問に答えるのに役立ちます。

表 9. 履歴分析レポートの使用

履歴データ	用途	参照するレポート
パフォーマンス		
長期に渡る平均照会実行時間	照会のパフォーマンスの傾向または変動を識別し、ハードウェアの変更またはウェアハウスの再設計による影響を見積る。	「照会」(「 実行時間 」でソート) 「照会」ヒストグラム(「y軸」で「 実行された照会 - 平均時間 」を表示) 注: 長期間に渡って、それらの2つのレポートの結果を比較します。
キューに入っている時間	照会の実行時間を最小限にするため、Query Patroller のしきい値を調整する。	「照会」ヒストグラム(「y軸」で「 キューに入れられた照会 - 合計キュー時間 」を表示)
一定の期間内に処理された照会の数	データウェアハウス・ウェアハウスのアクティビティーを理解する。	「照会」ヒストグラム(「y軸」で「 実行された照会 - 実行された数 」を表示)
一定の期間内に処理された照会の数の変動	保守スケジュールを最適化したり、DB2 [®] の動的構成を実行するために、システム・アクティビティーが多い期間と少ない期間を識別する。	「照会」ヒストグラム(「y軸」で「 実行された照会 - 実行された数 」を表示)
照会コスト	効率的でない照会、または問題のある照会を識別する。	「照会」(「 見積りコスト 」でソート)
サブミッターのアクティビティー		
ユーザーによってサブミットされた照会の数	サブミッターしきい値を調整するためにヘビー・ユーザーを識別したり、照会のサブミットに関する教育が必要なサブミッターを識別したりする。	「サブミッター」(「 サブミッター ID 」でソート)
ユーザーによってサブミットされた照会のサイズ	問題のある照会のサブミッターを識別し、サブミッターしきい値を調整する。	「照会」(「 見積りコスト 」でソート)

表 9. 履歴分析レポートの使用 (続き)

履歴データ	用途	参照するレポート
サブミッターまたはアプリケーションによるオブジェクトの使用	特定のオブジェクトをどのサブミッターのグループが使用しているかに応じて、そのオブジェクトの最適なロケーションを判別する。	「サブミッター」 → 「サブミッター X (Submitter X)」 → 「ヒットした表」 「サブミッター」 → 「サブミッター X (Submitter X)」 → 「ヒットした表」 → 「表 X (Table X)」 → 「ヒットした列」 「サブミッター」 → 「サブミッター X (Submitter X)」 → 「ヒットした表」 → 「表 X (Table X)」 → 「ヒットした索引」
オブジェクトの使用		
ヒットしたデータベース・オブジェクト (表、列、索引)	マテリアライズ照会表、索引、またはマルチディメンション・クラスタリングの候補を識別する。	「ヒットした表」 「ヒットした索引」 「ヒットした表」 → 「表 X (Table X)」 → 「ヒットした列」
ヒットしなかったデータベース・オブジェクト (表、列、索引)	除去するオブジェクト、またはアクセス速度の遅い装置に移動させるオブジェクトを識別する。	「ヒットしなかった表」 「ヒットしなかった索引」 「ヒットした表」 → 「表 X (Table X)」 → 「ヒットしなかった列」

関連タスク:

- 179 ページの『Query Patroller を使用して履歴データを収集する』
- 138 ページの『履歴データのコレクションを使用可能にする』

Query Patroller を使用して履歴データを収集する

Query Patroller の履歴分析機能を使用して、データウェアハウスのワークロードに関するデータを収集して分析することができます。テスト・ワークロードに関するデータ、あるいは実際の実動アクティビティーに関するデータを収集できます。収集したワークロードに関する情報は、データベースとオブジェクトの使用状況をより深く理解するため、Query Patroller のしきい値を設定するため、および照会クラスを作成するために使用することができます。

前提条件:

テスト・ワークロードと、正規の実動アクティビティーのどちらに関するデータを収集するか決定する必要があります。テスト・ワークロードを実行する場合は、サ

ブミッターを作成します。そして、テスト・サブミッター・プロファイルによってサブミットされるすべての照会が履歴分析のためにトラッキングされるよう指定します。他の照会はずべて代行受信されないようにする必要があります。

照会の実行時間に関するデータを収集する場合は、DB2 のタイム・スタンプとステートメント・モニターのスイッチを「ON」に設定する必要があります。照会が戻す行数に関するデータを収集する場合は、DB2 ステートメント・モニターのスイッチを「ON」に設定する必要があります。

手順:

履歴データは、次の方法で収集します。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. Query Patroller で照会の代行受信を可能にします。
2. Query Patroller を開始します。そのためには、**qpstart** コマンドを以下のように発行します。
3. 履歴データの収集を使用可能にします。
4. Query Patroller のしきい値はデフォルト設定のままにするか、または Query Patroller のしきい値を無制限にして、照会を無制限に実行できるようにします。しきい値をデフォルト設定のままにすること、あるいは無制限にするということは、Query Patroller のすべての照会管理フィーチャーは使用しないこと、しかしデータベースのワークロードに関するデータは収集することを意味します。
5. テスト・ワークロードを実行するか、あるいはデータベース・アクティビティーを通常どおりに続行させます。
6. 履歴データを生成して、履歴分析表にデータを追加します。
7. 「クエリー・パトローラー・センター」を開き、「履歴分析」フォルダーの中のレポートを使用してデータを分析します。

関連概念:

- 113 ページの『Query Patroller 履歴分析』
- 177 ページの『履歴分析レポートの使用』

関連タスク:

- 93 ページの『Query Patroller が照会を代行受信できるようにする』
- 138 ページの『履歴データのコレクションを使用可能にする』
- 180 ページの『Query Patroller を使用して履歴データを生成する』

関連資料:

- 285 ページの『履歴データ収集設定』

Query Patroller を使用して履歴データを生成する

履歴分析で使用できる現行の情報が必要な場合、履歴データを生成します。履歴データを生成すると、Query Patroller が履歴分析用に保管した照会に対して、SQL Explain 機能を実行し、クエリー・パトローラー・センターの履歴分析のレポートとグラフで情報が使用できるようにします。

「一定時間の照会アクティビティ」レポート以外に、「履歴分析」フォルダーに含まれるのは、履歴データを生成した照会に関する情報だけです。履歴データを生成するかどうか決定するためには、それが最後にいつ、どの照会に対して生成されたのかを判別します。

照会で SQL Explain が正常に実行されなかった場合、たとえその照会が指定された時間範囲内に収まっても、履歴データが次に生成されるときに SQL Explain が再び実行されることはありません。

前提条件:

DBADM 権限が必要です。

手順:

履歴データを生成するには、次のいずれかの方式を実行してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

すべての未解決の照会 (まだ照会用に生成された履歴データのない照会) に対して履歴データを生成するには、

1. 「クエリー・パトローラー・センター」で、オブジェクト・ツリーで「履歴分析」フォルダーを検索する。
2. 「履歴分析」フォルダーを右クリックし、ポップアップ・メニューの「履歴データの生成」をクリックする。「履歴データの生成」ウィンドウが表示されます。
3. 「未解決の照会すべてに対してデータを生成する」ラジオ・ボタンをクリックする。
4. 「OK」をクリックして履歴データを生成し、ウィンドウをクローズする。

特定の期間の照会に対して履歴データを生成するには、次のようにしてください。

1. 「クエリー・パトローラー・センター」で、オブジェクト・ツリーで「履歴分析」フォルダーを検索する。
2. 「履歴分析」フォルダーを右クリックし、ポップアップ・メニューの「履歴データの生成」をクリックする。「履歴データの生成」ウィンドウが表示されます。
3. 「期間内の照会実行に対してデータを生成する」ラジオ・ボタンをクリックする。
4. 「開始日」および「終了日」フィールドを使用して、履歴データを生成する期間を定義する。
5. 「OK」をクリックして履歴データを生成し、ウィンドウをクローズする。

履歴データの生成を停止するには、「進行」ウィンドウの「終了 (Terminate)」をクリックします。「進行」ウィンドウは、「履歴データの生成」ウィンドウで「OK」をクリックすると表示されます。

コマンド行方式:

GENERATE HISTORICAL_DATA コマンドを発行する。

履歴データの生成を停止するには、**GENERATE HISTORICAL_DATA** に STOP パラメーターを指定して実行します。

関連概念:

- 113 ページの『Query Patroller 履歴分析』
- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『SQL Explain 機能』

関連タスク:

- 182 ページの『履歴データが最後に生成された時期を判別する』

関連資料:

- 228 ページの『GENERATE HISTORICAL_DATA』

履歴データが最後に生成された時期を判別する

「履歴分析」フォルダーにあるレポートとグラフには、履歴データが作成されている照会に関する情報だけが含まれます。履歴データを生成するかどうか判別するには、次の項目をチェックすることができます。

- すべての未解決照会に関して最後に履歴データが生成されたのはいつか
- 履歴データが生成されているのはどの照会か

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、表示または編集権限のある HISTORICAL ANALYSIS 特権が存在する

手順:

未解決の照会すべてに対して履歴データが最後に生成された時期を判別するには、次のいずれかの要件に合致する必要があります。

注: DBADM 権限が必要です。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「クエリー・パトローラー・センター」で、オブジェクト・ツリーで「履歴分析」フォルダーを検索する。
2. 「履歴分析」フォルダーを右クリックし、ポップアップ・メニューの「履歴データの生成」をクリックする。「履歴データの生成」ウィンドウが表示されます。
3. 履歴データが最後に生成された日付が「未解決の照会すべてに対して最後に生成された日付データ」フィールドに表示されます。

注: 「履歴データの生成」ウィンドウの「未解決の照会すべてに対して最後に生成された日付データ」フィールドは、特定の期間でデータを生成する選択をした場合には更新されません。未解決の照会すべてに対して履歴データを生成する選択をした場合にだけ更新されます。

4. 「キャンセル」をクリックして「履歴データの生成」ウィンドウをクローズする。

どの照会に履歴データが生成されているのかは、次の方法で判別します。

注: DBADM 権限を持っているか、あるいは演算子プロファイルに、表示または編集権限のある HISTORICAL ANALYSIS 特権が含まれている必要があります。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「クエリー・パトローラー・センター」で、オブジェクト・ツリーで「履歴分析」フォルダーを検索する。
2. 「履歴分析」フォルダーをクリックする。目次ペインに「一定時間の照会アクティビティ」レポートが表示されます。
3. 「一定時間の照会アクティビティ」レポートの「**Explain Run**」列には、照会に対して SQL Explain が実行されたかどうかが表示されます。
 - 照会の「**Explain Run**」列に「**正常実行**」という状況が表示されている場合は、その照会に対して履歴データが作成されていて、その履歴データは「履歴分析」のレポートとグラフに表示されます。
 - 照会に対する **Explain Run** 列に**未実行**の状況が表示されている場合、履歴データはその照会に対して生成されていません。
 - 照会に対する **Explain Run** 列に**異常実行**の状況が表示されている場合、履歴データはその照会に対して生成されず、履歴分析レポートまたはグラフに表示されません。正常に実行されなかった理由を判別するには、`qpuser.log` ファイルを調べてください。
4. オプション: **Explain Run** をクリックすると、「一定期間の照会アクティビティ」レポートの照会をソートすることができます。

関連概念:

- 113 ページの『Query Patroller 履歴分析』

関連タスク:

- 180 ページの『Query Patroller を使用して履歴データを生成する』

Query Patroller を使用して履歴照会の詳細を表示する

履歴照会の詳細を表示すると、照会の SQL、処理時間、ユーザー情報、アプリケーション情報、およびパッケージ情報などの情報を参照できます。特定の履歴照会の詳細を参照することによって、どの照会が完了するまで長くかかるか、また、どの照会が全稼働時間でサブMITされたかに関する情報を調査することができます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、表示または編集権限のある HISTORICAL ANALYSIS 特権が存在する

手順:

履歴照会の詳細を表示するには、次の方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「履歴照会プロパティ」ノートブックをオープンする。

2. サブミッターおよび照会結果に関する SQL ステートメントおよび一般情報を表示するには、「**一般**」タブをクリックする。
3. 照会のタイム・スタンプと処理期間を表示するには、「**時間**」タブをクリックする。
4. パッケージ情報を表示するには、「**パッケージ (Package)**」タブをクリックする。
5. ステートメント、アプリケーション、およびエンド・ユーザーに関する情報を表示するには、「**その他**」タブをクリックする。
6. 「**クローズ**」をクリックして、「履歴照会プロパティ」ノートブックをクローズする。

関連概念:

- 113 ページの『Query Patroller 履歴分析』

関連タスク:

- 172 ページの『Query Patroller を使用して結果表を表示する』
- 169 ページの『Query Patroller を使用して管理対象照会の詳細を表示する』

関連資料:

- 233 ページの『GET QUERY』

Query Patroller を使用して索引の詳細を表示する

Query Patroller の履歴照会を調査している時、その照会で使用された索引に関する詳しい情報と同時に使用されなかった索引の情報についても必要になることがあります。索引の詳細を表示すると、索引が基礎とした列、索引の定義者、索引のタイプ、索引がシステムで必要であるなどを調べることができます。

「索引プロパティ」ウィンドウに表示される情報は、DB2 システム・カタログ表からのものです。SYSCAT.INDEXES 表は、「索引プロパティ」ウィンドウの次のフィールドにある情報のソースです。

- 索引名
- 索引スキーマ
- 表名
- 表スキーマ
- 索引定義者
- 索引タイプ
- ユーザーにより定義された索引
- システムに必要な索引
- コメント

DB2 SYSCAT.INDEXCOLUSE 表は、「索引プロパティ」ウィンドウの「**列**」表にある情報のソースです。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある

- 演算子のプロファイルに、表示または編集権限のある HISTORICAL ANALYSIS 特権が存在する

手順:

索引の詳細を表示するには、次の方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「索引プロパティ」ウィンドウをオープンする。索引の詳細が「索引プロパティ」ウィンドウに表示されます。
2. オプション: 「列」表の列見出しをクリックすると、その見出しでソートすることができます。
3. 「クローズ」をクリックして、「索引プロパティ」ウィンドウをクローズする。

関連概念:

- 113 ページの『Query Patroller 履歴分析』

関連タスク:

- 183 ページの『Query Patroller を使用して履歴照会の詳細を表示する』

システムが照会の履歴データを収集するようにセットアップされている場合、いずれはデータの累積を制御する必要が生じるかもしれません。自分の目的にとって不要になったデータを定期的にパージできます。そのような保守タスクの詳細については、187 ページの『第 22 章 スペースの管理』を参照してください。

第 22 章 スペースの管理

効率的なスペース管理戦略があれば、管理対象照会、履歴照会、および結果表が使用するストレージの量を制御できます。Query Patroller のインストール時に、デフォルトの保守スケジュールが自動的にセットアップされます。システムのワークロードおよび特性に応じて、これらのスケジュールを調整することもできます。

この章では、管理対象照会、履歴照会、および結果表の除去を、手動で行う方法とスケジュールに基づいて行う方法の両方に関する情報を扱います。

照会および結果表に対して Query Patroller 保守スケジュールを設定する

管理対象照会および結果表はスペースを消費するため、定期的に除去する必要があります。管理対象照会および結果表を通常のインターバルで進行状況に基づきページするために、Query Patroller をスケジュールすることができます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が存在する

手順:

照会および結果表の保守スケジュールを設定するには、次の方式のいずれかを使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「Query Patroller システム・プロパティ」ノートブックをオープンする。
2. 「オプション」タブをクリックする。
3. 「管理対象照会設定」の下で「照会の保持時間」フィールドを使用して管理対象照会フォルダーで照会を保持する時間を設定する。照会を無期限に保持するには、フィールドをブランクにしておいてください。
4. 「結果表の保持時間」フィールドを使用して、照会の完了後に結果表を保持する時間を指定する。結果表を無期限に保持するには、フィールドをブランクにしておいてください。

注: 管理対象照会または履歴照会を削除するには、対応する結果表も削除されます。そのため「照会の保持時間」フィールドで指定した時間の長さは、「結果表の保持時間」フィールドで指定された時間以上である必要があります。

5. オプション: 「結果表の表スペース」で、結果表が保管される表スペース名を入力する。デフォルトの DB2 表スペースを使用するには、フィールドをブランクにしておいてください。

6. 「ページ・ジョブのスケジュール」をクリックして、管理対象照会および結果表のページを手動でスケジュールするウィンドウをオープンする。管理対象の照会および結果表のページをスケジュールリングするを参照してください。

注: 管理対象照会を削除しても、履歴分析フォルダーの対応する照会は削除されません。ただし、履歴照会をページし、管理対象照会の下にこの照会が存在する場合、両方からこれが削除されます。

7. 「OK」をクリックして保守スケジュールを設定します。

コマンド行方式:

次のパラメーターを指定して **UPDATE QP_SYSTEM** コマンドを発行してください。

- QUERY_PURGE_PERIOD
- RESULT_PURGE_PERIOD
- RESULT_TABLE_SPACE

注:

1. 照会および結果表のページをスケジュールするには、**QUERY_PURGE_PERIOD** パラメーターと **RESULT_PURGE_PERIOD** パラメーターの両方を、-1 (値が -1 の場合は無制限であることを意味します) 以外の値に設定する必要があります。
2. 照会がページされると、対応する結果表も削除されます。そのため、**QUERY_PURGE_PERIOD** パラメーターの値を、**RESULT_PURGE_PERIOD** パラメーターの値以上に設定する必要があります。設定していないと、**RESULT_PURGE_PERIOD** パラメーターの値の方が大きくても、結果表に関連する照会と同時に結果表もページされます。
3. **UPDATE QP_SYSTEM** コマンドを使用すると、有効なページ・スケジュールが存在する場合に限り、照会および結果表のページのスケジュールをすることができます。照会および結果表のページに対するデフォルトのスケジュールは、インストール時に作成されます。クエリー・パトローラー・センターを使用すると、ページ・スケジュールの変更と削除が可能です。コマンド行からは、このスケジュールの変更も削除もできません。

関連概念:

- 114 ページの『Query Patroller の結果表および結果セット』

関連タスク:

- 190 ページの『管理対象照会および結果表のページをスケジュールする』

関連資料:

- 279 ページの『UPDATE QP_SYSTEM』

履歴照会を管理する

履歴照会は、Query Patroller によって、履歴データを生成するために使用されます。履歴照会はスペースを消費するため、定期的に除去する必要があります。ただし、いったん履歴照会が除去されると、履歴データの生成に使用されることはなくなります。履歴照会を通常のインターバルで進行状況に基づきページするために、Query Patroller をスケジュールすることができます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が存在する

手順:

履歴照会のページをスケジュールするには、次のいずれかの方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「Query Patroller システム・プロパティ」ノートブックをオープンする。
2. 「オプション」タブをクリックする。
3. 「履歴分析」の下で、保管したい照会を「管理対象照会のみ」または「すべての代行受信済み照会」ラジオ・ボタンを選択して指定する。
4. 「履歴分析」の下で「照会の保持時間」フィールドを使用して履歴分析表示で完了した照会を保持する時間を設定する。
5. 「ページ・ジョブのスケジュール」をクリックして、履歴照会ページを手動でスケジュールするウィンドウをオープンする。履歴照会のページをスケジュールリングするを参照してください。

注: 管理対象照会を削除しても、履歴分析フォルダーの対応する照会は削除されません。ただし、履歴照会をページし、管理対象照会の下にこの照会が存在する場合、両方からこれが削除されます。

6. 「OK」をクリックして、履歴照会のページをスケジュールする。

コマンド行方式:

次のパラメーターを指定して **UPDATE QP_SYSTEM** コマンドを発行してください。

- QUERIES_TO_SAVE
- HISTORY_PURGE_PERIOD

注: **UPDATE QP_SYSTEM** コマンドを使用すると、有効なページ・スケジュールが存在する場合に限り、履歴照会のページのスケジュールをすることができます。履歴照会のページに対するデフォルトのスケジュールは、インストール時に作成されます。クエリー・パトローラー・センターを使用すると、ページ・スケジュールの変更と削除が可能です。コマンド行からは、このスケジュールの変更も削除もできません。

関連概念:

- 113 ページの『Query Patroller 履歴分析』

関連タスク:

- 191 ページの『履歴照会のページ・スケジュール』

関連資料:

- 279 ページの『UPDATE QP_SYSTEM』

管理対象照会および結果表のページをスケジュールする

繰り返しの原則で、特定の時刻に実行する管理対象照会および結果表のページをスケジュールすることができます。たとえば、毎月最終日曜日の午前 1:00 で実行するように、管理対象照会および結果表のページをスケジュールすることができます。

注: クエリー・パトローラー・センターからだけ、管理対象照会のページを手動でスケジュール設定することができます。コマンド行を使用して、スケジュールを手動で設定することはできません。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が存在する

注: 演算子ではあるけれども編集権限がない場合には、スケジュールを表示することはできても、このスケジュールを変更することはできません。

手順:

管理対象照会および結果表のページをスケジュールするには、次の方式のいずれかを使用してください。

注: 管理対象照会および結果表の両方のページに同じスケジュールが使用されます。別々のスケジュールを作成する必要はありません。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「管理対象照会ページ・ジョブのスケジュール」ウィンドウをオープンする
2. 管理対象照会をページする頻度を指定するには、「**インターバル**」および「**頻度**」フィールドを使用する。選択したインターバルによっては、「**詳細**」フィールドを使用する必要がある場合もあります。
3. 管理対象照会のページを開始する時期を指定するには、「**日付**」および「**時刻**」フィールドを使用する。
4. 管理対象照会のページ終了日を指定する。終了日がない場合は、「**終了日なし**」チェック・ボックスを選択します。終了日を指定するには、「**日付**」および「**時刻**」フィールドを使用します。
5. オプション: タスクを実行できないようにするには、「**スケジュールの中断**」チェック・ボックスを選択する。
6. 「**追加**」ボタンをクリックして、「**スケジュール・リスト**」にタスクを追加する。
7. 「**OK**」をクリックしてタスクをスケジュールする。

関連概念:

- 114 ページの『Query Patroller の結果表および結果セット』

履歴照会のページ・スケジュール

繰り返しの原則で、特定の時刻に実行する履歴照会のページをスケジュールすることができます。たとえば、毎月最終日曜日の午前 1:00 で実行するように、履歴照会のページをスケジュールすることができます。

注: クエリー・パトローラー・センターからだけ、履歴照会のページを手動でスケジュール設定することができます。コマンド行を使用して、スケジュールを手動で設定することはできません。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が存在する

注: 演算子ではあるけれども編集権限がない場合には、スケジュールを表示することはできても、このスケジュールを変更することはできません。

手順:

履歴照会のページをスケジュールするには、次の方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「履歴分析ページ・ジョブのスケジュール」ウィンドウをオープンする
2. 管理対象照会をページする頻度を指定するには、「**インターバル**」および「**頻度**」フィールドを使用する。選択したインターバルによっては、「**詳細**」フィールドを使用する必要がある場合もあります。
3. 履歴照会のページを開始する時期を指定するには、「**日付**」および「**時刻**」フィールドを使用する。
4. 履歴照会のページ終了日を指定する。終了日がない場合は、「**終了日なし**」チェック・ボックスを選択します。終了日を指定するには、「**日付**」および「**時刻**」フィールドを使用します。
5. オプション: タスクを実行できないようにするには、「**スケジュールの中断**」チェック・ボックスを選択する。
6. 「**追加**」ボタンをクリックして、「**スケジュール・リスト**」にタスクを追加する。
7. 「**OK**」をクリックしてタスクをスケジュールする。

関連タスク:

- 187 ページの『照会および結果表に対して Query Patroller 保守スケジュールを設定する』
- 194 ページの『履歴照会を手動で除去する』

Query Patroller を使用して手動で結果表をドロップする

結果表が消費しているスペースを解放したい場合には、結果表をドロップしてください。次の場合に、結果表が作成されます。

- 照会サブミッターのサブミット設定が、照会のサブミット後にアプリケーションを解放するように指定した場合
- 照会が保留となってから実行された場合
- 照会がバックグラウンドで実行された場合

結果表をドロップするには、次の 3 通りがあります。

- クエリー・パトローラー・センターを使用して、即時に結果表をドロップする。
- クエリー・パトローラー・センターを使用して、ドロップされる結果表をスケジュールする。
- コマンド行を使用して、結果表をドロップする。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある MONITORING 特権が存在する
- ドロップされる結果表を生成した照会のサブミッターである

手順:

結果表をドロップするには、次の方式のいずれかを使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式 #1:

1. 「管理対象照会プロパティ」ノートブックをオープンする。
2. 「結果」タブをクリックする。
3. 「結果表のドロップ」をクリックする。

クエリー・パトローラー・センター方式 #2:

1. 「クエリー・パトローラー・センター」で、「管理対象照会」フォルダーが表示されるまで「モニター」フォルダーを展開する。
2. 「管理対象照会」フォルダーをクリックする。管理対象照会がウィンドウの右側のペイン (内容ペイン) に表示されます。
3. 内容ペインで、結果表をドロップしたい照会を右クリックして、ポップアップ・メニューの「結果表のドロップ」をクリックする。
4. オプション: **Ctrl** ボタンを押したまま、ドロップしたい結果表の照会をクリックして、一度に複数の結果表をドロップすることができます。右クリックして、ポップアップ・メニューの「除去」をクリックしてください。

クエリー・パトローラー・センター方式 #3:

管理対象の照会および結果表のページをスケジュールリングするによって、特定の時刻でドロップされる結果表をスケジュールすることもできます。

コマンド行方式:

REMOVE RESULT コマンドを発行する。

関連概念:

- 114 ページの『Query Patroller の結果表および結果セット』

関連タスク:

- 190 ページの『管理対象照会および結果表のページをスケジュールする』

- 187 ページの『照会および結果表に対して Query Patroller 保守スケジュールを設定する』
- 172 ページの『Query Patroller を使用して結果表を表示する』

関連資料:

- 260 ページの『REMOVE RESULT』

管理対象照会を手動で除去する

Query Patroller から管理対象照会を除去すると、システムから管理対象照会情報も除去します。関連した履歴照会情報は除去されません。結果表がドロップされる管理対象照会に存在する場合、結果表はドロップされます。

管理対象照会を手動で除去せずに、照会をパージするようスケジュールすることもできます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある MONITORING 特権が存在する

手順:

管理対象照会を除去するには、次のいずれかの方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「クエリー・パトローラー・センター」で、「**管理対象照会**」フォルダーが表示されるまで「**モニター**」フォルダーを展開する。
2. 「**管理対象照会**」フォルダーをクリックする。管理対象照会がウィンドウの右側のペイン (内容ペイン) に表示されます。
3. 内容ペインで、除去したい照会を右クリックして、ポップアップ・メニューの「**除去**」をクリックする。
4. オプション: ドロップしたい照会を選択して Ctrl ボタンを押したまま、一度に複数の照会をドロップすることができます。右クリックして、ポップアップ・メニューの「**除去**」をクリックしてください。

コマンド行方式:

REMOVE QUERY_INFO コマンドを発行する。

関連タスク:

- 187 ページの『照会および結果表に対して Query Patroller 保守スケジュールを設定する』
- 194 ページの『履歴照会を手動で除去する』

関連資料:

- 256 ページの『REMOVE QUERY_INFO』

履歴照会を手動で除去する

Query Patroller から履歴照会を除去すると、システムから履歴照会情報も除去します。関連した管理対象照会情報があると、これも除去されます。結果表がドロップされる履歴照会に存在する場合、結果表はドロップされます。

履歴照会を手動で除去せずに、照会をパージするようスケジュールすることもできます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある HISTORICAL ANALYSIS 特権が存在する

手順:

履歴照会を手動で除去するには、次のいずれかの方式を使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「クエリー・パトローラー・センター」で、「**照会**」フォルダーが表示されるまで「**履歴分析**」フォルダーを展開する。
2. 「**照会**」フォルダーをクリックする。履歴分析ツールバーで指定された時刻範囲内で発生した履歴照会が、ウィンドウの右側のペイン (内容ペイン) に表示されます。関心のある時刻範囲を指定するには、履歴分析ツールバーを使用します。
3. 内容ペインで、除去したい照会を右クリックして、ポップアップ・メニューの「**除去**」をクリックする。
4. オプション: Ctrl ボタンを押したまま、ドロップしたい照会を選択して一度に複数の照会をドロップすることができます。右クリックして、ポップアップ・メニューの「**除去**」をクリックしてください。

特定のサブミッターに対する履歴照会を手動で除去するには、次のようにしてください。

1. 「クエリー・パトローラー・センター」で、「**サブミッター**」フォルダーが表示されるまで「**履歴分析**」フォルダーを展開する。「**サブミッター**」フォルダーを展開して、必要な特定のサブミッターにフォルダーでクリックする。サブミッターのフォルダーを展開して、「**照会**」フォルダーを検索してください。
2. 「**照会**」フォルダーをクリックする。履歴分析ツールバーで指定された時刻範囲内で発生したサブミッターの履歴照会が、ウィンドウの右側のペイン (内容ペイン) に表示されます。関心のある時刻範囲を指定するには、履歴分析ツールバーを使用します。
3. 内容ペインで、除去したい照会を右クリックして、ポップアップ・メニューの「**除去**」をクリックする。
4. オプション: Ctrl ボタンを押したまま、ドロップしたい照会を選択して一度に複数の照会をドロップすることができます。右クリックして、ポップアップ・メニューの「**除去**」をクリックしてください。

コマンド行方式:

REMOVE QUERY_INFO_HISTORY コマンドを発行する。

関連タスク:

- 187 ページの『照会および結果表に対して Query Patroller 保守スケジュールを設定する』
- 188 ページの『履歴照会を管理する』
- 193 ページの『管理対象照会を手動で除去する』

関連資料:

- 258 ページの『REMOVE QUERY_INFO_HISTORY』

第 7 部 Query Patroller の調整およびトラブルシューティング

第 23 章 Query Patroller を調整する

時折、照会ワークロードに何らかの問題があることが判明することがあります。以下の表では、発生する可能性のあるいくつかの問題について説明し、状況を改善するために検討できる、考えられるいくつかの原因を取り上げています。

表 10. 照会管理上の問題と考えられる原因のリスト

問題	考えられる原因
保留になっている照会が多すぎる。	サブミッター・プロファイルの最大照会コストの設定 (MAX_COST_ALLOWED) が小さすぎる。
照会がキューに入っている時間が長すぎる、あるいはキューに入る頻度が高すぎる。	サブミッターの照会の最大数の設定 (MAX_QUERIES_ALLOWED)、またはシステムの照会の最大数の設定 (MAX_TOTAL_QUERIES) が小さすぎる。 システムで照会クラスを定義している場合、1 つまたは複数の照会クラスに設定されている照会の最大数 (MAX_QUERIES) が小さすぎるか、あるいは作成されている照会クラスの数が多すぎる可能性があります。
小さな照会の実行が遅すぎる。	サブミッターの管理する最小照会コスト (MIN_COST_TO_MANAGE) の設定が小さすぎる。
スケジュールされているジョブが一晩かかってでも完了しない。	保留照会の実行のための所要時間 (RUN_HELD_DURATION) の設定が小さすぎる。
Query Patroller をインストールした後、速度重視の照会のパフォーマンスに支障をきたしている。	特定のアプリケーションかサブミッターに、Query Patroller の代行受信のう回を許可することを考慮してください。
管理を受けずに実行されている照会が多すぎる。	サブミッターの管理する最小照会コスト (MIN_COST_TO_MANAGE) の設定が大きすぎるか、Query Patroller によって代行受信するようスケジュールされているべき特定のアプリケーションが代行受信されていない。
照会コストの見積りが不正確のように思える。	データベース統計が正確でない。 RUNSTATS が定期的に、かつすべての有効なデータベース変更後に実行されていることを確認する。

関連概念:

- 121 ページの『Query Patroller の構成ロードマップ』
- 129 ページの『照会クラス構成』
- 125 ページの『サブミッター・プロファイルの構成』

関連資料:

- 265 ページの『RUN HELD_QUERY』
- 271 ページの『UPDATE QUERY_CLASS』
- 276 ページの『UPDATE SUBMITTER_PROFILE』
- 280 ページの『Query Patroller のシステムしきい値の設定』

第 24 章 他の DB2 コンポーネントでの Query Patroller の使用

Query Patroller での DB2 ガバナーの使用

Query Patroller の主な機能は、データベース管理者がデータベースに対する照会を管理する作業を支援することです。DB2 ガバナーの主な機能は、管理者がデータベースに対して実行されているアプリケーションを管理する作業を支援することです。

DB2 ガバナーを使用すると、ロックの数、アイドル時間の量、アプリケーションの使用する CPU 量など、リソースに関する限界値を設定できます。DB2 ガバナーを Query Patroller と共に使用することにより、管理制御の機能が大幅に拡張されます。しかし、それらを効率的に使用するためには、その相互作用をよく理解しておく必要があります。

Query Patroller は、1 つのデータベースに対して実行される一連の提携アプリケーションで構成されるシステムです。ガバナーは、他のアプリケーションに対するのと同じ方法でそれらのアプリケーションに対して動作することが可能であるため、ガバナー構成ファイルに規則を指定する際のガイドラインがいくつかあります。

特に重要な点として、Query Patroller で使用されるプロセスをガバナー構成ファイルの規則に含めることは避けてください。Query Patroller がその操作を実行するには、Windows では javaw.exe、java.exe、db2fmp.exe、および qp.exe、また UNIX システムでは java、db2fmp、および qp が使用されます。ガバナーが Query Patroller に対して動作することがないようにするには、それらのプロセスをガバナー構成ファイルに含めないようにしてください。また、デフォルトで全アプリケーションを代行受信することになるような一般的な規則は指定しないようにしてください。DB2 ガバナーが代行受信するアプリケーションのリストを明示的に含めてください。

注: ガバナー構成ファイルには、Query Patroller のプロセスに対して動作する規則以外に、Query Patroller が代行受信されることになるような他の規則を含めることができます。

Query Patroller によって使用されるプロセスを DB2 ガバナーの代行受信から除外できない場合には、ガバナー構成ファイルの規則を作成する際に次のガイドラインに従ってください。

- クエリー・コントローラーは、Windows では javaw.exe と db2fmp.exe、UNIX システムでは java と db2fmp を使用します。それらのプロセスを代行受信することが必要なら、限界値 rowssel と rowsread を、SYSCAT.DBAUTH のうち (DBADMAUTH='Y' かつ GRANTEETYPE='U') であるレコードの数か、(DBADMAUTH='Y' かつ GRANTEETYPE='G') であるレコードの数のいずれか大きい方よりも大きい値に設定してください。それでも DB2 ガバナーがクエリー・コントローラーを代行受信するようであれば、限界値 rowssel と rowsread をさらに高く設定して再試行してください。

- クエリー・パトローラー・センターは Windows では javaw.exe、 java.exe、および db2fmp.exe、また UNIX システムでは java と db2fmp を使用します。それらのプロセスを代行受信することが必要なら、限界値 rowssel と rowsread を、SYSCAT.DBAUTH のうち (DBADMAUTH='Y' かつ GRANTEETYPE='U') であるレコードの数か、(DBADMAUTH='Y' かつ GRANTEETYPE='G') であるレコードの数のいずれか大きい方よりも大きい値に設定してください。さらに、限界値 rowssel と rowsread が、Query Patroller の最大のコントロール表のレコード数より小さいなら、クエリー・パトローラー・センターまたは Query Patroller コマンド行プロセッサに対して DB2 ガバナーが動作することになります。Query Patroller コントロール表のレコード数の最大値は、ほとんど動的なものであり、それを事前に判別する方法はありません。必要なら、限界値 rowssel と rowsread を、現行の最大レコード数よりも高い値に設定するか、または無制限として設定してください。

CPU 使用率やアイドル時間など、その他の限界値による制限も、DB2 ガバナーが Query Patroller プロセスに対して動作する原因になる場合があります。それは、Query Patroller が Query Patroller コントロール表に対して操作を実行するために使用する時間やリソースの量に応じて異なります。それらについても、ハードウェアの能力やデータのサイズに応じて異なるものであり、事前に判別することはできません。必要なら、それらの限界値を、DB2 ガバナーが Query Patroller に対して動作することがないような高い値に設定してください。

Query Patroller のプロセスに対する DB2 ガバナーのアクションによる効果

優先順位 (priority) またはスケジュール (schedule) のアクションが Query Patroller のプロセスに適用される場合、Query Patroller はシステム・リソースが制限された状態で実行を続けます。しかし、Query Patroller プロセスに強制 (force) アクションが適用される場合、プロセスが終了する場合があります。強制アクションのために Query Patroller のプロセスが正常に終了する場合、戻される戻りコードは SQL1224N です。しかし、強制アクションが発行されるより前に db2fmp プロセスが開始されているなら、アプリケーション・エラーになったり DARI プロセスが異常終了 (SQL1131N) したりする場合があります。db2fmp が開始された場合、Query Patroller はそれを停止できません。db2fmp プロセスが正常に実行されるために必要とするデータベース接続を Query Patroller がシャットダウンした後でも、db2fmp プロセスは実行終了を試行します。

db2fmp プロセスについては、アプリケーション開発ガイド: クライアント・アプリケーションのプログラミング を参照してください。

同じサブミッター・アプリケーションに対して Query Patroller と DB2 ガバナーを実行する

Query Patroller と DB2 ガバナーの両方を、同じ照会サブミッター・アプリケーションに対して使用することが可能です。たとえば、DB2 CLP (Windows の場合は db2bp.exe、UNIX システムの場合は db2bp) などのサブミッター・アプリケーションは、ガバナー構成ファイルだけでなく、Query Patroller によって代行受信されるアプリケーションのリストにも含めることができます。

Query Patroller はサブミット時に照会を代行受信するのに対して、DB2 ガバナーは照会実行時にアプリケーションを代行受信します。照会サブミットは照会の実行に先立って発生されるため、Query Patroller は常に DB2 ガバナーより前に照会を代行受信することになります。したがって、Query Patroller が照会を保留にするか、キューに入れた場合、DB2 ガバナーは、その照会をサブミットしたアプリケーションを代行受信する前に、照会が実行されるまで待機する必要があります。

Query Patroller によって代行受信される照会は、サブミット元アプリケーションか、別のアプリケーション (Windows の場合は `qprunquery.exe`、UNIX システムの場合は `qprunquery`) のいずれかによって実行できます。サブミッターのサブミットの設定において、照会の結果が戻されるまでサブミット元アプリケーションがアプリケーションの解放を待つよう指定されている場合、照会を実行するのはサブミット元アプリケーションになります。サブミット元アプリケーションが DB2 ガバナーの構成ファイルに含まれている場合には、DB2 ガバナーが照会実行時にサブミット元アプリケーションを代行受信します。

サブミッターのサブミットの設定において、サブミット元アプリケーションが解放されなければならない、照会の結果を結果表に送らなければならないことが指定されている場合、照会は `qprunquery` によって実行されます。その場合、DB2 ガバナーがアプリケーションを代行受信するのは、`qprunquery` が DB2 ガバナー構成ファイルの中に含まれている場合だけです。

DB2 接続コンセントレーターでの Query Patroller の使用

Query Patroller により照会がキューに入れられると、その照会が実行される時点まで、照会がキューに入っている間、アプリケーションは実行されません。

DB2 接続コンセントレーターがアクティブでない場合、アプリケーションが切断されるまで、どのアプリケーションについてもそれぞれ独自エージェントによってデータベース接続が管理されます。コンセントレーターがアクティブにされている場合、すべてのアプリケーションが 1 つのエージェント・プールを共用し、その中のエージェントがトランザクション境界上にあるアプリケーションの間で切り替えられます。したがって、コンセントレーターが有効で、Query Patroller が照会をキューに入れている場合、照会が実行されるまでそれらのエージェントが結び付けられます。そうすると、使用可能なエージェントのプールが減ることになり、アプリケーションがエージェントのサービスを利用できないため、接続や要求実行ができなくなって DB2 のパフォーマンスに影響を及ぼします。それで、接続コンセントレーターがアクティブの場合、Query Patroller は照会をキューに入れるのではなく、キュー処理がサポートされている照会を拒否し、`sqlcode 29009`、理由コード 6 を戻します。

照会がキューに入れるものとして選択された場合に、それが拒否されないようにするためには、`BLOCK_OPTION` オプションを設定することにより、コンセントレーターがアクティブの場合に Query Patroller が照会を拒否せず実行するように設定できます。このオプションは、`UPDATE QP_SYSTEM` コマンドを使用することによってシステム・レベルで設定するか、または `UPDATE SUBMITTER_PROFILE` コマンドを使用することによってユーザー・レベルで設定できます。`BLOCK_OPTION` は、デフォルトでは拒否 (R) に設定されています。その場合、コンセントレーターがアクティブなら照会はキューに入れられずに拒否されます。コンセントレーター

がアクティブの場合に Query Patroller が照会を拒否しないで実行するように指定するには、BLOCK_OPTION を処理 (P) に設定してください。

たとえば、普通ならコンセントレーターがアクティブの場合に拒否される sample データベースに対する照会を Query Patroller が実行できるようにするには、次のようにして BLOCK_OPTION オプションを P に設定します。

```
qp -d sample -u userid -p password "UPDATE QP_SYSTEM USING BLOCK_OPTION 'P'"
```

普通ならコンセントレーターがアクティブの場合に拒否されるプロファイル STEVED の下でサブミットされる照会を Query Patroller が実行できるようにするには、次のようにして BLOCK_OPTION オプションを P に設定します。

```
qp -d sample -u userid -p password "UPDATE SUBMITTER_PROFILE  
FOR USER'STEVED' USING BLOCK_OPTION 'P'"
```

BLOCK_OPTION の値は、データベースの QP_SYSTEM 表および SUBMITTER_PROFILE 表に格納されます。

QP_SYSTEM の BLOCK_OPTION の設定値は NULL 可能ではありません。
SUBMITTER_PROFILE の BLOCK_OPTION の設定値は NULL 可能です。
QP_SYSTEM とユーザーのサブミッター・プロファイルの両方に対して BLOCK_OPTION が設定されているなら、そのユーザーについてはサブミッター・プロファイルの値が優先されます。その他のすべてのユーザーについては、QP_SYSTEM の BLOCK_OPTION の設定値が適用されます。特定のユーザーについて QP_SYSTEM のほうの BLOCK_OPTION の設定値が適用されるようにするには、そのユーザーの SUBMITTER_PROFILE の BLOCK_OPTION を NULL に設定してください。

第 25 章 Query Patroller バージョン 8 の制約事項

照会のサブミットのための対話モードがない:

Query Patroller バージョン 8 には、照会のサブミットのための対話モードがありません。したがって、Query Patroller バージョン 7 からクエリー・イネーブラー・ダイアログへの相関はありません。クエリー・イネーブラー・ウィンドウでは、照会をスケジュールしておき、後で実行したり、以前実行した照会と同じ SQL ステートメントの照会をサブミットする際に、以前の照会の結果セットからの選択 (select) 操作を実行したりできます。Query Patroller バージョン 8 では、クエリー・パトローラー・センターを使用して、管理者は保留照会のバッチを後の時刻に実行するようにスケジュールでき、ユーザーは照会の結果を表示または保管することができます。

SQL ステートメントと Query Patroller 機能の非互換性:

いくつかのタイプの SQL 照会には、特定の Query Patroller 機能との互換性がありません。これらの照会については、以下の表にリストしています。

表 11. SQL ステートメント・タイプ別の Query Patroller の制約事項

ステートメント・タイプ	代行受信	管理	履歴分析	スケジュール	保留	キュー
SELECT 以外のステートメント (UPDATE、INSERT、DELETE)	する	する	する ¹	しない	しない	する
ホスト変数を含む静的 SQL	する	する	する ¹	しない	しない	しない
ストアード・プロシージャからの SQL 照会	する	する	する ¹	しない	しない	しない
ゼロ以外のネスト照会を含むユーザー定義関数	する	する	する ¹	しない	しない	しない
パラメーター・マーカーまたは特殊レジスターを含む SQL 照会	する	する	する ¹	しない	しない	する
Declared Global Temporary Tables (DGTT) を含む SQL 照会	する	する	しない	しない	しない	する
識別値関数 (IDENTITY_VAL_LOCAL()) またはシーケンス値関数 (seqno()) を含む SQL 照会	する	する	する ¹	しない	しない	しない
暗号化または暗号化解除機能を含む SQL 照会	する	する	する ¹	しない	しない	する

注:

- 履歴分析は、完了状況が「D」(実行済み)である照会に対してだけ実行されます。このタイプの照会がしきい値を超えると、それには完了状況「R」(リジェクトされた)が割り当てられ、その照会は履歴分析には不適格になります。

静止モード:

DB2[®] Universal Database バージョン 8 には、静止モードという新しい保守モードがあります。DB2 が静止モードになっている場合、Query Patroller はすべての照会によってう回されます。

db2qp.result_info 表とデータベースの間の不整合の可能性:

db2qp.result_info 表とデータベース内の結果表の間に不整合が生じる場合があります。この不整合が発生する可能性があるのは、コントロール表を含む表スペースに対し、異なる表スペースに存在する結果表の最後の更新よりも前の時点にさかのぼってロールフォワード・リカバリーが行われた場合です。たとえば、結果表のページを実行してから、コントロール表スペースをリストアし、ページより前の時点までさかのぼってロールフォワードを実行した場合、db2qp.result_info 表には、結果表が存在していないのに、結果表がまだ存在していることを示す情報が含まれます。

db2dqp.track_query_info 表からの SQL ステートメント・テキストを選択するために提供する UDF:

db2dqp.track_query_info 表のステートメント・フィールドのデータ・タイプは BLOB なので、単純な SELECT ステートメントを実行して表から値を検索することはできません。このフィールドを照会するには、db2qp.convertToString 関数を使用して、値を検索用に変換する必要があります。たとえば、この表のステートメント・フィールドからすべての値を選択するには、以下を入力します。

```
select db2qp.convertToString(statement) from db2qp.track_query_info
```

保留照会、キューに入れられた照会、および分析中の照会のタイミングに関する考慮事項:

照会の実行が何らかの理由で遅れた場合 (照会が保留にされたり、キューに入れられたりした場合や、照会がサブミットされてから実行されるまでの間に、照会がアクセスする表が変更または除去された場合など)、予期しない結果やエラーが発生する可能性があります。

照会を分析するとき、その照会に関係する表が、照会が実行されてから分析されるまでの間に変更または除去されると、予期しない結果やエラーが発生する可能性があります。

英語以外の言語用のコマンド行サポート:

コマンド行の使用時に英語以外の文字を適切に表示するには、Query Patroller コマンドを、英語以外の言語用の DB2 CLP ウィンドウで入力する必要があります。

定位置 UPDATE または DELETE ステートメントによる履歴データ生成に関する制限:

定位置 UPDATE または定位置 DELETE ステートメントを含む照会については、照会データを生成できません。

照会のリカバリー:

まれなことではありますが、キューに入れられた照会または実行中の照会が変更された場合に、Query Patroller が新しい状況をただちに記録できないことがあります。普通これが発生するのは、次のようにして異常終了が発生した場合です。

- 予期しない時に DB2 サーバーが終了したか、または **db2stop force** コマンドによってシャットダウンされたが、その時点でキューに入れられた照会や実行中の照会が存在していた場合。

- 予期しない時に Query Patroller サーバーが終了したか、または **qppstop dbname force** コマンドによってシャットダウンされたが、その時点でキューに入れられた照会や実行中の照会が存在していた場合。
- DB2 サーバーと Query Patroller サーバーの両方が予期しない時に終了したが、その時点でキューに入れられた照会や実行中の照会が存在していた場合。これは、停電やハードウェア障害が発生した場合に生じる可能性があります。

Query Patroller サーバーは、起動時および定期的に自動リカバリーを実行します。現在の状況が待機中 (queued) または実行中 (running) の照会があるかどうかを調べ、その状況が正確なものかどうかを確認します。現在の状況が正確ならその照会は普通に処理されます。また、Query Patroller サーバーが終了して再始動した場合には、Query Patroller サーバーの内部データ構造が復元されます。しかし、DB2 サーバーが終了して再始動したり Query Patroller がダウンして照会の状況を更新できなかったため、状況が待機中または実行中である照会が DB2 中にはもう存在していないことが確認された場合、照会に対してリカバリー処理が実行されます。実行されるリカバリー・アクションは、その照会が結果を戻す先がクライアント・アプリケーションか、それとも DB2 結果表かに応じて異なります。

- クライアント・アプリケーションに結果を戻す照会の状況が実行中なら、その状況は不明 (unknown) に変更されます。
- クライアント・アプリケーションに結果を戻す照会の状況が待機中なら、その状況は打ち切り (aborted) に変更されます。
- DB2 結果表に結果を戻す照会の状況が実行中なら、それは自動的に再実行されません。
- DB2 結果表に結果を戻す照会の状況が待機中なら、それは自動的に再びキューに入れられます。

DBCLOB オブジェクトは「結果の表示」ダイアログで表示可能でない:

JDBC の制限のため、DBCLOB オブジェクトは、Query Patroller の「結果の表示」ダイアログ・ウィンドウに表示できません。DBCLOB オブジェクトについては、その代わりに空ストリングがダイアログ・ウィンドウに表示されます。この制限が適用されるのはクエリー・パトローラー・センターの場合だけであり、Query Patroller のコマンド行には適用されません。

大量の照会の表示でのフィルターの適用:

管理対象照会または履歴照会を何百個も表示しようとすると、クエリー・パトローラー・センターの応答時間がかなり長くなる可能性があります。この問題を改善するため、ビューにフィルターを適用することにより、表示する照会の数を制限することをお勧めします。クエリー・パトローラー・センターでフィルターを適用する方法については、「*Query Patroller: インストール、管理、使用法のガイド*」、または DB2 インフォメーション・センターの中の Query Patroller に関する情報を参照してください。

バックグラウンドで実行される照会により発行されるロード:

バックグラウンドで実行される照会の結果は、結果表に格納されます。結果表を生成する照会は、*qprunquery* というプロセスによって実行されます。このプロセスにより結果表が作成され、照会結果をその表に入れるために、カーソルからのロードが発行されます。したがって、結果表を生成する照会には、それ以外の場合のカー

ソルからのロードと同じ制限が適用されます。それらの制限については、「DB2 コマンド・リファレンス」の中の LOAD コマンドについての説明を参照してください。

qprunquery によって実行される各ロードにおいて、*db2diag.log* ファイルの中に項目が入れられます。UNIX オペレーティング・システムにおいては、*INSTANCE/db2dump* ディレクトリーの下サブディレクトリーの中に 1 つ以上のメッセージが作成されます (*INSTANCE* は DB2 のインストール先ディレクトリー)。Windows においては、*diagpath* データベース構成パラメーターで指定されるディレクトリーの下サブディレクトリーの中に、1 つ以上のメッセージが作成されません。メッセージ・ファイル・サブディレクトリーの名前は、ロード操作の詳細に基づいて生成されます。たとえば、メッセージ・ファイル・サブディレクトリーは次のような名前で作成されます。

```
qpTbLoad_SAMPLE_349_2003-05-21-16.51.32
```

ここで、

- qpTbLoad は、それが **qprunquery** によって実行された LOAD コマンドによるメッセージ・ファイルであることを示しています。
- SAMPLE はデータベースの名前です。
- 349 は、そのロードが開始された照会の ID です。
- 2003-05-21-16.51.32 は、そのロードの開始直前のタイム・スタンプです。

このサブディレクトリーに含まれるメッセージ・ファイルのファイルは、たとえば次のようになります。

```
qpTbLoad_SAMPLE_349_2003-05-21-16.51.32.MSG.*
```

注: 複数区画のデータベースの場合、LOAD コマンドによって複数のメッセージ・ファイルが作成され、各ファイル名にそれぞれ異なるファイル拡張子が付けられます。

ロードが正常に完了すると、メッセージ・ファイルは削除されます。ロードが失敗した場合は、問題判別のため、メッセージ・ファイルは削除されません。

並行して実行可能な同時ロードの数には制限があります。その制限を超えると、照会が打ち切れ、*qpdiag.log* ファイルにエラー SQL6555 が記録されます。このエラーが発生した場合、レジストリー変数 *DB2ATLD_PORTS* によって指定される範囲を変更することによって解決できます。このレジストリー変数は、一度に可能な並行ロードの数を決定するためのものです。実際のシステムに必要なポートのおよその数を計算するには、まず、一度に実行する必要があるロードの最大数 (*qprunquery* およびその他のロード操作によって発行されるものを含む) を判別します。その数に、実際の環境での物理区画当たりの論理区画の数を乗算します。それに 25% を加えてください。

DB2ATLD_PORTS レジストリー変数を設定するには、次のコマンドを発行します。

```
db2set DB2ATLD_PORTS=num1:num2
```

ただし、 $num1 < num2$ です。

Query Patroller がデフォルトで使用するポートは、 50000 から 56000 までの範囲の 6000 個のポートです。 DB2ATLD_PORTS はその値をオーバーライドします。

クエリー・コントローラーまたはクエリー・パトローラー・センターでのメモリー不足エラー:

Query Patroller が大量の照会を管理している場合、クエリー・コントローラーまたはクエリー・パトローラー・センターが実行されているなら、マシンに十分なメモリーがあるにもかかわらずメモリー不足のエラーになる場合があります。使用可能なメモリーをもっと利用できるようにするため、 java ヒープ領域関連の環境変数をデフォルトのレベルより大きい値に設定することができます。

更新する環境変数は QP_INIT_JAVA_HEAP_SIZE と QP_MAX_JAVA_HEAP_SIZE です。これらの変数が設定されていない場合のデフォルト値は、それぞれ 32 mb および 512 mb です。

関連概念:

- 「フェデレーテッド・システム・ガイド」の『フェデレーテッド・システム』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『QUIESCE コマンド』

第 8 部 付録

付録 A. Query Patroller のコマンド

Query Patroller のコマンド行サポート

Query Patroller のコマンドは、コマンド行ウィンドウから、先頭にキーワードの `qp` を付けて呼び出すことができます。Query Patroller コマンドを実行するための汎用構文について、以下で説明します。

注: 英語以外の言語の場合、Query Patroller コマンドは、正しいコード・ページを適用するために DB2 CLP ウィンドウから実行する必要があります。

コマンド構文:

```
qp [-u username] [-p password] [-d database] qp-command
```

コマンド・パラメーター:

-u username

データベースに接続して Query Patroller のコマンドを実行するために使用するユーザー ID `username` を指定します。

-p password

ユーザー名の認証に使用するパスワードを指定します。パスワードを省略すると、ユーザーに入力を求めるプロンプトが出ます。

-d database

コマンドの実行対象になるデータベースを示します。

qp-command

実行する Query Patroller のコマンド・ストリングを指定します。

例:

次のコマンドは、SAMPLE データベースに対して実行中の照会 854 を取り消します。 `qp -d sample cancel query 854`

以下のコマンドは、「testuser」という `username` を使用して発行され、TESTDB データベースに対して定義されているすべての照会クラスをリストします。 `qp -u testuser -p testpw -d testdb list query_classes`

使用上の注意:

1. Query Patroller のコマンドのリストを表示するには、次のいずれかのコマンドを入力します。

```
qp -d db-name ?
```

または

```
qp -d db-name help
```

`db-name` はデータベースの名前です。

この Query Patroller コマンドが実行されているクライアントがリモート・クライアントなら、次のようにして、ユーザーとパスワードのオプションも指定する必要があります。

```
qp -d db-name -u user_id -p password ?
```

または

```
qp -d db-name -u user_id -p password help
```

2. 対応する SQL タイプが char または varchar であるパラメーターはすべて、単一引用符で囲まなければなりません。パラメーター値そのものに単一引用符が含まれている場合は、エスケープ文字が必要です。たとえば、Mike O'Connell という username は、'Mike O"Connell' と指定する必要があります。
3. UNIX プラットフォームでは、qp コマンド・ストリングに単一引用符が含まれている場合、qp コマンド全体を二重引用符で囲む必要があります。たとえば、testuser 用の新しいサブミッター・プロファイルを作成する場合は、次のコマンドを入力します。

```
qp -d wsdb "add submitter_profile 'TESTUSER' using default"
```
4. 既存の接続がない場合は、コマンドが実行される時にデータベース接続が確立されます。

関連概念:

- 4 ページの『Query Patroller のコンポーネント』

ADD OPERATOR_PROFILE

OPERATOR_PROFILE 表で定義された Query Patroller 演算子プロファイルのセットに、新しい演算子プロファイルを追加します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

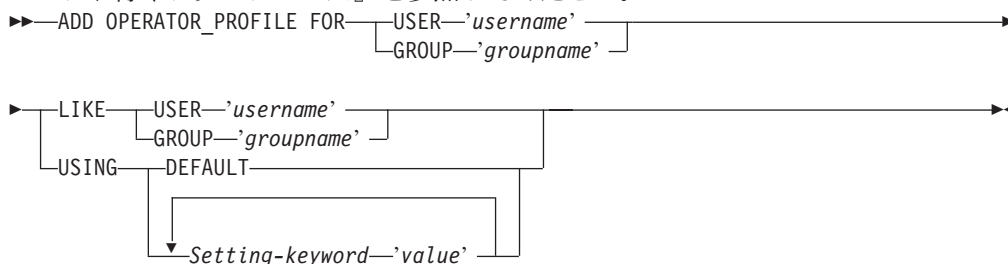
- DBADM 権限がある

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。



コマンド・パラメーター:

USER username

作成する演算子プロファイルのユーザー名を指定します。ユーザー ID username は、DB2 許可 ID としても存在している必要があります。

GROUP groupname

作成する演算子プロファイルのグループ名を指定します。グループ名は DB2 ユーザー ID でなければならず、オペレーティング・システムまたは Kerberos レベルの既存の ID でなければなりません。

DEFAULT

すべてのパラメーターについてデフォルト値が指定された演算子プロファイルを作成することを指定します。デフォルト値を持つ個々のパラメーターについては、DEFAULT を値として指定してパラメーターを入力すれば、そのパラメーターをデフォルトに設定できます。たとえば、ユーザー A の MONITORING 特権をデフォルト値に設定する場合は、次のように入力します。

```
qp -d sample "ADD OPERATOR_PROFILE FOR USER 'USERA' USING
MONITORING DEFAULT"
```

LIKE USER username

新しい演算子プロファイルが、USER username の演算子プロファイルと同じ設定を持つよう指定します。

LIKE GROUP groupname

新しい演算子プロファイルが、 GROUP groupname の演算子プロファイルと同じ設定を持つよう指定します。

Setting-keyword

CONFIGURATION

演算子に CONFIGURATION 特権の権限レベルを割り当てることを指定します。

- E** 演算子が Query Patroller キュー・クラスとシステム設定を追加、編集、および表示することを許可します。
- V** 演算子が Query Patroller 照会クラスとシステム設定を表示することを許可します。
- N** 演算子が Query Patroller 照会クラスとシステム設定を表示できないようにします。これはデフォルト値です。

HISTDATA

演算子に HISTORICAL DATA 特権の権限レベルを割り当てることを指定します。

- E** 演算子が履歴データを表示および除去することを許可します。

注: 履歴データを生成するには、DBADM 権限が必要です。
- V** 演算子が履歴データを表示することを許可します。
- N** 演算子が履歴データを表示または除去できないようにします。これはデフォルト値です。

MONITORING

演算子に MONITORING 特権の権限レベルを割り当てることを指定します。

- E** 演算子が照会を表示および管理することを許可します。これには、管理対象の照会の状況のモニター、除去、および変更、照会の詳細の表示、および結果表の削除を行えるということが含まれます。
- V** 演算子が Query Patroller で管理されている照会の詳細を表示することを許可します。
- N** その演算子が照会を表示または管理できないようにします。これはデフォルト値です。

USERADMIN

演算子に USER ADMINISTRATION 特権の権限レベルを割り当てることを指定します。

- E** 演算子が Query Patroller の演算子プロファイルとサブミッター・プロファイル、および他のユーザーのサブミット設定を編集および表示することを許可します。
- V** 演算子が Query Patroller の演算子プロファイルとサブミッ

ター・プロファイル、および他のユーザーのサブミット設定を表示することを許可します。

- N** 演算子が Query Patroller の演算子プロファイルとサブミッター・プロファイル、または他のユーザーのサブミット設定を編集または表示できないようにします。これはデフォルト値です。

SUSPENDED

この演算子プロファイルの特権が中断しているかどうかを示します。

- N** この演算子プロファイルの特権は中断していません。これはデフォルト値です。

- Y** この演算子プロファイルの特権は中断しています。

例:

以下のコマンドは、サンプル・データベース上にグループ HELPDESK 用の演算子プロファイルを作成します。helpdesk グループはユーザーの管理と照会の管理を行います。システム設定を表示または編集したり、履歴データを表示したりする必要はありません。helpdesk グループの演算子プロファイルは、編集権限を含むモニター特権と、編集権限を含むユーザー管理特権をメンバーに与えます。

```
qp -d sample "ADD OPERATOR_PROFILE FOR GROUP 'HELPDESK' USING HISTDATA 'N'
CONFIGURATION 'N' MONITORING 'E' USERADMIN 'E' SUSPENDED 'N'"
```

使用上の注意:

1. データベースに対する DBADM 権限を付与されたユーザーについては、演算子プロファイルを作成する必要はありません。そのようなユーザーは、すでに最大レベルの演算子権限特権を付与されているため、演算子プロファイルを追加すると重複することになります。また、DBADM 権限を付与されているユーザーに対して演算子プロファイルを作成することは、間違いの原因になりかねません。というのは、そのプロファイルに関連付けられている演算子特権にどんな制限があるとしても、そのユーザーは Query Patroller のあらゆるタスクを自動的に実行できるからです。

ADD QUERY_CLASS

データベースに対して定義されている照会クラスのリストに、新しい照会クラスを追加します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶—ADD QUERY_CLASS—USING—————▶  
▶—MAX_QUERIES—max-number-of-queries—MAX_COST—max-query-cost————▶  
▶  
┌DESCRIPTION—'description' ─┐
```

コマンド・パラメーター:

MAX_QUERIES max-number-of-queries

この照会クラスで同時に実行できる照会の最大数。実行照会のこのしきい値に達すると、この照会クラスに対する追加の照会は、リソースが使用可能になるまでキューに入れられます。値は 0 より大きくなければならず、かつ Query Patroller のシステム設定で指定された MAX_TOTAL_QUERIES の値以下でなければなりません。

MAX_COST max-query-cost

この照会クラスが受け入れる、単一の照会に対する最大コスト。値は、Query Patroller のシステム設定で指定された MAX_TOTAL_COST の値以下でなければなりません。

注: システムで定義されているすべての照会クラスには、別個の MAX_COST の値が必要です。

DESCRIPTION description

照会クラスの説明を指定します。この説明は、256 文字以下で、単一引用符で囲まれていなければなりません。このパラメーターは NULL 可能です。

例:

以下の例では、SAMPLE データベース用の新しい照会クラスを作成します。この照会クラスでは、最大で 10 の照会が同時に実行でき、1 つの照会の最大サイズは 1000 timeron です。

```
qp -d sample "ADD QUERY_CLASS USING MAX_QUERIES 10 MAX_COST 1000  
DESCRIPTION 'This query class runs small sales queries.'"
```

使用上の注意:

1. 照会クラスは、最大で 1 つのシステムに 99 個作成できます。
2. 照会クラスは、Query Patroller が開始している間に、作成、除去または変更できます。ただし、この変更は、Query Patroller が停止して再始動するまでは反映されません。

関連概念:

- 112 ページの『Query Patroller 照会クラス』
- 129 ページの『照会クラス構成』

関連タスク:

- 142 ページの『Query Patroller の照会クラスを作成する』

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 255 ページの『REMOVE QUERY_CLASS』
- 234 ページの『GET QUERY_CLASS』
- 241 ページの『LIST QUERY_CLASSES』
- 271 ページの『UPDATE QUERY_CLASS』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』
- 252 ページの『qpstart - Query Patroller の開始』
- 253 ページの『qpstop - Query Patroller の停止』

ADD SUBMISSION_PREFERENCES

指定されたサブミッターのサブミット設定ファイルを作成します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

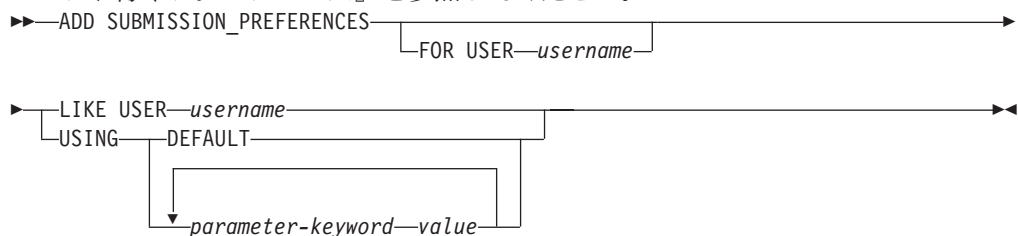
- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が組み込まれている
- 作成するサブミット設定ファイルの所有者である

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。



コマンド・パラメーター:

USER username

作成するサブミット設定ファイルを所有するサブミッターの `username` を指定します。 `username` が指定されていない場合は、現行のログイン ID が使用されます。ユーザー ID `username` は、DB2 許可 ID としても存在している必要があります。

LIKE USER username

新しいサブミット設定プロファイルが、USER `username` のサブミット設定プロファイルと同じ設定を持つよう指定します。

DEFAULT

このユーザーが、デフォルトのサブミット設定 (PUBLIC に割り当てられているサブミット設定) を使用することを指定します。

parameter-keyword value

以下のパラメーターは、このコマンドを使用して設定することができます。

SUBMITTER_PROFILE_NAME profile-name

SUBMITTER_PROFILE_TYPE profile-type

サブミッターが USER タイプのプロファイルを持っていない場合に、しきい値などのサブミッターの設定を設定するために使用するグループ・プロファイルを指定します。

SUBMITTER_PROFILE_TYPE の値は「group」でなければなりません。

ん。このサブミッターに対して複数のグループ・プロファイルが存在し、ここでグループ・プロファイルが指定されていない場合、照会はリソースしきい値が最も小さいグループ・プロファイルを使用してサブミットされます。

RESULT_EXCEEDED_ACTION

結果表に格納する照会結果が、サブミッターのプロファイルで指定されている最大結果行数を超える場合に行う処置を指定します。

- 'A' 結果セットが、サブミッターのプロファイルで定義されている限度より長い場合は、結果表に結果を格納しないことを指定します。このオプションはデフォルトです。
- 'T' 結果セットがサブミッター・プロファイルに定義されている限度よりも長い場合、切り捨てられた結果が結果表に保管されることを指定します。

RESULT_ACCESSIBILITY

照会結果を含む結果表を、サブミッター以外のユーザーも使用できるようにするかどうかを指定します。

- 'O' OTHER_GRANTEES パラメーターの値にリストされた DB2 ID が、結果表にアクセスできるようにすることを指定します。リストされている DB2 ID は、照会がサブミットされたデータベースへのアクセスを持っている必要があります。
- 'S' 結果表へのアクセスを、照会のサブミッターに限定することを指定します。このオプションはデフォルトです。

OTHER_GRANTEES grantees

結果表にアクセスできる DB2 ユーザー ID またはグループ ID を指定します。最大 1024 文字の英数字を使用することができます。複数の ID はコンマで区切る必要があります。

RESULT_DESTINATION result-destination-id

照会結果が戻るまで、サブミットを行うアプリケーションを待たせるか、次のアクティビティーのために解放するかを指定します。

- 'A' 照会をサブミットしたアプリケーションが、Query Patroller が照会を管理する間、結果セットが戻されるのを待機することを指定します。このオプションが選択されている場合、照会をサブミットしたアプリケーションは、結果セットが戻されるまで応答しなくなります。このオプションはデフォルトです。
- 'T' 結果セットを DB2 表に格納することを指定します。照会がサブミットされると、照会をサブミットしたアプリケーションは、その後の処理のために解放されます。

EMAIL_ADDRESSES email-addresses

このサブミッターがサブミットした照会に関する通知を受け取るための、1 つまたは複数の E メール・アドレスを指定します。

注: この通知は、QP_SYSTEM 設定で E メール通知が有効になっている場合にのみ行われます。

このパラメーターの値は、最大で 1024 文字です。複数の E メール・アドレスはコンマで区切る必要があります。

関連概念:

- 161 ページの『Query Patroller 照会サブミット設定』

関連タスク:

- 161 ページの『別のサブミッターに対して照会サブミット設定を設定する』
- 329 ページの『独自の照会サブミット設定を設定する』

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 235 ページの『GET SUBMISSION_PREFERENCES』
- 242 ページの『LIST SUBMISSION_PREFERENCES』
- 273 ページの『UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』
- 262 ページの『REMOVE SUBMISSION_PREFERENCES』

ADD SUBMITTER_PROFILE

SUBMITTER_PROFILE 表に新しいサブミッター・プロファイルを追加します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

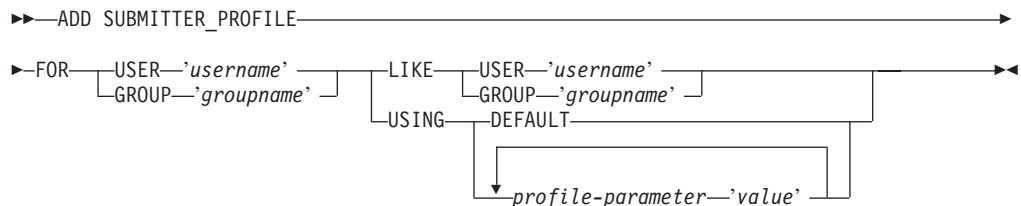
- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。



コマンド・パラメーター:

USER username

プロファイルと関連するユーザーの名前を指定します。ユーザー ID *username* は、DB2 許可 ID としても存在する必要があります。

GROUP groupname

プロファイルに関連するグループの名前を指定します。指定するグループは DB2 グループ ID でなければならず、オペレーティング・システム・レベルまたは Kerberos レベルのグループとして存在していなければなりません。

USING DEFAULT

すべてのパラメーターにデフォルト値が指定されたサブミッター・プロファイルを作成することを指定します。デフォルト値を持つ個々のパラメーターについては、DEFAULT を値として指定してパラメーターを入力すれば、そのパラメーターをデフォルトに設定できます。たとえば、USERA の PRIORITY をデフォルト値に設定する場合は、次のように入力します。

```
qp -d sample "ADD SUBMITTER_PROFILE FOR USER 'USERA' USING PRIORITY
DEFAULT"
```

LIKE USER username

新しいサブミッター・プロファイルが、USER *username* のサブミッター・プロファイルと同じ設定を持つよう指定します。

LIKE GROUP groupname

新しいサブミッター・プロファイルが、GROUP *groupname* のサブミッター・プロファイルと同じ設定を持つよう指定します。

profile-parameter

プロファイルに割り当てるパラメーター値を指定します。以下のパラメーターを設定できます。

PRIORITY priority

このプロファイル下でサブミットされる照会に割り当てる優先順位を指定します。このパラメーターの値が大きいく程、サブミッターの照会に割り当てられる優先度は高くなります。

- 値は 0 から 999 の整数でなければなりません。
- デフォルト値は 500 です。

MAX_QUERIES_ALLOWED max-queries

サブミッターが同時に実行できる照会の最大数を指定します。この制限に達した後サブミットされた照会は、サブミットされている他の照会が完了するまで、キューに入れられた状態になります。グループ用のサブミッター・プロファイルを作成しているときは、このパラメーターに設定されている値が各ユーザーに適用されることに留意してください。たとえば、グループ A のこの値が 10 に設定されている場合、グループ A に属する各ユーザーには、同時に 10 の照会を実行する権限があります。

- 「-1」の値は、このプロファイルを持つユーザーが、無制限数の照会を同時に実行できることを示します (ただし、QP_SYSTEM 表で指定された MAX_TOTAL_QUERIES の値まで)。
- このパラメーターのデフォルト値は 100 です。

MAX_RESULT_ROWS max-number-of-result-rows

このプロファイル下でサブミットされる単一の照会あたりの、結果表に格納される結果行の最大数を指定します。この制約を受けるのは、結果が結果表に格納される照会のみです。

- 「-1」の値は、このプロファイルを持つユーザーが、結果セット全体に順応するために必要な数の行を含む結果を格納できることを示します。
- このパラメーターのデフォルト値は 1,000,000 行です。

MAX_COST_ALLOWED max-query-cost

このプロファイル下のサブミッターあたりの最大照会コストを指定します。このプロファイル下でサブミットされる照会の見積りコストがこの値を超える場合、その照会は保留状態にされます。

- 「-1」の値は、このプロファイルを持つユーザーが任意のサイズの照会を実行できることを示します (ただし QP_SYSTEM 表で指定された MAX_TOTAL_COST の値まで)。
- このパラメーターのデフォルト値は 10,000 です。

MIN_COST_TO_MANAGE min-query-cost

Query Patroller で管理される照会の最小コストを指定します。見積りコストがこの値よりも小さい照会は、Query Patroller によって管

理されません。QP_SYSTEM 表の QUERIES_TO_SAVE パラメーターの値が A (すべての照会) に設定されていれば、この最小コストに満たない照会にも、履歴分析のためのトラッキングは行われません。デフォルト値は 1000 です。

ACCOUNT_ID account-id

アカウントのトラッキングのために使用する英数字の ID を指定します。最大で 128 文字まで指定できます。このパラメーターを使用して、サブミッターを論理グループにソートして使用コストをトラッキングすることができます。このパラメーターは NULL 可能です。

SUSPENDED Y/N

サブミッターに、照会のサブミットを禁止するかどうかを指定します。このパラメーターのデフォルト値は「N」です。このパラメーターの文字値は、単一引用符で囲む必要があります。

INTERCEPT Y/N

このサブミッターによってサブミットされた照会を Query Patroller が代行受信または管理するよう指定します。照会が代行受信されない場合、Query Patroller はその照会のコストの計算や、履歴分析のためのその照会のトラッキングは行いません。このパラメーターのデフォルト値は「Y」です。このパラメーターの文字値は、単一引用符で囲む必要があります。

例:

以下の例は、MARKETING グループが SALES データベースを使用するためのサブミッター・プロファイルを追加します。このグループのユーザーは大規模な照会をサブミットする傾向があるので、このグループに対して定義するプロファイルでは、大規模な見積りコストを持つ照会を許可し、結果表に多数の結果行が格納されることを許可しています。また、このグループのユーザーは、一度にそれほど多数の照会はサブミットしない傾向があるので、MAX_QUERIES_ALLOWED の値は 100 に設定しています。このプロファイルの残りの設定は、デフォルト値のままにしています。

```
qp -d sales "ADD SUBMITTER_PROFILE FOR GROUP 'MARKETING' USING
MAX_QUERIES_ALLOWED 100 MAX_RESULT_ROWS 10000000000 MAX_COST_ALLOWED
10000000"
```

使用上の注意:

1. 特定のサブミッター・プロファイルのすべての設定を印刷または表示する場合は、GET SUBMITTER_PROFILE コマンドを使用します。
2. データベースに対して現在定義されているすべてのサブミッター・プロファイルをリストする場合は、LIST SUBMITTER_PROFILES コマンドを使用します。

関連概念:

- ヘルプ: Query Patroller の『サブミッター・プロパティ — 概要』
- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』
- 99 ページの『シナリオ: サブミッター・プロファイルを構成することによって照会サブミッターの要件を管理する』

- 125 ページの『サブミッター・プロファイルの構成』

関連タスク:

- 156 ページの『ユーザーおよびグループ用のサブミッター・プロファイルを作成する』

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 263 ページの『REMOVE SUBMITTER_PROFILE』
- 236 ページの『GET SUBMITTER_PROFILE』
- 243 ページの『LIST SUBMITTER_PROFILES』
- 276 ページの『UPDATE SUBMITTER_PROFILE』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

CANCEL QUERY

指定された照会を取り消します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある MONITORING 特権が組み込まれている
- 取り消される照会のサブミッターである

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

▶—CANCEL QUERY—*query-id*—▶

コマンド・パラメーター:

QUERY *query-id*

取り消される照会の ID を指定します。

関連資料:

- 233 ページの『GET QUERY』
- 238 ページの『LIST QUERIES』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

GENERATE HISTORICAL_DATA

TRACK_QUERY_INFO 表からデータを収集し、このデータに対して SQL Explain 機能を実行して、結果を QUERY_ANALYSIS 表に追加します。これらの結果は、クエリー・パトローラー・センターで履歴分析のレポートとグラフを生成するために使用されます。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶▶ GENERATE HISTORICAL_DATA [STOP] [FROM START—start-time—END—end-time]
```

コマンド・パラメーター:

STOP 履歴データの生成を停止します。このオプションを指定した場合、停止コマンドが発行されたことを示す更新が QP_SYSTEM コントロール表に対して加えられます。履歴データ生成プログラムが実行されると、停止コマンドが発行されたかどうかを判断するために、照会 20 個ごとに QP_SYSTEM 表が調べられます。停止コマンドが発行されると、履歴データの生成は停止します。

FROM START *start-time* END *end-time*

start-time から *end-time* までの間のデータベース・アクティビティーに関して履歴データを生成することを指定します。 *start-time* と *end-time* の値の形式は YYYY-MM-DD HH24:MI:SS です。ただし、

- YYYY は、年を示す 4 桁の数値です。
- MM は、月を示す 1 から 12 までの 2 桁の数値です (1 月は 01)。
- DD は、日付を示す 1 から 31 までの 2 桁の数値です。
- HH24 は、時刻の時を示す 00 から 24 までの数値です。

注: 時の値が 24 の場合、分と秒の値はいずれも 00 でなければなりません。

- MI は、分を示す 00 から 59 までの 2 桁の数値です。
- SS は、秒を示す 00 から 59 までの 2 桁の数値です。

使用上の注意:

1. このコマンドの結果は、クエリー・パトローラー・センターの履歴分析のレポートとグラフの中に表示されます。

2. 履歴データ生成プログラムは、可能な限りデータベースの使用率が最低になる時間に実行してください。このコマンドをオフピーク時に実行することにより、データベースのパフォーマンスに影響を与える危険を最小限にとどめることができます。
3. `GENERATE_HISTORICAL_DATA` コマンドを定期的に行うことをお勧めします。それにより、データを一度に収集する照会の数を少なくすることができます。

関連資料:

- 279 ページの『`UPDATE QP_SYSTEM`』
- 285 ページの『履歴データ収集設定』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』
- 258 ページの『`REMOVE QUERY_INFO_HISTORY`』

FILE RESULT

指定された照会の結果を、指定されたファイルに送信します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 照会をサブミットしたサブミッターである。
- (サブミッターのサブミット設定で指定されている) このユーザーによってサブミットされた照会の結果へのアクセスを付与されている。

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

►►FILE RESULT FOR—QUERY—*query-id*—TO—*filepath*—◄◄

コマンド・パラメーター:

QUERY *query-id*

ファイルに結果を保存する照会の ID。

注: 結果表に格納されている結果だけを保存できます。

TO *filepath*

保存する照会結果の宛先であるファイルへの完全修飾パス名。

使用上の注意:

1. 照会の結果を保管する際、BLOB 列の値は保管されません。それは、BLOB というキーワードで置き換えられます。CLOB の値のサイズが 32K より大きい場合、それは切り捨てられます。

関連資料:

- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

GET OPERATOR_PROFILE

指定された Query Patroller の演算子プロファイルの設定を検索します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、表示または編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が存在する

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶▶ GET OPERATOR_PROFILE FOR [USER='username' | GROUP='groupname'] ◀◀
```

コマンド・パラメーター:

USER *username*

検索する演算子プロファイルを持つユーザーの名前を指定します。ユーザー ID *username* は、DB2 許可 ID としても存在している必要があります。

GROUP *groupname*

検索する演算子プロファイルを持つグループの名前を指定します。このグループ名は、DB2 許可 ID としても存在している必要があります。

例:

以下のコマンドは、TESTDB データベースのユーザー *jsmith* のプロファイル設定を検索します。

```
qp -d testdb "GET OPERATOR_PROFILE FOR USER 'JSMITH'"
```

関連概念:

- 147 ページの『Query Patroller 演算子』

GET QP_SYSTEM

Query Patroller 対応データベースのシステム設定を検索します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集または表示権限のある CONFIGURATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

▶▶—GET QP_SYSTEM—◀◀

関連概念:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『Query Patroller のシステム・プロパティ — 概要』

GET QUERY

指定された照会の詳細を検索します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、表示または編集権限のある MONITORING 特権が存在する
- 検索される照会のサブミッターである

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶ GET QUERY query-id [SHOW FULL QUERY]
```

コマンド・パラメーター:

query-id

検索する照会の ID を指定します。

SHOW FULL QUERY

全照会テキストが表示または印刷されるよう指定します。このキーワードが指定されていない場合、デフォルトでは、照会テキストの最初の 1KB のみが戻されます。

関連資料:

- 227 ページの『CANCEL QUERY』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

GET QUERY_CLASS

指定された Query Patroller の照会クラスの設定を検索します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、表示または編集権限のある CONFIGURATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

▶▶ GET QUERY_CLASS *query-class-id* ◀◀

コマンド・パラメーター:

query-class-id

検索する照会クラスの ID。

関連概念:

- 112 ページの『Query Patroller 照会クラス』

GET SUBMISSION_PREFERENCES

指定された Query Patroller ユーザーのサブミット設定を検索します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、少なくとも表示権限がある USER ADMINISTRATION 特権が存在する
- 検索されるサブミット設定の所有者である

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶▶ GET SUBMISSION_PREFERENCES ───────────────────────────────────▶▶  
└──┬──FOR──USER──'username'──┘
```

コマンド・パラメーター:

FOR username

検索されるサブミット設定を持つユーザーの名前。ユーザー ID *username* は、DB2 許可 ID としても存在している必要があります。これが指定されていない場合は、現行のユーザーに関連したサブミット設定が戻されます。

使用上の注意:

1. 指定されたユーザー名に対してサブミット設定が定義されていない場合、このコマンドはデフォルトの PUBLIC サブミット設定の値を戻します。

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 242 ページの『LIST SUBMISSION_PREFERENCES』
- 273 ページの『UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES』
- 220 ページの『ADD SUBMISSION_PREFERENCES』
- 262 ページの『REMOVE SUBMISSION_PREFERENCES』

GET SUBMITTER_PROFILE

指定された Query Patroller のサブミッター・プロファイルの設定の詳細を検索します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集または表示権限のある USER ADMINISTRATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶▶ GET SUBMITTER_PROFILE FOR 

|       |            |
|-------|------------|
| USER  | 'username' |
| GROUP | 'groupnam' |

 ▶▶
```

コマンド・パラメーター:

USER username

検索するサブミッター・プロファイルを持つユーザーの名前を指定します。ユーザー ID *username* は、DB2 許可 ID としても存在している必要があります。

GROUP groupname

検索するサブミッター・プロファイルを持つグループの名前を指定します。グループ名は DB2 許可 ID としても存在していなければなりません。

関連概念:

- 151 ページの『Query Patroller サブミッター・プロファイル』

関連タスク:

- ヘルプ: Query Patroller の『照会サブミッター・プロファイルを表示する』

関連資料:

- 223 ページの『ADD SUBMITTER_PROFILE』
- 263 ページの『REMOVE SUBMITTER_PROFILE』
- 243 ページの『LIST SUBMITTER_PROFILES』
- 276 ページの『UPDATE SUBMITTER_PROFILE』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

LIST OPERATOR_PROFILES

すべての Query Patroller の演算子プロファイルの設定、またはあるデータベースの指定された数の演算子プロファイルの設定をリストします。リストは、プロファイル名に従ってアルファベット順にソートされます。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、表示または編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が存在する

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶▶—LIST OPERATOR_PROFILES—▶▶  
    └─SHOW—┬─ALL—┬──────────────────────────┐  
              └─number-of-profiles-to-list—┘
```

コマンド・パラメーター:

SHOW ALL

データベースに対して現在定義されているすべての演算子プロファイルをリストするよう指定します。これがデフォルトの動作です。

SHOW number-of-profiles-to-list

リストされる演算子プロファイルの最大数を指定します。値は正の整数でなければなりません。

使用上の注意:

1. 何もパラメーターを指定しないで LIST OPERATOR_PROFILES コマンドを入力すると、そのシステムのすべての演算子プロファイルが表示されます。

関連概念:

- ヘルプ: Query Patroller の『Query Patroller のシステム・プロパティ — 概要』

LIST QUERIES

指定されたデータベースの照会をリストします。このリストは、照会 ID に従って降順で表示されます。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

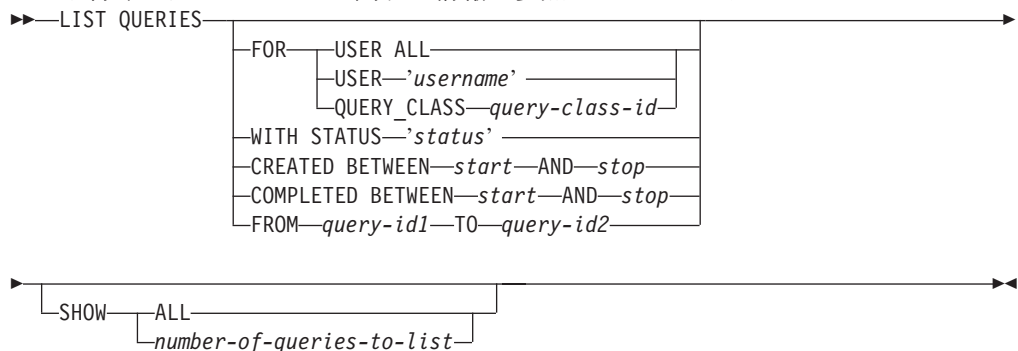
- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集または表示権限のある MONITORING 特権が存在する
- リストされる照会を所有するサブミッターである

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、Query Patroller のコマンド行インターフェースに関する情報を参照してください。



コマンド・パラメーター:

FOR USER ALL

すべてのユーザーの管理対象照会をリストするよう指定します。

FOR USER *username*

特定のサブミッターによってサブミットされた照会をリストするよう指定します。USER パラメーターを指定しない場合のデフォルトは、現在のユーザーに属する照会をリストするというものです。

FOR QUERY_CLASS *query-class-id*

query-class-id によって識別される照会クラスで実行されている照会のリストを指定します。

WITH STATUS *status*

特定の状況にある照会をリストするよう指定します。このパラメーターの値は、以下のいずれかになります。

- A** 指定された照会をリストするよう指定します。
- C** 取り消された照会をリストするよう指定します。

- D** 完了した（「実行済みの」）照会をリストするよう指定します。
- U** 状況が不明な照会をリストします。
- H** 保留にされている照会をリストするよう指定します。
- J** リジェクトされた照会をリストするよう指定します。
- L** 保留解除になっている照会をリストするよう指定します。
- Q** キューに入れられている照会をリストするよう指定します。
- R** 実行中の照会をリストするよう指定します。

CREATED BETWEEN start AND stop

指定された開始時刻から停止時刻までの間に作成された照会のリストを指定します。開始時刻と終了時刻の形式は、`YYYY-MM-DD HH24:MI:SS` というものです。ただし、

- `YYYY` は、年を示す 4 桁の数値です。
- `MM` は、月を示す 1 から 12 までの 2 桁の数値です (1 月は 01)。
- `DD` は、日付を示す 1 から 31 までの 2 桁の数値です。
- `HH24` は、時刻の時を示す 00 から 24 までの数値です。

注: 時の値が 24 の場合、分と秒の値はいずれも 00 でなければなりません。

- `MI` は、分を示す 00 から 59 までの 2 桁の数値です。
- `SS` は、秒を示す 00 から 59 までの 2 桁の数値です。

COMPLETED BETWEEN start AND stop

指定された開始時刻から停止時刻までの間に完了した照会のリストを指定します。開始時刻と終了時刻の形式は、`YYYY-MM-DD HH24:MI:SS` というものです。ただし、

- `YYYY` は、年を示す 4 桁の数値です。
- `MM` は、月を示す 1 から 12 までの 2 桁の数値です (1 月は 01)。
- `DD` は、日付を示す 1 から 31 までの 2 桁の数値です。
- `HH24` は、時刻の時を示す 00 から 24 までの数値です。

注: 時の値が 24 の場合、分と秒の値はいずれも 00 でなければなりません。

- `MI` は、分を示す 00 から 59 までの 2 桁の数値です。
- `SS` は、秒を示す 00 から 59 までの 2 桁の数値です。

FROM query-id1 TO query-id2

照会 ID が `query-id1` から `query-id2` までの範囲に含まれる照会のリストを指定します。

SHOW ALL

指定した基準に適合する照会をすべて表示することを指定します。

SHOW number-of-queries-to-list

指定した基準に適合する照会のリスト表示で、表示する照会数の最大値を指定します。この値は正の整数でなければなりません。

使用上の注意:

1. 何もパラメーターを指定しないで LIST QUERIES コマンドを入力すると、現在のユーザーによって発行された管理対象照会のリストが戻されます。
2. DBADM 権限、あるいは MONITORING 特権のある演算子プロファイルを持たないサブミッターは、自分が所有する照会しかリストできません。

関連概念:

- 167 ページの『管理対象照会状況』

関連タスク:

- 169 ページの『Query Patroller を使用して管理対象照会の詳細を表示する』

関連資料:

- 233 ページの『GET QUERY』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

LIST QUERY_CLASSES

特定のデータベース用に定義された Query Patroller 照会クラスの設定値をリストします。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集または表示権限のある CONFIGURATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶▶ LIST QUERY_CLASSES [SHOW [ALL [number-of-query-classes-to-list]]]
```

コマンド・パラメーター:

ALL データベース用に現在定義されているすべての照会クラスをリストすることを指定します。

number-of-query-classes-to-list

リストする照会クラスの最大数を指定します。この値は正の整数でなければなりません。

使用上の注意:

1. パラメーターを指定せずに LIST QUERY_CLASSES コマンドを実行すると、システムの照会クラスすべてが表示されます。

関連概念:

- 112 ページの『Query Patroller 照会クラス』

LIST SUBMISSION_PREFERENCES

すべてのデータベースの Query Patroller サブミッター、または指定した数のサブミッターのサブミット設定をリストします。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集または表示権限のある USER ADMINISTRATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶—LIST SUBMISSION_PREFERENCES—▶
▶—┬──────────────────────────────────┬──────────────────▶
   └─SHOW─┬──ALL──┬──────────────────┬──────────────────▶
           └──number-of-submission-preferences-to-list─┘
```

コマンド・パラメーター:

ALL データベース用に現在定義されているすべてのサブミット設定をリストすることを指定します。

number-of-submission-preferences-to-list

リストするサブミット設定の最大数を指定します。この値は正の整数でなければなりません。

使用上の注意:

1. パラメーターを指定せずに LIST SUBMISSION_PREFERENCES コマンドを実行すると、システムのサブミット設定すべてが表示されます。

関連概念:

- 161 ページの『Query Patroller 照会サブミット設定』

LIST SUBMITTER_PROFILES

すべての Query Patroller のサブミッター・プロファイルの設定、またはあるデータベースの指定された数のサブミッター・プロファイルの設定をリストします。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集または表示権限のある USER ADMINISTRATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶▶—LIST SUBMITTER_PROFILES—▶▶
▶
└─SHOW—┬─ALL—┬─number-of-submitter-profiles-to-list—┘

```

コマンド・パラメーター:

ALL データベース用に現在定義されているすべてのサブミッター・プロファイルをリストすることを指定します。

number-of-submitter-profiles-to-list

リストするサブミッター・プロファイルの最大数を指定します。この値は正の整数でなければなりません。

使用上の注意:

1. パラメーターを指定せずに LIST SUBMITTER_PROFILES コマンドを実行すると、システムのサブミッター・プロファイルすべてが表示されます。

関連概念:

- 161 ページの『Query Patroller 照会サブミット設定』

qpcenter - クエリー・パトローラー・センターの開始

クエリー・パトローラー・センターを開始します。 **qpcenter** は、オペレーティング・システムのコマンド・プロンプトから発行できます。

許可:

なし。

必要な接続:

データベース。

コマンド構文:

```
▶ qpcenter [-u username -p password] -d database ▶
```

コマンド・パラメーター:

-u username

データベースへ接続するときに使用するユーザー名を指定します。

-p password

ユーザー名を認証するのに使用するパスワード。パスワードを省略すると、ユーザーに入力を求めるプロンプトが出ます。

-d database

接続を確立する相手のデータベースを識別します。

関連タスク:

- 40 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (UNIX)』
- 80 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードでの Query Patroller クライアント・ツールのインストール (Windows)』

関連資料:

- 252 ページの『qpstart - Query Patroller の開始』

qpmigrate - Query Patroller データおよび設定の移行

Query Patroller バージョン 7 データおよび設定を Query Patroller バージョン 8 システムに移行します。

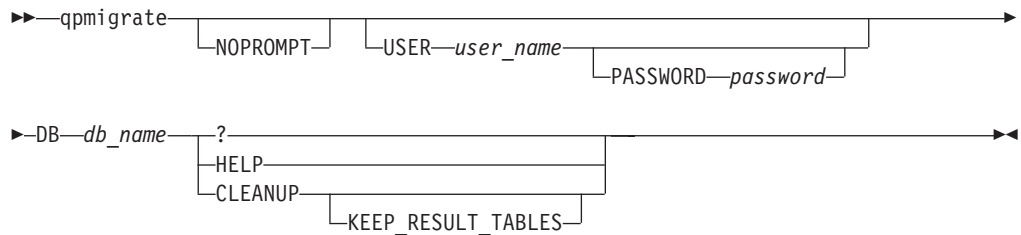
許可:

- **qpmigrate** コマンドを実行するには、DBADM 権限が必要です。

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:



コマンド・パラメーター:

注: 次のコマンド・パラメーター・キーワードは、大文字小文字の区別をしません。

[NOPROMPT]

このパラメーターは、パスワードのプロンプトを出さないことを指定します (USER は指定され、PASSWORD は指定されない場合)。その代わりに、エラーが戻されます。このオプションが CLEANUP オプションとともに使用されると、確認のための「この処理を本当に行いますか?」というプロンプトは表示されず、直ちにクリーンアップ操作が実行されます。NOPROMPT パラメーターを指定する場合、このパラメーターが最初のパラメーターでなければなりません。このパラメーターはオプションです。

[USER user_name]

このパラメーターは、**qpmigrate** を実行するときに使用するユーザー名を指定します。

[PASSWORD password]

このパラメーターは上記のユーザーの対応するパスワードを指定します。USER を指定した場合、このパラメーターは必須です。USER を指定していても PASSWORD は指定していない場合、プログラムは PASSWORD を入力するようプロンプトを出します (NOPROMPT が指定されていない場合には、エラーが戻されます)。

DB db_name

このパラメーターは、**qpmigrate** コマンドを実行したいデータベースの名前を指定します。**qpmigrate** コマンド構文を表示する場合を除いて、このパラメーターは必須です。

? このパラメーターは、**qpmigrate** コマンド構文を表示することを指定します。パラメーターを指定しないと、**qpmigrate** コマンド構文も表示されません。

HELP このパラメーターは、**qpmigrate** コマンド構文を表示することを指定します。パラメーターを指定しないと、**qpmigrate** コマンド構文も表示されません。

CLEANUP [KEEP_RESULT_TABLES]

このパラメーターは、DB2 Query Patroller バージョン 7 コントロール表を永久に除去します。**qpmigrate** コマンドを使用する通常移行の後、移行が正常に完了したことを検査するために十分な期間を取って DB2 Query Patroller バージョン 8 システムを使用するようにしてください。移行が正常に完了したことが確認され、DB2 Query Patroller バージョン 7 データが必要なくなったら、このパラメーターを使用して DB2 Query Patroller バージョン 7 表を除去し、ディスク・スペースを解放することができます。CLEANUP もデフォルトで DB2 Query Patroller バージョン 7 結果表を除去します。結果表を保持したい場合は、KEEP_RESULT_TABLES パラメーターを使用してください。

関連概念:

- 89 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードによる Query Patroller サーバーの自動移行』
- 7 ページの『インストール・タスクの概要』

関連タスク:

- 87 ページの『Query Patroller サーバーの手動設定』
- 90 ページの『Query Patroller サーバーの手動移行』

関連資料:

- 247 ページの『qpsetup - Query Patroller サーバーのセットアップ』

qpsetup - Query Patroller サーバーのセットアップ

qpsetup コマンドは以下の作業を実行できます。

- 指定された DB2 データベースで Query Patroller サーバーをセットアップする。
- 指定されたコントロール表スペース上の Query Patroller コントロール表を置き換える。

1. 指定された DB2 データベースで Query Patroller サーバーをセットアップする。

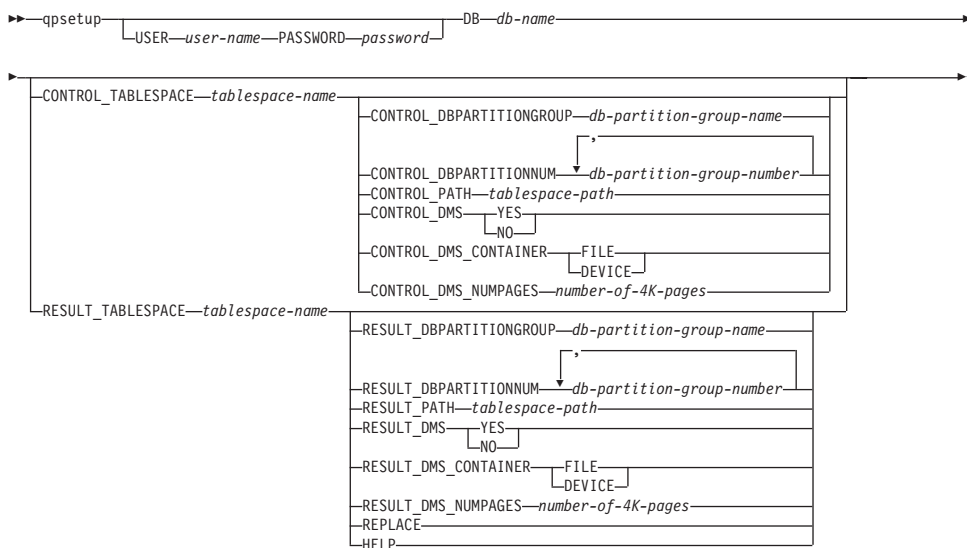
許可:

- **qpsetup** コマンドを実行するには、SYSADM 権限が必要です。

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:



コマンド・パラメーター:

USER *user-name*

このパラメーターは、**qpsetup** を実行するとき使用するユーザー名を指定します。

PASSWORD *password*

このパラメーターは上記のユーザーの対応するパスワードを指定します。 **USER** パラメーターが指定されている場合、このパラメーターは必須です。上記のユーザーがパスワードを提供しない場合、ユーザーに対してパスワードのプロンプトが出されます。

DB *db-name*

このパラメーターは、DB2 Query Patroller をセットアップしたいデータベースの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

CONTROL_TABLESPACE *tablespace-name*

このパラメーターは、DB2 Query Patroller コントロール表を作成したい表スペースの名前を指定します。このパラメーターは必須です。表スペースが存在しない場合は、作成されます。パフォーマンスと可用性を

向上させるため、単一のデータベース・パーティション・グループ内の、DB2 Query Patroller サーバーが起動したのと同じデータベース・パーティションに、コントロール表スペースを置くようお勧めします。

CONTROL_DBPARTITIONGROUP *db-partition-group-name*

このパラメーターは、コントロール表スペースを作成したいデータベース・パーティション・グループの名前を指定します。このパラメーターはオプションです。指定したデータベース・パーティション・グループが存在しない場合は、作成されます。これを指定しないと、デフォルトのデータベース・パーティション・グループ **IBMDEFAULTGROUP** 上に表スペースが作成されます。コントロール表スペースがすでに存在している場合には、このパラメーターは無視されます。パフォーマンスと可用性を向上させるため、単一のデータベース・パーティション・グループ内の、DB2 Query Patroller サーバーが起動したのと同じデータベース・パーティションに、コントロール表スペースを置くようお勧めします。

CONTROL_DBPARTITIONNUM *db-partition-group-number*

このパラメーターは、コントロール・データベース・パーティション・グループを作成したいデータベース・パーティション番号を指定します。このパラメーターはオプションです。これを指定しないとデータベース・パーティション・グループがすべてのデータベース・パーティション上に作成されます。CONTROL_DBPARTITIONGROUP パラメーターが指定されていない場合、またはデータベース・パーティション・グループがすでに存在している場合、このパラメーターは無視されます。

CONTROL_PATH *tablespace-path*

このパラメーターはコントロール表スペースの表スペース・コンテナーのパスを指定します。コントロール表スペースを作成する必要がある場合、このパラメーターは必須です。それ以外の場合は無視されます。

CONTROL_DMS YES | NO

このパラメーターは、作成されるコントロール表スペースが DMS 表スペースか、SMS 表スペースかを指定します。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は **NO** です。コントロール表スペースがすでに存在している場合には、このパラメーターは無視されます。

CONTROL_DMS_CONTAINER FILE | DEVICE

このパラメーターは、コンテナー・タイプが **FILE** か、**DEVICE** かを指定します。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は **FILE** です。コントロール表スペースがすでに存在しており、かつ CONTROL_DMS パラメーターが指定されていないか、値が **NO** である場合に、このパラメーターは無視されます。

CONTROL_DMS_NUMPAGES *number-of-4K-pages*

このパラメーターはコントロール表スペース用に作成する 4K ページの数を指定します。CONTROL_DMS パラメーターが **YES** である場合、このパラメーターは必須です。コントロール表スペースがすでに存在している場合には、このパラメーターは無視されます。

RESULT_TABLESPACE *tablespace-name*

このパラメーターは、結果表を作成したい表スペースの名前を指定します。このパラメーターは必須です。表スペースが存在しない場合は、作成されます。

RESULT_DBPARTITIONGROUP *db-partition-group-name*

このパラメーターは、結果表スペースを作成したいデータベース・パーティション・グループの名前を指定します。このパラメーターはオプションです。これを指定しないと、デフォルトのデータベース・パーティション・グループ **IBMDEFAULTGROUP** 上に表スペースが作成されます。結果表スペースがすでに存在している場合には、このパラメーターは無視されます。

RESULT_DBPARTITIONNUM *db-partition-group-number*

このパラメーターは、結果データベース・パーティション・グループを作成したいデータベース・パーティション番号を指定します。このパラメーターはオプションです。これを指定しないとデータベース・パーティション・グループがすべてのデータベース・パーティション上に作成されます。 **RESULT_DBPARTITIONGROUP** パラメーターが指定されていない場合、または指定されたデータベース・パーティション・グループがすでに存在している場合、このパラメーターは無視されます。

RESULT_PATH *tablespace-path*

このパラメーターは結果表スペースの表スペース・コンテナーのパスを指定します。結果表スペースを作成する必要がある場合には、このパラメーターは必須です。それ以外の場合、このパラメーターは無視されます。

RESULT_DMS YES | NO

このパラメーターは、作成される結果表スペースが **DMS** 表スペースか、**SMS** 表スペースかを指定します。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は **NO** です。結果表スペースがすでに存在している場合には、このパラメーターは無視されます。

RESULT_DMS_CONTAINER FILE | DEVICE

このパラメーターは、コンテナー・タイプが **FILE** か、**DEVICE** を指定します。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は **FILE** です。結果表スペースがすでに存在しており、かつ **RESULT_DMS** パラメーターが指定されていないか、値が **NO** である場合に、このパラメーターは無視されます。

RESULT_DMS_NUMPAGES *number-of-4K-pages*

このパラメーターは結果表スペース用に作成する **4K** ページの数を指定します。 **RESULT_DMS** パラメーターが **YES** である場合、このパラメーターは必須です。結果表スペースがすでに存在している場合には、このパラメーターは無視されます。

REPLACE

このパラメーターは、**DB2 Query Patroller** コントロール表を新しいコントロール表で置き換えるかどうかを指定します (新しいものがすでに存在している場合)。このパラメーターはオプションです。

HELP このパラメーターは、**qpsetup** コマンド構文を表示することを指定します。

- 指定されたコントロール表スペース上の Query Patroller コントロール表を置き換える。

許可:

- qpsetup** コマンドを使用して既存の表スペースに関する仕様を作成するには、DBADM 権限を持っている必要があります。

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: 表スペースが存在しない場合は、作成されず、エラー・メッセージが戻されます。

```
▶—qpsetup—CONTROL_TABLES_ONLY—USER—user-name—PASSWORD—password→  
▶—DB—db-name—CONTROL_TABLESPACE—tablespace-name—REPLACE→
```

コマンド・パラメーター:

CONTROL_TABLES_ONLY

このパラメーターは、**qpsetup** が表スペースを作成せずに、パッケージをバインドせずに、DB2 Query Patroller コントロール表の作成だけを行います。

USER *user-name*

このパラメーターは、**qpsetup** を実行するときに使用するユーザー名を指定します。

PASSWORD *password*

このパラメーターは上記のユーザーの対応するパスワードを指定します。USER を指定した場合、このパラメーターは必須です。上記のユーザーがパスワードを提供しない場合、ユーザーに対してパスワードのプロンプトが出されます。

DB *db-name*

このパラメーターは、DB2 Query Patroller をセットアップしたいデータベースの名前を指定します。このパラメーターは必須です。

CONTROL_TABLESPACE *tablespace-name*

このパラメーターは、DB2 Query Patroller コントロール表を作成したい表スペースの名前を指定します。このパラメーターは必須です。表スペースが存在しない場合は、エラー・メッセージが戻されます。

REPLACE

このパラメーターは、DB2 Query Patroller コントロール表を新しいコントロール表で置き換えるかどうかを指定します (新しいものがすでに存在している場合)。このパラメーターはオプションです。

使用上の注意:

- Query Patroller を使用するデータベースごとに、**qpsetup** コマンドを実行する必要があります。そうすることによって、表に関連付けられているコントロール

表、ビュー、およびトリガーや、Query Patroller (QP) の実行に必要なユーザー定義関数およびプロシージャなど、一連の Query Patroller コントロール・データベース・オブジェクトが、データベースごとに作成されます。コントロール表には、通知設定値、ユーザー・プロフィール、履歴照会データなどの情報が含まれています。

関連タスク:

- 87 ページの『Query Patroller サーバーの手動設定』
- 90 ページの『Query Patroller サーバーの手動移行』

関連資料:

- 245 ページの『qpmigrate - Query Patroller データおよび設定の移行』

qpstart - Query Patroller の開始

Query Patroller を開始します。 **qpstart** は、オペレーティング・システムのコマンド・プロンプトから発行できます。

許可:

Query Patroller を実行する対象となるデータベースを含むインスタンスの所有者でなければなりません。

必要な接続:

データベース。

コマンド構文:

▶▶ `qpstart db-name` ◀◀

コマンド・パラメーター:

db-name

Query Patroller で照会を管理したいデータベースの名前を指定します。

使用上の注意:

- Query Patroller を開始する前に DB2 を開始します。
- Query Patroller で照会を管理したいデータベースに対して、構成パラメーター `dyn_query_mgmt` を ENABLE に設定しなければなりません。

関連タスク:

- 93 ページの『Query Patroller を開始する』
- 94 ページの『Query Patroller を停止する』

関連資料:

- 253 ページの『qpstop - Query Patroller の停止』

qpstop - Query Patroller の停止

Query Patroller を停止します。 **qpstop** は、オペレーティング・システムのコマンド・プロンプトから発行できます。

許可:

DBADM 権限が必要です。

必要な接続:

データベース。

コマンド構文:

```
▶▶ qpstop db-name [force]
```

コマンド・パラメーター:

db-name

Query Patroller で照会の管理を停止したいデータベースの名前を指定します。

force アクティブな照会を強制することを指定します。照会が強制されると、Query Patroller を再始動し、照会のリカバリーが完了するまでは、これらの照会是不整合状態になります。

関連タスク:

- 93 ページの『Query Patroller を開始する』
- 94 ページの『Query Patroller を停止する』

関連資料:

- 252 ページの『qpstart - Query Patroller の開始』

REMOVE OPERATOR_PROFILE

指定した演算子プロファイルを Query Patroller 演算子プロファイルから削除します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶▶ REMOVE OPERATOR_PROFILE FOR USER 'username'
                                └─GROUP 'groupname' ─┘
```

コマンド・パラメーター:

USER *username*

演算子プロファイルを削除するユーザーの名前を指定します。ユーザー ID *username* は、DB2 許可 ID としても存在している必要があります。

GROUP *groupname*

演算子プロファイルを削除するグループの名前を指定します。このグループ名は、DB2 許可 ID としても存在している必要があります。

例:

次のコマンドは、SAMPLE データベースの「sdiniro」の演算子プロファイルを除去します。

```
qp -d sample "REMOVE OPERATOR_PROFILE FOR USER 'SDINIRO'"
```

関連タスク:

- ヘルプ: Query Patroller の『ユーザーおよびグループの演算子プロファイルを除去する』

REMOVE QUERY_CLASS

Query Patroller QUERY_CLASS コントロール表から照会クラス定義を除去します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

▶—REMOVE QUERY_CLASS—*query-class-id*—▶

コマンド・パラメーター:

query-class-id

除去する照会クラスの ID。

例:

次の例は、TESTDB データベース用に定義された照会クラスのリストから、照会クラス 5 を除去します。

```
qp -d testdb "REMOVE QUERY_CLASS 5"
```

使用上の注意:

1. 照会クラスは、Query Patroller が開始している間に、作成、除去または変更できません。ただし、この変更は、Query Patroller が停止して再始動するまでは反映されません。

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 218 ページの『ADD QUERY_CLASS』
- 234 ページの『GET QUERY_CLASS』
- 241 ページの『LIST QUERY_CLASSES』
- 271 ページの『UPDATE QUERY_CLASS』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』
- 252 ページの『qpstart - Query Patroller の開始』
- 253 ページの『qpstop - Query Patroller の停止』

REMOVE QUERY_INFO

MANAGE_QUERY_INFO コントロール表から特定の照会または照会セットの情報を削除します。つまり、その情報を、クエリー・パトローラー・センター・インターフェースの管理対象照会フォルダーから、あるいは GET QUERY コマンドまたは LIST QUERY コマンドから利用することはできなくなります。

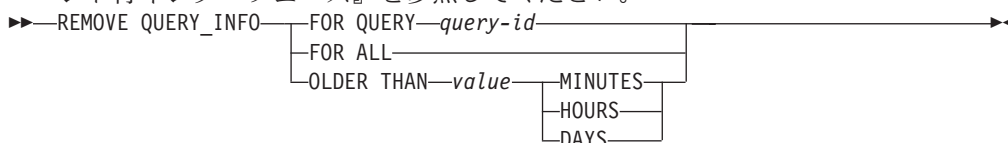
許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある MONITORING 特権が組み込まれている

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。



コマンド・パラメーター:

FOR QUERY query-id

除去する情報の照会の ID を指定します。

FOR ALL

MANAGE_QUERY_INFO コントロール表のすべての照会情報を削除することを指定します。

OLDER THAN value time-unit

指定した時刻より古い照会を MANAGE_QUERY_INFO から削除することを示します。

time-units

MINUTES

指定された分数を経過した照会は削除されます。

HOURS

指定された時間数を経過した照会は削除されます。

DAYS

指定された日数を経過した照会は削除されます。

使用上の注意:

1. 照会が削除されると、それに関連した結果表または結果セット情報はすべて削除されます。
2. 「待機中」または「実行中」状態の照会は除去できません。

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』

- 283 ページの『システム保守設定』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』
- 258 ページの『REMOVE QUERY_INFO_HISTORY』

REMOVE QUERY_INFO_HISTORY

TRACK_QUERY_INFO コントロール表から特定の照会または照会セットの情報を削除します。これは、一度コマンドを実行すると、その情報が、クエリー・パトローラー・センター・インターフェースの履歴分析表示では利用できなくなることを意味します。

照会の情報が TRACK_QUERY_INFO コントロール表から削除されると、それは MANAGE_QUERY_INFO 表からも削除され、その照会に対応する結果セット情報はすべて RESULT_INFO 表から削除されます。これは、クエリー・パトローラー・センターの管理対象照会表示からはその照会が表示できず、その照会の結果表が利用できないことを意味します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある HISTORICAL DATA 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶▶ REMOVE QUERY_INFO_HISTORY [FOR QUERY query-id | FOR ALL | OLDER THAN value [DAYS | YEARS]]
```

コマンド・パラメーター:

FOR QUERY *query-id*

除去する情報の照会の ID を指定します。

FOR ALL

TRACK_QUERY_INFO コントロール表のすべての照会情報を削除することを指定します。

OLDER THAN *value* *time-unit*

指定した時刻より古い照会の履歴情報を TRACK_QUERY_INFO 表から削除することを示します。

time-units

DAYS 指定した日数を経過した照会の履歴情報が削除されます。

YEARS

指定した年数を経過した照会の履歴情報が削除されます。

使用上の注意:

1. TRACK_QUERY_INFO 表から照会が削除されると、MANAGE_QUERY_INFO 表の対応するすべての管理対象照会、すべての結果表、またはすべての結果情報も削除されます。

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 285 ページの『履歴データ収集設定』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』
- 256 ページの『REMOVE QUERY_INFO』

REMOVE RESULT

指定した照会または照会セットの結果セットを含む DB2 表をドロップします。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

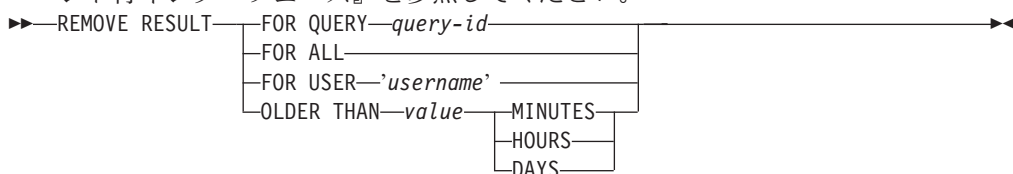
- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある MONITORING 特権が組み込まれている
- 結果を生成した照会のサブミッターである

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。



コマンド・パラメーター:

QUERY *query-id*

削除する結果を生成した照会の ID。

ALL 指定したデータベースの結果セットすべてが削除されることを示します。

USER *username*

USER *username* によってサブミットされた照会の結果セットすべてが削除されることを指定します。

OLDER THAN *value time-unit*

指定した時刻より古い結果表が削除されることを示します。

time-units

MINUTES

指定された分数を経過した結果表は削除されます。

HOURS

指定された時間数を経過した結果表は削除されます。

DAYS 指定された日数を経過した結果表は削除されます。

例:

次の例は、SAMPLE データベース上で実行された照会 958 の結果を含む DB2 表をドロップします。


```
qp -d sample "REMOVE RESULT FOR QUERY 958"
```

関連概念:

- 114 ページの『Query Patroller の結果表および結果セット』

関連資料:

- 283 ページの『システム保守設定』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』
- 267 ページの『SHOW RESULT』
- 230 ページの『FILE RESULT』

REMOVE SUBMISSION_PREFERENCES

特定の Query Patroller サブミッターのサブミット設定ファイルを削除します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が組み込まれている
- 除去するサブミット設定ファイルの所有者である

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行プロセッサ』を参照してください。

```
▶▶ REMOVE SUBMISSION_PREFERENCES FOR USER 'username'
                                     └──GROUP 'groupname' ─┘
```

コマンド・パラメーター:

USER username

サブミット設定ファイルを削除するユーザーの名前を指定します。ユーザー ID *username* は、DB2 許可 ID としても存在する必要があります。

GROUP groupname

サブミット設定ファイルを削除するグループの名前を指定します。このグループ名は、DB2 許可 ID としても存在する必要があります。

関連概念:

- ヘルプ: Query Patroller の『照会のサブミット設定 — 概要』
- 161 ページの『Query Patroller 照会サブミット設定』

関連タスク:

- ヘルプ: Query Patroller の『サブミッターの照会サブミット設定を除去する』

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 235 ページの『GET SUBMISSION_PREFERENCES』
- 242 ページの『LIST SUBMISSION_PREFERENCES』
- 273 ページの『UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』
- 220 ページの『ADD SUBMISSION_PREFERENCES』

REMOVE SUBMITTER_PROFILE

指定したサブミッター・プロファイルを Query Patroller SUBMITTER_PROFILE コントロール表から削除します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行プロセッサ』を参照してください。

```
▶▶ REMOVE SUBMITTER_PROFILE FOR USER 'username' GROUP 'groupname' ◀◀
```

コマンド・パラメーター:

USER username

サブミッター・プロファイルを削除するユーザーの名前を指定します。ユーザー ID *username* は、DB2 許可 ID としても存在する必要があります。

GROUP groupname

サブミッター・プロファイルを削除するグループの名前を指定します。このグループ名は、DB2 許可 ID としても存在する必要があります。

例:

次のコマンドは、SALES データベースのグループ「managers」用のサブミッター・プロファイルを除去します。

```
qp -d sales "REMOVE SUBMITTER_PROFILE FOR GROUP 'MANAGERS'"
```

関連タスク:

- ヘルプ: Query Patroller の『ユーザーおよびグループのサブミッター・プロファイルを除去する』

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 223 ページの『ADD SUBMITTER_PROFILE』
- 236 ページの『GET SUBMITTER_PROFILE』
- 243 ページの『LIST SUBMITTER_PROFILES』
- 276 ページの『UPDATE SUBMITTER_PROFILE』

- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

RUN HELD_QUERY

保留照会を解放します。これは、リソースが使用可能になったらすぐに照会が実行されることを意味します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある MONITORING 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

▶▶—RUN HELD_QUERY—*query-id*—▶▶

コマンド・パラメーター:

query-id

実行する保留照会の ID を指定します。

関連概念:

- 167 ページの『管理対象照会状況』

関連タスク:

- 168 ページの『Query Patroller を使用して照会状況を変更する』
- 173 ページの『保留照会をスケジュール時間で実行する』

関連資料:

- 227 ページの『CANCEL QUERY』
- 281 ページの『保留照会処理設定』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

RUN IN BACKGROUND QUERY

以前にサブミットされた照会を実行します。照会は実行されるか、またはキューに入れられます。Query Patroller は照会の実行を停止し、照会を再サブミット中にクライアントに制御を戻します。再実行された照会の結果は、結果表に保管されま

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある MONITORING 特権が組み込まれている
- 元の照会をサブミットしたサブミッターである

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

▶—RUN IN BACKGROUND QUERY—*query-id*—▶

コマンド・パラメーター:

query-id

実行する照会の ID を指定します。

関連概念:

- 167 ページの『管理対象照会状況』

関連タスク:

- 168 ページの『Query Patroller を使用して照会状況を変更する』
- 173 ページの『保留照会をスケジュール時間で実行する』

関連資料:

- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

SHOW RESULT

指定した照会の結果を表示します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 照会をサブミットしたサブミッターである
- (サブミッターのサブミット設定で指定されている) このユーザーによってサブミットされた照会の結果へのアクセスを付与されている。

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
►► SHOW RESULT FOR QUERY query-id [WITH|WITHOUT] COLUMN NAMES
```

コマンド・パラメーター:

QUERY *query-id*

表示する結果の照会の ID を指定します。

注: 結果表に保管されている結果だけが表示できます。

WITH/WITHOUT COLUMN NAMES

この照会結果に列名を表示するかどうかを指定します。オプションを指定しない場合、列名はデフォルトで表示されます。

例:

次のコマンドは、query 88 の結果を列名とともに表示します。

```
qp -d sample "show result for query 88"
```

関連概念:

- 114 ページの『Query Patroller の結果表および結果セット』

関連タスク:

- 172 ページの『Query Patroller を使用して結果表を表示する』

関連資料:

- 260 ページの『REMOVE RESULT』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』
- 230 ページの『FILE RESULT』

UPDATE OPERATOR_PROFILE

指定した Query Patroller 演算子プロファイルを更新します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
►► UPDATE OPERATOR_PROFILE FOR USER 'username'
                                GROUP 'groupname'
►► USING DEFAULT
    Setting-keyword 'value'
```

コマンド・パラメーター:

USER username

変更する演算子プロファイルのユーザー名を指定します。ユーザー ID *username* は、DB2 許可 ID としても存在する必要があります。

GROUP groupname

変更する演算子プロファイルのグループ名を指定します。このグループ名は DB2 許可 ID として存在していなければなりません。

Setting-keyword value

次の演算子プロファイル・パラメーターは、このコマンドを使用して設定できます。

DEFAULT

すべてのパラメーターについてデフォルト値が指定された演算子プロファイルを作成することを指定します。デフォルト値を持つ個々のパラメーターについては、パラメーターの値として DEFAULT を入力することにより、パラメーターをデフォルトに設定することができます。たとえば、USERA の CONFIGURATION 特権をデフォルト値に変更するには、次のように入力します。

```
qp -d sample "UPDATE OPERATOR_PROFILE FOR USER 'USERA' USING
CONFIGURATION DEFAULT"
```

CONFIGURATION

演算子に CONFIGURATION 特権の権限レベルを割り当てることを指定します。

E 演算子が Query Patroller 照会クラスとシステム設定値を編集および表示できるようにします。

- V** 演算子が Query Patroller 照会クラスとシステム設定値を表示できるようにします。
- N** 演算子が Query Patroller 照会クラスとシステム設定値を表示または編集できないようにします。これがこのパラメータのデフォルト値です。

HISTDATA

演算子に HISTORICAL DATA 特権の権限レベルを割り当てることを指定します。

- E** 演算子が履歴データを表示および除去することを許可します。

注: 履歴データを生成するには、DBADM 権限が必要です。

- V** 演算子が履歴データを表示することを許可します。
- N** 演算子が履歴データを表示または除去できないようにします。これがこのパラメータのデフォルト値です。

MONITORING

演算子に MONITORING 特権の権限レベルを割り当てることを指定します。

- E** 演算子が照会を表示および管理することを許可します。これには、管理対象の照会の状況のモニター、除去、および変更、照会の詳細の表示、および結果表の削除を行えるということが含まれます。
- V** 演算子が Query Patroller で管理されている照会の詳細を表示することを許可します。
- N** その演算子が照会を表示または管理できないようにします。これがこのパラメータのデフォルト値です。

USERADMIN

演算子に USER ADMINISTRATION 特権の権限レベルを割り当てることを指定します。

- E** 演算子が Query Patroller 演算子とサブミッター・プロフィールとシステム設定値を編集および表示できるようにします。
- V** 演算子が Query Patroller 演算子とサブミッター・プロフィールとシステム設定値を表示できるようにします。
- N** 演算子が Query Patroller 演算子とサブミッター・プロフィールとシステム設定値を編集または表示できないようにします。これがこのパラメータのデフォルト値です。

SUSPENDED

この演算子プロファイルの特権を中断するかどうかを示します。

- N** この演算子プロファイルの特権は中断していません。これがこのパラメーターのデフォルト値です。
- Y** この演算子プロファイルの特権は中断しています。

例:

次のコマンドは HELPDESK グループの演算子プロファイルを更新し、このプロファイルを持つ演算子に、PRODUCTION データベースに対して実行された保留照会の状況を変更する機能を与えます。

```
qp -d production "UPDATE OPERATOR_PROFILE FOR GROUP 'HELPDESK' USING  
MONITORING 'E'"
```

関連概念:

- 147 ページの『Query Patroller 演算子プロファイル』

関連タスク:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループの演算子プロファイルを変更する』

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 215 ページの『ADD OPERATOR_PROFILE』
- 254 ページの『REMOVE OPERATOR_PROFILE』
- 231 ページの『GET OPERATOR_PROFILE』
- 237 ページの『LIST OPERATOR_PROFILES』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

UPDATE QUERY_CLASS

指定した Query Patroller 照会クラスの設定詳細を更新します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶▶ UPDATE QUERY_CLASS—query-class-id—USING—————▶▶
|
| ┌──MAX_QUERIES—max-number-of-queries──┐ ┌──MAX_COST—max-query-cost──┐
| └────────────────────────────────────────┘ └────────────────────────────────┘
|
| ┌──DESCRIPTION—'description'──┐
| └────────────────────────────────┘
▶▶
```

コマンド・パラメーター:

query-class-id

設定詳細を更新する照会クラスの ID を指定します。

MAX_QUERIES max-number-of-queries

この照会クラスの照会を同時に実行できる最大数を指定します。照会の実行がこのしきい値に達すると、この照会クラスのそれ以後の照会は、リソースが使用可能になるまでキューに入れられます。値は 0 以上でなければならず、かつ Query Patroller システム設定値に指定された MAX_TOTAL_QUERIES の値以下でなければなりません。

MAX_COST max-query-cost

この照会クラスが受け入れる、単一の照会に対する最大コスト。値は 0 より大きくなければならず、かつ Query Patroller システム設定値に指定された MAX_TOTAL_COST の値以下でなければなりません。この値は、システムに定義された各照会クラスごとに固有でなければなりません。

DESCRIPTION description

オプションで、照会クラスのテキスト記述を指定します。このパラメーターは NULL 可能です。

例:

次のコマンドは、TESTDB データベースの照会クラス 8 を更新し、最大 50 個の照会を受け入れるようにします。

```
qp -d testdb "UPDATE QUERY_CLASS 8 USING MAX_QUERIES 50"
```

使用上の注意:

1. 照会クラスは、Query Patroller が開始している間に、作成、除去または変更できます。ただし、この変更は、Query Patroller が停止して再始動するまでは反映されません。

関連概念:

- 129 ページの『照会クラス構成』

関連タスク:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『Query Patroller の照会クラスを変更する』

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 218 ページの『ADD QUERY_CLASS』
- 255 ページの『REMOVE QUERY_CLASS』
- 234 ページの『GET QUERY_CLASS』
- 241 ページの『LIST QUERY_CLASSES』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』
- 252 ページの『qpstart - Query Patroller の開始』
- 253 ページの『qpstop - Query Patroller の停止』

UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES

指定したサブミッターのサブミット設定を更新します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

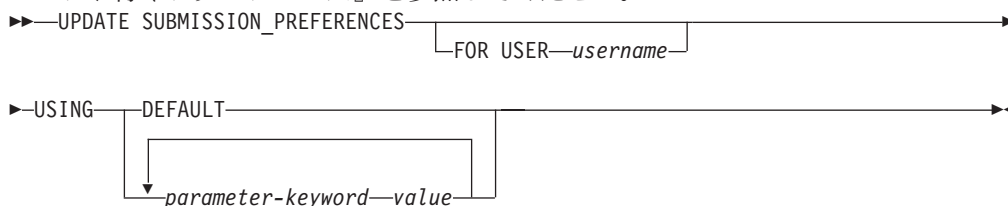
- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が組み込まれている
- 更新するサブミット設定に関連したプロファイルの所有者である

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。



コマンド・パラメーター:

USER username

更新するサブミット設定のあるサブミッターのユーザー名を指定します。username が指定されていない場合は、現在のログイン ID が使用されます。ユーザー ID username は、DB2 許可 ID としても存在している必要があります。

DEFAULT

このユーザーが、デフォルトのサブミット設定 (PUBLIC に割り当てられているサブミット設定) を使用することを指定します。

parameter-keyword value

以下のパラメーターは、このコマンドを使用して設定することができます。

SUBMITTER_PROFILE_NAME profile-name

SUBMITTER_PROFILE_TYPE profile-type

サブミッターが USER タイプのプロファイルを持っていない場合に、しきい値などのサブミッターの設定を設定するために使用するグループ・プロファイルを指定します。このサブミッターに対して複数のグループ・プロファイルが存在し、ここでグループ・プロファイルが指定されていない場合、照会はリソースしきい値が最も小さいグループ・プロファイルを使用してサブミットされます。

RESULT_EXCEEDED_ACTION

結果表に格納する照会結果が、サブミッターのプロファイルで指定されている最大結果行数を超える場合に行う処置を指定します。

- 'A' 結果セットが、サブミッターのプロファイルで定義されている限度より長い場合は、結果表に結果を格納しないことを指定します。このオプションはデフォルトです。
- 'T' 結果セットがサブミッター・プロファイルに定義されている限度よりも長い場合、切り捨てられた結果が結果表に保管されることを指定します。

RESULT_ACCESSIBILITY

照会結果を含む結果表を、サブミッター以外のユーザーも使用できるようにするかどうかを指定します。

- 'O' OTHER_GRANTEES パラメーターの値にリストされた DB2 ID が、結果表にアクセスできるようにすることを指定します。リストされている DB2 ID は、照会がサブミットされたデータベースへのアクセスを持っている必要があります。
- 'S' 結果表へのアクセスを、照会のサブミッターに限定することを指定します。このオプションはデフォルトです。

OTHER_GRANTEES grantees

結果表にアクセスできる DB2 ユーザー ID またはグループ ID を指定します。最大 1024 文字の英数字を使用することができます。複数の ID はコンマで区切る必要があります。

RESULT_DESTINATION result-destination-id

照会結果が戻るまで、サブミットを行うアプリケーションを待たせるか、次のアクティビティーのために解放するかを指定します。

- 'A' 照会をサブミットしたアプリケーションが、Query Patroller が照会を管理する間、結果セットが戻されるのを待機することを指定します。このオプションが選択されている場合、照会をサブミットしたアプリケーションは、結果セットが戻されるまで応答しなくなります。このオプションはデフォルトです。
- 'T' 結果セットを DB2 表に格納することを指定します。照会がサブミットされると、照会をサブミットしたアプリケーションは、その後の処理のために解放されます。

EMAIL_ADDRESSES email-addresses

このサブミッターがサブミットした照会に関する通知を受け取るための、1 つまたは複数の E メール・アドレスを指定します。

注: この通知は、QP_SYSTEM 設定で E メール通知が有効になっている場合にのみ行われます。

このパラメーターの値は、最大で 1024 文字です。複数の E メール・アドレスはコンマで区切る必要があります。

例:

TEAMDB データベースに対する照会の結果をチーム・メンバーが表示できるようにしたいと Query Patroller ユーザーが思っているとします。そのためには、自分の照会結果にユーザー「JSMITH」と「AWONG」がアクセスできるようにするために、次のコマンドを使用してサブミット設定を更新します。

```
qp -d teamdb "UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES FOR USER 'BJONES' USING  
RESULT_ACCESSIBILITY '0' OTHER_GRANTEES 'JSMITH, AWONG'"
```

このコマンドは、ユーザー「JSMITH」と「AWONG」に対して、このコマンドの実行後に「BJONES」によって作成された結果表へのアクセス権を付与します。これらのユーザーには、UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES コマンドを実行する前に作成された結果表へのアクセス権はありません。

関連概念:

- 161 ページの『Query Patroller 照会サブミット設定』

関連タスク:

- 161 ページの『別のサブミッターに対して照会サブミット設定を設定する』
- 329 ページの『独自の照会サブミット設定を設定する』

UPDATE SUBMITTER_PROFILE

SUBMITTER_PROFILE 表のサブミッター・プロフィールを更新します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロフィールに、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。

```
▶▶ UPDATE SUBMITTER_PROFILE ▶▶
```

```
▶▶ FOR { USER 'username' | GROUP 'groupname' } USING { DEFAULT | profile-parameter 'value' } ▶▶
```

コマンド・パラメーター:

USER username

プロフィールに関連付けるユーザーの名前を指定します。ユーザー ID *username* は、DB2 許可 ID としても存在する必要があります。

GROUP groupname

プロフィールに関連付けるグループの名前を指定します。このグループは、DB2 許可 ID としても存在する必要があります。

DEFAULT

すべてのパラメーターにデフォルト値を指定してサブミッター・プロフィールを更新することを指定します。デフォルト値を持つ個々のパラメーターについては、DEFAULT を値として指定してパラメーターを入力すれば、そのパラメーターをデフォルトに設定できます。たとえば、USERA の MIN_COST_TO_MANAGE パラメーターをデフォルト値に設定するには、次のように入力します。

```
qp -d sample "UPDATE SUBMITTER_PROFILE FOR USER 'USERA' USING  
MIN_COST_TO_MANAGE DEFAULT"
```

profile-parameter

プロフィールに割り当てるパラメーター値を指定します。以下のパラメーターを設定できます。

PRIORITY priority

このプロフィール下でサブミットされる照会に割り当てる優先順位を指定します。

- 値は 0 から 999 の整数でなければなりません。
- デフォルト値は 500 です。

MAX_QUERIES_ALLOWED max-queries

サブミッターが同時に実行できる照会の最大数を指定します。この制限に達した後にサブミットされた照会は、サブミットされている他の照会が完了するまで、キューに入れられた状態になります。グループ用のサブミッター・プロファイルを作成しているときは、このパラメーターに設定されている値が各ユーザーに適用されることに留意してください。たとえば、グループ A のこの値が 10 に設定されている場合、グループ A に属する各ユーザーには、同時に 10 の照会を実行する権限があります。

- 「-1」の値は、このプロファイルを持つユーザーが、無制限数の照会を同時に実行できることを示します (ただし、QP_SYSTEM 表で指定された MAX_TOTAL_QUERIES の値まで)。
- このパラメーターのデフォルト値は 100 です。

MAX_RESULT_ROWS max-number-of-result-rows

このプロファイル下でサブミットされる単一の照会あたりの、結果表に格納される結果行の最大数を指定します。この制約を受けるのは、結果が結果表に格納される照会のみです。

- 「-1」の値は、このプロファイルを持つユーザーが、結果セット全体に順応するために必要な数の行を含む結果を格納できることを示します。
- このパラメーターのデフォルト値は 1,000,000 行です。

MAX_COST_ALLOWED max-query-cost

このプロファイル下のサブミッターあたりの最大照会コストを指定します。このプロファイル下でサブミットされる照会の見積りコストがこの値を超える場合、その照会は保留状態にされます。

- 「-1」の値は、このプロファイルを持つユーザーが任意のサイズの照会を実行できることを示します (ただし QP_SYSTEM 表で指定された MAX_TOTAL_COST の値まで)。
- このパラメーターのデフォルト値は 10,000 です。

MIN_COST_TO_MANAGE min-query-cost

Query Patroller が管理する照会の最小コストを指定します。見積りコストがこの値より低い照会コストは、Query Patroller で管理されません。この最小コスト以下の照会であっても、QP_SYSTEM 表の QUERIES_TO_SAVE パラメーターの値が A (すべての照会) に設定されているなら、履歴分析のために追跡が継続されます。デフォルト値は 1000 です。

ACCOUNT_ID account-id

アカウントのトラッキングのために使用する英数字の ID を指定します。最大で 128 文字まで指定できます。このパラメーターを使用して、サブミッターを論理グループにソートして使用コストをトラッキングすることができます。

SUSPENDED Y/N

サブミッターに、照会のサブミットを禁止するかどうかを指定します。このパラメーターのデフォルト値は「N」です。

INTERCEPT Y/N

このサブミッターによってサブミットされた照会を Query Patroller が代行受信または管理するよう指定します。照会が代行受信されない場合、Query Patroller はその照会のコストの計算や、履歴分析のためのその照会のトラッキングは行いません。このパラメーターのデフォルト値は「Y」です。

例:

次の例は、ユーザー「jsmith」の特権を中断します。このコマンドの実行後、サブミッターは SALES データベースに対して照会をサブミットすることが許可されなくなります。

```
qp -d sales "UPDATE SUBMITTER_PROFILE FOR USER 'JSMITH' USING SUSPENDED 'Y'"
```

関連タスク:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『ユーザーおよびグループのサブミッター・プロフィールを変更する』

関連資料:

- 289 ページの『DB2 Query Patroller コントロール表』
- 223 ページの『ADD SUBMITTER_PROFILE』
- 263 ページの『REMOVE SUBMITTER_PROFILE』
- 236 ページの『GET SUBMITTER_PROFILE』
- 243 ページの『LIST SUBMITTER_PROFILES』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

UPDATE QP_SYSTEM

特定のデータベースの Query Patroller システム設定値を更新します。このコマンドは QP_SYSTEM コントロール表の項目を更新します。

許可:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

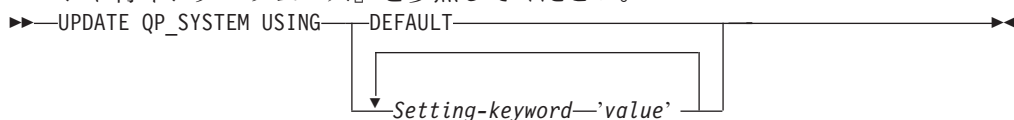
- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある CONFIGURATION 特権が組み込まれている

必要な接続:

なし。このコマンドは、データベース接続を確立します。

コマンド構文:

注: コマンド行インターフェースを使用した Query Patroller コマンドの実行方法と、Query Patroller コマンドの汎用構文については、『Query Patroller のコマンド行インターフェース』を参照してください。



コマンド・パラメーター:

DEFAULT

QP_SYSTEM コントロール表の項目をデフォルト値にリセットします。

Setting-keyword value

更新するパラメーター、およびそのパラメーターに割り当てられる値を指定します。次のシステム設定カテゴリとそれに関連するパラメーターを、次のコマンドを使用して更新できます。

- システムしきい値
 - MAX_TOTAL_QUERIES
 - MAX_TOTAL_COST
- 保留照会処理
 - RUN_HELD_QUERIES
 - RUN_HELD_DURATION
- 照会代行受信
 - INTERCEPT_APPLICATIONS
 - INCLUDE_APPLICATIONS
 - EXCLUDE_APPLICATIONS
- システム保守
 - QUERY_PURGE_PERIOD
 - RESULT_PURGE_PERIOD
 - RESULT_TABLE_SPACE
- 履歴データ収集
 - QUERIES_TO_SAVE
 - CAPTURE_REJECTED_QUERY_INFO

- HISTORY_PURGE_PERIOD
- E メール通知
 - EMAIL_ENABLE
 - EMAIL_SERVER
 - SEND_DESIGNATED
 - DESIGNATED_EMAIL_ADDRESS

使用上の注意:

1. システム設定のリストを表示または印刷するには、GET QP_SYSTEM コマンドを使用します。
2. 異なるシステム設定パラメーターとそれに受け入れられる値については、次の設定の説明を参照してください。
 - Query Patroller のシステムしきい値の設定
 - 保留照会処理設定
 - 照会代行受信設定
 - システム保守設定
 - 履歴データ収集設定
 - E メール通知設定

関連タスク:

- 93 ページの『Query Patroller が照会を代行受信できるようにする』
- 138 ページの『履歴データのコレクションを使用可能にする』

関連資料:

- 232 ページの『GET QP_SYSTEM』
- 280 ページの『Query Patroller のシステムしきい値の設定』
- 281 ページの『保留照会処理設定』
- 282 ページの『照会代行受信設定』
- 285 ページの『履歴データ収集設定』
- 287 ページの『E メール通知設定』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

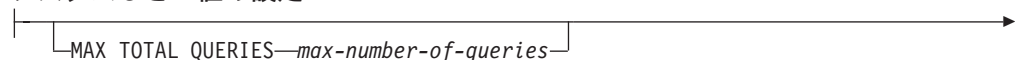
Query Patroller のシステムしきい値の設定

これらのパラメーターは、同時に実行できる照会の数や、同時に実行されるすべての照会の最大ワークロード・コストに関する、システム全体に及ぶしきい値を指定します。

コマンド構文:

注: これらのパラメーターは、UPDATE QP_SYSTEM コマンドの一部です。

システムしきい値の設定:



```
┌───┴───┐
└─MAX_TOTAL_COST—max-total-query-cost─┘
```

パラメーターの説明:

MAX_TOTAL_QUERIES max-number-of-queries

データベース全体に対して同時に実行できる照会の最大数。実行中の照会がこのしきい値に到達すると、追加の照会は、十分なりリソースが使用可能になるまで、キューに入れられた状態になります。

- 無制限の照会を同時に実行できるようにするには、このパラメーターを「-1」に設定することができます。
- このパラメーターのデフォルトの設定値は -1 (無制限) です。
- この値を、`QUERY_CLASS` コントロール表内に定義されている照会クラスの `MAX_QUERIES` 値よりも小さくしないでください。

MAX_TOTAL_COST max-total-query-cost

最大ワークロード・コストのしきい値を表します (timeron 単位)。着信照会のコストにより、すべての実行中の照会の集約コストがこの値を超えた場合、着信照会は待機状態に置かれ、そこで十分なりリソースが使用可能になるまで待機します。

- 浮動小数点数を入力する場合、その値は 10 進数または指数表記でなければなりません。
- 無制限のワークロード・コストを可能にするには、このパラメーターを「-1」に設定することができます。
- このパラメーターのデフォルトの設定値は -1 (無制限) です。
- この値を、`QUERY_CLASS` コントロール表内に定義されている照会クラスの `MAX_COST` 値よりも小さくしないでください。

関連資料:

- 233 ページの『GET QUERY』
- 238 ページの『LIST QUERIES』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

保留照会処理設定

これらのパラメーターは、スケジュールどおりに保留照会を実行するかどうかということと、保留照会を実行させておく時間の長さを指定します。

コマンド構文:

注: これらのパラメーターは、`UPDATE QP_SYSTEM` コマンドの一部です。

保留照会処理設定:

```
┌───┴───┐ ┌───┴───┐
└─RUN_HELD_QUERIES—'Y'─┘ └─RUN_HELD_DURATION—run-held-queries-duration—time-unit─┘
└─'N'─┘
```

パラメーターの説明:

- I** INCLUDE_APPLICATIONS 内に指定されているアプリケーションからの照会のみが Query Patroller によって代行受信されることを指定します。
- E** EXCLUDE_APPLICATIONS パラメーター内に指定されているアプリケーションを除くすべてのアプリケーションからの照会が Query Patroller によって代行受信されることを指定します。

INCLUDE_APPLICATIONS

Query Patroller によって代行受信されるアプリケーションの実行可能なファイル名を、コンマ区切りで指定します。最大 1024 文字まで使用できます。他のアプリケーションはすべて代行受信されません。

注:

1. この設定は、INTERCEPT_APPLICATION パラメーターが「I」に設定されている場合にのみ適用されます。
2. ファイル名の値には大文字小文字の区別があります。

EXCLUDE_APPLICATIONS

Query Patroller によって代行受信されないアプリケーションの実行可能なファイル名を、コンマ区切りで指定します。最大 1024 文字まで使用できます。他のアプリケーションはすべて代行受信されます。

注:

1. この設定は、INTERCEPT_APPLICATION パラメーターが「E」に設定されている場合にのみ適用されます。
2. ファイル名の値には大文字小文字の区別があります。

関連資料:

- 233 ページの『GET QUERY』
- 238 ページの『LIST QUERIES』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

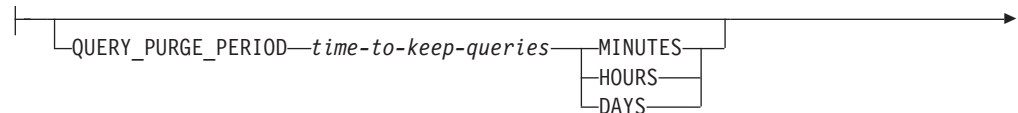
システム保守設定

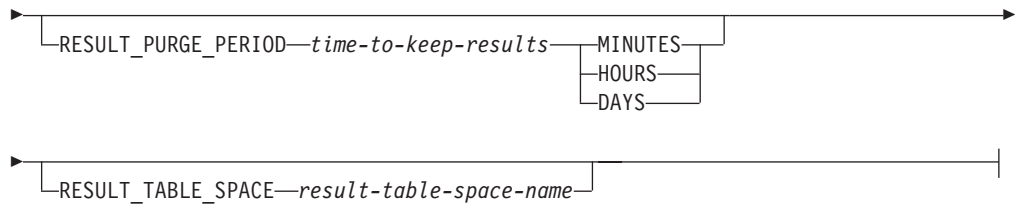
これらのパラメーターは、照会および結果表がシステムからパージされる頻度を指定します。

コマンド構文:

注: これらのパラメーターは、UPDATE QP_SYSTEM コマンドの一部です。

システム保守設定:





パラメーターの説明:

QUERY_PURGE_PERIOD time-to-keep-queries time-unit

照会の完了後、その照会が `MANAGE_QUERY_INFO` 表にどれだけの時間に渡って残されているかを秒単位で示します。この時間が満了したとき、およびスケジュールされたページ・ジョブが実行されたときに、照会が `MANAGE_QUERY_INFO` コントロール表から除去されます。つまり、その照会を Query Patroller の管理対象照会ビューから、あるいは `GET QUERY` コマンドまたは `LIST QUERY` コマンドから利用することはできなくなります。

time-unit

MINUTES

指定された分数を経過した照会は除去されます。

HOURS

指定された時間数を経過した照会は除去されます。

DAYS 指定された日数を経過した照会は除去されます。

- このパラメーターの値は、整数でなければなりません。
- 0 の値は、スケジュールされたページ・ジョブが実行されるときにはいつでも、すべての照会が `MANAGE_QUERY_INFO` 表から除去されることを意味しています。

注: Query Patroller のコマンド行インターフェースを使用して、スケジュールを作成、更新、表示、または削除することはできません。これらのタスクは、クエリー・パトローラー・センター・インターフェースで実行しなければなりません。スケジュールが作成されていない場合には、デフォルトのスケジュールが使用されます。

- このパラメーターが設定されていない場合、または `DEFAULT` に設定されている場合、照会は実行時から 1 週間保持されます。
- -1 の値は、照会が削除されないという意味です。
- 照会が完了状態にある場合、その情報は `TRACK_QUERY_INFO` 表にそのまま保存されます。照会が取り消し、打ち切り、不明、またはリジェクト状態にある場合、`TRACK_QUERY_INFO` 表には保管されません。保留状態の照会がこのコマンドで除去されることはありませんが、`REMOVE QUERY_INFO` コマンドでは除去されます。

RESULT_PURGE_PERIOD time-to-keep-results time-unit

照会の完了後に、結果表を保持する時間の長さを示しています。ここに指定された時間を経過した結果表は、次のページ・ジョブのスケジュールが実行されるときにドロップされます。

time-unit

M Query Patroller によって管理される照会だけを履歴分析に含めるよう指定します。このオプションはデフォルトです。

A Query Patroller によって代行受信されるすべての照会を履歴分析に含めるよう指定します。これには、設定を管理するためのサブミッターの最小コストに満たない照会も含まれます。

CAPTURE_REJECTED_QUERY_INFO

Y 拒否された照会のデータをキャプチャーすることを指定します。履歴分析は完了した照会についてしか実行されないため、拒否された照会について収集されたデータを表示可能なのは、管理対象照会レポートにおいてだけです。

N 拒否された照会のデータをキャプチャーしないことを指定します。

HISTORY_PURGE_PERIOD value time-unit

履歴分析のレポートとグラフについて、完了した照会を保存しておく時間を指定します。

time-units

HOURS

指定された時間数を経過した履歴データは削除されます。

DAYS 指定された日数を経過した履歴データは削除されます。

- このパラメーターの値は、整数でなければなりません。
- 0 の値は、スケジュールされたページ・ジョブが実行されるときにはいつでも、すべての照会が `TRACK_QUERY_INFO` 表から除去されることを意味しています。

注: Query Patroller のコマンド行インターフェースを使用して、スケジュールを作成、更新、表示、または削除することはできません。これらのタスクは、クエリー・パトローラー・センター・インターフェースで実行しなければなりません。スケジュールが作成されていない場合には、デフォルトのスケジュールが使用されます。

- このパラメーターが設定されていない場合、または `DEFAULT` に設定されている場合、この値は 1 年に設定されます。
- -1 の値は、履歴データがページされないという意味です。

使用上の注意:

1. 照会に関する履歴情報が `TRACK_QUERY_INFO` 表から削除される際には、`MANAGE_QUERY_INFO` 表内の対応する項目、結果表、および結果情報も削除されます。そのため、`HISTORY_PURGE_PERIOD` の値は `QUERY_PURGE_PERIOD` の値以上でなければなりません。

関連資料:

- 233 ページの『GET QUERY』
- 238 ページの『LIST QUERIES』
- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

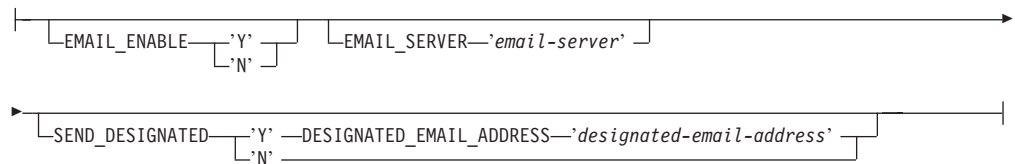
E メール通知設定

これらのパラメーターは、照会結果が結果表に保管されたとき、あるいは結果表を生成するはずの照会を処理している間にエラーが発生した場合に、サブミッターに通知するかどうかを指定します。E メール通知設定は、サブミッターの E メールが指定されていない場合に、宛先に通知を送信するかどうかも指定します。

コマンド構文:

注: これらのパラメーターは、UPDATE QP_SYSTEM コマンドの一部です。

E メール通知設定:



パラメーターの説明:

EMAIL_ENABLE

- Y** 照会が完了して結果が結果表に保管された場合、あるいは結果表を生成するはずの照会を処理している間にエラーが発生した場合に、サブミッターに通知するために E メール・メッセージを送信するよう指定します。照会が完了したものの、結果が結果表に保管されなかった場合には、E メール・メッセージは送信されません。
- N** 照会が完了しても、サブミッターに通知するために E メール・メッセージを送信しないよう指定します。これがデフォルトの設定です。

EMAIL_SERVER

適切な STMP の E メール・サーバーのホスト名または IP アドレスを指定します。最大 256 文字まで使用できます。

SEND_DESIGNATED

- Y** サブミッターの「照会サブミット設定」ダイアログにある「E メール・アドレス」フィールドがブランクの場合、E メールが指定のアドレスに送信されることを指定します。
- N** 照会のサブミッターのサブミット設定にサブミッターの E メール・アドレスが指定されていない場合、通知メッセージを送信しないことを指定します。これがデフォルトの設定です。

DESIGNATED_EMAIL_ADDRESS *designated-email-address*

完了した照会の結果が結果表に保管され、かつ照会サブミッターのサブミット設定に E メール・アドレスが指定されていない場合に、通知の送信先となる E メール・アドレスを指定します。このパラメーターの値は、最大 256 文字です。

関連資料:

- 233 ページの『GET QUERY』
- 238 ページの『LIST QUERIES』

- 213 ページの『Query Patroller のコマンド行サポート』

付録 B. Query Patroller コントロール表

DB2 Query Patroller コントロール表

Query Patroller のコントロール表は、DB2 Query Patroller のセットアップ時にターゲット・データベースに作成されます。コントロール表には、DB2 Query Patroller が照会を処理するのに必要な情報が含まれています。これらの表の情報は、クエリー・パトローラー・センターやコマンド行インターフェースから表示および更新できます。

Query Patroller コントロール表の表スキーマは DB2QP です。

Query Patroller のコントロール表には、3 つのタイプがあります。

- プロファイル表
- 照会情報表
- システム設定情報表

プロファイル表

演算子プロファイル (OPERATOR_PROFILE) コントロール表

定義されているすべての演算子プロファイルの行が含まれています。

表 12. OPERATOR_PROFILE コントロール表

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
NAME	VARCHAR(128)	いいえ	演算子プロファイルのユーザー名。 TYPE 列とセットで、表の主キーを形成します。
TYPE	CHAR(1)	いいえ	プロファイルのタイプ: <ul style="list-style-type: none">• 「U」 = ユーザー• 「G」 = グループ デフォルト値は「U」です。 NAME 列とセットで、表の主キーを形成します。
SUSPENDED	CHAR(1)	いいえ	オペレーター権限の状況 <ul style="list-style-type: none">• 「Y」 = 権限は中断中• 「N」 = 権限は中断されていない デフォルト値は「N」です。
CONFIGURATION	CHAR(1)	いいえ	CONFIGURATION 特権の権限レベル <ul style="list-style-type: none">• 「E」 = 編集特権• 「V」 = 表示特権• 「N」 = 特権なし デフォルト値は「N」です。
MONITORING	CHAR(1)	いいえ	MONITORING 特権の権限レベル <ul style="list-style-type: none">• 「E」 = 編集特権• 「V」 = 表示特権• 「N」 = 特権なし デフォルト値は「N」です。

表 12. OPERATOR_PROFILE コントロール表 (続き)

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
USERADMIN	CHAR(1)	いいえ	USER ADMINISTRATION 特権の権限レベル <ul style="list-style-type: none"> 「E」 = 編集特権 「V」 = 表示特権 「N」 = 特権なし デフォルト値は「N」です。
MONITORING	CHAR(1)	いいえ	MONITORING 特権の権限レベル <ul style="list-style-type: none"> 「E」 = 編集特権 「V」 = 表示特権 「N」 = 特権なし デフォルト値は「N」です。
HISTDATA	CHAR(1)	いいえ	HISTORICAL DATA 特権の権限レベル <ul style="list-style-type: none"> 「E」 = 編集特権 「V」 = 表示特権 「N」 = 特権なし デフォルト値は「N」です。
RESERVE	BLOB(64K)		

サブミッター・プロファイル (SUBMITTER_PROFILE) コントロール表

定義されているすべてのサブミッター・プロファイルの行が含まれています。

表 13. SUBMITTER_PROFILE コントロール表

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
ID	INTEGER	いいえ	サブミッター・プロファイルのシステム生成 ID 番号。 表の主キー
NAME	VARCHAR(128)	いいえ	サブミッター・プロファイルに関連付けられているユーザー ID の名前
TYPE	CHAR(1)	いいえ	プロファイルのタイプ: <ul style="list-style-type: none"> 「U」 = ユーザー 「G」 = グループ デフォルト値は「U」です。
SUSPENDED	CHAR(1)	いいえ	サブミッター権限の状況 <ul style="list-style-type: none"> 「Y」 = 権限は中断中 「N」 = 権限は中断されていない デフォルト値は「N」です。
INTERCEPT	CHAR(1)	いいえ	照会代行受信の設定: <ul style="list-style-type: none"> 「Y」 = サブミッターからの照会を代行受信する 「N」 = サブミッターからの照会を代行受信しない デフォルト値は「Y」です。
PRIORITY	SMALLINT	いいえ	キュー内での照会の優先順位。値は、0 から 999 の間の値でなければなりません。999 が最も高い優先順位、0 が最も低い優先順位です。デフォルト値は 500 です。
MAX_QUERIES_ALLOWED	INTEGER	いいえ	キューを使用せず、このサブミッターから並行して実行できる照会の最大数。値 -1 で無制限になります。デフォルト値は 100 です。

表 13. SUBMITTER_PROFILE コントロール表 (続き)

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
MAX_COST_ALLOWED	REAL	いいえ	保留にすることなく処理できる、このサブミッターからの照会の最大コスト。値 -1 で無制限になります。デフォルト値は 10 000 000 です。
MIN_COST_TO_MANAGE	REAL	いいえ	このサブミッターからの照会が管理対象となるための最小コスト。値は 0 以上でなければなりません。デフォルト値は 15 000 です。
MAX_RESULT_ROWS	BIGINT	いいえ	このサブミッターからの 1 つの照会のために結果表に保管できる結果の最大行数。(スケジュールされた照会にのみ関係します。) 値 -1 で無制限になります。デフォルト値は 1 000 000 です。
ACCOUNT_ID	VARCHAR(128)		サブミッター・プロファイルのアカウント ID。チャージバック関数に使用されます。
RESERVE	BLOB(64K)		この列は、将来の利用のために予約されていますので、変更しないでください。

照会サブミット設定 (SUBMISSION_PREFERENCES) コントロール表

定義されているすべてのサブミット設定ファイルの行が含まれます。

表 14. SUBMISSION_PREFERENCES コントロール表

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
USER_NAME	VARCHAR(128)	いいえ	設定の所有者のユーザー ID。 表の主キーです。
PROFILE_ID	INTEGER		ユーザーに専用のプロファイルがない場合は、サブミッター・プロファイルが使用されます。外部キーは、削除カスケードの SUBMITTER_PROFILE 表を参照します。
RESULT_DESTINATION	CHAR(1)	いいえ	照会の結果を戻すロケーション: <ul style="list-style-type: none"> 「A」 = アプリケーションに結果を戻す 「T」 = 結果表を作成して結果を保管する デフォルト値は「A」です。
RESULT_EXCEEDED_ACTION	CHAR(1)	いいえ	照会の結果がサブミッター ¹ の MAX_RESULT_ROWS を超えた時のアクション: <ul style="list-style-type: none"> 「A」 = 打ち切り 「T」 = 切り捨てた結果を戻す デフォルト値は「A」です。
RESULT_ACCESSIBILITY	CHAR(1)	いいえ	照会結果表のアクセシビリティ: <ul style="list-style-type: none"> 「S」 = サブミッター 「O」 = その他のユーザー デフォルト値は「S」です。
OTHER GRANTEES	VARCHAR(1024)	いいえ ²	このサブミッターからの照会の結果にアクセスできるユーザー ID のリスト。 値が複数になる場合は、コンマで区切ってください。
EMAIL_ADDRESSES	VARCHAR(1024)		このサブミッターからの照会について通知する E メール・アドレス。値が複数になる場合は、コンマで区切ってください。 QP_SYSTEM 表で E メールによる通知がオンになっている場合にのみ、適用されます。

表 14. SUBMISSION_PREFERENCES コントロール表 (続き)

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
RESERVE	BLOB(64K)		

注:

- この列は、スケジュールされた照会 (結果がサブミッター・アプリケーションではなく結果表に戻される) にも適用できます。
- この列は、RESULT_ACCESS_TYPE = 'O' でも NULL にはなりません。

照会情報表

管理対象照会情報 (MANAGE_QUERY_INFO) コントロール表

Query Patroller によって管理されるすべての照会の行が含まれます。この表の情報は、QP_SYSTEM 表の QUERY_PURGE_PERIOD 列で指定された期間がすぎると削除されます。また、手動で削除することも可能です。

表 15. MANAGE_QUERY_INFO コントロール表

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
ID	INTEGER	いいえ	照会 ID。外部キーは、削除カスケードの TRACK_QUERY_INFO 表を参照します。 表の主キーです。
STATUS	CHAR(1)	いいえ	照会の状況 ¹ : <ul style="list-style-type: none"> 「H」 = 保留 「Q」 = 待機中 「R」 = 実行中
QUERY_CLASS_ID	SMALLINT		照会が実行のために割り当てられている照会クラス ² 。
USER_MAX_COST_ALLOWED	REAL		SUBMITTER_PROFILE 表の照会サブミッターの MAX_COST_ALLOWED。
APPLICATION_HANDLE	BIGINT		照会をサブミットしたアプリケーションの ID。
MAX_RESULT_ROWS	BIGINT		SUBMITTER_PROFILE 表の照会サブミッターの MAX_RESULT_ROWS。
TIME_UPDATED	TIMESTAMP	いいえ	このレコードが最後に更新された時刻。デフォルト値は現在のタイム・スタンプです。
SESSION_AUTH_ID	VARCHAR(128)	いいえ	DB2 セッションの許可 ID。
SESSION_AUTH_TYPE	CHAR(1)	いいえ	SESSION_AUTH_ID の ID タイプ: <ul style="list-style-type: none"> 「U」 = ユーザー 「G」 = グループ (予定: 「R」 = 役割)
MESSAGE_RETURNED	VARCHAR(1024)		実行後に戻される DB2 メッセージ ³ 。
RESERVE	BLOB(64K)		この列は、将来の利用のために予約されていますので、変更しないでください。

注:

- これは、完了する前の照会の状況です。照会が完了すると、最後の状況は TRACK_QUERY_INFO 表の COMPLETION_STATUS フィールドに記録されません。
- 照会がデフォルト照会クラスの下で実行された場合、QUERY_CLASS_ID の値は 0 になります。

3. 照会が正常に完了すれば、MESSAGE_RETURNED フィールドは通常、空になります。

照会結果情報 (RESULT_INFO) コントロール表

結果表に保管されているすべての結果の照会の行が含まれます。この表の情報は、QP_SYSTEM 表の RESULT_PURGE_PERIOD 列で指定された期間がすぎると削除されます。また、手動で削除することも可能です。

表 16. RESULT_INFO コントロール表

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
QUERY_ID	INTEGER	いいえ	照会 ID。外部キーは、削除カスケードの MANAGE_QUERY_INFO 表を参照します。 表の主キーです。
STATUS	CHAR(1)	いいえ	照会の結果の状況: <ul style="list-style-type: none"> 「D」 = ドロップされている 「E」 = 存在する 「N」 = 存在しない 「P」 = パージされている 「T」 = 切り捨てられている
OWNER	VARCHAR(128)		結果を所有するユーザー ID。これは、結果セットのスキーマです。
RESULT_TABLE	VARCHAR(128)		結果セットを含むデータベース表。
RESULT_SELECT	CLOB(2MB)		結果を検索するときに発行される SELECT ステートメント。
RESERVE	BLOB(64K)		この列は、将来の利用のために予約されていますので、変更しないでください。

履歴分析 (QUERY_ANALYSIS) コントロール表

DB2 Explain データを使用した履歴分析で生成されるデータが含まれます。履歴データの生成が完了すると、この表にデータが追加されます。各レコードは、TRACK_QUERY_INFO 表内の該当する項目が削除されると、この表から削除されます。

注: この表では、照会に含まれる Explain データのタイプによって、1 つの照会に複数の項目が存在する場合があります。

表 17. QUERY_ANALYSIS コントロール表

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
QUERY_ID	INTEGER	いいえ	照会 ID。外部キーは、削除カスケードの TRACK_QUERY_INFO 表を参照します。
STATEMENT_TYPE	CHAR(2)	いいえ	照会のタイプの記述ラベル <ul style="list-style-type: none"> 「S」 = 選択 「D」 = 削除 「DC」 = カーソルの現在位置の削除 「I」 = 挿入 「U」 = 更新 「UC」 = カーソルの現在位置の更新
OBJECT_TYPE	CHAR(1)		記録されるデータのタイプ: <ul style="list-style-type: none"> 「C」 = 列 「I」 = 索引

表 17. QUERY_ANALYSIS コントロール表 (続き)

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
OPERATOR_TYPE	CHAR(1)		将来の利用のために予約済み。
OBJECT_SCHEMA	VARCHAR(128)		表索引のためのスキーマ。 OBJECT_TYPE='I' の場合に適用可能です。
OBJECT_NAME	VARCHAR(128)		表の列または索引の名前。
TABLE_SCHEMA	VARCHAR(128)	いいえ	列や索引が属している表のスキーマ。
TABLE_NAME	VARCHAR(128)	いいえ	列や索引が属している表の名前。
RESERVE	BLOB(64K)		この列は、将来の利用のために予約されていますので、変更しないでください。

履歴照会情報 (TRACK_QUERY_INFO) コントロール表

Query Patroller によって管理されるすべての照会の行が含まれます。代行受信されるものの、Query Patroller によって管理されない照会の場合、項目は、QP_SYSTEM 表の QUERIES_TO_SAVE フィールドの値が「A」(すべての照会のトラック) になっている場合にのみこの表に保管されます。

この表の情報は、QP_SYSTEM 表の HISTORY_PURGE_PERIOD 列で指定された期間がすぎると削除されます。また、手動で削除することも可能です。

表 18. TRACK_QUERY_INFO コントロール表

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
ID	INTEGER	いいえ	照会の ID 番号。 表の主キー
TYPE	SMALLINT	いいえ	ステートメントのタイプ: <ul style="list-style-type: none"> 0x0001= 選択 0x0002= 変更
COMPLETION_STATUS	CHAR(1)	いいえ	照会が完了したときの状況: <ul style="list-style-type: none"> 「A」= 打ち切り 「C」= キャンセル 「D」= 完了 「N」= 未完了 「U」= 不明 デフォルト値は「N」です。
MANAGED	CHAR(1)	いいえ	Query Patroller が照会を管理しているか: <ul style="list-style-type: none"> 「Y」= はい 「N」= いいえ デフォルト値は「Y」です。
EXPLAIN_RUN	CHAR(1)	いいえ	EXPLAIN 実行の状況: <ul style="list-style-type: none"> 「F」= 失敗した 「N」= 実行されていない 「S」= 正常に実行された デフォルト値は「N」です。
QUERY_PRIORITY	SMALLINT		照会をサブミットしたサブミッターの優先順位。

表 18. TRACK_QUERY_INFO コントロール表 (続き)

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
STMT_ATTRIBUTES	INTEGER	いいえ	以下のビットのビットマップ: <ul style="list-style-type: none"> • 0x00000001 - 静的 SQL • 0x00000002 - ホスト変数/パラメーター・マーカ • 0x00000004 - 特殊レジスター • 0x00000008 - DGTT¹ • 0x00000010 - ID/シーケンス値 • 0x00000020 - 結果セット不可 • 0x00000040 - セッション変数 • 0x00010000 - キューイング不可 デフォルト値は 0 です。
NESTING_LEVEL	INTEGER	いいえ	照会のネスト・レベル。デフォルト値は 0 です。
ROUTINE_ID	INTEGER		ルーチンのユニーク ID。
PARENT_QUERY_ID	INTEGER		即時の親照会の ID。
PACKAGE_SCHEMA	VARCHAR(128)		
PACKAGE_NAME	VARCHAR(128)		
PACKAGE_VERSION	VARCHAR(128)		
SECTION_ENTRY_NUMBER	INTEGER		
PROFILE_ID	INTEGER	いいえ	照会に使用されるサブミッター・プロファイル。
RESULT_ROWS	BIGINT		戻される結果セットの行数 ² 。
EXECUTION_TIME_SECONDS	BIGINT		照会実行時間の秒の部分 ³ 。
EXECUTION_TIME_MILLI_SECONDS	BIGINT		照会実行時間のミリ秒の部分 ³ 。
SYSTEM_TIME_SECONDS	BIGINT		照会の合計システム・プロセッサ時間の秒の部分 ³ 。システム時間は、システム呼び出しにかかった時間を示します。
SYSTEM_TIME_MILLI_SECONDS	BIGINT		照会の合計システム・プロセッサ時間のミリ秒の部分 ³ 。システム時間は、システム呼び出しにかかった時間を示します。
USER_TIME_SECONDS	BIGINT		照会の合計ユーザー・プロセッサ時間の秒の部分 ³ 。ユーザー時間は、データベース・マネージャー・コードの実行にかかった時間を示します。
USER_TIME_MILLI_SECONDS	BIGINT		照会の合計ユーザー・プロセッサ時間のミリ秒の部分 ³ 。ユーザー時間は、データベース・マネージャー・コードの実行にかかった時間を示します。
ESTIMATED_COST	REAL		照会の見積りコスト (timeron)
TIME_CREATED	TIMESTAMP	いいえ	照会がサブミットされた時刻。デフォルト値は現在のタイム・スタンプです。
TIME_STARTED	TIMESTAMP		照会の開始時刻。
TIME_COMPLETED	TIMESTAMP		照会の完了時刻。
TIME_RELEASED	TIMESTAMP		将来の利用のために予約済み。
USER_ID	VARCHAR(128)	いいえ	DB2 からのユーザー ID。
USER_TYPE	CHAR(1)	いいえ	プロファイルのタイプ: <ul style="list-style-type: none"> • 「U」 = ユーザー • 「G」 = グループ
STMT_AUTH_ID	VARCHAR(128)	いいえ	DB2 からのステートメント許可 ID。

表 18. TRACK_QUERY_INFO コントロール表 (続き)

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
STMT_AUTH_TYPE	CHAR(1)	いいえ	ステートメント許可のタイプ: <ul style="list-style-type: none"> • 「U」 = ユーザー • 「G」 = グループ
ACCOUNT_ID	VARCHAR(128)		サブミッターのチャージバック・アカウント ID
APPLICATION	VARCHAR(128)		サブミッター・アプリケーションの名前。
APPLICATION_HOST	VARCHAR(255)		照会をサブミットしたマシンのホスト名。
CLIENT_USER_ID	VARCHAR(255)		sqleseti API を使用してアプリケーションが設定したクライアント・ユーザー ID。
CLIENT_ACCOUNT_ID	VARCHAR(255)		sqleseti API を使用してアプリケーションが設定したクライアント・アカウント ID。
CLIENT_APPLICATION	VARCHAR(255)		sqleseti API を使用してアプリケーションが設定したクライアント・アプリケーション名。
CLIENT_WORKSTATION	VARCHAR(255)		sqleseti API を使用してアプリケーションが設定したクライアント・ワークステーション名。
REASON_HELD	VARCHAR(255)		将来の利用のために予約済み。
REASON_QUEUED	VARCHAR(255)		将来の利用のために予約済み。
ENVIRONMENT_VALUES	BLOB(64K)		コンパイル環境値。
STATEMENT	BLOB(2MB)		照会のテキスト。 ⁴
RESERVE	BLOB(64K)		この列は、将来の利用のために予約されていますので、変更しないでください。

注:

1. DGTT= Declared Global Temporary Table
2. 結果がクライアント・アプリケーションに戻される照会の場合は、ステートメント・モニター・スイッチが ON になっているときにのみこの情報が使用できます。結果が結果用に戻される照会の場合は、ステートメント・モニター・スイッチが OFF になっているときにのみこの情報が使用できます。
3. タイム・スタンプおよびステートメントのモニター・スイッチが ON になっている場合にのみ、使用可能です。
4. このフィールドのデータ・タイプは BLOB なので、単純な SELECT ステートメントを実行して表から値を検索することはできません。このフィールドを照会するには、db2qp.convertToString 関数を使用して、値を検索用に変換する必要があります。たとえば、この表からステートメント・フィールドを選択するには、以下を入力します。

```
select db2qp.convertToString(statement) from db2qp.track_query_info
```

システム設定情報表

Query Patroller システム (QP_SYSTEM) コントロール表

QP_SYSTEM 表には、データベースの設定すべてを保管する 1 つの項目がありません。

表 19. QP_SYSTEM コントロール表

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
QUERIES_TO_SAVE	CHAR(1)	いいえ	履歴分析用にトラッキングされる照会: <ul style="list-style-type: none"> 「M」 = 管理対象照会のみ 「A」 = すべての照会 デフォルト値は「M」です。
QUERY_PURGE_PERIOD	INTEGER	いいえ	照会を保持する時間の長さ (秒)。値 -1 で無制限になります。 デフォルト値は 604800 (1 週間)。
RESULT_PURGE_PERIOD	INTEGER	いいえ	照会の結果を保持する時間の長さ (秒)。値 -1 で無制限になります。 デフォルト値は 604800 (1 週間)。
HISTORY_PURGE_PERIOD	INTEGER	いいえ	照会の履歴データを保持する時間の長さ (秒)。値 -1 で無制限になります。 デフォルト値は 31536000 (365 日) です。
MAX_TOTAL_QUERIES	INTEGER	いいえ	並行して実行できる管理対象照会の最大数。値 -1 で無制限になります。 デフォルト値は -1 (無制限) です。
MAX_TOTAL_COST	DOUBLE	いいえ	並行して管理されるすべての管理対象照会の最大合計コスト。値 -1 で無制限になります。 デフォルト値は -1 です。
MAX_QUERY_COST	FLOAT	いいえ	将来の利用のために予約済み。デフォルト値は -1 です。
RESULT_TABLE_SPACE	VARCHAR(128)		結果表を保管する表スペース。 値が何も指定されない場合は、デフォルトの表スペースが使用されます。
REJECT_HIGH_COST_QUERY	CHAR(1)	いいえ	将来の利用のために予約済み。デフォルト値は「N」です。
RUN_HELD_QUERIES	CHAR(1)	いいえ	スケジュールによる保留照会の実行: <ul style="list-style-type: none"> 「N」 = 照会を実行しない 「Y」 = 照会を実行する (予定: 「C」 = キャンセル) デフォルト値は「N」です。
RUN_HELD_DURATION	INTEGER	いいえ	保留照会を実行するまでの時間 (秒)。値 -1 で無制限になります。デフォルト値は 28800 です。
EMAIL_ENABLE	CHAR(1)	いいえ	照会の完了またはエラーに関する E メール・メッセージをサブミッターに送るかどうか。 <ul style="list-style-type: none"> 「N」 = E メールでの通知を可能にしない。 「Y」 = E メールでの通知を可能にする。 デフォルト値は「N」です。
EMAIL_SERVER	VARCHAR(256)		SMTP E メール・サーバーのホスト名または IP アドレス。

表 19. QP_SYSTEM コントロール表 (続き)

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
SEND_DESIGNATED	CHAR(1)		サブミッターのサブミット・プロパティで E メール・アドレスが指定されない場合に、あらかじめ指定されているアドレスに E メールを送信するかどうか: <ul style="list-style-type: none"> 「Y」 = はい 「N」 = いいえ デフォルト値は「N」です。
DESIGNATED_EMAIL_ADDRESS	VARCHAR(256)		SEND_DESIGNATED='Y' になっていて、サブミッターのサブミット設定で E メールが指定されなかった場合に通知メッセージを受け取る E メール・アドレス。
INTERCEPT_STATIC_SQL	CHAR(1)	いいえ	将来の拡張用に予約されています。デフォルト値は「Y」です。
INTERCEPT_APPLICATION	CHAR(1)	いいえ	アプリケーションの代行受信: <ul style="list-style-type: none"> 「A」 = すべてのアプリケーションの受信を代行する 「I」 = INCLUDE_APPLICATIONS にリストされているアプリケーションだけの受信を代行する 「E」 = EXCLUDE_APPLICATIONS にリストされている以外のアプリケーションの受信を代行する デフォルト値は「A」です。
TIME_HIST_GENERATOR_LAST_RUN	TIMESTAMP		履歴データが最後に生成された日時。
INCLUDE_APPLICATIONS	VARCHAR(1024)		代行受信するアプリケーションのリスト。コンマで区切ります。
EXCLUDE_APPLICATIONS	VARCHAR(1024)		代行受信しないアプリケーションのリスト。コンマで区切ります。
RESERVE	BLOB(64K)		この列は、将来の利用のために予約されていますので、変更しないでください。

照会クラス (QUERY_CLASS) コントロール表

QUERY_CLASSES 表には、データベースで定義されたすべての照会クラスの行が含まれます。

表 20. QUERY_CLASS コントロール表

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
ID	SMALLINT	いいえ	照会クラス ID。表の主キーです。
MAX_QUERIES	INTEGER	いいえ	照会クラス内で並行して実行できる照会の最大数。 値 -1 で無制限になります。
MAX_COST	REAL	いいえ	このクラスで実行する照会の最大コスト (timeron) ¹ 。
説明	VARCHAR(256)		照会クラスのテキスト記述。
RESERVE	BLOB(64K)		この列は、将来の利用のために予約されていますので、変更しないでください。

注:

1. 同じシステム内に、このフィールドの値が同一の照会クラスを複数存在させることはできません。

スケジュール情報 (SCHEDULE) コントロール表

SCHEDULE 表には、データベースに定義されているすべてのスケジュールの行が含まれます。

表 21. SCHEDULE コントロール表

列名	データ・タイプ	NULL 可能	説明
ID	INTEGER	いいえ	スケジュールのシステム生成 ID。 表の主キーです。
TYPE	CHAR(1)	いいえ	スケジュールのタイプ: <ul style="list-style-type: none"> 「H」 = 履歴データのページ 「Q」 = 照会表または結果表のページ。 「R」 = 保留照会の実行。
SUSPENDED	CHAR(1)	いいえ	スケジュールの中断: <ul style="list-style-type: none"> 「N」 = いいえ 「Y」 = はい デフォルト値は「N」です。
START_DATE	TIMESTAMP	いいえ	スケジュールの開始日。
END_DATE	TIMESTAMP		スケジュールの終了日。
INTERVAL_UNIT	INTEGER		スケジュールのインターバル単位。
INTERVAL	INTEGER		スケジュールの頻度。
INTERVAL_DETAIL	INTEGER		
NEXT_START_TIME	TIMESTAMP		次にスケジュール・ジョブが実行される日時。
RESERVE	BLOB(64K)		この列は、将来の利用のために予約されていますので、変更しないでください。

関連資料:

- 215 ページの『ADD OPERATOR_PROFILE』
- 218 ページの『ADD QUERY_CLASS』
- 223 ページの『ADD SUBMITTER_PROFILE』
- 254 ページの『REMOVE OPERATOR_PROFILE』
- 255 ページの『REMOVE QUERY_CLASS』
- 263 ページの『REMOVE SUBMITTER_PROFILE』
- 268 ページの『UPDATE OPERATOR_PROFILE』
- 271 ページの『UPDATE QUERY_CLASS』
- 276 ページの『UPDATE SUBMITTER_PROFILE』
- 279 ページの『UPDATE QP_SYSTEM』
- 273 ページの『UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES』
- 256 ページの『REMOVE QUERY_INFO』
- 258 ページの『REMOVE QUERY_INFO_HISTORY』
- 220 ページの『ADD SUBMISSION_PREFERENCES』
- 262 ページの『REMOVE SUBMISSION_PREFERENCES』

付録 C. Query Patroller メッセージ

DQP メッセージ

DQP0001E コマンドにデータベース名を指定してください。

説明: コマンド構文により、データベース名の指定が必要です。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。

データベース名を指定して、再度コマンドを発行してください。

DQP0002E Query Patroller は、データベース *dbname* に接続できません。

説明: Query Patroller は、*dbname* データベースへの接続を確立できませんでした。

ユーザーの処置: データベース名が正しく、データベース・マネージャーが実行中であることを確認してください。

このメッセージが表示された原因については、qpdiag.log ファイルを参照してください。問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP0003E Query Patroller サーバーを始動できません。

説明: Query Patroller を始動できませんでした。

ユーザーの処置: このメッセージが表示された原因については、qpdiag.log ファイルを参照してください。問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP0004E Query Patroller サーバーを停止できません。

説明: Query Patroller サーバーを停止できません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを停止しようとした時に、実際に Query Patroller サーバーが実行中であったか確認してください。このメッセージが表示された原因については、qpdiag.log ファイルを参照してください。問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP0005E データベース *dbname* に対する Query Patroller 構成が見つかりません。

説明: データベース *dbname* に対する構成が見つかりません。

ユーザーの処置: qstop コマンドを発行して、Query Patroller を停止してください。

DQP0006E Java プロパティー・ファイル *filename* が見つかりません。

説明: 必要なプロパティー・ファイル *filename* が見つかりません。

ユーザーの処置: sqllib/msg/<locale>/qp/ ディレクトリをチェックして、プロパティー・ファイルが存在するかどうか判別してください。

問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP0007E 内部エラー *error* が発生しました。

説明: 処理中に内部エラーが発生しました。

ユーザーの処置: このメッセージが表示された原因については、qpdiag.log ファイルを参照してください。問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP0008E ユーザー *username* はサブミッター・プロファイルを持っていません。

説明: ユーザーは、それぞれサブミッター・プロファイルを持っている必要があります。

ユーザーの処置: 管理者が、ユーザー用にサブミッター・プロファイルを定義するよう要求してください。

DQP0009E ファイル *filename* をオープンできません。

説明: 指定されたファイルをオープンしようとしてエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ファイルが存在し、その許可が正しいかどうか、確認してください。

このメッセージが表示された原因については、qpdiag.log

ファイルを参照してください。問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP0010E ユーザー *user-ID* は有効なサブミッター・プロファイルを持っていません。

説明: ユーザー *user-ID* には、Query Patroller の有効なサブミッター・プロファイルがありません。これは、次の理由から発生する可能性があります。

- ユーザーにサブミッター・プロファイルがない。
- ユーザーに所属しているユーザーまたはグループ、あるいはその両方のサブミッター・プロファイルが中断となる可能性があります。

ユーザーの処置: データベース管理者がサブミッター・プロファイルを作成し、サブミッター・プロファイルを再活動化するように要求してください。

DQP0011E *property-file1* および *property-file2* のいずれも見つからなかったため、サブミット設定ダイアログを表示できません。

説明: プロパティ・ファイルが見つかりません。この結果、サブミット設定ダイアログを表示できません。

ユーザーの処置: ファイルが存在するかどうか確認してください。

DQP0012E データベース *databasename* は、Query Patroller で使用するためにセットアップされていません。

説明: Query Patroller をデータベース上で使用するには、そのデータベースが含まれるサーバーに、Query Patroller をインストールする必要があります。Query Patroller のインストール中に、管理対象となるデータベースの照会を選択し、Query Patroller コントロール表およびストアド・プロシージャが、このデータベースで作成されます。Query Patroller を使用して、追加データベースの照会を管理する必要がある場合、データベースごとに、qpsetup コマンドを実行しなければなりません。

ユーザーの処置: データベースが含まれるサーバーに Query Patroller をインストールするよう、管理者に要求するか、すでにサーバーにインストールされている場合には、そのデータベースに対して qpsetup コマンドを実行し、Query Patroller をセットアップするよう要求してください。

qpsetup コマンドがデータベースに対して実行されていても問題が解決しない場合は、UNIX では `INSTPATH/function` に、ファイル `db2qp` があるかどうか、Windows では `INSTPATH\function` にファイル `db2qp.dll` があるかどうかをチェックしてください。

(`INSTPATH` は、DB2 インスタンス・ディレクトリーを意味します。)

DQP0019E *command-name* コマンドを発行するには、**SYSADM** 権限が必要です。

説明: このコマンドには SYSADM 権限が必要です。

ユーザーの処置: システム管理者に、このコマンドを実行するよう要求してください。

DQP0020E この機能はサポートされていません。理由コード = *reason-code*。

説明: 以下の理由コードによって示されているような制限に違反しているため、このステートメントを処理できません。

- 1 機能が使用できないため、接続コード・ページを設定できません。
- 2 制約事項が不明です。

ユーザーの処置: 理由コードに応じたアクションは次のとおりです。

- 1 Query Patroller クライアントを新しいバージョンに更新してください。
- 2 問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP0021E DB2 サーバーと Query Patroller サーバーの製品レベルが異なります。

説明: DB2 サーバーと Query Patroller サーバーの製品レベルは、同じでなければなりません。

ユーザーの処置: DB2 サーバーと Query Patroller サーバーが、同じ製品レベルであるかどうか確認してください。Query Patroller サーバーをインストールする前に、DB2 サーバーにフィックスパックを適用している場合は、そのフィックスパックを再適用してください。

製品の前提条件の記述については、Query Patroller の資料を参照してください。

DQP0406E 最大数 *maxnumber* のクエリー・コントローラーがすでに実行中のため、クエリー・コントローラーを開始できません。

説明: 許可されているクエリー・コントローラーの最大数よりも多くのクエリー・コントローラーを開始しようとしました。

ユーザーの処置: 現在実行中のクエリー・コントローラーの 1 つを使用してください。

DQP0408E コマンド *commandname* を実行するには、**DBADM** 権限が必要です。

説明: コマンド *command-name* には、DBADM 権限が必要です。

ユーザーの処置: データベース管理者に DBADM 権限を付与するよう要求し、コマンドを再発行してください。

DQP0409E Query Patroller のシステム設定が存在しません。

説明: システム設定が存在しない場合には、Query Patroller を実行することはできません。

ユーザーの処置: qpsetup コマンドを発行して、Query Patroller システム設定を作成してください。

qpsetup コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。

DQP0410E PUBLIC グループのサブミット設定が存在しません。

説明: PUBLIC グループに対するサブミット設定が存在しない場合には、Query Patroller を実行することはできません。

ユーザーの処置: PUBLIC グループに対するサブミット設定を再作成し、qpstart コマンドを発行して Query Patroller を開始してください。

DQP0412I データベース接続が再確立されました。

説明: データベース接続が再確立されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP0413E データベース接続が失われました。
Query Patroller が終了しました。

説明: データベース接続が失われました。この結果、Query Patroller が終了しました。

ユーザーの処置: データベース接続を再確立してから qpstart コマンドを発行して Query Patroller を再始動してください。

DQP0414E アクティブな照会があるため、**Query Patroller** を停止しませんでした。

説明: キューに入っている照会またはアクティブな照会があるため、Query Patroller を停止しませんでした。

ユーザーの処置: FORCE オプションを使用して、コマンドを再実行してください。アクティブな照会が強制されると、Query Patroller を再始動し、照会のリカバリー

が完了するまでは、これらの照会是不整合状態になります。

DQP0415I 照会の見積りコストが、ユーザーのサブミッター・プロファイルに許可された最大数を超えています。

説明: 照会は保留となります。

ユーザーの処置: データベース管理者に、照会を実行または取り消すように要求してください。

DQP0416E 照会の見積りコストが、システムの最大照会コストを超えています。

説明: 照会は保留となります。

ユーザーの処置: データベース管理者に、照会を実行または取り消すように要求してください。

DQP0417E 実行中の照会数がシステムで許可されている最大数に到達しました。

説明: 照会はキューに入れられます。

ユーザーの処置: 実行中の照会数が、システムで許可されている最大数まで減ると、照会が自動的に実行されます。

DQP0418E ユーザー *username* に対して実行されている照会の数が、サブミッター・プロファイルに許可された最大数を超えています。

説明: 照会はキューに入れられます。

ユーザーの処置: 実行中の照会数が、システムで許可されている最大数まで減ると、照会が自動的に実行されます。

DQP0419E 照会クラス *queryclassnumber* の下で実行中の照会の数は、この照会クラスに許可されている最大数です。

説明: 照会はキューに入れられます。

ユーザーの処置: 実行中の照会数が、照会クラスで許可されている最大数まで減ると、照会が自動的に実行されます。

DQP0420I 見積りコストと現行システム・ワークロードの合計が、許可されている最大システム・ワークロードを超えています。

説明: サブミットされている照会の見積りコストと現行システム・ワークロードの合計が、許可されている最大システム・ワークロードを超えています。

ユーザーの処置: 必要に応じて、システム・ワークロードの最大許可数を増やしてください。

DQP0421I 照会の見積りコストが、許可されている最大システム・ワークロードを超えました。

説明: 照会の見積りコストが、許可されている最大システム・ワークロードを超えているために、照会は保留となります。

ユーザーの処置: 照会を実行できるように、管理者に照会を解放するよう要求するか、または許可される最大システム・ワークロードを増やしてください。

DQP0422E DB2 Query Patroller ライセンスが見つかりません。

説明: DB2 Query Patroller が見つからないか、期限が切れています。

ユーザーの処置: 製品の完全なバージョンに対するライセンス・キーをインストールしてください。IBM 担当者または認定販売業者に連絡して、製品のライセンス・キーを取得してください。

DQP0423E Query Patroller はすでに開始済みです。

説明: Query Patroller はすでに実行中のため、開始できません。

ユーザーの処置: Query Patroller を再始動するには、qppstop コマンドを発行してから qppstart を発行してください。

DQP0424E Query Patroller の開始コマンドが出されていません。

説明: Query Patroller の開始コマンドは処理されていません。Query Patroller の停止コマンドを発行する前に、処理されている必要があります。

ユーザーの処置: Query Patroller の開始コマンド qppstart を発行してから、現行コマンドを再発行してください。

DQP1001E 指定された日付または時間が無効です。

説明: 指定された日付または時間が、誤ったフォーマットになっています。

ユーザーの処置: 正しいフォーマットの日時を入力してください。

DQP1002E 指定される開始日時は、終了日時よりも前でなければなりません。

説明: 指定される開始日時は、終了日時よりも前でなければなりません。

ユーザーの処置: 終了日時よりも前に発生する開始日時を指定してください。

DQP1003E 日付の整合性に違反するため、操作が打ち切られました。SQLSTATE = sqlstate。

説明: Query Patroller のコントロール表には、そこに含まれているデータの整合性を保護するためのトリガーがあります。そのようなトリガーは、試行されたアクションを介して活動化されています。構成の整合性の制約違反により、操作が打ち切られました。

ユーザーの処置: qpschema.sql ファイルを調べて、SQLSTATE のシグナルを出したトリガーを見つけてください。この調査を基に、再びトリガーがアクションを打ち切らないように、必要な調整を行ってください。

DQP1004E メモリーの割り振りエラーが発生しました。

説明: 処理を続行することのできる十分なメモリーがありません。

ユーザーの処置: システムに十分なメモリーがあるか確認してください。

システム・メモリー要件については、Query Patroller の資料を参照してください。問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP1005E 時刻範囲を 2 年より大にすることはできません。

説明: 指定された時刻範囲が 2 年を超えています。

ユーザーの処置: 次の 2 年以内の時刻範囲を指定して、再度コマンドを発行してください。

DQP1006E SQL ステートメント sqlstmt が失敗しました。SQLCODE SQLCODE。

説明: SQL ステートメントが失敗しました。

ユーザーの処置: このメッセージの原因については、qpdiag.log ファイルをチェックしてください。問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP1008E SQL データ・タイプ *datatype* はサポートされていません。

説明: SQL データ・タイプはサポートされていません。

ユーザーの処置: サポートされる SQL データ・タイプに関する情報については、Query Patroller の資料を参照してください。

DQP1009E 結果宛先が大き過ぎて表示できません。

説明: 結果がコントロール表の最大サイズ限度を超えているため、クエリー・パトローラー・センターおよび Query Patroller コマンド行プロセッサは、結果を戻すことができません。

ユーザーの処置: 照会を再サブミットして、結果が結果表に保管されるのではなく、アプリケーションに戻されることを確認してください。

照会がバックグラウンドで実行されたために結果表を生成した場合は、結果が戻されるまで待機するようサブミット設定を設定して、照会を再サブミットしてください。

照会が保留後に実行されたために、結果表が生成された場合は、照会を保留せずに再サブミットできるように、サブミッター・プロファイルの照会コストを上げるよう管理者に要求してください。

別の方法として、結果表から直接選択するよう選択することもできますが、結果表の列の名前は照会の名前と一致せず、結果表には追加の列である A0000 が含まれます。

DQP1010E ファイル *filename* にアクセスできません。

説明: 指定されたファイルにアクセスできません。

ユーザーの処置: ファイルが存在し、ファイル許可が正しいかどうか、確認してください。

DQP1011E ユーザー *username* はこのコマンドの発行を許可されていません。

説明: ユーザーが必要な許可レベルを所有していないため、コマンドを実行できません。

ユーザーの処置: 必要な許可については、Query Patroller パトローラーの資料をチェックしてください。ユーザーに必要な権限を付与するようデータベース管理者に要求して、コマンドを再発行してください。

DQP1012E ファイル *filename* は存在しません。

説明: 指定されたファイルが存在しません。

ユーザーの処置: ファイルが存在するかどうか確認してください。問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP1023E ファイル *filename* へ保管中に、エラーが発生しました。

説明: このメッセージの原因には、以下が含まれます。

- ファイルに、正しいファイル許可がない。
- ファイル名が、ファイル・システム規則に準拠していない。

ユーザーの処置: 解決策は以下のとおりです。

- ファイル許可を確認してください。
- 正しいファイル名を指定してください。

DQP1024W 照会クラスの作成、変更、除去は、Query Patroller サーバーが再始動されるまで反映されません。

説明: 照会クラスの作成、変更、または削除を行ったところです。これは、Query Patroller サーバーによる詳細の処理方法の動作を変更します。この動作の変更は、Query Patroller が次回開始されるまで発生しません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーが実行中のコンピュータで、qstop、qstart の順でコマンドを実行し、Query Patroller を再始動するよう管理者に要求してください。

DQP1025W 更新は、Query Patroller サーバーの再始動まで反映されません。

説明: 設定は、Query Patroller サーバーの再始動まで反映されません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、変更を反映させてください。

DQP1026W 更新が正常に行われました。ただし、Query Patroller サーバーとの通信は失敗しました。

説明: 更新が正常に行われました。ただし、変更を反映するための Query Patroller サーバーへの接続はできません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、影響を受けた変更を参照してください。

DQP1028E ネットワークの操作が妥当な時間内に完了しませんでした。コマンドを完了することができません。

説明: ネットワークの操作が妥当な時間内に完了しませんでした。コマンドを完了することができません。

ユーザーの処置: ネットワークが混んでいない時に、コマンドを再実行してください。問題が解決しない場合は、システム管理者に連絡し、ネットワーク・エラーがないかどうか分析してください。

DQP2020E パス *path* が無効です。

説明: 指定されたパスが無効です。

ユーザーの処置: パスを確認し、コマンドを再実行してください。

DQP2101I ユーザー *username* の演算子プロファイルは正常に追加されました。

説明: このユーザーの演算子プロファイルが作成されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2102I グループ *groupname* の演算子プロファイルが正常に追加されました。

説明: このグループの演算子プロファイルが作成されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2103I ユーザー *username* の演算子プロファイルが正常に更新されました。

説明: 既存のユーザー演算子プロファイルが更新されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2104I グループ *groupname* の演算子プロファイルが正常に更新されました。

説明: 既存のグループ演算子プロファイルが更新されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2105I ユーザー *username* の演算子プロファイルが正常に除去されました。

説明: ユーザーの演算子プロファイルが除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2106I グループ *groupname* の演算子プロファイルが正常に除去されました。

説明: グループの演算子プロファイルが除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2107E ユーザー *username* の演算子プロファイルが存在しません。

説明: ユーザーの演算子プロファイルが定義されていません。

ユーザーの処置: 指定されたユーザー名が正しいことを確認して、コマンドを再発行してください。

DQP2108E グループ *groupname* の演算子プロファイルが存在しません。

説明: グループの演算子プロファイルが定義されていません。

ユーザーの処置: 指定されたグループ名が正しいことを確認して、コマンドを再発行してください。

DQP2109E ユーザー *username* の演算子プロファイルはすでに存在しています。

説明: ユーザーの演算子プロファイルはすでに存在しています。

ユーザーの処置: 指定されたユーザー名がユニークであることを確認して、コマンドを再発行してください。

DQP2110E グループ *groupname* の演算子プロファイルはすでに存在しています。

説明: グループの演算子プロファイルはすでに存在しています。

ユーザーの処置: 指定されたグループ名がユニークであることを確認して、コマンドを再発行してください。

DQP2111I 演算子プロファイルが定義されていません。

説明: 表示する演算子プロファイルが定義されていません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2112I 照会クラス *queryclassID* は正常に追加されました。

説明: 新規照会クラスが定義されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2113I 照会クラス *queryclassID* は正常に更新されました。

説明: 既存の照会クラスが更新されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2114I 照会クラス *queryclassID* は正常に除去されました。

説明: 照会クラスが除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2115E 照会クラス *queryclassID* は存在しません。

説明: 照会クラスが存在しません。

ユーザーの処置: 指定された照会クラス ID が正しいことを確認して、コマンドを再発行してください。

DQP2116E 同じ最大照会コスト値を持つ照会クラスがすでに存在します。

説明: 照会クラスがすでに存在します。

ユーザーの処置: まだ存在しない照会クラスを指定して、コマンドを再実行してください。

DQP2117I 照会クラスが定義されていません。

説明: 既存の照会クラスはありません。リストにも情報がありません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2118I ユーザー *username* のサブミッター・プロフィールが正常に追加されました。

説明: このユーザーに対する新規ユーザー・サブミッター・プロフィールが作成されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2119I グループ *groupname* のサブミッター・プロフィールが正常に追加されました。

説明: このグループの新規グループ・サブミッター・プロフィールが作成されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2120I ユーザー *username* のサブミッター・プロフィールを作成するが正常に更新されました。

説明: 既存のユーザー・サブミッター・プロフィールが更新されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2121I グループ *groupname* のサブミッター・プロフィールが正常に更新されました。

説明: 既存のグループ・サブミッター・プロフィールが更新されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2122I ユーザー *username* のサブミッター・プロフィールが正常に除去されました。

説明: ユーザー・サブミッター・プロフィールが除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2123I グループ *groupname* のサブミッター・プロフィールが正常に除去されました。

説明: グループ・サブミッター・プロフィールが除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2124E ユーザー *username* のサブミッター・プロフィールが存在しません。

説明: このユーザーのサブミッター・プロフィールは存在しません。

ユーザーの処置: 既存のユーザー名を指定して、再度コマンドを発行してください。

DQP2125E グループ *groupname* のサブミッター・プロフィールが存在しません。

説明: このグループのサブミッター・プロフィールが存在しません。

ユーザーの処置: 既存のグループ名を指定して、再度コマンドを発行してください。

DQP2126E ユーザー *username* のサブミッター・プロフィールはすでに存在します。

説明: このユーザーのサブミッター・プロフィールは存在しています。

ユーザーの処置: ユニークなユーザー名を指定して、再

度コマンドを発行してください。

DQP2127E グループ *groupname* のサブミッター・プロファイルはすでに存在します。

説明: このグループのサブミッター・プロファイルは存在しています。

ユーザーの処置: ユニークなグループ名を指定して、再度コマンドを発行してください。

DQP2128I サブミッター・プロファイルが存在しません。

説明: サブミッター・プロファイルがありません。リストにも情報がありません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2129I Query Patroller システムの設定が正常に更新されました。

説明: Query Patroller システムの設定が正常に更新されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2130E 照会 *queryID* は存在しません。

説明: 指定された照会 ID は存在しません。

ユーザーの処置: 存在する照会 ID を指定して、再度コマンドを発行してください。

DQP2131I 入力基準に一致する照会がありません。

説明: 入力基準に一致する照会がないため、リストする情報がありません。

ユーザーの処置: 必要な場合には入力基準を変更してください。

DQP2132I ユーザー *username* の新規サブミット設定が追加されました。

説明: ユーザーに対して新規ユーザー・サブミット設定が作成されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2133I ユーザー *username* のサブミット設定が正常に更新されました。

説明: 既存のサブミット設定が更新されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2134I ユーザー *username* のサブミット設定が除去されました。このユーザーは、デフォルトのサブミット設定を使用します。

説明: 個人のサブミット設定が除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2135E ユーザー *username* のサブミット設定はすでに存在します。

説明: このユーザーのサブミット設定はすでに存在しています。

ユーザーの処置: ユニークなユーザー名を指定して、再度コマンドを発行してください。

DQP2136I すべての結果表が正常に除去されました。

説明: すべての結果表がドロップされました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2137I ドロップする既存の結果表がありません。

説明: ドロップする結果表がありません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2138I ユーザー *username* に所属する結果表が正常に除去されました。

説明: 結果表がドロップされました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2139I ユーザー *username* に属す結果表がありません。何も除去されませんでした。

説明: ドロップする結果表がありません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2140I 照会 *queryID* の結果表が正常に除去されました。

説明: 結果表がドロップされました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2141I 照会 *queryID* の結果表が存在しません。何も除去されませんでした。

説明: 指定された照会の結果表が存在しません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2142E 照会 *queryID* が正しい状態ではありません。

説明: 照会は、コマンドを実行する正しい状態ではありません。

ユーザーの処置: 照会の状態を確認し、コマンドを再実行してください。

DQP2143E 無効な時間単位 *timeunit* がパラメーター *parametername* に対して指定されました。

説明: パラメーターに指定された時間単位は無効です。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。

正しい訂正単位を指定し、コマンドを再実行してください。

DQP2144E 指定されたパラメーター *parametername* は正しくありません。

説明: 指定されたパラメーターは正しくありません。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。構文を訂正して、再度コマンドを発行してください。

DQP2145E パラメーター *parametername* を指定する必要があります。

説明: 指定されたコマンド構文は正しくありません。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。構文を訂正して、再度コマンドを発行してください。

DQP2146E 誤った値 *value* がパラメーター *parametername* に対して指定されました。

説明: パラメーターに対して誤った値が指定されました。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。パラメーター値を訂正して、再度コマンドを発行してください。

DQP2147E パラメーター *parametername* の値が欠落しています。

説明: 必要なパラメーター値がコマンドから欠落しています。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。必要なパラメーター値を指定して、再度コマンドを発行してください。

DQP2148E 予期しないキーワード *keyword*、予期されているキーワードは *keyword* である可能性があります。

説明: コマンドに適用されないキーワードを検出しました。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。構文を訂正して、再度コマンドを発行してください。

DQP2149E 予期しないコマンドの終わり。予期される値には、*value* が含まれている可能性があります。

説明: コマンドで構文エラーが検出されました。

コマンドは処理されません。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。

構文を訂正して、再度コマンドを発行してください。

DQP2150E パラメーター *parametername* を複数回指定することはできません。

説明: パラメーター *parametername* が複数回指定されました。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。構文を訂正して、再度コマンドを発行してください。

DQP2151E パラメーター *parametername* のデフォルト値はありません。

説明: このパラメーターには、デフォルト値はありません。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。有効なパラメーター値を指定して、再度コマンドを発行してください。

DQP2152E パラメーター *parametername* の値を NULL にすることはできません。

説明: パラメーター *parametername* の値を指定してください。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。このパラメーターの値を指定して、再度コマンドを発行してください。

DQP2153E パラメーター *parametername* の値は、単一引用符で囲む必要があります。

説明: このパラメーターは、単一引用符で囲む必要があります。

ユーザーの処置: コマンドの実行方法の記述については、Query Patroller の資料を参照してください。パラメーター値を単一引用符で囲んで、再度コマンドを発行してください。 the command.

DQP2154E この照会は現在実行中ではなく、照会の状況は不明です。

説明: 照会は実行中ではありませんが、その最終状況を判別できません。正常に完了しているか、または失敗している可能性があります。これは、次のシナリオによって起きることのある異常な状態です。

- この照会の実行中に、Query Patroller サーバーの破損、または FORCE オプションによるシャットダウン、停電による終了、または DB2 への接続の強制切断が起きた。
- この照会が待機または実行中に、DB2 サーバーの破損、または force オプションによるシャットダウン、停電による終了が起きた。
- DB2 が照会完了状況をレポートしようとする予想時間枠以内に、Query Patroller サーバーが応答しない。

ユーザーの処置: 照会状況および結果のために、照会をサブミットしたクライアント・アプリケーションを調査してください。必要であれば、照会を再サブミットしてください。

DQP2155E ユーザー *username* は中断されています。

説明: このユーザーは照会をサブミットしたり、Query Patroller のコマンドを実行する許可を持っていません。

ユーザーの処置: データベース管理者にこのユーザーのサブミッター・プロファイルを再活動化するよう要求してください。

DQP2156E Query Patroller サーバーとの通信がタイムアウトになりました。

説明: DB2 サーバーは、予想時間枠内に Query Patroller サーバーへの接続または通信ができません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーが一時的に多重定義となっているため、通常の応答時間より時間がかかりました。システムのワークロードをチェックして、Query Patroller システムが、最適なパフォーマンスのために正しく調整されていることを確認してください。必要であれば、照会を再サブミットしてください。

問題が解決されない場合は、IBM サービスまで連絡してください。

DQP2157E ユーザー *username* のサブミット設定が存在しません。

説明: このユーザーに対する既存のサブミット設定がありません。

ユーザーの処置: ユーザーのサブミット設定を作成するか、既存のサブミット設定を持つユーザー名を指定してください。

DQP2158E ユーザー *username* に属するサブミット設定を自分自身にコピーすることはできません。

説明: サブミット設定を自身にコピーすることはできません。

ユーザーの処置: 別のユーザー名を指定して、コマンドを再実行してください。

DQP2159I 照会 *queryID* の照会情報が除去されました。

説明: *queryID* 照会に関連した既存の情報はありません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2160I 照会 *queryID* の履歴情報が除去されました。

説明: *queryID* 照会に関連した既存の履歴情報はありません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2161I すべての照会情報が除去されました。

説明: 照会情報が除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2162I すべてのヒストリカル照会情報が除去されました。

説明: 履歴照会情報が除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2163I 照会 *queryID* が取り消されました。

説明: 照会が取り消されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2164I *number* の照会の照会情報のうち、*timeunit* よりも古いものが除去されました。

説明: *timeunit* より古い照会に関連する情報が除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2165I *number* の照会の履歴照会情報のうち、*timeunit* よりも古いものが除去されました。

説明: *timeunit* より古い照会に関連する履歴情報が除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2166E 照会 *queryID* を、取り消すことはできません。照会がすでに完了、取り消し、または打ち切りとなっています。

説明: 照会がすでに完了、取り消し、または打ち切りとなっているため、照会 *queryID* を取り消すことはできません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2167E 予期しないキーワード *keyword* です。コマンドの終わりを予想しました。

説明: コマンドに適用されないキーワードを検出しました。

ユーザーの処置: コマンドの詳細な記述については、Query Patroller の資料を参照してください。構文を訂正して、再度コマンドを発行してください。

DQP2168I 指定されたすべての照会の情報が除去されました。

説明: 照会情報が除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2169I 指定されたすべての照会の履歴情報が除去されました。

説明: 照会の履歴情報が除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2170I *Number* の結果表のうち、*timeunit* よりも古いものがドロップされました。

説明: *timeunit* より古いいため、結果表は除去されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2171I Query Patroller は *number* 個の照会を処理し、*number* 個の照会に対して履歴データが正常に生成されました。

説明: 履歴データが識別された照会数に対して生成されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2172I 照会クラスの更新には、かなり時間がかかる場合があります。現在待機中の照会および新たにサブミットされる照会は、このプロセスが完了するまで待機中になります。

説明: 照会クラスの更新には、完了までかなり時間がかかる場合があります。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2173E 照会クラスの更新が進行中です。この時には、別の更新を実行することはできません。

説明: 別の照会クラスの更新が進行中の場合には、照会クラスの更新を実行することができません。

ユーザーの処置: 現行の更新が完了してから、コマンドを再実行してください。

DQP2174I 照会クラスの最大数を超えました。

説明: 照会クラスの最大数に到達しました。新規照会クラスを作成できません。

ユーザーの処置: 既存の照会クラス数を減らしてください。

DQP2175I 同じ最大照会コスト値を持つ照会クラスがすでに存在するか、照会クラスの最大数を超えました。

説明: 照会クラスの最大数に到達しました。新規照会クラスを作成できません。

照会クラスにはユニークな照会コスト値が必要です。

ユーザーの処置: 既存の照会クラス数を減らし、すべての照会クラスにユニークな照会コスト値があることを確認してください。

DQP2176E キーワード *keyword* の長さが最大許可長を超えています。

説明: 指定されたキーワードの長さが、最大許可長を超えています。

ユーザーの処置: キーワードが有効であることを確認し、コマンドを再実行してください。

DQP2178E 無効なユーザー名またはパスワードが入力されました。

説明: 無効なユーザー名またはパスワードが入力されました。

ユーザーの処置: 正しいユーザー名とパスワードを指定して、コマンドを再実行してください。

DQP2179I 履歴照会情報が存在しません。

説明: 情報が存在しないため、照会の中には履歴情報を除去できないものがあります。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2180W 照会 *queryid* は現在バックグラウンドで実行中です。

説明: 指定された照会はバックグラウンドで実行中です。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2181E 結果セットの行数が結果表に入れることのできる行数を超えているため、照会が打ち切られました。

説明: この照会がバックグラウンドで実行されていたか、またはいったん保留されてから解放されたため、Query Patroller は、この照会に対する結果表を作成しようとして失敗しました。このサブミッターのサブミット設定は、イベントで結果セットが許可されている最大セットより大きい場合、結果が戻らないことを示しました。

照会から戻った行数が、この照会をサブミットしたサブミッター・プロファイルの指定した結果表の最大サイズを超過した場合、Query Patroller は照会を打ち切ります。

ユーザーの処置: 照会から戻る行数を減らすか、あるいは管理者または演算子に結果表で許可される行数を増やすよう要求してください。照会がバックグラウンドで実行されている場合は、照会を解放せず結果を待機するようにしてください。

DQP2182I 保留照会 *queryid* が実行されています。

説明: 指定された照会はバックグラウンドで実行中です。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2183E 照会 *queryid* は、バックグラウンドで実行できません。

説明: 指定された照会はバックグラウンドで実行できません。

ユーザーの処置: バックグラウンドで実行できる照会クラスに関しては、Query Patroller の資料を参照してください。

DQP2184E *time-unit* より古い結果表は存在しません。

説明: 結果表が存在しません。何も除去されませんでした。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2185I *time-value* より古い照会情報は存在しません。

説明: 照会情報が存在しないため、除去することができません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2186I *time-value* より古い履歴照会情報は存在しません。

説明: 履歴照会情報が存在しないため、除去することができません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2187W ユーザー *username* のサブミット設定が正常に追加されました。ただし、Query Patroller サーバーとの通信は失敗しました。変更は、Query Patroller サーバーに反映されていません。

説明: ユーザーに対する新規サブミット設定が正常に追加されました。ただし、変更を反映するための Query Patroller サーバーへの接続はできません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、影響を受けた変更を参照してください。

DQP2188W ユーザー *username* のサブミット設定が正常に更新されました。ただし、Query Patroller サーバーとの通信は失敗しました。変更は、Query Patroller サーバーに反映されていません。

説明: ユーザーに対するサブミット設定が正常に更新されました。ただし、変更を反映するための Query Patroller サーバーへの接続はできません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、影響を受けた変更を参照してください。

DQP2189W ユーザー *username* のサブミッター・プロファイルが正常に追加されました。ただし、**Query Patroller** サーバーとの通信は失敗しました。変更は、**Query Patroller** サーバーに反映されていません。

説明: ユーザーに対するサブミッター・プロファイルが正常に追加されました。ただし、変更を反映するための Query Patroller サーバーへの接続はできません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、影響を受けた変更を参照してください。

DQP2190W ユーザー *username* のサブミッター・プロファイルを作成するが正常に更新されました。ただし、**Query Patroller** サーバーとの通信は失敗しました。変更は、**Query Patroller** サーバーに反映されていません。

説明: ユーザーに対するサブミッター・プロファイルが正常に更新されました。ただし、変更を反映するための Query Patroller サーバーへの接続はできません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、影響を受けた変更を参照してください。

DQP2191W グループ *groupname* のサブミッター・プロファイルが正常に追加されました。ただし、**Query Patroller** サーバーとの通信は失敗しました。変更は、**Query Patroller** サーバーに反映されていません。

説明: グループに対するサブミッター・プロファイルが正常に追加されました。ただし、変更を反映するための Query Patroller サーバーへの接続はできません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、影響を受けた変更を参照してください。

DQP2192W グループ *groupname* のサブミッター・プロファイルが正常に更新されました。ただし、**Query Patroller** サーバーとの通信は失敗しました。変更は、**Query Patroller** サーバーに反映されていません。

説明: グループに対する新規サブミッター・プロファイルが正常に更新されました。ただし、変更を反映するための Query Patroller サーバーへの接続はできません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、影響を受けた変更を参照してください。

DQP2193W **Query Patroller** システムの設定が正常に更新されました。ただし、**Query Patroller** サーバーとの通信は失敗しました。変更は、**Query Patroller** サーバーに反映されていません。

説明: Query Patroller システムの設定が正常に更新されました。ただし、変更を反映するための Query Patroller サーバーへの接続はできません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、影響を受けた変更を参照してください。

DQP2194W ユーザー *username* のサブミット設定が正常に除去されました。ただし、**Query Patroller** サーバーとの通信は失敗しました。変更は、**Query Patroller** サーバーに反映されていません。

説明: ユーザーに対するサブミット設定が正常に除去されました。ただし、変更を反映するための Query Patroller サーバーへの接続はできません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、影響を受けた変更を参照してください。

DQP2195W ユーザー *username* のサブミッター・プロファイルが正常に除去されました。ただし、**Query Patroller** サーバーとの通信は失敗しました。変更は、**Query Patroller** サーバーに反映されていません。

説明: ユーザーに対するサブミッター・プロファイルが正常に除去されました。ただし、変更を反映するための Query Patroller サーバーへの接続はできません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、影響を受けた変更を参照してください。

DQP2196W グループ *groupname* のサブミッター・プロファイルが正常に除去されました。ただし、**Query Patroller** サーバーとの通信は失敗しました。変更は、**Query Patroller** サーバーに反映されていません。

説明: グループに対するサブミッター・プロファイルが正常に除去されました。ただし、変更を反映するための Query Patroller サーバーへの接続はできません。

ユーザーの処置: Query Patroller サーバーを再始動して、影響を受けた変更を参照してください。

DQP2197I 照会 *queryID* は除去できません。

説明: 照会情報を除去することはできません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2198E 照会 *queryID* に対する結果セットを表示
できません。結果セットが存在しません。

説明: 照会の結果セットが存在しません。このエラーは、照会が SELECT 以外のステートメントであるか、結果セットが手動でドロップされたか、または結果出力先としてクライアント・アプリケーションが指定されている場合に発生する可能性があります。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2199W 管理対象照会に対して指定されたページ期間が、結果表に対して指定されたページ期間より短くなっています。管理対象照会が削除されると、関連した結果表も削除されます。

説明: 管理対象照会に対して指定されたページ期間が、結果表に対して指定されたページ期間より短くなっています。管理対象照会が削除されると、関連した結果表も削除されます。そのため、結果表のページ期間は無視されます。

ユーザーの処置: 管理対象照会に対するページ期間を、結果表に対するページ期間以上になるよう設定してください。

DQP2200W 履歴照会に対して指定されたページ期間が、管理対象照会に対して指定されたページ期間より短くなっています。履歴照会が削除されると、関連した管理対象照会も削除されます。

説明: 履歴が削除されると、関連した管理対象照会も削除されます。そのため、管理対象照会の管理対象ページ期間は無視されます。

ユーザーの処置: 履歴照会に対するページ期間を、管理対象照会に対するページ期間以上になるよう設定してください。

DQP22202I 履歴分析データ生成プログラムがユーザーによって停止されました。Query Patroller は *number* 個の照会を処理し、*number* 個の照会に対して履歴データを正常に生成した後、停止しました。

説明: GENERATE HISTORICAL_DATA STOP コマンドが別プロセスで発行されました。履歴データが識別された照会数に対して生成されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2203I 履歴データの生成を停止するための試行処理が進行中です。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2204I この時点で Query Patroller は履歴データを生成していません。

説明: この時点で履歴データが生成されていないため、Query Patroller は GENERATE HISTORICAL_DATA STOP コマンドを発行できません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2209W この照会を保留解除すると、その結果としてシステムの実行するワークロードは、最大システム・ワークロード・コストを超過することになります。

説明: 保留解除中の照会のコストは、システム・ワークロード・コストを超過しています。その保留状態が解除されると、Query Patroller は、キューに入れられている他の照会がなくなるまで、この照会をキューに入れません。

これは、この照会と同時に実行中の他の照会がないことを保証するものではありません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2211E 履歴分析データ生成プログラムを実行できません。それはすでに現在実行中です。

説明: 1 つのデータベースに対しては、一度に 1 つの履歴分析データ生成プログラムしか実行できません。

ユーザーの処置: 現在実行中の履歴分析データ生成プログラムが完了してから、もう一度実行してみてください。または、GENERATE HISTORICAL_DATA STOP Query Patroller コマンドを発行することによって、現在実行中の履歴分析データ生成プログラムを停止してください。

DQP2505I データベース・パーティション・グループ *dbpartitiongroupname* は存在しません。**qpsetup** コマンドが新規データベース・パーティション・グループの作成を試行します。

説明: 指定されたデータベース・パーティション・グループが存在しません。

ユーザーの処置: qpsetup コマンドが新規データベース・パーティション・グループの作成を試行します。

DQP2506E 1 つ以上の Query Patroller のコントロール表がすでに存在します。

説明: 1 つ以上の Query Patroller のコントロール表が見つかりました。 `qpsetup` コマンドを実行できません。

ユーザーの処置: コントロール表が有効で完全であるか、確認してください。このコントロール表を、新規のコントロール表と置き換えたい場合、 `REPLACE` オプションを指定して、 `qpsetup` コマンドを再実行してください。

DQP2507E 表スペース `tablespacename` は存在しません。 `qpsetup` コマンドを実行できません。

説明: 指定された表スペース名が存在しません。

ユーザーの処置: 表スペース名が正しいことを確認して、コマンドを再発行してください。

DQP2508E スキーマ `schemaname` はすでに存在しません。コマンド `commandname` を実行できません。

説明: 指定されたスキーマ名がすでに存在します。

ユーザーの処置: ユニークなスキーマ名を指定して、コマンドを再実行してください。

DQP2516E パッケージ `package-name` をバインドできません。理由 `reason`。

説明: パッケージをバインドしようとして失敗しました。

ユーザーの処置: この失敗が `SQLCODE` によって発生した場合、詳細についてはメッセージ・リファレンスを参照してください。問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP2518E Query Patroller のコントロール表が存在しません。

説明: Query Patroller のコントロール表が、指定されたデータベースでは見つかりません。

ユーザーの処置: `qpsetup` コマンドを発行して、Query Patroller のコントロール表を作成してください。

DQP2519E 結果表スペース情報を指定した `DB2QP.QP_SYSTEM` 表の更新ができませんでした。理由 = `reason`。

説明: `qpsetup` コマンドは、結果表スペースを指定した `QP_SYSTEM` 表を更新しようとしたましたが、この更新は失敗しました。

ユーザーの処置: 理由を分析して問題を生成し、コマンドを再実行してください。

問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP2520W スキーマ `schema-name` はすでに存在しません。 `qpsetup` コマンドが、このスキーマを使用して Query Patroller のコントロール表の作成を試行します。

説明: スキーマは、指定されたデータベースにすでに存在します。 `qpsetup` コマンドが、このスキーマに Query Patroller のコントロール表の作成を試行します。このスキーマに存在する DB2 の表は、 `REPLACE` オプションが `qpsetup` コマンドで指定されない限り、置き換えられません。

ユーザーの処置: 既存の表に Query Patroller のコントロール表と同じ名前の表がある場合は、別のスキーマに移動してください。

DQP2521E 表スペース・コンテナ `container-path` はすでに使用中です。

説明: 指定された表スペース・コンテナのパスは、別のアプリケーションで使用されています。

ユーザーの処置: パスを確認し、コマンドを再実行してください。

DQP2522E `qpsetup` コマンドは失敗しました。このコマンドで作成されたすべてのデータベース・オブジェクトをクリーンアップしません。

説明: `qpsetup` コマンドは失敗しました。表スペース、表、関数、プロシージャなどのすべてのデータベース・オブジェクトをクリーンアップします。

ユーザーの処置: このメッセージが表示された原因については、 `qpsetup.log` ファイルを参照してください。問題が解決されない場合は、IBM サポートまで連絡してください。

DQP2523I **qpsetup** コマンドが正常に終了しました。

説明: qpsetup コマンドが正常に終了しました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2526I パッケージ *package-name* が正常にバインドされました。

説明: Query Patroller はパッケージを正常にバインドしました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2604I **Query Patroller** バージョン 7 のコントロール表のクリーンアップが正常に完了しました。

説明: Query Patroller の移行クリーンアップは正常に完了し、バージョン 7 の Query Patroller の表、ビュー、およびトリガーはすべてドロップされました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2605E **Query Patroller** バージョン 7 のコントロール表のクリーンアップが失敗しました。

説明: Query Patroller 移行ツールは、バージョン 7 の Query Patroller のデータベース・オブジェクトを移行中に、致命的エラーを検出しました。クリーンアップは正常に完了しませんでした。

ユーザーの処置: このメッセージが表示された原因については、qpmigrate.log ファイルを参照してください。

DQP2606W **Query Patroller** バージョン 7 のコントロール表のクリーンアップが警告を出して完了しました。

説明: Query Patroller の移行クリーンアップは、バージョン 7 の Query Patroller 表を削除している間に警告を検出しました。ただし、処理は正常に完了している可能性があります。ユーザーまたはシステム構成の一部、あるいはこの両方を移行する場合にエラーが発生した可能性があります。

ユーザーの処置: このメッセージが表示された原因については、qpmigrate.log ファイルを参照してください。

DQP2607I **Query Patroller** のコントロール表のバージョン 7 からバージョン 8 への移行は正常に完了しました。

説明: Query Patroller 移行ツールは正常に完了しました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2608E **Query Patroller** のコントロール表のバージョン 7 からバージョン 8 への移行が失敗しました。

説明: Query Patroller 移行ツールは、データベースの移行中に致命的エラーを検出しました。移行は正常に完了しませんでした。

ユーザーの処置: このメッセージが表示された原因については、qpmigrate.log ファイルを参照してください。

DQP2609W **Query Patroller** のコントロール表のバージョン 7 からバージョン 8 への移行が警告を出して完了しました。

説明: Query Patroller 移行ツールは、データベースの移行中に警告を検出しましたが、移行は正常に完了した可能性があります。ユーザーまたはシステム構成の一部、あるいはこの両方を移行する場合にエラーが発生した可能性があります。

ユーザーの処置: このメッセージが表示された原因については、qpmigrate.log ファイルを参照してください。

DQP2610E 先に進む前に、**Query Patroller** を停止してください。

説明: Query Patroller 移行ツールを実行する前に、Query Patroller サーバーを停止しておく必要があります。

ユーザーの処置: qpstop コマンドを発行して、Query Patroller サーバーを停止してください。

DQP2611W ユーザー *username* のユーザー・プロファイルが移行されていません。 **SQLCODE = SQLCODE**。

説明: ユーザーは移行されていません。

ユーザーの処置: このメッセージが表示された原因については、SQLCODE を参照してください。

DQP2612I Query Patroller のユーザー・プロフィールとグループ・プロファイルの移行が正常に完了しました。

説明: バージョン 7 の Query Patroller 表である IWM003_USER_PROF からのデータが、バージョン 8 の Query Patroller 表である SUBMITTER_PROFILE、OPERATOR_PROFILE、および SUBMISSION_PREFERENCES に移行されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2613W Query Patroller のユーザー・プロフィールとグループ・プロファイルの移行が完了しましたが、警告が出されました。

説明: Query Patroller 移行ツールは、バージョン 7 の Query Patroller 表である IWM003_USER_PROF から、バージョン 8 の Query Patroller 表である SUBMITTER_PROFILE、OPERATOR_PROFILE、および SUBMISSION_PREFERENCES へ移行する間に警告を検出しました。

ユーザーの処置: 移行されていないユーザーのリストについては、qpmigrate.log を参照してください。ユーザー名の競合が予想された場合には、アクションは不要です。その他の場合は、データを手動で表にコピーしてください。

DQP2614W Query Patroller のユーザー・プロフィールとグループ・プロファイルの移行が失敗しました。

説明: バージョン 7 の Query Patroller 表からデータを読み取ろうとしてエラーが発生し、ユーザーおよびグループ・プロファイル情報の移行を続行できませんでした。バージョン 7 の Query Patroller 表が壊れているか、あるいはバージョン 7 の Query Patroller 表からの読み取り中に入出力エラーが発生しました。

ユーザーの処置: バージョン 7 の Query Patroller 表のすべてが、有効なデータで存在しているかどうか確認してください。

DQP2615I Query Patroller のシステム構成の移行が正常に完了しました。

説明: バージョン 7 の Query Patroller 表である IWM003_JOB_QUEUE および IWM003_SYS_PARMS からのデータが、バージョン 8 の Query Patroller 表である QUERY_CLASS および QP_SYSTEM に正常に移行されました。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP2616W Query Patroller のシステム構成の移行が完了しましたが、警告が出されました。

説明: Query Patroller 移行ツールは、バージョン 7 の Query Patroller 表である IWM003_JOB_QUEUE および IWM003_SYS_PARMS からバージョン 8 の Query Patroller 表である QUERY_CLASS および QP_SYSTEM へ移行している間に警告を検出しました。さまざまなジョブ・キューがすでに表に存在している可能性があります。

ユーザーの処置: 移行されていないジョブのリストについては、qpmigrate.log を参照してください。ジョブ・キューの競合が予想された場合には、アクションは不要です。その他の場合は、データを手動で表にコピーしてください。

DQP2617E Query Patroller のシステム構成の移行が失敗しました。

説明: バージョン 7 の Query Patroller 表からデータを読み取ろうとしてエラーが発生し、システム構成情報の移行を続行できませんでした。バージョン 7 の Query Patroller 表が壊れているか、あるいはバージョン 7 の Query Patroller 表からの読み取り中に入出力エラーが発生しました。

ユーザーの処置: バージョン 7 の Query Patroller 表のすべてが、有効なデータで存在しているかどうか確認してください。

DQP2625W 照会 ID *queryid* の移行が失敗しました。
これは同一の最大照会コスト *querycost* を持つ項目がすでに存在するためです。

説明: Query Patroller の移行は、移行されようとしている照会クラスと同一の最大コストを指定した QUERY_CLASS コントロール表で、項目を検出しました。同一の最大コストを指定した項目は許可されません。

ユーザーの処置: 最大コストの競合が予想された場合には、アクションは不要です。その他の場合、移行する照会クラスの最大コストを変更して QUERY_CLASS コントロール表へ手動で挿入してください。

DQP3000E この照会クラスの最大照会数は、Query Patroller システムの照会数より小さくなければなりません。

説明: 照会の最大数が、照会クラスおよび Query Patroller システム自体に対して設定されている可能性があります。Query Patroller システムの最大照会数より大きい数の照会クラスが存在しません。

ユーザーの処置: 照会クラスに対する最大照会数を低くするか、この照会数を増やすより先に Query Patroller システムに対する最大照会数を増やしてください。

DQP3001E この照会クラスの最大照会コストは、**Query Patroller** システムの最大ワークロード・コストよりも小さくなければなりません。

説明: Query Patroller システムの最大ワークロード・コストより大きい数の照会クラスが存在しません。

ユーザーの処置: 照会クラスに対する最大照会コストを低くするか、この照会コストを増やすより先に Query Patroller システムに対する最大ワークロード・コストを増やしてください。

DQP3002E **Query Patroller** システムに指定された値よりも大きい最大照会数を持つ、1 つ以上の照会クラスが存在します。

説明: 照会の最大数が、照会クラスおよび Query Patroller システム自体に対して設定されている可能性があります。Query Patroller システムの最大照会数より大きい数の照会クラスが存在しません。

ユーザーの処置: Query Patroller システムの最大照会数を増やすか、システムの最大数を低くできないようにしている照会クラスの最大数を減らしてください。

DQP3003E **Query Patroller** システムの最大ワークロード・コストに指定された値よりも大きな最大照会コストを持つ、1 つ以上の照会クラスが存在します。

説明: Query Patroller システムの最大ワークロード・コストより大きい数の照会クラスが存在しません。

ユーザーの処置: Query Patroller システムの最大ワークロード・コストを増やすか、システムの最大数を低くできないようにしている照会クラスの最大コストを減らしてください。

DQP3010E **PUBLIC** サブミッター・プロファイルを除去することはできません。

説明: PUBLIC サブミッター・プロファイルを除去することはできません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

DQP3011E **USER** サブミッター・プロファイル名を指定することができません。

説明: コマンドは、USER サブミッター・プロファイル名の指定を受け入れません。デフォルトでは、ユーザー独自のサブミッター・プロファイルが存在する場合は、自動的に作成されます。サブミッター・プロファイルが存在しない場合は、ユーザーの所属するグループのサブミッター・プロファイルを指定することができません。

ユーザーの処置: コマンドを再実行して、グループ・サブミッター・プロファイルを指定するか、またはこの指定を行わないでください。

DQP3012E **PUBLIC** サブミット設定を除去することはできません。

説明: PUBLIC サブミット設定を除去することはできません。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

付録 D. Query Patroller グラフィカル・ユーザー・インターフェース

クエリー・パトローラー・センターにログオンする

クエリー・パトローラー・センターを使用する前に、ログオンする必要があります。クエリー・パトローラー・センターを起動すると、ログイン・ウィンドウが自動的にオープンします。

手順:

クエリー・パトローラー・センターにログオンするには、次のいずれかの方式を使用してください。

コントロール・センター方式:

1. 「ログイン」ウィンドウをオープンする
2. 使用したいログイン証明書を「デフォルト」または「別のユーザー ID」のいずれかを選択して指定する。デフォルトでは、オペレーティング・システムにサインオンするために使用している ID と同じ ID を使用して、クエリー・パトローラー・センターにログオンします。
3. デフォルトの ID を使用しない場合は、「ユーザー ID」および「パスワード」フィールドに別の値を入力する。
4. 「OK」をクリックしてクエリー・パトローラー・センターをオープンする。

「スタート・メニュー」方式:

1. 「ログイン」ウィンドウをオープンする
2. 「データベース」フィールドで、処理したいデータベースを選択する。処理したいデータベースがリストされていない場合は、「データベース・リストの更新」をクリックして、カタログされたデータベースをリストに追加できるウィンドウをオープンしてください。
3. 使用したいログイン証明書を「デフォルト」または「別のユーザー ID」のいずれかを選択して指定する。デフォルトでは、現在使用している ID と同じオペレーティング・システムの ID を使用して、クエリー・パトローラー・センターにログオンします。
4. デフォルトの ID を使用しない場合は、「ユーザー ID」および「パスワード」フィールドに別の値を入力する。
5. 「OK」をクリックしてクエリー・パトローラー・センターをオープンする。

コマンド行方式:

qpcenter コマンドを発行する。

関連タスク:

- 136 ページの『Query Patroller のデータベース・リストを更新する』

クエリー・パトローラー・センター入門

クエリー・パトローラー・センターを使用して、データベースに対する照会の流れをモニターおよびコントロールすることができます。クエリー・パトローラー・センターを使用すると、ユーザーと照会が適切に優先順位付けられているかどうか、照会のワークロードがシステム間で均衡になっているかどうか、実行前に、極度に大量の照会を検出するかどうかを確認することができます。

クエリー・パトローラー・センターは、履歴分析ツールおよびレポートも提供します。履歴分析機能により、一定期間でのデータベースのさまざまな局面を検討することができます。

クエリー・パトローラー・センターから他のセンターやツールをオープンして、データベースをモニターするために役立てることもできます。

Query Patroller の権限および特権:

管理者 Query Patroller 管理者は、データベースに対して DBADM 権限を持ちます。

演算子 演算子の場合には、Query Patroller 管理者は、管理者特権の一部を割り当てます。これによってクエリー・パトローラー・センター機能の一部へのアクセス権を持ちます。演算子権限には次の 4 つがあります。

- ユーザー管理
- モニター
- 構成
- 履歴分析

サブミッターの照会

Query Patroller のサブミッター (Query Patroller 管理者またはオペレーターではありません) の場合、クエリー・パトローラー・センターの表示が別の表示になります。照会サブミット設定だけでなく、自分の管理対象照会にもアクセス権を持ちます。

Query Patroller タスク:

Query Patroller 権限および特権に応じて、次のタスクのいずれかまたはすべてのタスクを実行することができます。

しきい値およびスケジュールの設定

- Query Patroller システムの照会しきい値を設定する
- スケジュールされた時間に保留照会を実行する
- 照会および結果表の Query Patroller 保守スケジュールを設定する

ユーザー管理タスク

- ユーザーおよびグループのサブミッター・プロファイルを作成する
- ユーザーおよびグループの演算子プロファイルを作成する
- ユーザーおよびグループのサブミッター・プロファイルを変更する
- ユーザーおよびグループの演算子プロファイルを変更する

- ユーザーおよびグループのサブミッター特権を延期またはリストアする
- ユーザーおよびグループの演算子特権を延期またはリストアする
- ユーザーおよびグループのサブミッター・プロフィールを除去する
- ユーザーおよびグループの演算子プロフィールを除去する
- 別のサブミッター用の照会サブミットの設定を行う

モニター・タスク

- Query Patroller を使用して照会の状況を変更するによる照会の取り消し
- Query Patroller を使用して照会の状況を変更するによる保留照会の実行
- Query Patroller を使用して結果表を手動でドロップする

構成タスク

- Query Patroller システムの照会しきい値を設定する
- Query Patroller の照会クラスを作成する
- Query Patroller の照会クラスを変更する
- Query Patroller の照会クラスを除去する

履歴分析タスク

- Query Patroller を使用して履歴データを生成する
- 履歴照会を管理する
- Query Patroller を使用して履歴照会の詳細を表示する

サブミッター・タスク

- Query Patroller を使用して照会の状況を変更するによる照会の取り消し
- Query Patroller を使用して照会の状況を変更するによるバックグラウンドでの照会の実行
- 独自の照会サブミットの設定を行う
- Query Patroller を使用して結果表を表示する

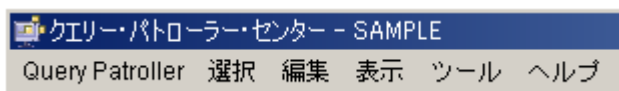
アクセシビリティ

- キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター
- Alt-Gr キーの組み合わせの ASCII 値

クエリー・パトローラー・センター・インターフェース:

クエリー・パトローラー・センターには、照会の流れをコントロールして分析するのに役立つ、次のエレメントがあります。

メニュー・バー



メニュー・バーを使用して、クエリー・パトローラー・センター内のオブジェクトを処理したり、他の管理センターおよびツールをオープンしたり、オンライン・ヘルプにアクセスします。

クエリー・パトローラー・センター・ツールバー



メニュー・バーの下のツールバー・アイコンを使用して、他の管理センターおよびツールへアクセスします。これらの機能は、「**ツール (Tools)**」メニューからも選択できます。「データベース」ドロップダウン・メニューおよび「データベース・リストの更新」ボタンを使用して、クエリー・パトローラー・センターでモニターされるデータベースを決定します。管理ツール (コントロール・センターなど) をインストールしていない場合、クエリー・パトローラー・センターのツールバーには「凡例」と「ヘルプ」のアイコンと、「データベース」ドロップダウン・メニュー、および「データベース・リストの更新」ボタンしかありません。

オブジェクト・ツリー



オブジェクト・ツリーを使用して、データベース・オブジェクト、ユーザー、照会、および履歴分析レポートを表示したり処理したりすることができます。付与されている特権によっては、オブジェクト・ツリーにすべてのオブジェクトが表示できない場合もあります。

内容ペイン



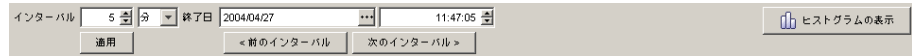
目次ペインを使用して、システム、ユーザー、照会、および履歴分析オブジェクトを表示したり処理したりすることができます。目次ペインは、オブジェクト・ツリーで選択したオブジェクトの内容を構成するシステムおよびデータベース・オブジェクトを表示します。

内容ペイン・ツールバー



目次ペインの下のツールバーを使用して、目次ペイン内のオブジェクトおよび情報の表示を必要に合わせて調整します。これらのツールバー機能は、編集メニューおよび表示メニューでも選択できます。

履歴分析ツールバー



履歴分析ツールバーを使用して、関心のある時間間隔を表示したり処理したりすることができます。また、グラフィカル表示とレポート表示の間で移動することもできます。このツールバーに関する詳細は、[Query Patroller 履歴分析インターフェース入門](#)を参照してください。

カスタム・コントロールにキーボードでアクセスする

キーボードを使用して、グラフィカル・ユーザー・インターフェースで見つかったコントロールにアクセスすることができます。以下の 2 つのコントロールは DB2 にユニークなものです。ここでは、キーボードを使用してこれらにアクセスする方法を示します。

-



キーボードを使用してこのボタンにアクセスするには、ボタンが選択されるまで Tab キーを使用し、それからスペース・バーを押します。

- 日付入力フィールド

キーボードを使用してこの機能にアクセスするには、Tab キーを使用して入力フィールドを選択し、入力フィールドに日付を入力します。

Query Patroller 履歴分析インターフェース入門

データウェアハウスのさまざまな局面を長期に渡って分析するために、クエリー・パトローラー・センターの履歴分析機能を使用します。

履歴分析レポートには、照会、表、索引およびサブミッターのレポートが含まれます。

- 「一定時間の照会アクティビティ」レポート: このレポートを使用すると、ピーク時のデータベース使用量と、最もコストの高い照会などの事項について判別することができます。
- 「ヒットしない表」レポート: このレポートを使用すると、除去すべき表を判別することができます。
- 「サブミッター」レポート: このレポートを使用すると、どのサブミッターが最も多くのリソースを使用しているかなどの、サブミッターに関する情報を判別することができます。

権限および特権:

履歴データを生成するには、次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある

履歴照会を手動で除去するなどの、Query Patroller データを変更する履歴分析タスクを実行するには、次の要件のいずれかに合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある HISTORICAL ANALYSIS 特権が存在する

表のフィルター操作などの、Query Patroller データの表示が含まれる履歴分析タスクを実行するには、次の要件のいずれかに合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集または表示権限のある HISTORICAL ANALYSIS 特権が存在する

履歴分析タスク:

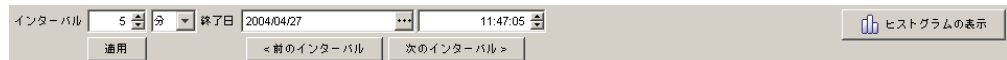
Query Patroller 権限および特権に応じて、次のタスクのいずれかまたはすべてのタスクを実行することができます。

- Query Patroller を使用して履歴データを生成する
- Query Patroller を使用して履歴照会の詳細を表示する
- Query Patroller を使用して履歴分析用の表をフィルター操作する
- 履歴照会を管理する

クエリー・パトローラー・センター履歴分析インターフェース:

Query Patroller の履歴分析データの表示タイプには、表の表示とグラフィック表示という 2 つの主なタイプがあります。

履歴分析ツールバー:



履歴分析ツールバーを使用して、関心のある時間間隔を表示したり処理したりすることができます。また、グラフィカル表示と表の表示の間で移動することもできます。

「インターバル」および「終了日」フィールドを使用して、履歴分析フォルダーの下のフォルダーおよび履歴分析目次ペインにおいて、どの項目が表示されるかを決定する時間範囲を確立するために使用されます。

インターバルおよび終了日を指定すると、この設定値による履歴分析情報の表示を最新表示するために「適用」ボタンをクリックする必要があります。

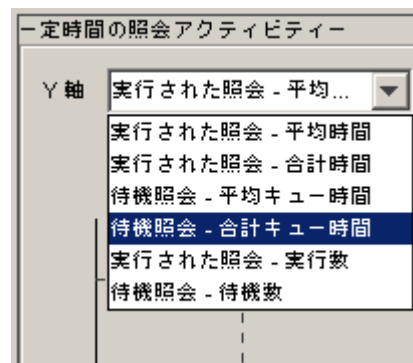
「前のインターバル」および「次のインターバル」ボタンを使用して、内容ペインに表示される履歴データから移動します。「前のインターバル」をクリックして、「インターバル」フィールドで指定したインターバルの分だけ終了日付を戻します。たとえば、インターバルの値が 5、時間単位が日で、終了日が 2003 年 5 月

22 日の場合、「前のインターバル」をクリックすると、終了日が 2003 年 5 月 17 日に更新されます。「次のインターバル」をクリックして、「インターバル」フィールドで指定したインターバルまで終了日を進めます。たとえば、インターバルの値が 5、時間単位が日で、終了日が 2003 年 5 月 22 日の場合、「次のインターバル」をクリックすると、終了日が 2003 年 5 月 27 日に更新されます。「前のインターバル」および「次のインターバル」ボタンをクリックして、目次ペインおよび「履歴分析」フォルダーの下にリストされた項目に表示される情報を自動的に最新表示します。

レポートのグラフィック表示を参照している場合は、ツールバーの右のほうにある「表の表示」ボタンを使用することにより、表の表示へ切り替えることができます。表の表示を参照している場合は、「表の表示」ボタンが「グラフの表示」ボタンになり、これを使用してグラフィック表示へ切り替えることができます。

「照会」フォルダーのみの履歴分析データについては、グラフではなくヒストグラム表示となります。「グラフの表示」ボタンは「ヒストグラムの表示」ボタンになります。ヒストグラム表示では、さらに細かいレベルの情報を取得するには、個々のヒストグラム・バーをダブルクリックしてください。たとえば、3 か月分の照会のレポートを参照している場合、レポートには 3 つのヒストグラム・バーが表示されます。このヒストグラム・バーのいずれかをダブルクリックすると、その月を構成する週のデータを表示します。さらに細かいレベルの情報までドリルダウンすると、ヒストグラム・バーのいずれかをマウスの右ボタンでダブルクリックすると、より高いレベルの情報を取得できるようにドリルアップをすることができます。たとえば、3 か月分の照会を示すレポートから、4 週間分の照会を示すレポートにドリルダウンしている場合、マウスの右ボタンでダブルクリックすると、月単位で表示するヒストグラムへドリルアップすることができます。

履歴分析ヒストグラムに表示される情報を変更する:



ヒストグラムに履歴照会について表示したい情報のタイプを指定するには、Y 軸ドロップダウン・メニューを使用します。次の 6 つのオプションから選択することができます。

- 実行された照会 - 平均時間
- 実行された照会 - 合計時間
- 待機照会 - 平均キュー時間
- 待機照会 - 合計キュー時間
- 実行された照会 - 実行数

- 待機照会 - 待機数

関連概念:

- 113 ページの『Query Patroller 履歴分析』
- 177 ページの『履歴分析レポートの使用』

関連タスク:

- 179 ページの『Query Patroller を使用して履歴データを収集する』
- 138 ページの『履歴データのコレクションを使用可能にする』

Query Patroller を使用して履歴分析の表をフィルター操作する

履歴分析レポートを参照するためにクエリー・パトローラー・センターを使用している場合、「ヒットした表」と「ヒットしなかった表」レポートに、かなりの行数がある可能性があります。「フィルター」ウィンドウを使用すると、表およびスキーマの名前に基づいた条件に一致する表だけを表示します。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、表示または編集権限のある HISTORICAL ANALYSIS 特権が存在する

手順:

履歴分析用に表をフィルターにかけるには、次のようにしてください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「フィルター」ノートブックをオープンする。
2. オプション: 「位置指定」タブで、表名の比較用の演算子を選択し、さらに比較される表名の値を入力する。
3. オプション: 表スキーマの比較用の演算子を選択し、さらに比較される表スキーマの値を入力する。
4. フィルターは入力した両方の比較に一致する表だけを表示するよう指示するには、「すべての条件に一致」ラジオ・ボタンをクリックする。フィルターは表名比較または表スキーマ比較の一方に一致する表を表示するよう指示するには、「いずれかの条件に一致」ラジオ・ボタンをクリックする。
5. オプション: 入力した表名および表スキーマの比較で生成された WHERE 文節を表示するには、「詳細」タブをクリックする。
6. オプション: 「オブジェクト・カウントを超えると自動的にフィルターを表示する」チェック・ボックスが選択されているなら、フォルダーが選択された時点で、そこに表示されるオブジェクトの数が「オブジェクト・カウント」フィールドで指定された値を超過している場合に、「フィルター」ノートブックが自動的

に表示されます。「フィルター」ノートブックを自動的に表示するようにするオブジェクトの数を調整するには、「オブジェクト・カウント」フィールドに新規の値を入力します。

7. フィルターを使用可能にするには、「フィルターを使用可能にする」チェック・ボックスを選択して、「OK」をクリックし、「フィルター」ノートブックをクローズする。
8. オプション: フィルターを使用可能にしたいくない場合は、「フィルターを使用可能にする」チェック・ボックスをクリアして、「OK」をクリックし、「フィルター」ノートブックをクローズする。「フィルター」ノートブックに入力した値は保存され、ノートブックを再オープンした時に表示されます。

定義したフィルターは、オブジェクト・ツリーに表示されるオブジェクトの数と、内容ペインに表示されるレポートの数に影響します。

関連概念:

- 113 ページの『Query Patroller 履歴分析』
- 323 ページの『Query Patroller 履歴分析インターフェース入門』

付録 E. サブミッター・タスク

独自の照会サブミット設定を設定する

デフォルトの照会サブミット設定は PUBLIC と呼ばれます。独自のサブミット設定がない場合、デフォルトでは PUBLIC サブミット設定で指定された設定を使用します。PUBLIC サブミット設定で指定された値を使用したくない場合は、自分用に別のサブミット設定を設定することができます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集権限のある USER ADMINISTRATION 特権が存在する
- 照会サブミット設定が属するサブミッターである

手順:

照会サブミット設定を設定するには、次の方式のいずれかを使用してください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「照会サブミット設定」ウィンドウをオープンする。
2. 複数のグループ・プロファイルに属している場合、「使用するサブミッター・プロファイル」フィールドを使用して、照会フォルダーをサブミットしたいグループ・プロファイルを選択する。タイプがユーザーであるサブミッター・プロファイルを持っている場合、このフィールドにはサブミッターのユーザー ID が表示されます。この値は変更できません。

タイプがユーザーであるサブミッター・プロファイルが欠けているが、複数のグループ・サブミッター・プロファイルに所属している場合、このフィールドにはグループ・サブミッター・プロファイルがリストされます。照会のサブミットに使用したいグループ・サブミッター・プロファイルを選択してください。「自動的に選択」項目は、最も低いリソース制限を持つプロファイルを適用します。

3. 照会サブミットされた後に発生することを次のように指定する。
 - 照会をサブミットしたアプリケーションが、Query Patroller が照会を管理する間、結果セットが戻されるのを待機することを指定するには、「結果セットが戻されるのを待機する」ラジオ・ボタンを選択する。このオプションはデフォルトです。

このオプションが選択されている場合、照会をサブミットしたアプリケーションは、結果セットが戻されるまで応答しなくなります。

- 結果セットは DB2 の表に保管され、照会をサブミットしたアプリケーションは、さらに進んだ処理用にフリーとなるように指定するには、「アプリケーションを解放して結果表からの結果を検索する」ラジオ・ボタンを選択する。
4. 結果表に使用したいアクセス・レベルを次のように指定する。

- サブミッターだけが結果表にアクセスできるように指定するには、「サブミッターへの限定アクセス」ラジオ・ボタンを選択する。
 - 結果表を、特定の DB2 ユーザーがアクセスできるようにするには、「他のユーザーまたはグループへのアクセスを認可する」ラジオ・ボタンを選択する。関連したフィールドに特定のユーザーまたはグループの名前をコンマで区切って入力します。リストされている DB2 ユーザーは、照会がサブミットされたデータベースへのアクセスを持っている必要があります。
5. 結果セットが最大許可長より長い場合のハンドル方法について、次のように指定する。
- 完了していない結果を結果表に保管しないように指定するには、「結果を戻さない」ラジオ・ボタンを選択する。
 - 結果セットがサブミッターのプロファイルに定義されている限度よりも長い場合、切り捨てられた結果が結果表に保管されることを指定するには、「切り捨てられた結果セットを戻す」ラジオ・ボタンを選択する。
6. 「E メール・アドレス」フィールドで、サブミッターに通知を送信するために使用される E メール・アドレスを入力する。通知は、照会が完了したり、エラーを検出すると指定されたアドレスへ送信されることができません。結果表は作成された場合に限りです。

注: 次の場合に、サブミッター用に結果表が作成されます。

- 「アプリケーションの解放」オプションが「照会サブミット設定」ウィンドウで指定されている。
 - 「結果が戻るまで待機する」オプションが「照会サブミット設定」ウィンドウで指定されているが、照会の完了前に保留状態になっている。
 - 照会状況が「照会をバックグラウンドで実行する」に変更されている。
7. 「OK」をクリックして照会サブミット設定を設定する。

コマンド行方式:

新規の照会サブミット設定を作成するには、 **ADD SUBMISSION_PREFERENCES** コマンドを発行する。

既存の照会サブミット設定を変更するには、 **UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES** コマンドを発行する。

関連概念:

- 161 ページの『Query Patroller 照会サブミット設定』
- ヘルプ: *Query Patroller* の『照会のサブミット設定 — 概要』

関連タスク:

- ヘルプ: *Query Patroller* の『サブミッターの照会サブミット設定を除去する』

照会のモニター

Query Patroller で管理されている照会のプロパティを表示することによって、照会のサブミッター、処理時間、および結果表に関する情報などの詳細を調べることができます。

前提条件:

次のいずれかの要件に合致する必要があります。

- DBADM 権限がある
- 演算子のプロファイルに、編集または表示権限のある MONITORING 特権が存在する
- 照会のサブミッターである

手順:

照会の詳細を表示するには、次のようにしてください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「管理対象照会プロパティ」ノートブックをオープンする。
2. 照会に関する一般情報を表示するには、「一般」タブをクリックする。
 - a. 新規ウィンドウで照会の SQL を表示するには、「別のウィンドウで SQL を表示する」をクリックする。
 - b. 照会をサブミットしたサブミッターのプロファイルを表示するには、「サブミッター・プロパティ」をクリックする。「サブミッター・プロパティ」ウィンドウをオープンするには、DBADM 権限があるか、または、編集または表示権限のある USER ADMINISTRATION 特権を持ったプロファイルの演算子である必要があります。
 - c. 照会を取り消すなどの照会の状況を変更する場合には、「状況の変更」をクリックする。
3. 照会実行情報および結果表の詳細を表示するには、「結果」タブをクリックする。
 - a. 照会の結果表を表示するには、「結果の表示」をクリックする。
 - b. 照会の結果表を保管するには、「結果の保管」をクリックする。
 - c. 照会の結果表を削除するには、「結果表のドロップ」をクリックする。
4. 照会のイベント・タイム・スタンプと処理期間を表示するには、「時間」タブをクリックする。
5. 許可 ID、アプリケーション情報、およびユーザー情報を表示するには、「その他」タブをクリックする。
6. 「クローズ」をクリックして、「管理対象照会プロパティ」ノートブックをクローズする。

コマンド行方式:

GET QUERY コマンドを発行する。

照会の取り消し

権限レベルに応じて、照会の取り消し、保留照会の解放、または照会をバックグラウンドで実行するなどの方法で、Query Patroller によって管理される照会状況を変更する場合があります。

照会の取り消し

照会をサブミットした後で、エラーが含まれていることに気付いた場合か、またはコストが高すぎることに気付いた場合には、この照会を取り消します。たとえば、照会のコストに対して許可されているシステム・リソースの

最大量を超過した照会があるため、保留となるという通知を受け取ることがあります。照会を取り消すと、これは取り消し状態となります。

保留状態から照会を解放する

照会がサブミッターの最大照会コストを超過していても、特定の照会を実行すると判断される場合には、保留照会を解放してください。保留照会を解放すると、現行システムのワークロードに応じて、照会は実行状態または待機中状態になります。

照会をバックグラウンドで実行する

照会結果が戻るまで待機するが、特定の照会の実行中はクライアント・アプリケーションを使用する、ということが照会サブミット設定によって指定されている場合、照会をバックグラウンドで実行します。照会をバックグラウンドで実行すると、現行システムのワークロードに応じて、照会を実行状態または待機中状態にします。

前提条件:

- 照会を取り消すには、次のいずれかの要件に合致する必要があります。
 - DBADM 権限がある
 - 演算子のプロファイルに、編集権限のある MONITORING 特権が存在する
 - 照会のサブミッターである
- 保留照会を解放するには、次のいずれかの要件に合致する必要があります。
 - DBADM 権限がある
 - 演算子のプロファイルに、編集権限のある MONITORING 特権が存在する
- 照会をバックグラウンドで実行するには、次が必要です。
 - 照会のサブミッターである

手順:

照会の状況を変更するには、次のようにしてください。

クエリー・パトローラー・センター方式:

1. 「照会状況の変更」ウィンドウをオープンする。
2. 照会を取り消すには、「照会の取り消し」をクリックする。
3. 照会を実行するには、「照会を保留状態から解放する」をクリックする。
4. サブミットしているアプリケーションのコントロールを回復するには、「照会をバックグラウンドで実行する」をクリックする。Query Patroller は、照会の実行を停止してから再サブミットします。照会の結果は、結果表に戻ります。
5. 「OK」をクリックする。指定したとおりに照会の状況が変更され、「照会状況の変更」ウィンドウをクローズされます。

コマンド行方式:

照会を取り消すには、**CANCEL QUERY** コマンドを発行する。

照会を実行するには、**RUN HELD_QUERY** コマンドを実行する。

照会をバックグラウンドで再実行するには、**RUN IN BACKGROUND QUERY** コマンドを実行する。

付録 F. DB2 Universal Database の技術情報の概要

DB2 PDF 資料および印刷された資料

以下の表は、正式な資料名、資料番号、および PDF ファイル名を示しています。ハードコピー版の資料を注文するには、正式な資料名を知っておく必要があります。PDF ファイルを印刷するには、PDF ファイル名を知っておく必要があります。

DB2 資料は、以下のカテゴリーに分類されています。

- DB2 中核情報
- 管理情報
- アプリケーション開発情報
- ビジネス・インテリジェンス情報
- DB2 Connect 情報
- 入門情報
- チュートリアル情報
- オプション・コンポーネント情報
- リリース・ノート

以下の表は、DB2 ライブラリー内の各資料について、その資料のハードコピー版を注文したり、PDF 版を印刷または表示したりするのに必要な情報を示しています。DB2 ライブラリー内の各資料に関する詳細な説明については、www.ibm.com/shop/publications/order にある IBM Publications Center にアクセスしてください。

DB2 の基本情報

こうした資料の情報は、すべての DB2 ユーザーに基本的なもので、プログラマーおよびデータベース管理者にとって役立つ情報であるとともに、DB2 Connect、DB2 Warehouse Manager、または他の DB2 製品を使用するユーザーにとっても役立つ内容です。

表 22. DB2 の基本情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database コマンド・リファレンス」	SC88-9140	db2n0j81
「IBM DB2 Universal Database 用語集」	資料番号なし	db2t0j81
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 1 巻」	GC88-9152 (ハードコピーな し)	db2m1j81

表 22. DB2 の基本情報 (続き)

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 2 巻」	GC88-9153 (ハードコピーな し)	db2m2j81
「IBM DB2 Universal Database 新機能」	SC88-9158	db2q0j81

管理情報

これらの資料の情報は、DB2 データベース、データウェアハウス、およびフェデレーテッド・システムを効果的に設計し、インプリメントし、保守するために必要なトピックを扱っています。

表 23. 管理情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: プランニング」	SC88-9135	db2d1j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: インプリメンテー ション」	SC88-9133	db2d2j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: パフォーマンス」	SC88-9134	db2d3j81
「IBM DB2 Universal Database 管理 API リファレンス」	SC88-9136	db2b0j81
「IBM DB2 Universal Database データ移動ユーティリティー ガイドおよびリファレンス」	SC88-9142	db2dmj81
「IBM DB2 Universal Database データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンス」	SC88-9143	db2haj81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター 管理ガイド」	SC88-9165	db2ddj81
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 1 巻」	SC88-9155	db2s1j81
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 2 巻」	SC88-9156	db2s2j81
「IBM DB2 Universal Database システム・モニター ガイドお よびリファレンス」	SC88-9157	db2f0j81

アプリケーション開発情報

これらの資料の情報は、DB2 Universal Database (DB2 UDB) のアプリケーション開発者またはプログラマーが特に興味を持つ内容です。サポートされるさまざまなプログラミング・インターフェース (組み込み SQL、ODBC、JDBC、SQLJ、CLI など) を使用して DB2 UDB にアクセスするのに必要な資料とともに、サポートさ

れる言語およびコンパイラについても紹介されています。また、DB2 インフォメーション・センターをご使用の場合には、サンプル・プログラムのソース・コードの HTML バージョンにアクセスすることもできます。

表 24. アプリケーション開発情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」	SC88-9137	db2axj81
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーションのプログラミング」	SC88-9138	db2a1j81
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド サーバー・アプリケーションのプログラミング」	SC88-9139	db2a2j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」	SC88-9159	db2l1j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 2 巻」	SC88-9160	db2l2j81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター アプリケーション統合ガイド」	SC88-9166	db2adj81
「IBM DB2 Universal Database XML Extender 管理およびプログラミングのガイド」	SC88-9172	db2sxj81

ビジネス・インテリジェンス情報

これらの資料の情報は、さまざまなコンポーネントを使用して、DB2 Universal Database のデータウェアハウジング機能および分析機能を拡張する方法を説明しています。

表 25. ビジネス・インテリジェンス情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インフォメーション・カタログ・センター 管理ガイド」	SC88-9167	db2dij81
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インストール・ガイド」	GC88-9164	db2idj81

表 25. ビジネス・インテリジェンス情報 (続き)

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition DB2 Warehouse Manager を使用時の ETI ソリューション・コンバージョン・プログラムの管理」	SC88-9894	iwhe1mstx80

DB2 Connect 情報

このカテゴリーの情報は、DB2 Connect Enterprise Edition または DB2 Connect Personal Edition を使用して、メインフレーム・サーバーおよびミッドレンジ・サーバー上のデータにアクセスする方法を説明しています。

表 26. DB2 Connect 情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM コネクティビティー 補足」	資料番号なし	db2h1j81
「IBM DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」	GC88-9145	db2c6j81
「IBM DB2 Connect Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9146	db2c1j81
「IBM DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」	SC88-9147	db2c0j81

入門情報

このカテゴリーの情報は、サーバー、クライアント、および他の DB2 製品をインストールして構成する場合に役立ちます。

表 27. 入門情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database DB2 クライアント機能 概説およびインストール」	GC88-9144 (ハードコピーなし)	db2itj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 サーバー機能 概説およびインストール」	GC88-9148	db2isj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9150	db2i1j81
「IBM DB2 Universal Database インストールおよび構成 補足」	GC88-9149 (ハードコピーなし)	db2iyj81

表 27. 入門情報 (続き)

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database DB2 Data Links Manager 概説 およびインストール」	GC88-9141	db2z6j81

チュートリアル情報

チュートリアル情報は、DB2 機能を紹介し、さまざまなタスクを実行する方法を示します。

表 28. チュートリアル情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「ビジネス・インテリジェン ス・チュートリアル: データ ウェアハウス・センターの紹 介」	資料番号なし	db2tuj81
「ビジネス・インテリジェン ス・チュートリアル: データ ウェアハウジングの上級者向 けガイド」	資料番号なし	db2taj81
「インフォメーション・カタ ログ・センター チュートリア ル」	資料番号なし	db2aij81
「Video Central for e-business チュートリアル」	資料番号なし	db2twj81
「Visual Explain チュートリア ル」	資料番号なし	db2tvj81

オプション・コンポーネント情報

このカテゴリーの情報は、DB2 のオプション・コンポーネントを使用する方法について説明しています。

表 29. オプション・コンポーネント情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Cube Views Guide and Reference」	SC18-7298	db2aax81
「IBM DB2 Query Patroller イ ンストール、管理、使用法の ガイド」	GC88-9154	db2dwj81
「IBM DB2 Spatial Extender and Geodetic Extender ユーザ ーズ・ガイドおよびリファレ ンス」	SC88-9171	db2sbj81
「IBM DB2 Universal Database Data Links Manager 管理ガイ ドおよびリファレンス」	SC88-9169	db2z0x82

表 29. オプション・コンポーネント情報 (続き)

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「DB2 Net Search Extender 管 理およびユーザズ・ガイ ド」	SH88-8546	N/A
注: この資料の HTML 版は、 HTML ドキュメンテーション CD からインストールされませ ん。		

リリース・ノート

リリース・ノートは、ご使用の製品のリリースおよびフィックスパック・レベルに特有の追加情報を紹介します。また、リリース・ノートには、各リリース、アップデート、およびフィックスパックで組み込まれた資料上の更新の要約も含まれています。

表 30. リリース・ノート

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「DB2 リリース・ノート」	「注」を参照。	「注」を参照。
「DB2 インストール情報」	製品 CD-ROM でのみ参照可 能。	使用できません。

注: リリース・ノートは以下の形式で入手できます。

- XHTML およびテキスト形式 (製品 CD 内)
- PDF 形式 (PDF ドキュメンテーション CD 内)

さらに、リリース・ノートの中で、『既知の問題と予備手段』および『リリース間の非互換性』に関する部分は DB2 インフォメーション・センターにも表示されます。

UNIX ベースのプラットフォームでテキスト形式でリリース・ノートを確認するには、Release.Notes ファイルを参照してください。このファイルは、DB2DIR/Readme/%L ディレクトリーに収録されています。%L はロケール名を表しています。DB2DIR は以下になります。

- AIX オペレーティング・システムの場合: /usr/opt/db2_08_01
- その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合:
/opt/IBM/db2/V8.1

関連タスク:

- 339 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』
- 339 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』
- 340 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』

PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法

DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている DB2 資料を印刷することができます。Adobe Acrobat Reader を使用すれば、資料全体または特定のページを印刷できます。

前提条件:

Adobe Acrobat Reader がインストールされていることを確認してください。Adobe Acrobat Reader をインストールする必要がある場合、Adobe Web サイト (www.adobe.com) から入手できます。

手順:

PDF ファイルから DB2 資料を印刷するには以下のようにします。

1. DB2 PDF ドキュメンテーション CD をドライブに挿入します。UNIX オペレーティング・システムの場合、DB2 PDF ドキュメンテーション CD をマウントします。UNIX オペレーティング・システムで CD をマウントする方法については、「概説およびインストール」を参照してください。
2. index.htm を開きます。ブラウザ・ウィンドウにファイルが開きます。
3. 参照したい PDF のタイトルをクリックします。Acrobat Reader で PDF が開きます。
4. 「ファイル」 → 「印刷」を選択して、所要の資料の任意の部分を印刷します。

関連概念:

- 348 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 339 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』

関連資料:

- 333 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 の印刷資料の注文方法

ハードコピー版の資料を望む場合には、以下のいずれかの方法で注文できます。

印刷資料の注文方法:

一部の国または地域では、印刷された資料を注文することもできます。お客様がお住まいの国または地域でこのサービスが利用可能かどうかを確認するには、お住まいの国または地域の IBM Publications Web サイトをご覧ください。資料のご注文が可能な場合、以下のように入力することができます。

- 正規の IBM 製品販売業者または営業担当員に連絡してください。お客様がお住まいの地域の IBM 担当員の情報については、お手数ですが IBM の Web サイト (www.ibm.com/planetwide) の IBM Worldwide Directory of Contacts で確認してください。

- IBM Publications Center (<http://www.ibm.com/shop/publications/order>) にアクセスしてください。なお、IBM Publications Center から資料を注文できない国もあります。

DB2 製品がご利用可能になった時点で、印刷された資料は *DB2 PDF* ドキュメンテーション CD にある PDF 形式の資料と同じものです。さらに、*DB2* インフォメーション・センター CD に収録されている印刷された資料の内容もまた、これらと同じです。ただし、*DB2* インフォメーション・センター CD には、PDF 資料にならない追加情報も含まれます (たとえば、SQL 管理作業や HTML サンプル)。DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている資料の中には、ハードコピーとしてご注文できない資料もあります。

注: DB2 インフォメーション・センターは、PDF またはハードコピー の資料よりも頻繁に更新されます。ドキュメンテーションの更新が入手可能になった時点でインストールするか、DB2 インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) を参照して最新の情報を入手してください。

関連タスク:

- 339 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』

関連資料:

- 333 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す

コンテキスト・ヘルプは、特定のウィンドウ、ノートブック、ウィザード、またはアドバイザーに関連したタスクまたはコントロールの情報を提供します。コンテキスト・ヘルプは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースのある DB2 管理ツールおよび開発ツールから利用できます。コンテキスト・ヘルプには、以下の 2 種類があります。

- それぞれのウィンドウまたはノートブックにある「ヘルプ」ボタンからアクセス可能なヘルプ
- infopop (ポップアップ情報ウィンドウ)。これは、マウス・カーソルを特定のフィールドまたはコントロール上に置いたとき、またはウィンドウ、ノートブック、ウィザード、アドバイザー内でフィールドまたはコントロールを選択して F1 を押すと表示されます。

「ヘルプ」ボタンを押すと、概説、前提条件、およびタスク情報が表示されます。infopop は、それぞれのフィールドおよびコントロールについて説明します。

手順:

コンテキスト・ヘルプを呼び出すには、以下のようになります。

- ウィンドウおよびノートブックのヘルプを表示するには、いずれかの DB2 ツールを開始して、任意のウィンドウまたはノートブックを開きます。ウィンドウまたはノートブックの右下隅にある「ヘルプ」ボタンをクリックして、コンテキスト・ヘルプを呼び出します。

また、それぞれの DB2 ツール・センターの上部にある「ヘルプ」メニュー項目からコンテキスト・ヘルプにアクセスすることもできます。

ウィザードおよびアドバイザーでは、最初のページの「タスクの概要」リンクをクリックすると、コンテキスト・ヘルプを表示できます。

- ウィンドウまたはノートブック上の各コントロールの infopop ヘルプを表示するには、コントロールをクリックしてから、**F1** を押します。コントロールの詳細情報を示すポップアップ情報が、黄色いウィンドウに表示されます。

注: フィールドまたはコントロールにマウス・カーソルを置いておくだけで infopops が表示されるようにするには、「ツール設定」ノートブックの「**文書 (Documentation)**」ページの「**infopops の自動表示**」チェック・ボックスを選択します。

infopop に似た別のコンテキスト・ヘルプに、診断ポップアップ情報があります。これにはデータ入力規則が示されます。診断ポップアップ情報は、無効または不十分なデータが入力されたとき、紫色のウィンドウに表示されます。診断ポップアップ情報は、以下に関して表示されます。

- 必須フィールド。
- 日付フィールドのように、正確なフォーマットを必要とするデータのフィールド。

関連タスク:

- 343 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 341 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 342 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 342 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す

メッセージ・ヘルプは、メッセージが出された原因と、エラーへの応答として実行すべきアクションを説明します。

手順:

メッセージ・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? XXXnnnnn
```

ここで、*XXXnnnnn* は有効なメッセージ ID を表します。

たとえば、? SQL30081 と入力すると、メッセージ SQL30081 に関するヘルプを表示します。

関連タスク:

- 340 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 343 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 342 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』

- 342 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す

コマンド・ヘルプは、コマンド行プロセッサでのコマンドの構文を説明します。

手順:

コマンド・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? command
```

ここで *command* はキーワードまたはコマンド全体を表します。

たとえば、? catalog と入力すると、すべての CATALOG コマンドに関するヘルプが表示され、? catalog database と入力すると、CATALOG DATABASE コマンドのヘルプだけが表示されます。

関連タスク:

- 340 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 343 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 341 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 342 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す

DB2 Universal Database は、SQL ステートメントの結果の原因となったと考えられる条件の SQLSTATE 値を戻します。SQLSTATE ヘルプは、SQL 状態および SQL 状態クラス・コードの意味を説明します。

手順:

SQL 状態ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? sqlstate または ? class code
```

ここで、*sqlstate* は有効な 5 桁の SQL 状態を、*class code* は SQL 状態の最初の 2 桁を表します。

たとえば、? 08003 を指定すると SQL 状態 08003 のヘルプが表示され、? 08 を指定するとクラス・コード 08 のヘルプが表示されます。

関連タスク:

- 343 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 341 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 342 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』

DB2 インフォメーション・センターの呼び出し

DB2 インフォメーション・センターは、Linux、UNIX、および Windows オペレーティング・システム用の DB2 製品 (DB2 Universal Database、 DB2 Connect、DB2 Information Integrator、 DB2 Query Patroller など) を使用するために必要なすべての情報を提供します。

DB2 インフォメーション・センターは、以下の場所から呼び出すことができます。

- DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューター
- DB2 インフォメーション・センターがインストールされているイントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューター
- IBM の Web サイト

前提条件:

DB2 インフォメーション・センターを呼び出すための要件は、以下のとおりです。

- オプション: 希望する言語でトピックを表示するようブラウザを構成する
- オプション: コンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを使用するよう DB2 クライアントを構成する

手順:

DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューターから DB2 インフォメーション・センターを呼び出すには、以下のようになります。

- (Windows オペレーティング・システムの)「スタート」メニューから: 「スタート」→「プログラム」→「IBM DB2」→「情報」→「インフォメーション・センター」をクリックします。
- コマンド行プロンプトから:
 - Linux および UNIX オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs** コマンドを発行します。
 - Windows オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs.exe** コマンドを発行します。

イントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューターにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようになります。

- Web ページ <http://<host-name>:<port-number>/> を開きます (<host-name> はホスト名、 <port-number> は DB2 インフォメーション・センターを利用可能なポート番号)。

IBM Web サイトにある DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようになります。

- Web ページ publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/ を開きます。

関連概念:

- 348 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 350 ページの『特定の言語でトピックを表示するようブラウザーを構成する方法』
- 340 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 344 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 341 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 342 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 342 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/> から利用できる DB2 インフォメーション・センターは、資料の新規追加または変更によって定期的に更新されます。さらに、更新された DB2 インフォメーション・センターをコンピューターまたはイントラネット・サーバーにダウンロードしてインストールできる場合もあります。DB2 インフォメーション・センターを更新しても、DB2 クライアント製品またはサーバー製品は更新されません。

前提条件:

インターネットに接続されたコンピューターへのアクセスが必要です。

手順:

DB2 インフォメーション・センターの更新をコンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストールするには、以下のようになります。

1. IBM の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターを開きます。
2. 「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」 ページの見出し「サービスおよびサポート」の「ダウンロード」セクションで、「**DB2 資料**」リンクをクリックします。
3. 最新のドキュメンテーション・イメージのレベルと、インストール済みのドキュメンテーション・レベルを比較して、DB2 インフォメーション・センターを更新する必要があるかどうかを確認します。「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」ページに、インストール済みのドキュメンテーションのレベルがリストされます。
4. より新しいバージョンの DB2 インフォメーション・センターが存在する場合、ご使用のオペレーティング・システムに対応する最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをダウンロードします。
5. 最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをインストールするには、Web ページの指示に従ってください。

関連タスク:

- 「*DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール*」の『DB2 HTML ドキュメンテーション CD から Web サーバーへファイルをコピーする』

関連資料:

- 333 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 トラブルシューティング情報

DB2[®] 製品を使用する際に役立つ、トラブルシューティングおよび問題判別に関する広範囲な情報を利用できます。

DB2 ドキュメンテーション

トラブルシューティング情報は、DB2 インフォメーション・センター、および DB2 ライブラリーに含まれる PDF 資料の中でご利用いただけます。DB2 インフォメーション・センターで、(ブラウザー・ウィンドウの左側の) ナビゲーション・ツリーの「サポートおよびトラブルシューティング (Support and troubleshooting)」ブランチを参照すると、DB2 トラブルシューティング・ドキュメンテーションの詳細なリストが見つかります。

DB2 Technical Support の Web サイト

現在問題が発生していて、考えられる原因とソリューションを検索したい場合は、DB2 Technical Support の Web サイトを参照してください。

Technical Support サイトには、最新の DB2 出版物、TechNotes、プログラム診断依頼書 (APAR)、フィックスパック、DB2 内部エラー・コードの最新リスト、その他のリソースが用意されています。この知識ベースを活用して、問題に対する有効なソリューションを探し出すことができます。

DB2 Technical Support の Web サイト

(<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support>) にアクセスしてください。

DB2 Problem Determination Tutorial Series

DB2 製品で作業中に直面するかもしれない問題を素早く識別し、解決する方法に関する情報を見つけるには、DB2 Problem Determination Tutorial Series の Web サイトを参照してください。あるチュートリアルでは、使用可能な DB2 問題判別機能およびツールを紹介し、それらをいつ使用すべきかを判断する助けを与えます。別のチュートリアルは、『データベース・エンジン問題判別 (Database Engine Problem Determination)』、『パフォーマンス問題判別 (Performance Problem Determination)』、『アプリケーション問題判別 (Application Problem Determination)』などの関連トピックを扱っています。

DB2 Technical Support

(<http://www.ibm.com/software/data/support/pdm/db2tutorials.html>) には、DB2 問題判別チュートリアルがすべて揃っています。

関連概念:

- 348 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

アクセス支援

アクセス支援機能は、身体に障害のある（身体動作が制限されている、視力が弱いなど）ユーザーがソフトウェア製品を十分活用できるように支援します。DB2®バージョン 8 製品に備わっている主なアクセス支援機能は、以下のとおりです。

- すべての DB2 機能は、マウスの代わりにキーボードを使ってナビゲーションできます。詳細については、『キーボードによる入力およびナビゲーション』を参照してください。
- DB2 ユーザー・インターフェースのフォント・サイズおよび色をカスタマイズすることができます。詳細については、『アクセスしやすい表示』を参照してください。
- DB2 製品は、Java™ Accessibility API を使用するアクセス支援アプリケーションをサポートします。詳細については、347 ページの『支援テクノロジーとの互換性』を参照してください。
- DB2 資料は、アクセスしやすい形式で提供されています。詳細については、347 ページの『アクセスしやすい資料』を参照してください。

キーボードによる入力およびナビゲーション

キーボード入力

キーボードだけを使用して DB2 ツールを操作できます。マウスを使って実行できる操作は、キーまたはキーの組み合わせによっても実行できます。標準のオペレーティング・システム・キー・ストロークを使用して、標準のオペレーティング・システム操作を実行できます。

キーまたはキーの組み合わせによって操作を実行する方法について、詳しくは キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・ナビゲーション

キーまたはキーの組み合わせを使用して、DB2 ツールのユーザー・インターフェースをナビゲートできます。

キーまたはキーの組み合わせによって DB2 ツールをナビゲートする方法の詳細については、キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・フォーカス

UNIX® オペレーティング・システムでは、アクティブ・ウィンドウの中で、キー・ストロークによって操作できる領域が強調表示されます。

アクセスしやすい表示

DB2 ツールには、視力の弱いユーザー、その他の視力障害をもつユーザーのためにアクセシビリティを向上させる機能が備わっています。これらのアクセシビリティ拡張機能には、フォント・プロパティのカスタマイズを可能にする機能も含まれています。

フォントの設定

「ツール設定」ノートブックを使用して、メニューおよびダイアログ・ウィンドウに使用されるテキストの色、サイズ、およびフォントを選択できます。

フォント設定に関する詳細情報は、メニューおよびテキストのフォントを変更する: Common GUI help を参照してください。

色に依存しない

本製品のすべての機能を使用するために、ユーザーは必ずしも色を識別する必要はありません。

支援テクノロジーとの互換性

DB2 ツールのインターフェースは、Java Accessibility API をサポートします。これによって、スクリーン・リーダーその他の支援テクノロジーを DB2 製品で利用できるようになります。

アクセスしやすい資料

DB2 形式は、ほとんどの Web ブラウザーで表示可能な XHTML 1.0 形式で提供されています。XHTML により、ご使用のブラウザに設定されている表示設定に従って資料を表示できます。さらに、スクリーン・リーダーや他の支援テクノロジーを使用することもできます。

シンタックス・ダイアグラムはドット 10 進形式で提供されます。この形式は、スクリーン・リーダーを使用してオンライン・ドキュメンテーションにアクセスする場合にのみ使用できます。

関連概念:

- 351 ページの『ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム』

DB2 チュートリアル

DB2[®] チュートリアルは、DB2 Universal Database のさまざまな機能について学習するのを支援します。このチュートリアルでは、アプリケーションの開発、SQL 照会のパフォーマンス調整、データウェアハウスの処理、メタデータの管理、および DB2 を使用した Web サービスの開発の各分野で、段階的なレッスンが用意されています。

はじめに:

インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) から、このチュートリアルの XHTML 版を表示できます。

チュートリアルの中で、サンプル・データまたはサンプル・コードを使用する場合があります。個々のタスクの前提条件については、それぞれのチュートリアルを参照してください。

DB2 Universal Database チュートリアル:

以下に示すチュートリアルタイトルのタイトルをクリックすると、そのチュートリアルを表示できます。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介 データウェアハウス・センターを使用して簡単なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド
データウェアハウス・センターを使用して高度なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

インフォメーション・カタログ・センター・チュートリアル
インフォメーション・カタログを作成および管理して、インフォメーション・カタログ・センターを使用してメタデータを配置し使用します。

Visual Explain チュートリアル
Visual Explain を使用して、パフォーマンスを向上させるために SQL ステートメントを分析し、最適化し、調整します。

DB2 インフォメーション・センター

DB2[®] インフォメーション・センターを使用すると、DB2 Universal Database[™]、DB2 Connect[™]、DB2 Information Integrator および DB2 Query Patroller[™] などの DB2 ファミリー製品を最大限に活用するのに必要なすべての情報にアクセスできます。また、DB2 インフォメーション・センターは、DB2 の主な機能とコンポーネントに関する情報を提供します (レプリケーション、データウェアハウジング、および DB2 の種々の Extender など)。

Mozilla 1.0 以上または Microsoft[®] Internet Explorer 5.5 以上で表示する場合、DB2 インフォメーション・センターには以下の機能があります。以下のいくつかの機能では、JavaScript[™] のサポートを使用可能にする必要があります:

柔軟なインストール・オプション

以下の中から、ご使用の環境に最も適したオプションを使って DB2 資料を表示できます。

- 最新の資料を常に自動的に利用できるようにするには、IBM[®] の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターからすべての資料に直接アクセスします。
- 更新処理を最小化し、イントラネット内のネットワーク・トラフィックだけに制限するには、イントラネット上の 1 つのサーバーに DB2 資料をインストールします。
- 柔軟性を改善し、ネットワーク接続への依存を軽減するには、個々のコンピュータに DB2 資料をインストールします。

検索 「検索」テキスト・フィールドに検索語を入力することにより、DB2 インフォメーション・センターのすべてのトピックを検索できます。複数の語句を引用符で囲めば、完全一致を検索できます。また、ワイルドカード演算子 (*、?) とブール演算子 (AND、NOT、OR) を使用して検索を絞り込むことができます。

タスク指向の目次

単一の目次の中から、DB2 資料のトピックを見付けることができます。目次は、主に実行するタスクの種類に従って編成されていますが、そのほかに製品概要、特定のゴール (目的) の情報、参照情報、索引、および用語集も含まれます。

- 製品概要では、DB2 ファミリーで使用可能な製品間の関係、そうした各製品で提供される機能、および各製品の最新リリース情報について説明されています。
- インストール、管理および開発などのゴール・カテゴリには、タスクを迅速に完了し、そのための背景情報をよく理解できるようにするトピックが含まれています。
- 「参照」トピックでは、その対象に関する詳細な情報 (ステートメントとコマンドの構文、メッセージ・ヘルプ、構成パラメーターなど) が説明されています。

現在のトピックを目次に表示する

現在のトピックが目次のどの部分に該当するかを表示するには、目次フレーム内の「リフレッシュ/現在のトピックの表示 (Refresh/Show Current Topic)」ボタンをクリックするか、コンテンツ・フレーム内の「目次に表示 (Show in Table of Contents)」ボタンをクリックします。幾つかのファイルで関連トピックへの複数のリンクをたどった場合、または検索結果からトピックにアクセスした場合には、この機能が役立ちます。

索引 索引から、すべての資料にアクセスすることができます。索引では、用語が 50 音順に編成されています。

用語集 用語集を見れば、DB2 資料で使われているさまざまな用語の定義を調べることができます。用語集では、用語が 50 音順に編成されています。

組み込まれているローカライズ情報

DB2 インフォメーション・センターは、ブラウザで設定された言語でトピックを表示します。設定された言語のトピックが利用できない場合、DB2 インフォメーション・センターにはそのトピックの英語版が表示されます。

iSeries™ 技術情報については、IBM eServer™ iSeries Information Center (www.ibm.com/eserver/iseries/infocenter/) を参照してください。

関連タスク:

- 344 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』

DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)

前提条件:

制約事項:

手順:

1.

2.

関連タスク:

- 350 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)

前提条件:

制約事項:

手順:

- 1.
- 2.

関連タスク:

- 349 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

特定の言語でトピックを表示するようブラウザーを構成する方法

DB2 インフォメーション・センターをブラウザーで表示した場合、ブラウザーの設定値で指定された言語でトピックを表示するよう試行されます。希望する言語に翻訳されていないトピックがある場合、そのトピックは英語で表示されます。

手順:

Internet Explorer Web ブラウザーにおいて、希望する言語でトピックを表示するには、

1. Internet Explorer で、「ツール」→「インターネット オプション」→「言語...」ボタンをクリックします。「言語の優先順位」ウィンドウが表示されます。
2. 言語リストの中で、希望する言語が最初の項目として指定されていることを確認してください。
 - 新しい言語をリストに追加するには、「追加...」ボタンをクリックします。
 - ある言語をリストの先頭に移動するには、その言語を選択してから、その言語が言語リストの先頭になるまで「上へ」ボタンをクリックします。

Mozilla Web ブラウザーにおいて、希望する言語でトピックを表示するには、

1. Mozilla で、「編集 (Edit)」→「設定 (Preferences)」→「言語 (Languages)」ボタンを選択します。「設定 (Preferences)」ウィンドウに「言語 (Languages)」パネルが表示されます。
2. 言語リストの中で、希望する言語が最初の項目として指定されていることを確認してください。
 - 新しい言語をリストに追加するには、「追加... (Add...)」ボタンをクリックします。
 - ある言語をリストの先頭に移動するには、その言語を選択してから、その言語が言語リストの先頭になるまで「上へ (Move Up)」ボタンをクリックします。

ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム

スクリーン・リーダーを使用してインフォメーション・センターを利用するユーザーのために、シンタックス・ダイアグラムがドット 10 進形式で提供されます。

ドット 10 進形式では、各シンタックス・エレメントは別々の行に書き込まれます。複数のシンタックス・エレメントが常に同時に存在する (または常に同時に不在の) 場合、単一のコンパウンド・シンタックス・エレメントとみなせるので同一行に表示できます。

各行は、ドット 10 進数で開始します。たとえば、3 または 3.1 ないしは 3.1.1 です。こうした数を適切に聞き取るには、スクリーン・リーダーが句読点を読み取るように設定されていることを確認してください。同じドット 10 進数を持つすべてのシンタックス・エレメント (たとえば、3.1 という数値を持つすべてのシンタックス・エレメント) は、相互に排他的な代替エレメントです。3.1 USERID および 3.1 SYSTEMID という行を聞き取る場合、シンタックスには両方ではなく USERID または SYSTEMID のどちらかが含まれることが分かります。

ドット 10 進レベルは、ネストのレベルを表示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメントの後に、一連のドット 10 進数 3.1 のシンタックス・エレメントが続きます。3.1 の番号が付されたシンタックス・エレメントすべては、番号 3 の付されたシンタックス・エレメントに従属します。

シンタックス・エレメントに関する情報を追加するため、ドット 10 進数の次に特定のワードおよびシンボルが使用されます。時折、こうしたワードおよびシンボルはエレメントの最初に表示される場合もあります。簡単に識別するため、ワードやシンボルがシンタックス・エレメントの一部である場合には、円記号 (¥) 文字が先頭に付きます。* シンボルはドット 10 進数の次に使用でき、シンタックス・エレメントが反復することを示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメント *FILE は、3 ¥* FILE という形式になります。3* FILE という形式は、シンタックス・エレメント FILE が反復されることを示します。3* ¥* FILE という形式は、シンタックス・エレメント * FILE が反復されることを示します。

シンタックス・エレメントのストリングを分離するのに使用されるコンマなどの文字は、シンタックス内の分離する項目の直前に表示されます。こうした文字は、それぞれの項目と同一行に表示するか、同じドット 10 進数を持つ関連する項目のある別の行に表示できます。またその行には、シンタックス・エレメントに関する情報を提供する別のシンボルを表示することも可能です。たとえば、複数の LASTRUN および DELETE シンタックス・エレメントを使用している場合には、5.1*、5.1 LASTRUN、および 5.1 DELETE という行は、エレメントをコンマで区切る必要があります。区切り文字が指定されないと、各シンタックス・エレメントを区切るのにブランクが使用されると想定されます。

シンタックス・エレメントの前に % シンボルが付く場合、他の箇所で定義されている参照であることを示します。% シンボルの後のストリングは、リテラルではなくシンタックス・フラグメントの名前です。たとえば、2.1 %OP1 という行は別のシンタックス・フラグメント OP1 を参照すべきことを意味します。

以下のワードおよびシンボルが、ドット 10 進数の次に使用されます。

- ? は、オプションのシンタックス・エレメントであることを表します。? シンボルが後に続くドット 10 進数は、対応するドット 10 進数のシンタックス・エレメント、および任意の従属のシンタックス・エレメントがオプションであることを示します。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが 1 つしかない場合、? シンボルはそのシンタックス・エレメントと同じ行に表示されます (たとえば、5? NOTIFY)。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが複数ある場合、? シンボルだけで行に表示され、その後にオプションのシンタックス・エレメントが続きます。たとえば、「5 ?, 5 NOTIFY、および 5 UPDATE」という行を聞き取る場合、シンタックス・エレメント NOTIFY および UPDATE がオプションである、つまりそのいずれかを選択でき、どちらも選択しないこともできることが分かります。? シンボルは、線路型ダイアグラムのバイパス線に相当します。
- ! は、デフォルトのシンタックス・エレメントであることを表します。! シンボルおよびシンタックス・エレメントが後に続くドット 10 進数は、そのシンタックス・エレメントが、同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントすべてのデフォルト・オプションであることを示します。同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントのうち 1 つだけに、! シンボルを指定できます。たとえば、「2? FILE、2.1! (KEEP)、および 2.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、FILE キーワードのデフォルト・オプションは (KEEP) になります。この例では、FILE キーワードを含めてもオプションを指定しない場合には、デフォルト・オプション KEEP が適用されます。デフォルト・オプションは、次に高位のドット 10 進数にも適用されます。この例の場合、FILE キーワードが省略されると、デフォルトの FILE(KEEP) が使用されます。しかし、「2? FILE、2.1、2.1.1! (KEEP)、および 2.1.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、デフォルト・オプション KEEP は次に高位のドット 10 進数 2.1 (関連キーワードを持っていない) にのみ適用され、2? FILE には適用されません。キーワード FILE が省略されると、どれも使用されません。
- * は、0 回以上反復できるシンタックス・エレメントを示します。* シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントが 0 回以上使用できること、つまりオプションであり、なおかつ反復できることを表します。たとえば、5.1* データ域という行を聞き取る場合、1 つまたは複数のデータ域を含めるか、またはデータ域を全く含めないことが可能です。「3*, 3 HOST、および 3 STATE」という行を聞き取る場合、HOST、STATE をどちらか一方または両方同時に含めるか、どちらも含めないことができます。

注:

1. ドット 10 進数の後にアスタリスク (*) が付き、ドット 10 進数の付いた項目が 1 つしかない場合には、同じ項目を複数回反復できます。
 2. ドット 10 進数の後にアスタリスクが付き、ドット 10 進数の付いた項目が複数ある場合、リストから複数の項目を使用できますが、各項目を複数回使用することはできません。前述の例では、HOST STATE と書くことはできますが、HOST HOST とは書けません。
 3. * シンボルは、線路型シンタックス・ダイアグラムのループバック線に相当します。
- + は、1 回以上含める必要のあるシンタックス・エレメントであることを示します。+ シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントを 1 回以上含める必要があること、つまり少なくとも 1 回は含める必要があり、反

復できることを表します。たとえば、「6.1+ データ域」という行を聞き取る場合、データ域を少なくとも 1 回は含めなければなりません。「2+, 2 HOST、および 2 STATE」という行を聞き取る場合には、HOST、STATE、またはその両方を含める必要があります。* シンボルと同様に、+ シンボルは、ドット 10 進数の付いた項目が 1 つしかない場合に限り、その特定の項目のみを反復できます。* シンボルと同様に、+ シンボルは線路型シンタックス・ダイアグラムのループバック線に相当します。

関連資料:

- 「SQL リファレンス 第 2 巻」の『構文図の見方』

DB2 Universal Database 製品の共通基準認証

DB2 Universal Database は、Common Criteria の評価検定レベル 4 (EAL4) で認証の評価を受けています。Common Criteria の詳細については、以下の Common Criteria の Web サイトを参照してください。 <http://niap.nist.gov/cc-scheme/>

特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム(本プログラムを含む)との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

ACF/VTAM	iSeries
AISPO	LAN Distance
AIX	MVS
AIXwindows	MVS/ESA
AnyNet	MVS/XA
APPN	Net.Data
AS/400	NetView
BookManager	OS/390
C Set++	OS/400
C/370	PowerPC
CICS	pSeries
Database 2	QBIC
DataHub	QMF
DataJoiner	RACF
DataPropagator	RISC System/6000
DataRefresher	RS/6000
DB2	S/370
DB2 Connect	SP
DB2 Extenders	SQL/400
DB2 OLAP Server	SQL/DS
DB2 Information Integrator	System/370
DB2 Query Patroller	System/390
DB2 Universal Database	SystemView
Distributed Relational Database Architecture	Tivoli
DRDA	VisualAge
eServer	VM/ESA
Extended Services	VSE/ESA
FFST	VTAM
First Failure Support Technology	WebExplorer
IBM	WebSphere
IMS	WIN-OS/2
IMS/ESA	z/OS
	zSeries

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。
他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

Query Patroller 用語集

[ア行]

う回 (**bypass**). 照会が Query Patroller の管理を受けずに実行できる状態。

演算子 (**operator**). Query Patroller において、演算子プロファイルに管理者権限のサブセットが定義されている人。

[カ行]

管理者 (**administrator**). アクセス認可やコンテンツ管理といった管理用タスクの担当者。管理者は、ユーザーに特定のレベルの権限を付与することもできる。

管理対象照会 (**managed query**). Query Patroller で管理される照会。 360 ページの『代行受信照会』および 360 ページの『保留照会』も参照。

キュー時間 (**queued time**). 『経過キュー時間』を参照。

キュー優先順位 (**queue priority**). Query Patroller において、照会がサブミットされたときに照会に割り当てられる優先順位を表す数値。

クエリー・コントローラー (**Query Controller**). Query Patroller システムのサーバー・コンポーネント。 DB2 サーバーと一緒に働き、データベースに対する照会を管理する。

クエリー・パトローラー・センター (**Query Patroller Center**). Query Patroller 管理用のグラフィカル・ユーザー・インターフェース。データベースに対する照会の管理を可能にする。クエリー・パトローラー・センターを使用すると、データベースに対する照会の流れをモニターおよび制御し、ユーザーを管理し、履歴照会情報を確認できる。

経過キュー時間 (**elapsed queued time**). Query Patroller において、照会が作成されてからその照会の実行が開始されるまでに経過した時間。 『合計経過時間』を参照。

結果宛先 (**result destination**). Query Patroller において、照会の結果が戻される場所。結果宛先は、照会がサブミットされたアプリケーションか結果表のいずれかにできる。 『結果表』を参照。

結果セット (**result set**). 照会やストアド・プロシージャが戻す行のセット。

結果表 (**result table**). Query Patroller において、照会の結果セットを保管するために作成される表。

合計経過時間 (**elapsed total time**). Query Patroller において、照会の経過キュー時間と実行経過時間の合計。 『経過キュー時間』および 360 ページの『実行時間』も参照。

合計時間 (**total time**). 『合計経過時間』を参照。

コスト (**cost**). ステートメント (またはステートメントの要素) のアクセス・プランを実行する際に必要な、総リソース使用量の見積り。コストは、プロセッサのコスト (命令の数) と I/O (シークおよびページ転送の数) を両方考慮して計算される。 360 ページの『timeron』を参照。

[サ行]

サブミッター (**submitter**). Query Patroller 環境において、照会をサブミットするアクセス権を与えられたユーザー。

システム時間 (system time). UNIX において、システム呼び出しにかかった時間。『ユーザー時間』を参照。

実行時間 (execution time). 照会の経過実行時間。これは照会実行の開始から終了までの時間である。『ユーザー時間』および『システム時間』も参照。

照会 (query). 特定の条件に基づいて行われるデータベースからの情報の要求。

照会クラス (query class). Query Patroller において、サイズに従って照会をグループ化および実行できるメカニズム。照会クラスを使用すると、サイズ別に照会をグループ (照会クラス) 化することによって、各照会の間でリソースが共有されるようにしつつ、データベース上での照会の流れを制御できる。

照会サブミット設定 (query submission preferences). Query Patroller において、サブミッターが表示および更新できるサブミッターの一連の特性。359 ページの『サブミッター』を参照。

照会状況 (query status). Query Patroller において、プロセスの中での管理対象照会について説明するいくつかの状況のおおの。359 ページの『演算子』および 359 ページの『管理対象照会』も参照。

[夕行]

代行受信照会 (intercepted query). Query Patroller が他のアプリケーションから代行受信した照会。この照会は、Query Patroller に管理させることも、そうしないでおくこともできる。管理対象照会は、代行受信された照会のサブセットである。359 ページの『管理対象照会』および『保留照会』も参照。

チャージバック・アカウント (charge-back account). ビジネスを行う部門やプロジェクトが使用するコンピューター・リソースをトラッキングする際に使用されるアカウント。チャージバック・アカウントの例としては、「マーケティング部門」や「夏のカタログ・プロジェクト」のようなものがその例である。

[ハ行]

プロファイル (profile). Query Patroller において、各演算子やサブミッターの一連の特性を定義するもの。359 ページの『演算子』および 359 ページの『サブミッター』も参照。

保留照会 (held query). 見積りコストが Query Patroller のしきい値よりも高いゆえに、Query Patroller によって実行を保留にされている照会。照会は、Query Patroller そのものによって保留状態から解放されるか、管理者のような十分な権限を持つユーザーによって解放されるまで、保留にされる。『代行受信照会』および 359 ページの『管理対象照会』も参照。

[ヤ行]

ユーザー時間 (user time). UNIX において、データベース・マネージャー・コードの実行にかかった時間。『システム時間』を参照。

[ラ行]

履歴分析 (historical analysis). Query Patroller において、データウェアハウスの過去の使用を分析するアクティビティ。このアクティビティは、管理報告、チューニング、および Query Patroller のしきい値の最適化のために行われる。

T

timeron. 同じ照会に対して 2 つの計画を実行するためにデータベース・サーバーで要求される、リソース (またはコスト) のおおまかな相対見積りの測定単位。見積りで計算されるリソースには、重み付けしたプロセッサおよび I/O のコストが含まれる。359 ページの『コスト』を参照。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ

機能 346

ドット 10 進数の構文図 351

アプリケーション照会, 代行受信 135

移行

データベース 89

Query Patroller

コマンド行から手動で 90

DB2 セットアップ・ウィザードによる 89

Query Patroller サーバー 89

印刷

PDF ファイル 339

印刷版ブックの注文 339

インストール

インフォメーション・センター 349, 350

概要 11

サーバー

概要, UNIX 17

概要, Windows 59

検証 34, 75

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した, UNIX 24

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した, Windows 63

DB2 製品

手動での 49

SMIT を使用した 52

Query Patroller クライアント・ツール

ディスク要件, UNIX 39

ディスク要件, Windows 79

メモリー要件 39

メモリー要件, Windows 78

要件, UNIX 36

要件, Windows 77

Query Patroller サーバー

ディスク要件, UNIX 23

ディスク要件, Windows 63

メモリー要件, UNIX 22

メモリー要件, Windows 62

要件, UNIX 19

要件, Windows 61

インストール (続き)

UNIX 上のクライアント

概要 17

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した 40

Windows 上のクライアント

概要 59

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した 80

インフォメーション・センター

インストール 349, 350

エクスポート

SQL ステートメント 171

演算子

説明 147

特権の中断 149

特権のリストア 149

プロファイル

作成 148

説明 147

中断 147

オペティマイザー

機能の説明 109

見積り照会コスト, Query Patroller に渡される 105

オンライン

ヘルプへのアクセス 340

[カ行]

開始

クエリー・パトローラー・センター 244

Query Patroller

構文 252

ステップ 93

カタログ

データベース 44, 84

ホスト・データベース

DB2 Connect 44, 84

TCP/IP ノード 42, 82

管理、履歴照会 188

管理対象照会

状況 167

詳細表示 169

除去 193

説明 115

ページのスケジューリング 190

ワークロードの考慮事項 119

SQL を表示 171

キーボード・ショートカット

サポート 346

起動

コマンド・ヘルプ 342

メッセージ・ヘルプ 341

SQL ステートメント・ヘルプ 342

キューに入れられた照会

説明 167

遅延実行に関して生じ得る問題 205

キュー優先順位

構成の考慮事項 125

説明 151

クエリー・コントローラー 4

クエリー・パトローラー・センター

開始 244

「管理対象照会」フォルダー 129

説明 320

履歴分析

データの収集を使用可能にする

138

履歴分析機能

説明 323

ログオン 319

Query Patroller のコンポーネント 4

クエリー・パトローラー・センターの開始

コマンド 244

クライアントからサーバーへの通信

接続のテスト, CLP を使用した 46,

85

結果セット 114

結果の宛先 114

結果表

アクセスの指定 329

説明 114

ドロップ 191

ページのスケジューリング 190

表示 169, 172

保管 169

保守スケジュールの設定 187

権限レベル

演算子用 147

検査

サーバーのインストール 34, 75

更新

HTML 文書 344

構成

クライアントからサーバーへの接続

Query Patroller のための 42, 82

システム・レベルの設定 123

照会クラス

ステップ 141

構成 (続き)

照会クラス (続き)

説明 129

Query Patroller

概要 95

サブミッター・プロファイル、ステップ 155

サブミッター・プロファイル、説明 125

照会クラス、説明 129

履歴分析の使用 177

ロードマップ 121

構成ロードマップ 121

コスト

照会 115

照会の 109

コマンド

ADD QUERY_CLASS 218

ADD

SUBMISSION_PREFERENCES 220

ADD SUBMITTER_PROFILE 223

CANCEL QUERY 227, 280, 281, 282, 285, 287

catalog database 44, 84

catalog tcpip 42, 82

db2start 46, 85

FILE RESULT 230

GENERATE HISTORICAL_DATA 228

GET OPERATOR_PROFILE 231

GET QP_SYSTEM 232, 237

GET QUERY 233

GET QUERY_CLASS 234

GET

SUBMISSION_PREFERENCES 235

GET SUBMITTER_PROFILE 236

LIST QUERIES 238

LIST QUERY_CLASSES 241

LIST

SUBMISSION_PREFERENCES 242, 243

qpcenter 244

qpmigrate 245

qpsetup 247

qpstart 252

qpstop 253

REMOVE OPERATOR_PROFILE 254

REMOVE QUERY_CLASS 255

REMOVE QUERY_INFO 256

REMOVE

QUERY_INFO_HISTORY 258

REMOVE RESULT 260

REMOVE

SUBMISSION_PREFERENCES 262

REMOVE SUBMITTER_PROFILE 263

RUN HELD_QUERY 265

コマンド (続き)

RUN IN BACKGROUND

QUERY 266

SHOW RESULT 267

UPDATE OPERATOR_PROFILE 268

UPDATE QP_SYSTEM

説明 279

UPDATE QUERY_CLASS 271

UPDATE

SUBMISSION_PREFERENCES 273

UPDATE SUBMITTER_PROFILE 276

コマンド行サポート

構文 213

説明 4

コマンド行プロセッサ

サーバー接続の構成 42, 82

コマンド行プロセッサ (CLP)

サポート

構文 213

説明 4

データベースのカタログ 44, 84

ノードのカタログ 42, 82

コマンド・ヘルプ

起動 342

コントロール表

Query Patroller

製品のコンポーネント 4

説明 289

コンポーネント、Query Patroller 4

[サ行]

サーバー

手動によるセットアップ 87

索引

詳細の表示 184

削除

結果表 191

照会

管理対象 193

履歴 194

照会クラス 143

作成

演算子プロファイル 148

サブミッターの照会サブミット設定 161

サブミッター・プロファイル 156

照会クラス 142

サブミッター

キュー優先順位の考慮事項 125

区別する、2 層セットアップで 125

区別する、3 層セットアップで 125

照会

代行受信 125

どの照会を代行受信するかの設定

158

サブミッター (続き)

照会サブミット設定 329

説明 151

特権

説明 151

中断 159

リストア 159

プロファイル

構成、ステップ 155

構成、説明 125

作成 156

しきい値 110

使用するもの 161

使用するものを指定 329

使用のシナリオ 99

説明 151

デフォルトの設定 125

PUBLIC 161

リソース制限、設定 158

レポート

アクティビティ 177

サブミッター・プロファイルの構成に関する 125

E メール・アドレス指定 161

しきい値

Query Patroller

サブミッター・プロファイル内の 125

サブミッター・レベル 110

システム・レベル、説明 110

設定 135

実行

照会をバックグラウンドで 168

保留照会 173

指定

結果表へのアクセス 329

使用するサブミッター・プロファイル 329

通知用の E メール・アドレス 329

シナリオ

大きい緊急照会の実行 101

大きい照会の処理 100

サイズの異なる照会の管理 102

照会サブミッターの必要の管理 99

履歴分析を使用したパフォーマンスの改善 103

収集

履歴分析データ 179

照会

管理

緊急照会のシナリオ 101

考慮事項 119

照会処理で 105

説明 115

コスト 109

照会 (続き)
サブミッター
 代行受信 125
システムで許容されている最大数 135
待機中 167
代行受信
 考慮事項 119
 使用可能にする 93
 処理のために 105
 Query Patroller による 115
代行受信されない 115
遅延実行に関して生じ得る問題 205
取り消し 168
バックグラウンドで実行 168
保守スケジュールの設定 187
保留 167
 処理のポリシー 119
見積りコスト 109
履歴
 ページのスケジューリング 191
 レポート 113
照会オプティマイザー
 機能の説明 109
 照会管理における役割 115
 見積り照会コスト、Query Patroller に
 渡される 105
照会管理ポリシー
 定義 119
照会クラス
 構成 141
 構成の考慮事項 129
 作成 142
 使用のシナリオ 102
 除去 143
 説明 112
 デフォルトの照会クラス 110
 プランの考慮事項 119
照会コスト
 最大 110
照会サブミット設定
 設定
 サブミッター用 161
 独自の 329
 説明 161
照会状況
 説明 167
 変更 168
使用可能にする
 Query Patroller
 サブミッターの E メール通知
 137
 照会代行受信 93
 履歴データの収集 138
除去
 照会
 管理対象 193

除去 (続き)
 照会 (続き)
 履歴 194
 照会クラス 143
資料
 表示 343
身体障害 346
スケジューリング
 結果表保守 187
 照会保守 187
 ページ
 管理対象照会の 190
 結果表の 190
 履歴照会の 191
 保留照会
 実行 173
 実行の開始時刻 174
ストアード・プロシージャ
 Query Patroller 4
静止モード、すべての照会が Query
 Patroller をう回 205
生成
 履歴データ 180
制約事項
 Query Patroller 205
接続コンセントレーター
 Query Patroller での使用 201
接続のテスト
 クライアントとサーバーの間 46, 85
設定
 サブミッターの照会サブミット設定
 161
 サブミッター・リソース制限 158
 照会サブミットの 161
 保留照会用照会ハンドリング処理 173
 Query Patroller システムのしきい値
 135

[夕行]

代行受信
 照会
 使用可能にする 93
代行受信された照会
 アプリケーションから 115
 サブミッターから 158
対話モード、バージョン 8 では使用不可
 205
チュートリアル 347
チューニング
 パフォーマンス
 Query Patroller 199
中断
 管理対象照会のスケジュールされたパ
 ージ 190

中断 (続き)
 特権
 演算子用 149
 サブミッター用 159
 保留照会のスケジュールされた実行
 174
通信
 Query Patroller
 構成、クライアントとサーバーの間
 の 42, 82
通知
 E メール、サブミッターの 137
データウェアハウス
 使用、識別方法 113
データベース
 オブジェクト使用に関するレポート
 177
 カタログ 44, 84
 使用可能なリストの更新 136
データベース構成パラメーター
 dyn_query_mgmt パラメーター、Query
 Patroller 105
停止
 Query Patroller
 構文 253
 ステップ 94
特権
 演算子
 構成 147
 複数のグループ演算子プロファイル
 を持つユーザー ID 147
 モニター 147
 ユーザー管理 147
 履歴分析 147
 サブミッター用 151
中断
 演算子用 149
 サブミッター用 159
リストア
 演算子用 149
 サブミッター用 159
ドット 10 進数の構文図 351
トラブルシューティング
 オンライン情報 345
取り消し
 照会 168
 特権
 演算子用 149
 サブミッター用 159
ドロップ
 結果表 191

[ハ行]

ページ
 管理対象照会 190

- ページ (続き)
 - 結果表 190
 - 履歴照会 188
- ページ、スケジュールが中断された 190
- パフォーマンス
 - チューニング
 - 問題の原因として考えられること 199
 - レポートの使用 177
- ハンドリング・プロセスの照会
 - 保留照会の設定 173
- 判別
 - 履歴データが最後に生成された日 182
- 表示
 - 管理対象照会の SQL 171
 - 管理対象照会の詳細 169
 - 結果表 169, 172
 - 索引詳細 184
 - 履歴照会の詳細 183
- フィルター操作
 - 履歴分析の表 326
- プラン
 - サブミッター・プロファイルの構成 125
 - 照会管理 119
 - 照会クラス 129
- プロファイル
 - 演算子 147
 - サブミッター 151
- ヘルプ
 - コマンド
 - 起動 342
 - 表示 343, 350
 - メッセージ
 - 起動 341
 - SQL ステートメント
 - 起動 342
- 変更
 - サブミッターの照会サブミット設定 161
 - 照会状況 168
- 保管
 - 結果表 169
 - SQL ステートメント 171
- 保留解除
 - 保留照会 168
- 保留照会
 - 照会コストの考慮事項 119
 - 照会状況情報 167
 - 処理のシナリオ 100
 - 処理のポリシー 119
 - スケジュールリング
 - 実行 173
 - 実行の開始時刻 174
 - 遅延実行に関して生じ得る問題 205
 - 保留解除 168

[マ行]

- 見積りコスト
 - 照会の 109
- メッセージ
 - DQP 301
 - Query Patroller 301
- メッセージ・ヘルプ
 - 起動 341
- 問題判別
 - 照会管理の問題 199

[ラ行]

- リストア
 - 特権
 - 演算子用 149
 - サブミッター用 159
- 履歴分析
 - インターフェースの説明 323
 - 使用 177
 - 照会
 - 照会の詳細の表示 183
 - 除去 194
 - ページ 188
 - ページのスケジュールリング 191
 - 照会アクティビティ・グラフ 129
 - 使用のシナリオ 103
 - 説明 113
 - データ
 - 最後に生成された日、判別 182
 - 収集 115, 179
 - 収集を使用可能にする 138
 - 生成 180
 - 表のフィルター 326
 - フェデレーテッド・サーバー上では
 - GROUP BY レポートが使用不可 205
 - フェデレーテッド・サーバー上では
 - JOIN レポートが使用不可 205
 - 変更または除去された表に関して生じ得る問題 205
 - レポート
 - 使用 177
 - 説明 113
- 例
 - リモート・データベースへの接続 46, 85
- レポート
 - サブミッターに関する 125
 - 照会のサイズの分布に関する 129
- 履歴分析
 - 説明 177
 - データウェアハウスの使用 113

- ログオン
 - クエリー・パトローラー・センター 319
- ログ・ファイル
 - Query Patroller、説明 4

[ワ行]

- ワークロード
 - 最大コストの設定 135
 - 制御 110
 - 調整 3
 - テスト 179
 - 分析 179

[数字]

- 2 層セットアップ、サブミッターの区別 125
- 3 層セットアップ、サブミッターの区別 125

A

- ADD QUERY_CLASS コマンド 218
- ADD SUBMISSION_PREFERENCES コマンド 220
- ADD SUBMITTER_PROFILE コマンド 223
- AIX
 - インストール
 - DB2 製品 52

C

- CANCEL QUERY コマンド 227, 280, 281, 282, 285, 287
- CLP (コマンド行プロセッサ) サポート
 - 構文 213
 - 説明 4

D

- DB2 インフォメーション・センター 348
 - 起動 343
- DB2 ガバナナー
 - Query Patroller での使用 201
- DB2 クライアント
 - カタログ
 - TCP/IP ノード 42, 82
- DB2 製品
 - インストール
 - db2_install スクリプトの使用 50

DB2 製品 (続き)
 インストール (続き)
 rpm を使用した 54
 Solaris オペレーティング環境 53
 swinstall を使用した 55
 手動でのインストール 49
 DB2 セットアップ・ウィザード
 Query Patroller クライアント・ツールのインストール、UNIX 40
 Query Patroller クライアント・ツールのインストール、Windows 80
 Query Patroller サーバーのインストール、UNIX 24
 Query Patroller サーバーのインストール、Windows 63
 DB2 チュートリアル 347
 DB2 の資料
 PDF ファイルの印刷 339
 DB2 ブックの注文 339
 DB2QP スキーマ 4
 db2qp.result_info 表、表とデータベースの間の潜在的な不整合 205
 db2_install スクリプト 50
 dyn_query_mgmt 構成パラメーター
 照会代行受信の使用可能化 93
 Query Patroller による照会処理 105

E

E メール通知
 アドレスの指定 329
 使用可能にする 137
 ENABLE データベース構成パラメーター 115

F

FILE RESULT コマンド 230

G

GENERATE HISTORICAL_DATA コマンド 228
 GET OPERATOR_PROFILE コマンド 231
 GET QP_SYSTEM コマンド 232, 237
 GET QUERY コマンド 233
 GET QUERY_CLASS コマンド 234
 GET SUBMISSION_PREFERENCES コマンド 235
 GET SUBMITTER_PROFILE コマンド 236

H

HP-UX
 インストール
 DB2 製品 55
 HTML 文書
 更新 344

L

Linux
 インストール
 DB2 製品 54
 LIST QUERIES コマンド 238
 LIST QUERY_CLASSES コマンド 241
 LIST SUBMISSION_PREFERENCES コマンド 242, 243

M

MANAGE_QUERY_INFO コントロール表 289
 MAX_COST パラメーター 112
 MAX_COST_ALLOWED パラメーター
 アクティブなサブミッター・プロファイルの特性 151
 サブミッターしきい値 110
 設定の考慮事項 125
 チューニング 199
 デフォルト値 125
 MAX_QUERIES パラメーター
 設定の考慮事項 129
 説明 112
 チューニング 199
 MAX_QUERIES_ALLOWED パラメーター
 サブミッターしきい値 110
 サブミッター・プロファイルの特性 151
 設定の考慮事項 125
 チューニング 199
 デフォルト値 125
 MAX_RESULT_ROWS パラメーター 151
 設定の考慮事項 125
 デフォルト値 125
 MAX_TOTAL_COST
 設定の考慮事項 123
 MAX_TOTAL_COST パラメーター
 システムしきい値 110
 デフォルトの照会クラスのしきい値 112
 MAX_TOTAL_QUERIES
 設定の考慮事項 123
 MAX_TOTAL_QUERIES パラメーター
 システムしきい値 110
 チューニング 199

MAX_TOTAL_QUERIES パラメーター (続き)
 デフォルトの照会クラスの間接的なしきい値 112
 MIN_COST_TO_MANAGE パラメーター
 アクティブなサブミッター・プロファイルの特性 151
 照会管理のしきい値 115
 照会クラスの下限值 112
 設定の考慮事項 125
 チューニング 199
 デフォルト値 125

O

OPERATOR_PROFILE コントロール表 289

P

pkgadd コマンド、Solaris オペレーティング環境での DB2 製品のインストール 53
 PUBLIC サブミッター・プロファイル
 デフォルトのサブミッター・プロファイル 151
 デフォルトの照会サブミット設定 161

Q

qpcenter コマンド 244
 qpdiaq.log ログ・ファイル 4
 qpmigrate コマンド 245
 qpsetup コマンド 247
 qpsetup.log ログ・ファイル 4
 qpstart コマンド 252
 qpstop コマンド 253
 qpuser.log ログ・ファイル 4
 QP_SYSTEM コントロール表 289
 Query Patroller
 移行 89
 移行、コマンド行から 90
 インストール
 環境の概要 11
 開始 93
 コマンド行サポート 213
 コントロール表 289
 コンポーネント 4
 サーバー
 移行 89
 シナリオ
 大きい緊急照会の実行 101
 大きい照会の処理 100
 サイズの異なる照会の管理 102

Query Patroller (続き)
シナリオ (続き)
照会サブミッターの要件の管理 99
履歴分析を使用したパフォーマンスの改善 103
照会処理 105
照会の代行受信を使用可能にする 93
ストアード・プロシージャ 4
制限 205
制約事項 205
接続コンセントレーター 201
説明 3
停止 94
DB2 ガバナーでの使用 201
Query Patroller クライアント
インストール要件
Windows 77
ディスク要件
UNIX 39
Windows 79
メモリー要件
UNIX 39
Windows 78
Query Patroller サーバー
インストール要件
UNIX 19
Windows 61
ディスク要件
UNIX 23
Windows 63
メモリー要件
UNIX 22
Windows 62
Query Patroller サーバーのセットアップ・
コマンド 247
Query Patroller データおよび設定の移行コ
マンド 245
Query Patroller の開始コマンド 252
Query Patroller の停止コマンド 253
QUERY_ANALYSIS コントロール表 289
QUERY_CLASS コントロール表 112,
289

R

REMOVE OPERATOR_PROFILE コマン
ド 254
REMOVE QUERY_CLASS コマンド 255
REMOVE QUERY_INFO コマンド 256
REMOVE QUERY_INFO_HISTORY コマ
ンド 258
REMOVE RESULT コマンド 260
REMOVE SUBMISSION_PREFERENCES
コマンド 262
REMOVE SUBMITTER_PROFILE コマン
ド 263

RESULT_INFO コントロール表 289
rpm コマンド、Linux での DB2 製品のイ
ンストール 54
RUN HELD_QUERY コマンド 265
RUN IN BACKGROUND QUERY コマン
ド 266
RUN_HELD_DURATION パラメーター
チューニング 199

S

SCHEDULE コントロール表 289
SHOW RESULT コマンド 267
SMIT コマンド、AIX での DB2 製品の
インストール 52
Solaris オペレーティング環境
インストール
DB2 製品、pkgadd を使用した 53
SQL ステートメント
エクスポート 171
表示、管理対象照会の 171
保管 171
Query Patroller 機能との互換性がない
ステートメントのリスト 205
SQL ステートメント・ヘルプ
起動 342
SUBMISSION_PREFERENCES コントロー
ル表 289
SUBMITTER_PROFILE コントロール表
289
swinstall コマンド、HP-UX での DB2 製
品のインストール 55

T

timeron 109
TRACK_QUERY_INFO コントロール表
289

U

UNIX
インストール
Query Patroller クライアント 36
Query Patroller サーバー 19
UPDATE OPERATOR_PROFILE コマンド
268
UPDATE QP_SYSTEM コマンド
説明 279
UPDATE QUERY_CLASS コマンド 271
UPDATE SUBMISSION_PREFERENCES
コマンド 273
UPDATE SUBMITTER_PROFILE コマン
ド 276

W

Windows

インストール

Query Patroller クライアント 77
Query Patroller サーバー 61

IBM と連絡をとる

技術上の問題がある場合は、お客様サポートにご連絡ください。

製品情報

DB2 Universal Database 製品に関する情報は、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb> から入手できます。

このサイトには、技術ライブラリー、資料の注文方法、製品のダウンロード、ニュースグループ、フィックスパック、ニュース、および Web リソースへのリンクに関する最新情報が掲載されています。

米国以外の国で IBM に連絡する方法については、IBM Worldwide ページ (www.ibm.com/planetwide) にアクセスしてください。



部品番号: CT2TCJA

Printed in Japan

GC88-9154-01



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12

(1P) P/N: CT2TCJA



Spine information:



IBM® DB2 Query Patroller™

DB2 Query Patroller ガイド

バージョン 8.2